小泉八雲集

上田和夫訳

新潮文庫

小泉八雲集

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草94

昭和五十年三月五日 印刷
昭和五十年三月十五日 発行

訳者 上田和夫

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一一一
編集部(〇三)(二六六)五四一一
振替 東京四―八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・塚田印刷株式会社　製本・憲専堂製本株式会社

文庫

小泉八雲集

上田和夫訳

新潮社版

2202

目次

小泉八雲集

『影』

和解

むかし、京都に一人の若い侍がおり、主家の没落のため生活に窮してきたので、家をはなれて、遠国の国守に仕えることになった。都を去るまえに、この侍は、妻を離縁した——善良な美しい女だったが、別の縁組によって、もっと出世しようと考えたのである。それから彼は、かなりの家柄の娘と結婚して、自分の任地へ連れて行った。

しかし、この侍が、愛情の価値もわからずにこうもあっさり捨て去ったのは、まだ思慮の足りない若年の頃のことで、身を切るような貧乏にあえいでいるときであった。彼の第二の結婚は幸福なものではなかった。新しい妻の性格が、冷酷でわがままだったのである。やがて彼は、折にふれて京都のころを悲しく思い出すようになった。それから、自分がまだ最初の妻を愛していることに——第二の妻よりもずっと、彼女を愛していることに気づいた。そして、自分がいかに不当で恩知らずであったかを感じるようになった。しだいに、彼は後悔のあまり自責の念に駆られて、心の平静を失った。あのひどい目にあわせた女の記憶が——あのやさしい話しっぷり、微笑、上品な、愛らしい仕草、非の打ちどころのない忍耐が——たえず彼の頭からはなれなかった。時には夢のなかで、彼は彼女が、あの窮乏のころ、夜となく昼となく精を出して彼を助けてくれた

ときのように、機(はた)を織っているのを見た。が、もっとしばしば見たのは、自分が置き去りにしてきたあの荒れた小部屋に、ひとり坐って、あわれにも破れた袖で、涙をかくしている彼女の姿であった。務めのあいだにも、彼の心はつい彼女のほうへさまよって行った。そして、彼女がどう暮し、何をしているのか、胸に問うてみた。どこか心のなかでは、ふたたび夫を持つはずはないし、自分をゆるしてくれないこともなかろう、と思われた。そこで、彼はひそかに京都に帰れるようになったらすぐ彼女をさがし出し——それから、彼女のゆるしを乞い、連れもどして、罪滅ぼしに、できるだけのことをしてやろうと決心した。しかし歳月は過ぎた。

ついに国守の任期も終り、この侍は自由になった。「さあ、彼女(あれ)のところへもどるのだ」彼は誓うようにいった。「ああ、彼女(あれ)を離縁するなんて、なんという残酷な——なんという愚かなことをしたものだろう！」彼は第二の妻を親許(もと)へかえした（彼女に子供がなかったのである）。そして京都へ急ぎ、ただちに——旅装をあらためる暇も惜しんで——かつての配偶(つれあい)をさがしに出かけた。

以前彼女の住んでいた町に着いたときは、すでに夜もふけていた——九月十日の夜なのである。そして都は、墓地のように静まりかえっていた。しかし、月光は皓々(こうこう)として冴(さ)え、あらゆるものを明らかにしていた。家を見つけることに困難はなかった。家は、見るからに荒れはてていた。屋根には丈高い草が生い茂っていた。雨戸をたたいたが、だれも応ずる者がなかった。そこで、内から戸締りしてあることがわかったので、彼は押しあけて中へはいった。表の間(ま)は畳もなく、

がらんとしていた。冷たい風が敷板の割れ目から吹きこんでくる。そして月光は、床の間のでこぼこした破れ壁から射し込んでいた。ほかの部屋も、同じように荒れはてた様子を見せていた。家には、どう見ても、人の住む気配はなかった。それでも侍は、さらに家のいちばん奥の一室――妻がいつも居間に使っていた、ごく小さな部屋をのぞいてみることにした。その部屋を仕切っているふすまに近づくと、中からあかりがもれているのでびっくりした。彼はふすまをあけて、よろこびの声をあげた。彼女がそこに坐って――行燈(あんどん)のかげで縫い物をしているのを見たからである。その瞬間、彼女の目は彼の目と同時に出会った。そしてうれしそうに微笑しつつ、彼女はあいさつした――ただ、こう訊(たず)ねたのである、「いつ、京都へお帰りになられまして？　こんな暗いお部屋をいくつもお通りになって、よくわたしのところが、お分りになりましたわね？」歳月は、彼女を変えていなかった。今もなお、あの甘い思い出の中にあったように、美しく若かった――が、どの思い出にもまして快く、妙(たえ)なる彼女の声が、うれしい驚きで震えをおびて、耳に聞えてきた。

それからうれしげに、彼は彼女の横に坐って、ことの仔細(しさい)を語った――どんなに深く自分のわがままを後悔したか――彼女がいなくてどんなにみじめであったか――どんなに絶えず彼女のことを後悔していたか――どんなに長いあいだ償いをしたいと考えていたか――ずっとそのあいだも、彼女を愛撫(あいぶ)しながら、何度も繰りかえしゆるしを乞うた。彼女は、彼が心から望んだように、情をこめ、やさしく答えて――そんなに自分を責めるのはやめてほしいと哀願した。わたしのために苦しむのは間違っています、と彼女はいった。わたしはいつも、あなたの妻にふさわしくな

いと感じていた、というのである。にもかかわらず、彼が彼女と別れたのが、たんに貧乏のゆえにほかならなかったことを知っていた。一緒に暮していたころ、彼はいつもやさしかった。それで、彼女はずっと彼の幸福を祈りつづけていたのである。しかし、かりに償いをするだけの理由はあるにしても、こうしてわざわざ訪ねてきてくれたことは、償いとして十分あまるほどだ——たとえ、束の間にせよ、こうしてふたたび会えることにまさる幸福があるだろうか。「ほんの束の間だと！」彼は、うれしそうに笑いながら答えた——「いや、どうして、七生かけてもだ！お前さえいやでなければ、いつまでも——いつまでも——いついつまでも、一緒に暮そうと思ってもどってきたのだ！　もう二度とわれわれを引き離すものはない。今では、金も友人もある。貧乏なんか怖れる必要はないのだ。明日は荷物をここへ運び込もう。召使たちもきて仕えてくれる。そしたら、この家をきれいにしよう。……じつは今夜」と弁解するかのように、彼はつけ加えた、「こんなに遅く——着物も替えずにやってきたのは、ただお前と会って、このことを伝えてやりたいと、思ったからだ」彼女はこれらの言葉を聞いて、たいそううれしげに見えた。そして今度は、彼女のほうから、彼が去ったとき以来、京都におこったことを一部始終、語った——ただ自分の苦労についてだけは、やさしく触れることを拒んだ。二人は夜のふけるまで語り合った。それから彼女は、南に面した暖かい部屋——かって二人の新婚の間であった部屋へ彼を案内した。「この家には、だれか手伝ってくれる者はいないのかね」彼女が床をとりはじめると、彼は訊ねた。「ええ」彼女は、ほがらかに笑いながら答えた、「とても召使なんか、置くことができませんでした——それで、ずっと一人で暮してきました」「明日からたくさん召使をかかえよう」

彼はいった、「よい召使を――それからお前の要るものはなんでも」二人は横になってやすんだ――が、眠るためではなかった。お互いもっと語り合うことがあったのである――二人は、空が白むまで、過去や現在や未来のことを語り合った。それから、いつとはなく、侍は目を閉じて、眠りこんだ。

目をさますと、陽光が雨戸のすきまから射し込んでいた。そして、仰天したことに、彼は朽ちかけた床板の上に、じかに横になっていたのである。……自分はただ夢を見ていただけなのか。いや、彼女はそこにいた――彼女は眠っていた……彼は彼女の上に身をかがめた――そして見た――そして悲鳴をあげた――なぜなら、眠っている人に顔がなかった！……彼の前に、ただ経帷子に包まれた、女のしかばねが――骨と、長いもつれた黒髪のほか、ほとんど何ものこっていないしかばねが一つ、横たわっていたのである。

＊　　＊　　＊

身をふるわせ、胸をむかつかせながら陽の中に立ちつくしていると――やがて、氷のような恐怖が、耐えがたいまでの絶望、おそるべき苦痛に変っていったので、彼は自分を嘲笑う疑惑の影をつかもうとした。そのあたりを知らないふりをして、かつて妻の住んでいた家へ行く道を訊ねてみた。

「あの家にはどなたもいらっしゃいません」と、訊ねられた人が答えた。「もとは、数年前に都を去った、あるお侍の奥様のものでした。そのお侍は、離れられるまえにほかの女をむかえるた

め、奥様を離縁されたのです。それで奥様は、非常に苦しまれて、病気になられました。京都に身寄りもなく、だれも世話をする人がありませんでした。それでその年の秋——九月の十日に亡くなられたのです」

衝立の乙女

古い日本の作者、白梅園鷺水*は述べている——

中国と日本の本には——古代と現代とを問わず——挿絵があまりにも美しくて見る人に不思議な力をおよぼす話がたくさん書かれている。そして、このような美しい絵について——有名な画家の描いた、花や鳥の絵であれ、人物画であれ——さらに画中の生き物や人間のかたちが、描かれた紙面や絹布からはなれて、いろんな行いをする——だから、絵が、自分の意志によって、実際に生きている、という。むかしからだれでも知っているこの種の話を、今ここで繰りかえすつもりはない。が、当世においても、菱川吉兵衛の描いた絵——すなわち「菱川の姿絵」——の評判はわが国でひろく知られている。

彼はそれからさらに言葉をつづけ、いわゆる姿絵の一つについて、次のような話をつたえている。

京都に、篤敬という名の若い書生がいた。彼は室町とよばれる町に住んでいた。ある夕方、人

をたずねて家に帰る途中、ある古道具屋の店先に売り物として出ていた、古い衝立に注意をひかれた。それは紙を張った衝立にすぎなかった。が、その上に描かれている少女の全身像が、この若者の心をとらえたのである。値段を訊いてみると非常に安かった。篤敬はその衝立を買い、家へ持って帰った。

部屋で一人になって、その衝立をまたもやながめていると、絵は前よりもずっと美しく思われた。どうやらそれは、ほんとうの似姿――十五、六歳の少女の姿絵であった。そして、絵のなかの髪や、目や、まつ毛や、口などが微細な点にいたるまで、賞讃の言葉もないほどうまく、真にせまるように描かれていた。*まなじりは「愛を求める芙蓉のよう」に思われ、唇は「丹花の微笑のよう」であった。若々しい顔全体が言いあらわせぬほど美しかった。もしも、そこに描かれている少女の生身も同じように美しかったら、見る人は心を奪われたにちがいない。そして篤敬は、少女がこのように美しかったに相違ないと信じた。なぜならその容姿が――話しかけられれば今にも答えるかと思われるほど――生き生きとして見えたからである。

その絵をじっと見つめているうちに、だんだんその美しさに魅せられていくような気がしてきた。「実際、この世に、こんな美しい女人がいたのだろうか」彼はひとりつぶやいた、「ほんのちょっとでも（日本の作者は〝露の間〟といっている）この腕の中に抱くことができたら、よろこんで自分の命を――いや、千年の命をも――ささげるのだが！」要するに、彼はその絵に夢中になった――その絵に描かれている人でなければ、どんな女をも愛することができないと思うほど、

夢中になったのである。だがその人は、たとえまだ生きているにしても、もう絵とは似つかぬものになっているだろう。おおかた彼女は、自分の生れるよりずっと前に亡くなっているだろう！

にもかかわらず、日ましに、この望みのない熱情は、彼の中にふくれていった。彼は食べることができなくなった。眠ることもできなくなった。また、これまで楽しんでいた学問にも夢中になることができなくなった。彼は何時間も、絵のまえにすわって――ほかのことはいっさい無視するか忘れて――絵に話しつづけていた。そして、とうとう病気になった――自分でも死ぬかもしれないと思うほどの病気になった。

ところで、篤敬の友人のなかに、尊敬すべき一人の学者がいて、古い絵や若者たちのこころについて、いろいろ不思議なことを知っていた。この老学者が、篤敬の病気の知らせを聞き、見舞いにきて、衝立を見ると、ことのしだいを理解した。それから篤敬は、問われるままに、いっさいを友に打ち明けて、断言した――「こんな女性が見つからなかったら、わたしは死んでしまいます」

老人はいった――

「その絵は、菱川吉兵衛の描いたものだ――写生したものなのだ。描かれた人物は、もうこの世にはいない。が、菱川吉兵衛は、その容姿ばかりでなく、こころも描いたそうで、その女の魂が、絵のなかに生きているといわれている。だからお前は、その女を手に入れることができると思う」

篤敬は、なかば寝床から身を起して、穴のあくほどじいっと老人を見つめた。
「お前は、その女に名前をつけてやるのだ」老人は言葉をつづけた、「そして毎日、その絵のまえにすわって、いつもその女のことを思いつづけて、お前のつけた名前でやさしく呼んでやるのだ、女がほんとに返事をするまでな」
「ほんとに返事をする！」息もつけないほど驚いて、この恋する男は叫んだ。
「おお、そうとも」助言者はこたえた、「女はきっと返事をする。だが、お前は、女が返事をしたら、わしがこれから言うものを贈るように、用意していなくてはならない」
「わたしは、命でもくれてやります！」と、篤敬は叫んだ。
「いや」と老人はいった、「百軒のちがう酒屋で買った酒を一杯、女に差し出すのだ。すると、女は酒を受けるために衝立から出てくる。そのあと、たぶん、どうすればいいか、女が自分で言ってくれるだろう」
そういって老人は立ち去った。彼の助言は、篤敬を絶望から救い出した。すぐに彼は絵のまえにすわって、その少女の名を（日本の語り手はどんな名か告げるのを忘れている）、非常にやさしく、何度も繰りかえし呼んだ。その日は返事がなかった。そのあくる日も、またそのあくる日も。しかし篤敬は、信念も忍耐も失わなかった。そして、何日もへたあと、突然ある夕方、その名に答えがあった――
「はい」
そこですぐさま、急いで、百軒のちがう酒屋から買った酒をいくらか、小さな盃（さかずき）に注いでうや

うやしく差し出した。すると少女は衝立から出てきて、部屋の畳のうえを歩き、篤敬の手から盃を受けとるためにひざまずいて――さわやかな微笑を浮べつつ、訊ねた。

「どうして、それほどわたしを愛してくださいますの？」

日本の語り手はいう――「女は絵よりもはるかに美しかった――すばらしい美しさだった――心も気立ても美しかった――この世のだれよりもすばらしかった」篤敬が女の問いに何と答えたか、書きとめていない。それは想像にまかせてある。

「でもあなたは、じきに、わたしがおいやになられるのではございません？」女は訊ねる。

「生きているあいだは決して！」彼は抗議した。

「では、そのあとは――？」女はさらに主張する――日本の花嫁は、ただ一生だけの愛には満足しないのである。

「二人でたがいに誓い合おう」彼は嘆願した、「七生のあいだ変らぬと」

「もし無情なことをなさったら」彼女はいった、「わたしは衝立にもどりますから」

二人はたがいに誓い合った。思うに篤敬は、誠実な若者だったのであろう――花嫁は衝立へもどらなかったからである。衝立の、彼女のいた場所は空いたままであった。

日本の作者は声を大にしていう――

「この世でこんなことはめったに、起きるものではない！」

死骸にまたがる男

からだは氷のように冷たかった。心臓はずいぶん前から打たなくなっている。だが、ほかに死の徴候はなかった。だれもその女を葬ろうと言いだす者はいない。女は、離縁された悲しみと怒りのために死んだのである。女を葬ることは無駄であったろう——人が死のまぎわに願う、いつ消えることもない最後の復讐(ふくしゅう)の念は、どんな墓をもみじんに砕き、どんな重い墓石をも引き裂くからである。女の横たわっている家の近くに住んでいる人びとは、彼らの家から逃げ出した。女が、自分を離縁した男の帰ってくるのを、ひたすら待ちわびていることを知っていたのである。

女が死んだとき、男は旅に出ていた。もどってきて、その話を聞かされると、男は恐怖にとりつかれた。「暗くならないうちに、助けてもらわないと」男はひそかに考えた、「女に八つ裂きにされるだろう」まだ辰の刻*である。が、一刻も猶予のならぬことを知っていた。

男はすぐさま陰陽師*のところへ行って、助けを乞うた。陰陽師は死んだ女の話を知っていた。そして、その死骸もすでに見ていた。彼は嘆願する男にいった、「非常に大きな危険があなたに迫っています。できるだけお助けするようやってみましょう。が、わたしのすすめることは、何でもやると約束してください。あなたの助かる道は、ただひとつ。それは恐ろしいやり方です。でも、それをやるだけの勇気がないと、女はあなたをばらばらに引き裂きます。もし勇気があれ

ば、夕暮れ、日の沈むまえに、もう一度わたしのところへお出かけください」男は身震いした。が、何でもいわれたことはやると約束した。

日が暮れると、陰陽師は男といっしょに、死骸の置かれてある家へ出かけた。陰陽師は引戸を押しあけて、その依頼した男に入るようにいった。たちまち、あたりは暗くなった。「とてもできません！」と男は、頭から足まで震わせながら、喘ぐようにいった、「とても女を見ることなんかできません！」「女を見るぐらいではすみませんぞ」と、陰陽師はいいきった、「それに、何でも従うという約束だったではありませんか。はいるのです！」彼は、その震える男を押し込むように家のなかへ入れると、死骸のそばへ連れて行った。

死んだ女は俯伏せになっていた。「さあ、その上にまたがるのです」と陰陽師はいった、「そして馬に乗るように、しっかり背中にすわっていなさい……さあ！――そうしなければいけないのだ！」男は、陰陽師が支えてやらねばならないほど震えた――ひどく震えていた。が、その通りにした。「さあ、両手で髪をつかむのです」と、陰陽師は命じた、「右手に半分、左手に半分……そう！……手綱のようにしっかりつかんで。それを手に巻きつけて――両手に――しっかりと。その通り！……よろしいですか！　朝までそうやっていなければならないのです。夜中に、恐ろしいことが起きますよ――きっと。しかし、どんなことがあっても、髪をはなしてはなりません。はなせば――たとえ一瞬でも――女はあなたをずたずたに引き裂きますから！」

陰陽師はそれから、何か不可思議な言葉を死骸の耳もとにささやき、またがっている男にむかっていった、「さあ、わたしは都合で、あなたを一人、置いて行かなくてはなりません……そのままにしているのですよ！……わけても、女の髪をはなさぬよう、注意してください」そういって彼は、戸を閉めて立ち去った。

何時間も、男は暗い恐怖につつまれて死骸にまたがっていた――そして、夜の静寂はあたりにいよいよ深まって、とうとう彼は、悲鳴を上げてそれを破った。するとたちまち、死骸は下で、男を振り落そうとするかのように躍りあがった。そして死んだ女は、大声で叫んだ、「ああ、なんて重いんだろう！　でも、あいつをすぐここへ連れてこなくちゃ！」

それからすっくと女は立ち上がり、戸口へ跳んで行き、戸をさっと引きはなつと、夜のなかへ飛び出した――いつまでも男を背負いながら。しかし男は、目を閉じて、呻き声さえたてられないほど恐怖におそわれていたものの、両手に女の長い髪を――しっかり、しっかり――巻きつけていた。女がどこまで行ったか、男にはわからなかった。男はなにも見なかった。ただ暗闇に、女のはだしの――ぴちゃぴちゃいう――足音と、走りながらひゅうひゅういう、息づかいが聞えるだけであった。

とうとう女は引き返して、家に走り込むと、前とおなじ床の上に横たわった。男の下で女は、鶏が時をつくりはじめるまで、喘ぎ呻いていた。それからあと、静かになった。

しかし男は、歯をがちがちいわせながら、夜明けに陰陽師がやってくるまで、女の上にまたが

っていた。「そのまま、髪をはなさなかったのですね！」――陰陽師は、非常によろこんでいった。「それはよかった……もう立ち上がってよろしい」彼はまた死骸の耳もとにささやいてから、男にむかっていった、「恐ろしい一夜を過されたことでしょう。でも、ほかに救うみちがなかったのです。これからはもう、女の復讐は心配されなくてもよろしい」

この話の結末は、どうも道徳的に満足できるようには思われない。この死骸にまたがった男が発狂したとも、髪が白くなったとも記録されていない。ただ、「男泣く泣く陰陽師を拝しけり」と述べられているだけである。この物語につけてある注記も同じように失望すべきものである。日本の作者はいう、「その（死骸にまたがった）人の孫、今も世にあり、その陰陽師の孫も大宿直村（たぶん、おおとのい村と発音するのであろう）という地に今もありとなん」

この村の名は、今日、日本のどの地名録にものっていない。多くの町や村の名が、この物語の書かれたとき以来、変っているからであろう。

弁天の同情

京都に、大通寺という名高い寺がある。清和（せいわ）天皇の第五皇子、貞純（さだずみ）親王が生涯の大半を、そこで僧として送られた。そして境内には、多くの有名な人びとの墓が見出される。

しかし、現在の伽藍（がらん）はむかしの寺のままではない。もとの寺は、千年もたって、荒廃したので、元禄十四年（西暦一七〇一年）にすっかり再建されることになった。

この寺の再建の祝いに盛大な法要がおこなわれた。そして、その法要に参列した数千という人のなかに、花垣梅秀（はながきばいしゅう）という若い学者で詩人がいた。彼は、新たに造成された庭園を歩きまわって、見るものすべてを楽しんでいるうちに、かつてしばしば飲んだことのある泉のところに出た。それで泉のまわりの土が掘りかえされて、四角い池になり、しかもこの池の一隅に、「誕生水*」と書かれた一枚の木札が立てられているのを見て、驚いた。彼はまた、小さいが、きわめて美しい弁天のお堂が、池のそばに建てられているのを見た。この新しいお堂をながめているうちに、一陣の突風が、彼の足もとに一枚の短冊（たんざく）*を吹きよせた。それにはこんな歌が書きつけてあった——

しるしあれと
いわいぞそむる

玉箒（たまほうき）
とる手ばかりの
ちぎりなれども

この歌は――あの有名な俊成卿（しゅんぜいきょう）の作った初恋の歌だが――彼にとって初めてではなかった。が、それは女の手で短冊に書きつけてあり、その見事さのあまり、彼はほとんど自分の目を信じることができなかった。文字の――えもいわれぬ雅趣にとむ――かたちから、幼女と大人のあいだの、あの青春のひとときをそれは示していた。そして、清冽（せいれつ）な美しい筆の跡は、書いた人の心の純潔と善良さとを語っているかのように思われた。*

梅秀は、短冊を丁寧にたたんで、家へ持って帰った。ふたたびひらいてそれを見ると、字は前よりもいっそうすばらしく思われた。彼の書法にかんする知識からして判断すると、歌は、非常に若い、非常に聡明な、たぶん非常に心根のやさしい少女の書いたものに相違なかった。しかし、こう確信するにしたがって、しだいに彼の心に非常に美しい人のすがたが作られていった。そしてすぐに、まだ見ぬその女（ひと）を恋するようになった。それから彼の最初の決意は、その歌の筆者をさがし出して、できることなら、妻にすることであった。……だが、どうしたら見つけ出せるだろうか。彼女はどういう人なのか。どこに住んでいるのか。疑いもなく、彼女を見つけ出せる希望は、神仏の助けによるほかなかった。

しかし、神仏もよろこんで力を貸したもうことが、やがて彼の心に浮んだ。短冊は、彼が弁天

さまのお堂のまえに立っているときに、彼のところへ飛んできた。しかも、恋人たちがしあわせに結ばれるよう祈願するのは、とくにこの神にほかならなかった。そう考えたので、彼はこの女神に助けを乞うことにした。彼はただちに、寺の庭の「誕生水の弁天」のお堂へ出かけた。そして、心から、こう祈願した——「弁天さま、おなさけでございます！——この短冊を書いた若い女がどこに住んでいるのか、さがし出せるよう力をお貸しください！——たとえほんの一瞬でも——その女と会える機会を、どうか作ってください！」そして、こう祈願したあと、この女神に七日参り*をはじめた。それとともに、第七夜は終夜、お堂に参籠することを誓った。

さて第七夜——寝ずの夜——のこと、静寂のもっとも深まったころ、寺の庭の総門に人の案内を乞う声が聞えた。中からは別の声がこたえる。門はひらいた。そして梅秀は、威厳のある老人がゆっくりした足どりで近づいてくるのを見た。この神さびたる人は礼服をまとっていた。そして雪のように白い頭には、高位をしめす形の烏帽子をかぶっていた。弁天の小さなお堂へ近づくと、なにか命令でも待つかのようにうやうやしく、その前にひざまずいた。すると、お堂の外側の扉がひらいた。つづいて、内部の祭壇を隠している御簾が、するすると半ば巻きあがる。そして、一人の稚児*——昔ながらに長い髪をうしろに束ねた、美しい男の児——が前へすすみ出た。彼は入口に突っ立って、よく通る大きな声で老人にいった——

「この所に、現在の身分には不相応な、しかも他の方法では許されそうにもない縁組を祈りつづけている者がある。しかしこの若者は、まことにふびんに思われるので、何かしてやれることで

もあれば、そなたを召したのである。宿世（すくせ）の縁があるものなら、なんとか二人を引き合わせてやってもらいたい」

この命を受けとると、老人はうやうやしく稚児におじぎをした。それから、立ち上がると、左の長い袖のたもとから、赤い糸を引き出した。この糸の一端を梅秀のからだに、まるでしばるかのように巻きつけた。他の一端は、御燈明（みあかし）の炎の一つにかざした。そして、糸が燃えているあいだ、暗闇からだれかを呼び出すかのように、三度手でさし招いた。

たちまち、寺の方に、こちらへ近づいてくる足音が聞える。と見る間に、一人の少女があらわれた——非常に美しい、十五、六ばかりの少女である。少女はしとやかに、しかも非常にはにかみつつ——扇で口のあたりを隠しながら、近づいてきた。それから梅秀のそばにひざまずいた。すると稚児は、梅秀にむかっていった——

「このごろ、そなたは、非常に心を痛めている。そして、叶（かな）わぬ恋に身をもそこなわんばかりである。こうした不幸な状態に、われわれはそなたを打ち捨てておけなくなった。そこで月下翁（げっかおう）*をよんで、あの短冊を書いた女（ひと）と引き合わせることにした。その女（ひと）は今、そなたのそばに参っている」

こういって稚児は、御簾のうしろに退いた。すると老人は、来たときと同じように立ち去った。そして、少女もその後にしたがった。と同時に、寺の大きな釣鐘が暁（あけ）の刻を告げるのを、梅秀は聞いた。彼は「誕生水の弁天」のお堂のまえに、感謝のあまりひれ伏した。それから——まるで楽しい夢から醒（さ）めたような心地で——あれほど会いたいとはげしく祈りつづけた美しい女（ひと）に会え

たこの喜びに胸をふくらませつつ――しかも、二度とは会えぬかもしれないと恐れつつ――家にもどった。

しかし、門から往来へ出るやいなや、すぐに自分とおなじ方向へひとり行く少女を見た。そして夜明けの薄暗がりのなかで、あの弁天堂で引き合わされた女(ひと)であることが、すぐにわかった。彼は足を早めて追いつくと、少女は振りむいて、しとやかに頭を下げてあいさつした。そこで、彼ははじめて話しかけてみた。すると彼女は返事をしたが、その声のあまりの美しさに、彼の胸はよろこびにあふれた。まだひっそりした往来を、二人はたのしげに語り合いながら、歩きつづけ、とうとう梅秀の住んでいる家のまえまできた。そこで彼は足をとめ――少女にむかって、自分の希望や恐れを語った。微笑(ほほえ)みながら、少女は訊ねる、「わたしが、あなたの奥様になるために召されたことをご存じないのでしょうか」そういって彼女は、彼といっしょに家の中にはいった。

妻となってから彼女は、その美しい心根と愛情とをもって、ことのほか彼をよろこばした。さらにそのうえ、予期した以上にたしなみのあることもわかった。筆づかいのすばらしさのほか、美しい絵を描くこともできた。生花や、刺繍(ししゅう)、音曲などの諸芸に通じていた。織ることも縫うこともできた。そして、家事万端にわたって、あらゆることをわきまえていた。

この若い二人が出会ったのは、秋の初めのころである。そうして、冬の季節がはじまるまで二人は、睦(むつ)まじく暮していた。この月日のあいだ、二人の平和を乱すものは何ごともなかった。梅

秀のやさしい妻に対する愛情は、時の経過とともにますます強まるばかりであった。だが、不思議なことに、彼は妻の身の上について何も知らなかった——家族についていて何ひとつ知らなかったのである。そんな問題に、彼女はけっして触れようとしなかった。神からの授かりものである以上、いろいろ問いただすことは間違っているように彼には思われた。しかし、月下翁にせよほかの誰にせよ——彼が恐れていたように——彼女を取り返しにくる者はなかった。彼女のことについて訊ねる者さえなかった。そして近くの連中も、なぜか、彼女の存在をまるで知らないようであった。

梅秀には、すべてこんなことが不思議に思えてならなかった。が、もっと不思議な体験が彼を待ちうけていた。

ある冬の朝、たまたま彼が、京都のいくらかへんぴな辺りを通っていると、大声で彼の名を呼ぶ者があった。見ると一人の下男が、ある屋敷の門から手招きをしていた。梅秀はその男の顔も知らず、また、京都のそんな界隈（かいわい）には一人の知人もなかったから、突然の招きに、飛び上がるほど驚いた。が、下男は、進み出ると、心からうやうやしくあいさつをしていった、「主人が、ぜひともあなたさまとお話しいたしたいと申しております。ちょっとお立ち寄りいただけないでしょうか」一瞬ためらったあと、梅秀は案内されるままにしたがった。この家の主人と思われる、品のよい、身なりの立派な人物が、玄関に出迎えて、客間に案内した。初対面のあいさつが丁重に交わされたあと、主人は突然の招きを詫（わ）びて、いった——

「こんなふうにお呼びとめして、さだめし無礼にお思いなされたことでございましょう。が、弁

天さまのお告げと固く信じておりますことによって、このようなことを仕出かしたと申しあげれば、たぶんお許しいただけることかと存じます。で、それをご説明いたします。
わたしには、十六ばかりになる、娘が一人ございまして、書はまあどうにかというところで、*ほかのことも、一応はこなします。まずは人並みの娘と申せましょう。よい縁を求めてしあわせにしてやりたいと思い、弁天さまにお祈りいたしました。それから、京都のどの弁天堂へも、娘の書いた短冊を納めました。幾晩かたって、弁天さまが夢にあらわれて、いわれました――『お前の願いは聞きとどけた。すでに娘御に、夫となるべき人は引き合わせてある。やがて冬とともにその人は訪れるであろう』わたしは、すでに引き合わせたという言葉がどうにもわからなくて、幾分疑いをもちました。この夢は、べつだん意味のない、普通の夢にすぎないのだ、と思いました。ところが、昨夜また、弁天さまを夢に見たのでございます。そして、おっしゃるには、『あした、前に伝えたあの若い男が、この町にまいる。で、家に請じ入れて、婿になってくれるか訊ねるがよい。彼はよい青年だから、先行き、今よりはもっと高い地位を得るにちがいない』ということでした。それから、弁天さまは、あなたのお名前、お齢、出生地を告げられ、顔かたちや服装まで寸分たがわず教えてくださいましたので、わたくしの与えました指図によって、下男は容易に、それとわかったわけでございます」
こうした説明は、梅秀を納得させるどころか困惑させるだけであった。彼の返事はただ、この家の主人が彼に敬意をこめて語ったことに、通りいっぺんのお礼しか返せなかった。しかも主人

が、娘に引き合わせようと、別室へ招じ入れたとき、彼の困惑は極度にたっした。が、それを無下に断わることもならなかった。彼はこのあまりにも異常な成行きに、すでに妻のあることを――弁天さまから直接授かった妻のあることを、口に出すわけにいかなかった。別れることなど、とうてい考えられない妻なのである。そこで、何もいわずおののきながら、その示された部屋へ主人について行った。

ところが、その家の娘に引き合わされたとき、彼女が、すでに妻としている女性であることを知った、彼の驚き！

そっくりであった――が、そっくりともいえない。

すでに月下翁によって引き合わされた娘は、たんに愛する人の魂にすぎなかった。

いま娘の父親の家で、結ばれようとしているのは、その現し身であった。

弁天は、その信者たちのためにこのような奇蹟を行なったのである。

もとの話は、いろんなことを説明しないまま、ここでぷつっと切れている。その結末はあまり満足なものでない。本当の娘が、自分の影の結婚生活のあいだどんな精神的体験をしていたのか、あれこれと知りたい。それから、その影がどうなったのか――独自に生きつづけたかどうか、夫の帰りをじっと待っていたのかどうか、本当の花嫁を訪ねたのか、知りたいものである。この本

では、これらのことについて何もいっていない。しかし日本の友人は、この奇蹟をこんなふうに説明する——

「魂の花嫁は、実のところ短冊から作られたものである。そこで、本当の娘が弁天堂の出会いについて何も知らなかったことは考えられる。その短冊に美しい文字を書きつらねたとき、彼女の魂はいくらかそれに乗り移った。だからこそ、書いたものから、書いた人と生き写しのものを呼び出すことができたのである」

鮫人（さめびと）の感謝

　むかし近江（おうみ）の国に、俵屋藤太郎（たわらやとうたろう）という人が住んでいた。家は、石山寺（いしやまでら）という名高い寺からさして遠くない、琵琶湖（びわこ）の岸にあった。相当の財産もあり、なに不自由なく暮していた。が、二十九歳になっても、まだ独身であった。彼の最大の野心は、非常に美しい女と結婚することであった。ところが、気に入った娘をなかなか見つけることができなかったのである。

　ある日、瀬田の長橋*にさしかかると、妙なものが、欄干のそばにうずくまっているのが見えた。その生き物は人間のからだに似ていたが、墨のようにまっ黒であった。顔は鬼のようである。目は緑柱石（エメラルド）のように緑いろで、髯（ひげ）は龍のよう。藤太郎は、最初ひどく驚いた。が、彼を見つめるその緑いろの目が、いかにもやさしそうだったので、ちょっとためらったあと、思いきってその生き物に訊（たず）ねた。すると、それはこう答えた、「わたくしは鮫人です――あの海の鮫人間*でございます。つい先ごろまで、龍宮（りゅうぐう）*の下っ端役人として八大龍王に仕えておりました。ところが、ちょっとした過ちのため、龍宮を追われ、海からも放逐されることになりました。それ以来、わたくしはこの辺りを――食べる物を手に入れることができず、寝る場所もなく――さまよいつづけております。どうか、このわたくしをあわれと思し召（おぼしめ）されるなら、宿る所を見つけ、なにか食べる物をお恵みくださいませ！」

こうしていかにも悲しげな口調で、恐る恐る嘆願されたので、藤太郎はひどく心を動かされた。「いっしょに来るがよい」彼はいった。「庭に大きな深い池があるから、いつまでもそこに、好きなだけいたらよかろう。食べる物もたっぷりやるから」

鮫人は、藤太郎の家へついて行ったが、その池がよほど気に入ったらしかった。

それ以後、ほとんど半年ばかり、この奇妙な客はその池に棲んで、藤太郎から海の生き物の好みそうなものを、毎日食べさせてもらっていた。

（もとの話ではこの辺りから、鮫人は怪物ではなく、情け深い人間の男性になっている。）

さて、その年も七月、近くの大津の町の、三井寺という大きな寺に、女人詣があった。藤太郎もそれに詣でるため、大津に出かけた。そこに集まってきた大勢の女や娘たちのなかに、まれに見る美しい人を見つけた。年のころは十六ばかり。顔は雪のように白く、上品であった。口もとの愛らしさは見る人に、その声が「梅の木に鳴く鶯の声のごとくうるわしく」聞えたであろうと思わせるものがあった。藤太郎は、ひと目で彼女が好きになった。彼女が寺から出て行くので、適当な距離をたもちつつあとをつけて行くと、彼女は母親といっしょに、近くの瀬田の村の、ある屋敷に数日のあいだ逗留していることがわかった。村の連中に訊ねて、彼女の名が珠名であり、まだ独り身であること、そして家人が、彼女を並みの身分の者へはやりたがっていないように思われることを――というのは、結納として一万の宝玉をおさめた箱を要求していたから――知ることができた。

藤太郎はそうと知って、すっかり気落ちして家に帰った。娘の両親の要求している奇妙な結納のことを考えれば考えるほど、彼女を妻として迎えることは、とうてい望めるように思えなかった。たとえ国中に一万もの宝玉があるにしても、大大名でもなければ、それを手に入れることは期待できなかったのである。

が、ほんの一刻も、藤太郎はその美しい娘の面影を忘れることができなかった。寝食もできないほど、その面影が彼の頭からはなれなかった。そうして日のたつにつれ、それはますます鮮明になってくるように思われた。で、とうとう、彼は病気になった——枕から頭も起せないほどの病気になったのである。そこで彼は、医師を呼んだ。

医師はていねいに診たあと、驚きの声をあげた。「どんな病気でも」彼はいった、「まず医者の適当な手当てで癒るものだが、恋の病だけは別です。あなたの病気はあきらかに恋煩いです。それには癒しようがありません。ずっとむかし、瑯琊王伯与はこの病で死にました。あなたもその人のように、死ぬ覚悟をしなければなりません」そういって医師は、藤太郎に薬もやらずに、立ち去った。

そのころ、庭の池に棲んでいる鮫人は、主人の病気のことを聞き、藤太郎の世話をするために家の中にはいってきた。そして、夜となく昼となく、こころをこめて看病した。しかし彼は、その病気の原因はおろか重態であることも知らなかった。が、一週間ばかりすると、藤太郎は死期

のせまったことを感じて、こんな別れの言葉を告げた。
「こうして長いあいだ、お前の世話をすることになったのも、なにか前世で結ばれた縁であろうと思う。が、いま、わたしの病はたいそう重いうえ、日一日と悪くなっている。わたしのいのちは、夕暮れを待たずに消える朝露のようなものだ。それで、お前のため、心を悩ましている。これまで、わたしがお前の世話をしてきた。わたしが死ねば、だれも、お前の世話をして養ってくれる者がいないのではないか……かわいそうに！……ああ！　このうき世ではいつも、願いごとはままならぬのだ」

藤太郎がこう言いおわるやいなや、鮫人は異様な苦痛にみちた叫び声をあげて、はげしく泣きはじめた。そうして泣くたびに、大きな血の涙が緑いろの目から流れ出し、黒い頬をつたって、床にしたたり落ちた。落ちるまで、それは血であった。が、落ちると、固まり、きらきらとかがやき、美しくなった——非常に貴重な宝玉、まっ赤な炎のようにきらめく紅玉になった。海に棲む者が泣けば、涙は宝石になるのである。

そこで藤太郎は、この不思議なできごとを見て、驚きかつよろこびのあまり、からだに力がよみがえってきた。彼は床からとび起き、鮫人の涙をひろって数えはじめ、同時に叫びつづけた、
「病気はなおった！　死なないぞ！　死なないぞ！」

すると、鮫人は非常におどろいて、泣くのをやめ、藤太郎にそんな不思議に癒ったわけを訊ねた。藤太郎は、三井寺で見かけた若い娘のこと、そしてその娘の家族が法外な結納を要求していることを教えた。「とても一万もの宝玉を手に入れられるとは考えられなかったので、この求婚

は絶望としか思えなかった。それでわたしは、ひどく気が滅入って、とうとう病気になったのだ。が、お前がいま、思うさま泣いてくれたので、たくさんの宝石が手にはいった。これであの娘とも結婚できると思う。ただ――宝石がまだ足りないのだ。頼むから、もうすこし泣いてくれまいか、必要なだけの数がそろうように」

だが、この要求に対し鮫人は、くびを振って、いくらか驚きとがめる調子で答えた――

「わたしが、娼婦のように――いつでも好きなときに泣ける、とお考えですか。いや、いや！娼婦は、男をだますために涙を流します。が、海の生き物は、ほんとうに悲しまずに、泣くことができません。わたしが、いま泣きましたのは、あなたが亡くなられると思って、心からほんとうに悲しく感じたからです。でも、ご病気がなおったといわれた以上、もう泣くことはできません」

「それでは、どうすればいいのか」と、訴えるように藤太郎は訊ねた。「一万の宝玉が手にはいらないと、あの娘と結婚できないのだ！」

鮫人はしばらく、考えこんでいるかのように、黙っていた。それからこういった――

「お聞きください！　今日はもう、どうしても泣けません。でもあした、酒とさかなをもって、ごいっしょに瀬田の長橋にまいりましょう。しばらく橋の上でやすんで、いっしょに酒を飲みさかなを食べながら、はるか龍宮のほうをながめて、そこで過した楽しい日々のことを思い出し、故郷をおもう心になれば――そうすれば、わたしも泣くことができましょう」

藤太郎は、よろこんで同意した。

あくる朝、二人は酒やさかなをたくさんたずさえて、瀬田の橋へ行き、そこに腰を落ちつけて、宴を張った。しこたま酒を飲んでから、鮫人は龍宮のほうをじっと見つめて、過去を思い出しはじめた。するとしだいに、酒の力で心がやわらぎ、楽しい日々のことが思い出されて、悲しみで胸がいっぱいになり、望郷の思いにかられるあまり、さめざめと泣くことができた。そして、彼の流した大きな赤い涙は、紅玉（ルビー）の雨となって、橋のうえに落ちた。藤太郎は、落ちてくるものを拾いあつめて、それらを手箱のなかへ入れ、数えてみると、もう一万もの数にたっしていた。そこで彼は、よろこびの叫び声をあげた。

ほとんどそれと同時に、はるか湖上のかなたから、たのしい楽の音（ね）が聞えてきた。すると沖のほうに、なにか雲のかたちをした、茜色（あかねいろ）の宮殿が、ゆっくり水面に浮び上がってきた。

すると、鮫人はたちまち橋の欄干のうえに跳びあがって、それをながめ、よろこびのあまり声をあげて笑った。それから、藤太郎のほうに向っていった――

「龍宮国に大赦があったにちがいありません。王様たちは、わたしを呼んでおられます。それでただちに、お別れをいたさなければなりません。あなたのご厚意に、いくぶんなりとお返しする機会を得て、うれしく存じます」

こういって彼は、橋から跳びおりた。そして、それから二度と、彼のすがたを見た者はなかった。が、藤太郎は、珠名の両親に紅玉の箱をおくって、彼女を妻にむかえた。

『日本雑記』

守られた約束

「この秋のはじめには必ず戻ってまいる」と、いまより数百年前、赤穴宗右衛門は、義兄弟の、若い丈部左門に別れを告げながらいった。時は春。場所は播磨の国加古の村。赤穴は出雲の武士であった。彼は、生れ故郷をたずねようと思ったのである。

丈部はいった——

「あなたの出雲——八雲立つ国*——は非常な遠国です。だから、たぶん、いつお帰りかお約束くださることは、困難でありましょう。しかし、その日をはっきりうかがえれば、まことにもって幸せに存じます。されば、迎えの宴を用意し、また、門口にてお帰りをお待ち申すことができますから」

「さて、そのことならば」と、赤穴はこたえた、「わたしは旅にはよく慣れておるゆえ、ある場所へ着くのにどのくらいかかるものか、まず前もって言うことができる。だから、ここへ帰るのはいつか、約束してさしつかえない。重陽の節句の日にしてはいかがなものであろう」

「九月九日でございますな」と、丈部はいった、「その頃は、菊の花も咲きましょうから、ごいっしょに菊見にもまいれます。それは楽しい！……では、お帰りは九月九日とお約束いただけますな」

「九月九日に」と赤穴は繰りかえし、にっこり笑って別れを告げた。それから彼は、播磨の国加古の村をあとに旅立った——そして丈部左門と丈部の母は、目に涙をうかべてそのあとを見送った。

「月日に関守なし」と古い日本のことわざにいう。すみやかに月日は去った。やがて秋——菊花の季節——がきた。そして、九月九日の早朝から、丈部は義兄を迎える用意をした。いろいろさかなをととのえ、酒を買い、座敷をかざり、床の間の花瓶には二色の菊の花を挿した。すると、それを見ていた彼の母はいった、「お前、出雲の国は、ここから百里以上もあります。それに、そこからいくつも山を越えてくる旅は、難儀で疲れましょう。ですから、赤穴が今日はたして来れるか、あてにはなりません。いま、そんな手間をかけずに、来るのを待ってからにしてはどうかね」「いいえ、母上！」丈部はこたえた——「赤穴は今日、ここへ来ると約束されました。約束を破るような方ではありません！　着かれてから、用意をはじめるのをごらんになれば、あの方の言葉を、疑っていたと思われるでしょう。われわれは面目を失います」

その日は美しく、空には雲ひとつなく、大気は澄み、ふだんより世界が千マイルもひろくなったように思われた。朝がた、多くの旅人が村を通りすぎた——なかには侍のすがたもあった。そして丈部は、やってくる人のすがたに目をくばっていたが、一度ならず、赤穴が近づいてくるのを見たように思った。しかし、寺の鐘が正午をつげた。が、赤穴は姿をあらわさない。母の後も

ずっと、丈部は見張りをつづけていたが、無駄であった。日は沈んだ。が、やはり、赤穴のやってくる様子はさらになかった。それでも、丈部は門先に立ったまま、道をながめていた。やがて母がきて、いった、「ねえ、お前、ことわざでもいうように、男の心は、秋の空のように変りやすいものです。それに、あの菊の花は、まだ明日も色はあせないでしょう。さあ、もう床についたら。明朝また、なんなら、赤穴を見張ることにしては」「母上は、おやすみください」と、丈部はこたえた――「でも、わたしは、まだ来られるものと信じております」そこで、母は自分の部屋にもどった。そして、丈部はまだ門先を去りかねていた。

夜も、昼のように澄みわたっていた。大空には星がまたたき、天の川はいつにない光にかがやいていた。村はねむっていた――静寂をやぶるものは、ただ小川のせせらぐ音と、農家の犬どもの遠ぼえだけであった。丈部はなおも待った――淡い月が近くの山かげに沈むまで待ちつづけた。そのとき、ようやく疑念と不安が立ちのぼってきた。ちょうど家へもどろうとしたとき、遠くに背の高い男が――いかにも軽々と足早に――近づいてくるのが見えた。と、つぎの瞬間、それが赤穴であることがわかった。

「おお！」と、丈部は叫んで、とび立つように彼をむかえた――「朝からいままでお待ちしておりました！……やはり、ほんとうに約束を守ってくださったのですね……しかし、兄上、お疲れでございましょう！――さ、おはいりください――いっさい、用意してあります」彼は、赤穴を座敷の上座に案内して、消えかかっていた灯りを、いそいでかき立てた。「母上は」と丈部はつづけた、「今夜はすこし疲れていましたので、もうやすんでおります。でも、すぐ起してまいり

ましょう」赤穴はくびを振って、かすかにそれには及ばぬというしぐさをした。「兄上、それでは御意のままに」と丈部はいって、旅人のまえに温かいさかなと酒を出した。赤穴は、さかなにも酒にも手をふれずに、しばらくじっと、黙っていた。それから——母親の日をさますのをおそれるかのように——声をひそめて、語りはじめた。

「さて、どうしてこのように遅くなったか、理由をお話しせねばなるまい。わたしが出雲へ帰ってみると、人びとは、先の藩主塩谷公のご恩をほとんど忘れ、あの富田城を盗った、謀反人の経久の顔色をうかがっていた。しかし、わたしは従弟の赤穴丹治をたずねなければならなかったが、この男も経久に仕え、家臣として、城内に住んでいたのだ。彼は、わたしを説きつけて、経久に目通りさせようとした。わたしがそれに従ったのは、おもに、まだ顔も見たことのない、新しい領主の性格をこの目で知りたいと思ったからである。彼は、老練な武士で、豪胆の主だ。が、ずるくて、残酷なところがある。わたしは、とうていこんな男に仕える気になれないことを知らせる必要を感じた。御前を下がると、彼は、わたしの従弟に命じて、わたしを引きとめ——屋敷に閉じこめさせた。わたしは、九日九日に播磨へ帰る約束のあることを抗議した。が、行くことを許してくれない。そこで、わたしは夜分、城を逃げ出そうと思った。しかし、たえず見張りがついていた。そして今日まで、約束を果す方法をみつけることができなかったのだ……」

「今日まで！」と丈部は、とまどいながら叫んだ——「城は、ここから百里以上もあるではありませんか！」

「さよう」と、赤穴が答えた、「生きている人はだれしも足では、一日に百里を行くことができ

ない。だが、わたしは、もし約束を守らなければ、そなたによく思われないだろう、と考えた。そして、『魂よく一日に千里を行く』という、古いことわざを思い出した。さいわい、わたしは帯刀をゆるされていた――そこで、ようやくここへ参ることができたのだ……母上によろしく」

そういって、立ち上がると同時に、彼はすっと消えた。

そこで丈部は、赤穴が約束を果すために、自害したことを知った。

夜も明けきらぬうちに、丈部左門は、出雲の国の、富田城にむけて出立した。松江に着くと、彼はそこで、九月九日の夜、赤穴宗右衛門が、城内の赤穴丹治の屋敷で、切腹したことを知った。そこで丈部は、赤穴丹治の屋敷へおもむき、赤穴丹治の裏切りを責め、家族の面前で斬りすてると、怪我も負わずに逃げた。しかし、経久侯はこの話をきくと、丈部のあとを追わないように命じた。なぜなら、経久侯その人は無法で残忍な男であったが、他人の誠実を愛する心には敬意をはらうことができたし、しかも、丈部左門の友情と勇気には感嘆を惜しまなかったからである。

破られた約束

一

「わたし、死ぬのはこわくありません」と、死期のせまった妻がいった、「ただひとつだけ、いまのわたしに、気にかかることがございます。わたしのかわりに、どなたがこの家にくるのか、それが知りたいのです」

「お前」と、悲しむ夫は答えた、「だれをお前のかわりに、この家へ入れるものか。わたしはけっして、けっして再婚などしないから」

こういったとき、彼は心の奥底から話しかけていた。いま失いかけている女を、愛していたのである。

「侍の信義にかけて？」彼女は、かすかに微笑をうかべて訊ねた。

「侍の信義にかけて」彼は——妻の青白いやせた顔をなでながら——答えた。

「それなら、あなた」彼女はいった、「わたしを庭へ埋めてください——ね？——向うの隅の二人で植えた梅の木のそばへ。わたし、ずっと前から、このことをお願いしたかったのです。でも、あなたが再婚なさると、そんな近くにわたしの墓があるのはおいやだろうと思って。ところがい

ま、わたしのかわりの方を、おもらいにならないとお約束いただいたので——わたし、もう遠慮しないで、お願いを申します……どうかほんとに、庭へ埋めてくださいね！　庭にいれば、ときどきあなたのお声も聞えるし、春どきには、いつも花が見られますから」

「お前の望むようにしてあげるよ」彼は答えた。「だが、もうそんな死んだ後の話はやめよう。まったく希望がなくなったというほど、悪いわけではないのだから」

「いいえ、もう駄目なの」彼女は答えた、「この朝がた、わたしは死ぬのです……でも、庭へ埋めてくださいますわね」

「よろしいとも」彼はいった、「二人で植えた梅の木かげに——そして、そこにりっぱな墓を建ててあげよう」

「それから、小さな鈴をくださいませんか」

「鈴を——？」

「ええ。小さな鈴をお棺へ入れていただきたいのです——お遍路さまがもっているような、小さな鈴を。いただけるかしら」

「よし、入れてあげよう——それから、何かほかに欲しいものは？」

「もうほかに、欲しいものはございません」彼女はいった——「あなた、いつもわたしに、たいへんやさしくしていただいて。これで、幸せに死ねます」

それから彼女は、目を閉じて死んだ——疲れた子供がぐっすり寝入るように安らかに。死顔は美しかった。そして顔には、微笑が浮んでいた。

彼女は庭の、生前愛していた木々のかげに埋められた。そして小さな鈴も、いっしょに埋められた。墓の上に、定紋(じょうもん)のついた石碑が建てられ、「慈海院梅花明影大姉」という戒名が彫られた。

＊　＊　＊

しかし、妻の死後一年とたたぬうちに、その侍の親戚(しんせき)や友人たちが、しきりに再婚をすすめだした。「お前はまだ若い」彼らはそういうのである、「それにひとり息子だ。しかも子供がいない。嫁をもらうのが侍のつとめだ。もし子供なしに死んだら、だれが供え物をして先祖をまつってくれるのか」

こうした忠告をつぎつぎと受けて、彼はとうとう再婚する気になった。花嫁はわずかに十七歳。そして、庭の墓からの無言の非難にもかかわらず、彼は心から花嫁を愛することができるように思った。

二

婚礼のあと七日目までは、この新妻の幸福をみだすようなことは何も起きなかった——しかし七日目の夜、夫は城中へ出仕する要のある仕事を仰せつかった。夫がはじめて妻を、ひとり家に残して行かねばならなかった晩のこと、彼女はなにか説明しがたい不安を感じた——理由(わけ)はわからないが、ばくぜんと恐ろしかった。床についたが、眠れなかった。あたりの空気が妙に重苦しかった——時としてあらしの来るまえにみられるような、名状しがたい圧迫感があった。

ほぼ丑の刻、彼女は外の闇のなかに、鈴――お遍路の鈴――のチリンチリン鳴るのを聞いた。そして彼女は、こんな時刻に、どんな遍路が武家屋敷を通るのか、不思議であった。やがて、しばらくとぎれた後、鈴はずっと近くで聞えた。あきらかに、遍路は家に近づきつつある――が、なぜ、道のない、裏のほうから近づいてくるのだろうか……突然、犬がいつにもない恐ろしい調子で哀れっぽく吠えだした――と、悪夢のような恐怖に彼女はおそわれた……その鈴の鳴る音は、たしかに庭の中にはいっている……彼女は身を起して、召使を呼ぼうとした。が、起きることができなかった――身動きすらできなかった――声も出なかった……そして近くに、ますます近くに、鈴の鳴る音が聞えてくる――それに、何という、あの犬の吠えかただろう！……すると、影の忍びこむように、一人の女が――どの戸もぴったり閉まり、どのふすまも動きもしないのに――経帷子を身につけ、遍路の鈴をもったひとりの女が、すっと部屋の中にはいってきた。はいってきた女には目がなかった――死んでかなりになるのであろう。しどけなく、髪は顔のまわりに振りかかっている――そして女は、振り乱した髪のあいだから、見えもせぬ目をむけ、舌もない口で語った――

「この家に――この家に、お前はいてはいけない！　ここの女主人は、まだわたしだ。出て行け。が、出て行く理由は、だれにもいってはいけない。もし、あの人にいったら、お前を八つ裂きにしてやるから！」

そういいつつ、幽霊は姿を消した。花嫁は、恐怖のあまり気を失った。夜あけまで、彼女はそのまま気を失っていた。

それでも、はれやかな白昼の光のなかで、彼女は見たり聞いたりしたことが、現実であったとは思えなかった。あの警告の記憶が、まだ彼女の心に重くのしかかっていたので、あの幻のことは、夫にもほかの誰にも、話す気にはなれなかった。ただ、自分では、いやな夢を見て、病気になったのだと、納得できそうであった。

しかし、あくる夜、もう疑うことができなかった。またもや、丑の刻になると、犬が哀れっぽく吠えだした——またもや鈴が鳴り——庭からゆっくり近づいてきた——またもや、これを聞いた彼女は、床からはね起き、叫ぼうとしたが、無駄であった——またもや死んだ女が部屋にはいってきて、鋭くののしった。

「出て行け。が、出て行かねばならぬ理由(わけ)は、だれにもいってはいけない！　もし、あの人にこっそりとでもいったら、お前を八つ裂きにしてやるから！」

こんどは幽霊は、寝床のすぐ近くまできた——そして、床の上へかがみこみ、つぶやいて、顔をしかめた……。

あくる朝、侍が城から帰ると、若い妻は、彼のまえにひれ伏して嘆願した。

「おねがいでございます」彼女はいった、「こんなことを申し上げて、恩知らずとご無礼は重々おゆるしくださいませ。わたしを、実家へ帰らせていただきとうございます――すぐに、行かせていただきとうございます」
「何かここで、いやなことでもあるのか」彼は、心から驚いて訊ねた。「だれかに、留守のあいだ、つれないことでもされたのか」
「そんなことではございません――」彼女は、すすり泣きながら答えた。「ここの方は、どなたもみな親切にしてくださいます……でも、これ以上わたしは、あなたの奥様になっておれないのです――出て行かねばならないのです」
「どうしたのだ」彼はたいそう驚いて、さけんだ、「この家で何かいやなことがあったらしいのは、非常に残念だ。しかし、なぜ出て行きたいのか、理由がわからない――だれも、お前にひどいこともしないのに……まさか、離縁してくれというつもりではないだろうね」
彼女は、身を震わせ、泣きながらいった。
「離縁してくださらねば、わたしは死んでしまいます！」
彼はしばらく黙ったままでいた――どうしてこんな人を驚かすようなことをいいだしたのか、その理由を考えてみようと思ったが、無駄であった。そこで、感情をおもてへあらわさずに答えた。
「お前になんの落度もないのに、いま実家へかえすのは、まことにけしからぬ行いのように思える。お前のその願いに、しかとした理由――りっぱにわたしが申し開きできるような理由を話し

てくれるなら、離縁状も書けよう。しかし、理由が――しかとした理由が聞かれないなら、離縁するわけにはまいらぬ――家名を辱しめないようにせねばならないから」

そこで彼女は、説明せざるをえなくなった。そして、いっさいを告げた――それから恐怖にもだえながら、つけ加えた。

「もうあなたにお話ししてしまった以上、わたしは、あの女に殺されます！――きっと殺されます！」

勇気にとみ、幽霊などほとんど信じるような男ではなかったものの、侍はいっとき、たいそう驚いた。しかし、事の容易で自然な説明が、すぐに彼の心に浮んだ。

「お前は」彼はいった、「いま、非常に神経質になっている。それに、だれかつまらぬ話を吹き込んだやつがいるのではないかと思う。この家で悪い夢を見たからという理由だけで、お前を離縁するわけにはいかない。だが、わたしの留守のあいだ、そんなふうに苦しんでいたとは、まことにあいすまない。今夜もまた、城中へまいらねばならぬが、お前をひとりにはしておくまい。二人の家来に、お前の部屋で見張っているよう命じよう。そうすれば、お前も安心して眠れるだろう。二人とも、しっかりした連中だ。できるだけ気をつけてくれるだろうと思う」

と、心から情愛をこめて話してくれたので、若妻は、恐怖にとりつかれていたことをほとんど恥じ入り、家にとどまる決心をした。

若妻をあずけられた二人の家来は、屈強の、実直な、大男たちで――子女の警護には熟達していた。気を引き立てるために、花嫁にいろいろおもしろい話を聞かせた。彼女は、長いあいだ彼らと話し込み、陽気な冗談に笑い興じ、ほとんど恐怖を忘れた。いよいよ眠るため横になると、侍たちは部屋の隅の、屏風のかげに座を占めて、碁をうちはじめた――彼女を起さぬように、小声でしか話さなかった。彼女は幼児のように眠った。

しかし、またもや丑の刻に、彼女は恐怖のうめきとともに目をさました――鈴の音が聞えたのである！……もうすでに近くにきていた、そしてだんだん近づいてきた。彼女はとび起きた。悲鳴をあげた――が、部屋には何ひとつ動く気配はなかった――ただ死のごとき静寂が――静寂はいよいよ増し――いよいよ深まりつつある。彼女は二人の武士のところへ駆け寄った。彼らは碁盤のまえに――じっと――たがいに相手を見つめ合ったまま――すわっていた。彼女は、二人にむかって金切り声をあげた。彼らをゆり動かした。彼らは、凍りついたように動こうとしなかった。

あとで、彼らの述べるところによれば、彼らには鈴の音も聞えた――花嫁の叫び声も聞えた――彼女がゆり起そうとしたのも知っている――が、それにもかかわらず、彼らは動くことも、口をきくこともできなかった。その瞬間から、耳も目もきかなくなった。黒々とした眠りが、彼

らをとらえたのである。

＊　＊　＊

夜が明けて、侍が花嫁の部屋にはいって見ると、消えかかった行燈のあかりのもとに、若妻の首のない死体が、血だまりの中に横たわっていた。まだ碁を打ちかけたままの姿勢で、二人の家扶たちは眠っていた。主人の叫び声に彼らははね起き、床の惨状にぼうぜんと目を見張った。

首はどこにも見あたらない――そして、むごたらしい傷あとから、それが斬りとられたものではなく、むしり取られたものであることがわかった。血が点々と、その部屋から縁側のかどまでつづき、そこで雨戸が引き裂かれていた。三人は、血の痕をたどって庭へ出た――草地をこえ――砂地をこえ――菖蒲にふちどられた池のへりにそって――杉や竹の暗いかげをぬって行った。と、不意に、角を曲ると、蝙蝠のようにキキーッと声をたてている魔性がすぐ前に立っていた。長らく埋められていた女が、墓の前にすっくと立っている――片手に鈴を、もう一つの手には、血のしたたる首をつかんで……一瞬、三人は声もなく立ちすくんだ。それから、侍の一人が、念仏をとなえつつ、刀を抜くや、その姿に斬りつけた。と、たちまち、それは土の上に崩おれ――経帷子と、骨と、髪が空しく散乱した。そして、鈴は、その残骸のなかから、音を鳴らしてころがり出た。しかし、肉のない右手は、手首から離れながら、なおものたうっていた――指はまだ、血のしたたる首をしっかりとつかみ――まるで黄いろい蟹のはさみが、落ちた果実にくっついているかのように――かきむしり、切りさいなみつづけていた。

「これは、ひどい話だ」とわたしは、この話をしてくれた友人にむかっていった。「この死人の復讐（ふくしゅう）は――もしやるなら――男にむかってやるべきだ」

「男はみなそう考えます」彼は答えた。「しかし、それは女の感じ方ではありません」

彼の言うとおりであった。

果心居士のはなし

天正の御代、* 京都の北辺のある町に、果心居士という一人の老人が住んでいた。長い白い髯をはやし、いつも神主のような衣裳をつけていたが、仏画を人に見せ、仏の道を教えることによって、暮しをたてていた。晴れた日には、祇園の社の境内へ行き、いろんな地獄の変相を描いた大きな掛け物を、木に掛けるのを常としていた。この掛け物は、あまりにも見事に描かれていたので、画中に見えるものはすべて真にせまっていた。そして老人は、それを見に集まってきた人びとにむかって説教をし、因果応報の理を説いた——いつもたずさえている如意で、いろいろ異なった責め苦を、こと細かに指し示し、だれもが仏の教えに従うようにすすめた。人びとは、その絵をながめ、それについて老人が説教するのを聞くために、大ぜい集まってきた。そして、時には、喜捨をうけるために前へひろげた莫蓙が、投げられた銭の山で見えなくなることもあった。

当時、織田信長が、京都およびその近隣の諸国を支配していた。その家臣の一人の、荒川という男が、祇園の社へ参詣の途中、たまたま、その絵が掛けられているのを見た。そして、そのあと、館へ帰って話をした。信長は、荒川の話に興味をおぼえ、果心居士に、ただちにその絵をたずさえて、館に参るよう命じた。

信長は掛け物をみて、その絵のみずみずしさに驚きを隠すことができなかった。悪鬼や、責め

苦にあっている亡者どもが、実際に目の前にうごめいているようであった。そして、泣き叫ぶ声が、その画面から聞えてきた。そこに描かれている血も、実際に流れているように思われた——だから彼は、その絵が濡れているのではないかと、指を突き出して触ってみずにいられなかった。が、指はよごれなかった——紙が完全に乾いていることがわかったからである。ますます驚いて、信長はこの不思議な絵の作者の名を訊ねた。果心居士は、あの有名な小栗宗丹*が——百日のあいだ毎日斎戒沐浴して、大いなる苦行をつみ、霊感をさずかるため清水寺の観音に一心に祈願をつづけたのち——描いたものであると答えた。

信長があきらかにその掛け物をほしがっている様子を見て、荒川は果心居士に、それを信長公に贈物として「献上」してはどうかと訊ねた。が、老人は大胆にも答えた、「この絵は、わたしの持っている唯一の価値あるものです。そして、それを人に見せて、なにがしかの金を手に入れることができるのです。そこで、もしいま、この絵を公に差し上げれば、わたしは暮しを立てる唯一の方便を失ってしまうことになります。しかしながら、もし公がどうしてもお望みとあれば、これに対し黄金百両をおさずけくだされ。それだけの金子があれば、何かもうかる商売でもはじめることができましょうから。さもなければ、とてもこの絵を差し上げるわけにはまいりませぬ」

信長は、この答えに満足しなかったようであった。そして、黙っていた。荒川はやがて、公の耳もとに何ごとかをささやき、公はうなずいて承諾した。それから果心居士は、いくばくかの金

子を賜わって、退出した。

しかし、老人が館をはなれると、荒川はひそかにそのあとをつけた――卑劣な手段によってその絵を奪いとる機会を得ようとしたのである。機会はやってきた。果心居士が、町のむこうの山へまっすぐ通じている道をとったからである。彼は、急に道の折れた、山のふもとのある淋しい場所にさしかかると、荒川につかまった。荒川はいった、「あんな絵で、黄金百両を要求するとは、何という強欲なやつだ。黄金百両のかわりに、この三尺の寸鉄をくらわしてやろう」というなり荒川は、刀を抜くと、老人を斬り捨てて、絵を奪った。

翌日、荒川は、その掛け物を――果心居士が館を下がるまえに包んだまま――織田信長のもとに差し出した。信長は、ただちにそれを掛けるように命じた。が、ひらいてみると、絵はまったく消えて――ただの白紙だったのに、信長も荒川も目をむいた。荒川は、どうしてもとの絵が消えたのか、説明できなかった。そして――故意であろうがなかろうが――主君をあざむいた罪のため、罰せられることになった。そこで、彼はかなりのあいだ、閉門を仰せつかった。

荒川の閉門の期限がようやく切れるころ、果心居士が北野神社の境内で、例によって有名な絵を見せているという報せがとどいた。荒川は、ほとんど耳を信じることができなかった。それでも、その報せは、なんらかの手段でその掛け物を取りもどし、それによって、つい先ごろの過失

を償うことができるかもしれないという、あわい希望をいだかせた。そこで彼は、急いで従者を何人か集めて神社へ急いだ。しかし、着いてみると、果心居士はすでに立ち去ったということであった。

数日後、果心居士が清水寺であの絵をひろげて、大群衆をまえに、それについて説教しているという報せが、荒川のもとにとどいた。荒川は大急ぎで、清水へむかった。が、そこへ着いて見ると、ちょうど群衆は散りかけているところであった――果心居士は、またもや姿を消していたのである。

ついにある日、荒川は思いがけなく、一軒の居酒屋で果心居士を見つけ、その場で彼を捕えた。老人は、捕えられたと知っても、ただ機嫌よく笑うだけであった。そして、こういった、「お伴しましょう。だが、も少し飲むまで、どうかお待ちください」この願いに、荒川は異をとなえなかった。すると果心居士は、碗で十二杯も酒をあおって、並みいる者どもを驚かした。十二杯目を飲んだあと、彼はもう満足したといった。それから荒川は命じて、縄で彼をしばり、信長の館へ連れて行った。

館の白洲(しらす)で、ただちに果心居士は奉行の取調べを受け、厳しいお叱りを受けた。最後に奉行は彼にいった、「お前が魔法で人びとをたぶらかしていることはいかにも明白である。その罪だけでも、お前は重罪にあたいする。だが、もしもお前が、つつしんでその絵を信長公のもとにささげるならば、このたびはお前の罪は大目に見てやってよいが、さもなければ、きっとお前に重罪を申しつけよう」

この脅迫に、果心居士はとまどったような笑いを浮べて叫んだ、「人をだます罪を犯したのは、わしではない」そして、荒川のほうへ向き、大声で怒鳴った、「お前は嘘つきだ！　お前はあの絵を差し上げて殿様にとり入ろうと思った。そして、それを盗みとるため、わしを殺そうとした。もし罪というものがあるなら、それこそが罪ではないか！　さいわいにして、お前はわしを殺しそこねた。だが、もし、思いどおりに、成功していたら、そんな振舞いに対して、どんな弁解ができたか。とにかく、お前は絵を盗んだのだ。わしがいま持っている絵は、写しにすぎない。そして、その絵を盗んだあと、信長公に差し出そうという気持が変って、それを自分のものにしておこうと、悪知恵をはたらかしたのだ。そこでお前は、信長公に白い掛け物を差し出した。そして、そんなこそこそした振舞いや目的を隠すために、このわしが、お前をたぶらかして、本物を白い掛け物とすり替えた、と言いふらしたのだ。いま、どこに本物があるのか、わしは知るものか。多分、お前のほうが知っているのだろう」

この言葉を聞くと、荒川は怒りのあまり、その囚人のほうにとびかかって、彼を打とうとしたが、衛士に押しとどめられた。そして、こう突然怒りだしたことが、かえって奉行に、荒川もまったく無実ではあるまいと、疑念をおこさせた。彼は、さしあたって、果心居士を獄へ下した。そしてそのあと、荒川をきつく糾明した。ところが荒川は生来、訥弁(とつべん)であった。そしてこの場でも、興奮のあまり、ほとんど口がきけなかった。どもったり、矛盾したことを言ったり、どこかうさんな様子をしめした。そこで奉行は、荒川を白状するまで棒で打つように命じた。が、白状していると思わせることすらできなかった。そこで彼は、気を失うまで竹でぶたれて、死んだよ

うに倒れた。

果心居士は牢(ろう)の中で、荒川のことを聞いた。そして、声をあげて笑った。が、しばらくして、獄吏にむかっていった、「それにしても、あの荒川というやつは、ほんとに、ごろつきのように振舞った。そこでわしは、あいつの悪い性根をただしてやるために、わざとこんな罰をあたえてやったのだ。が、もう奉行に、荒川はほんとのところ、何も知らなかったに違いないから、わしがいっさい納得いくように説明しよう、と伝えてもらいたい」

そこで果心居士は、ふたたび奉行の前に引き出されると、つぎのように言ってのけた、「ほんとにすぐれた絵には、魂があるにちがいあるまい。そして、そんな絵には、絵そのものの意志があり、生命をあたえてくれた人とか、正当な所有者から、どうしても離れようとしないのだ。ほんとに偉大な絵に魂があることを示す話はたくさんある。むかし、法眼元信(ほうげんげんしん)が襖(ふすま)に描いた数羽の雀が飛び去って、それらの描かれていたあとが白く残された話は、よく知られていよう。また、ある掛け物に描かれた馬が、夜な夜な草を食(は)みに出かけたことも、有名な話だ。さて、こんどのことも、真相はこうだと信じている――つまり、信長公は、わしの掛け物の正当な所有者になられなかったがゆえに、絵が御前でひろげられたとき、ひとりでに表から消えうせたのだろう。しかし、わしが最初に申し出た値段――つまり、黄金百両――をお出しになれば、絵はひとりでに、現在空白になっている紙面に、あらわれてくるものと思う。とにかく、やってみてはいかがか！危険なぞ毛頭ござらぬ――絵がふたたび現われなければ、金はただちにご返却いたそう」

こういう奇妙な主張をきいて信長は、百両を払うよう命じ、その結果を見るために、みずから

立ち会った。そこで掛け物は、御前でひろげられた。すると、並みいる者の驚いたことに、絵は細部にいたるまでことごとく、元のように現われた。ただ、色がすこし褪(あ)せているように思われた。そして、亡者や鬼どものかたちが、前ほど、真にいきいきとは見えなかった。この違いをみて信長公は、果心居士にその理由を説明するように訊ねた。すると、果心居士は答えた、「最初ごらんになった絵の価値は、どんな値もつけられぬほどの絵の価値でござった。しかし、いま、ごらんいただいている絵の価値は、まさしく、お払いになっただけのもの――つまり、黄金百両分――を、あらわしておる……ほかに、方法はござるまい?」この答えを聞いて、並みいる者すべてが、もうこれ以上、この老人に敵対することの無益をさとった。彼はただちに自由の身になった。そして、荒川もまた赦された。受けた罰によって、罪を十二分にあがなったからである。

ところで、荒川には、武一という弟がいた――やはり信長に扈従(こしょう)の身である。武一は、荒川が打たれて牢に入れられたため、非常に怒った。そして、果心居士を殺そうと決心した。果心居士は、ふたたび自由な身になるやいなや、そのまま居酒屋へいそぎ、酒を命じた。武一は彼のあとを追って店へとび込み、彼を斬りたおし、首を切り落した。それから、老人に支払われた百両を奪って、武一は首と黄金とを一緒に風呂敷につつむと、荒川に見せるため家に急いだ。だが、風呂敷をひらいてみると、そこには、首のかわりに空の酒瓢箪(さけびょうたん)が、黄金のかわりに一塊りの汚物が出てきた……そして、まもなく、この兄弟の困惑は、首のない身体が――どのように、いつともわからないままに――居酒屋から消えたという報せを聞いて、ますます加わるばかりであった。

それからほぼ一カ月後、果心居士についてなんら消息も聞かれなかったが、そのころ、ある晩のこと、信長公の館のまえで、まるで遠雷のひびきのようないびきをかいて、眠っているひとりの酔っぱらいがあった。家臣のひとりが、その大酒飲みが果心居士であることに気づいた。このあまりにも無礼な振舞いのため、その老いぼれはただちに捕えられ、牢にぶち込まれた。が、老人は日をさまさなかった。そして、牢のなかで、十日十晩も間断なく眠りつづけ――その間ずっと、はるか遠くまで聞えるほど、大きないびきをかいていた。

このころ、信長公は、部将の一人である、明智光秀の謀反（むほん）のため横死をとげ、ただちに光秀が天下をとった。が、光秀の権力は、わずか十二日しかつづかなかった。

さて、光秀が京都を制したとき、果心居士の話を耳にした。そして、囚人を前へ連れてくるように命じた。そこで果心居士は、新しい君主の御前へ呼び出された。ところが、光秀は彼にやさしく声をかけ、客人としてもてなし、存分に供応するよう命じた。老人が食べおわると、光秀は彼にむかっていった、「聞くところによれば、お前はたいそう酒が好きであるとのこと――いったい一時（いっとき）に、どのくらい飲めるのか」果心居士は答えた、「どのくらいか、自分でもよくわかりませぬ。酔いがまわれば、飲むのをやめるばかりでござる」それで光秀は、果心居士のまえに大きな杯*を置き、侍臣に命じて、老人の所望するだけ何度もつがせた。果心居士は大盃でたてつづけに十度も飲み干し、さらに所望した。が、侍臣は、もう酒樽が空になったと答えた。並みいる人びとはすべて、その飲みっぷりに驚嘆した。そこで光秀は、果心居士に訊ねた、「まだ足りな

いか」「いやいや、いささか満足つかまつった」と果心居士は答えた、「――で、ご好意のお礼までに、すこしくわしの技をお見せいたそう。さて、あの屛風をごらんくだされ」といって彼は、近江八景を描いてある、四曲半双の大きな屛風を指さした。で、みな、いっせいに屛風をながめた。八景のひとつに、はるか湖上を、ひとりの男が小舟をこいでいる絵が描かれてあった――舟の長さは、屛風の上では、一インチにも満たなかった。果心居士はそれから小舟のほうへ手を振った。すると、小舟が急に向きを変え、絵の前景のほうへ動きはじめるのが見えた。それは近づくにつれて、ますます大きくなった。やがて、船頭の顔だちがはっきり見分けられるようになった。なおも舟は近づいてくる――たえず大きくなり――ついに、すぐそばに見えるようになった。すると突然、湖の水が――画面から部屋のなかへ――あふれるように思われた。そして、部屋は水浸しになった。見ている人たちは、水が膝のうえまでのぼってきたので、あわてて着物のすそをからげた。と同時に、舟が――ほんとうの漁船が――画面からすべり出てくるように思われた。そして、一丁の艪のきしる音が聞えた。なおも部屋にあふれる水は増えつづけ、ついに見ている人たちは、帯のところまで水に浸ったまま立っていた。すると、舟は果心居士のそばへ近づいた。果心居士はそれに乗り込んだ。船頭は舟を返して、急速に漕ぎ去りはじめた。そして、舟が退くにつれて、部屋の水も急速に減りはじめ――屛風のなかへ引いていくように思われた。舟が絵の前景と思われるところを通り過ぎると、たちまち部屋の水は、ふたたびなくなった！　が、なおも絵の舟は、絵の水面をすべるようにすすんで行くように見えた――ますます遠くへ退き、たえず小さくなり――そしてついに、はるか沖合の小さな一点となった。それから、全く消えてしま

梅津忠兵衛のはなし

梅津忠兵衛は、剛力と胆力とにすぐれた若い侍であった。彼は戸村十太夫という藩主に仕えていたが、侯の居城は、出羽の国、横手に近い高い丘の上にあった。家臣たちの屋敷は丘のふもとに、小さな町並みをつくっていた。

梅津は、城門の夜番にえらばれた一人であった。夜番は二通りある——第一のものは、夕暮れにはじまり真夜中におわる。第二のものは真夜中にはじまり、日の出におわるのである。

ある夜、梅津が第二の夜番にあたっているとき、奇妙な事件にぶつかった。深夜、見張りにつこうとして丘をのぼっていくと、城へ通じる曲りくねった道の一番上の曲り角に、一人の女の立っているのが見えた。女は、両腕に子供を抱きかかえて、だれかを待ちうけているようであった。そんな遅い時刻に、しかもそんな淋しい場所に、女がひとりいるということは、よほど特殊な事情でもなければ説明がつくまい。梅津は、妖怪が人をだまして殺すため、暗くなってから女の姿に化けて出ることを思い出した。そこで、彼は目の前の、女のように見えるものが、はたして人間なのか信じかねた。そして女が、まるで話しかけでもするかのように、彼のほうへ急ぎ足で近づいてくるのを見て、彼はひと言も声をかけずに、女をやり過そうとした。ところが、女が彼の名をよび、非常にやさしい声で、話しかけてきたので、驚きのあまり、彼はやり過すことができ

なかった。「梅津さま、今夜わたしは大そう困っております、それに大そう厄介なことをいたさなければなりません。どうか、ほんのしばらくの間、この児を持っていていただけませんでしょうか」そういって女は、子供を彼のほうへ差し出した。

梅津は女を知らなかったが、大そう若く見えた。彼は、一風変ったその声の魅力を怪しみ、不思議な誘惑を怪しみ、何もかも怪しく思った。が、生来、彼は親切な男であった。そして妖怪を怖れるあまり親切な衝動をおさえることは、男らしくなかろうと感じた。返事もせずに、彼は子供を受けとった。「どうか、もどってまいりますまで、おあずかりねがいます」と、女がいった。「すぐ、もどってまいりますから」「たしかにおあずかりしよう」彼は答えた。すると、すぐに女は背をむけ、道をはなれると、ほとんど目も信じかねるほど軽々とすばやく、音もなく、飛ぶように丘を下って行った。たちまち、女のすがたは消えた。

梅津はそのとき、初めて子供を見た。それは非常に小さく、生れたばかりのように思えた。両手のなかで、それはじっとしていた。そして、泣き声ひとつ立てなかった。

とつぜん、それがだんだん大きくなるように思われた。彼は、ふたたびそれを見た……ところが、それは元のまま、小さい形をしていた。そして、動こうともしなかった。どうして、それがだんだん大きくなるように感じたのであろうか。

次の瞬間、彼にはわけがわかった――そして悪寒（おかん）が、背すじをはしるのを感じた。子供は大きくなっているのではない。重くなりつつあるのだ……はじめ、それは七、八ポンドしかないようであった。それからしだいに、重さが倍になり――三倍になり――四倍になった。もうそれは、

五十ポンドにも達した――なおもそれは、重さを加えつつある……百ポンド！――百五十ポンド！――二百ポンド！……梅津は、だまされたことに気づいた――彼と話した女は、人間ではなかった――子供も人間ではないことに、気づいたのである。が、すでに約束はなされた。しかも、武士に二言は許されない。で、彼は、赤ん坊を腕にかかえつづけていた。すると、それはますます重さを加えた……二百五十ポンド！――三百ポンド！――四百ポンド！……いったいどうなるのか、想像もつかなかった。が、彼は、恐れずに、力のつづくかぎり子供をはなさないでいようと決心した……五百ポンド！――五百五十ポンド！――六百ポンド！　彼の筋肉は全身、緊張のあまり震えはじめた。なおも、重さは加わりつつある……「南無阿弥陀仏！」彼はうめき声を立てた――「南無阿弥陀仏！――南無阿弥陀仏！」ちょうど彼が、三度念仏を唱えたとき、手の中の重さはあっという間になくなった。そして彼は、手を空にしたまま――なぜなら、不思議にも子供のすがたは消えてしまったから――茫然と突っ立っていた。しかも、ほとんどそれと同時に、あの不思議な女が、立ち去ったときと同じように急ぎ足で、帰ってくるのが見えた。まだ息を切らしつつ女は、彼のそばへやってきた。そのときはじめて、彼は女が非常に美しいのに気づいた。が、女のひたいには汗がしたたっていた。そして袖は、今までいっしょうけんめい働いていたかのように、たすきがけに後ろ手にくくり上げてあった。

「ご親切な梅津さま」女はいった、「たいそうお力添えいただいて、ありがとうございました。わたしは、この土地の氏神です。そして、今夜、わたしの氏子の一人がお産をするので、わたしに助けを求めてきました。が、陣痛はたいへんな苦しみでした。すぐに、わたし一人の力では、

助けてやれないことがわかりました——そこでわたしは、あなたの力と勇気に助けをもとめたわけです。わたしがあなたの手にお渡しした子供は、まだ生れるまえの子供でした。そして、はじめて、だんだん重くなるのを感じられたときは、たいそう危険だったのです——産道が閉じていたからです。それから子供が、あまりに重くなり、もうこれ以上、重さには耐えられないとあなたが思われたとき——ちょうどその時に、母親は死んだようになり、家の者がみな泣いていました。すると、あなたは三度、『南無阿弥陀仏！』と念仏を繰りかえされました——そして、この三度目の念仏で、仏が手を貸されて、産道が開いたのです……あなたのなされたことに対しては、相応なお礼をいたします。勇気ある武士にとって、剛力ほど助けになるものはありますまい。そこで、あなたばかりでなく、あなたのお子さまや、そのお子さまのまたお子さまたちに至るまで、剛力をさずけることにいたしましょう」

こう約束したかと思うと、氏神は姿を消した。

梅津忠兵衛は、深くいぶかりながら、ふたたび城のほうへ歩きだした。夜あけに、勤めをおえ、朝の勤行をつとめるまえに、いつものように顔と手を洗おうとした。が、いつも使っている手拭いをしぼりかけて、驚いたことに、丈夫なそれが、手のなかでぷっつり二つに切れた。その切れたものを、合わせてねじってみた。するとまた——まるで濡れた紙のように——それは、ちぎれた。彼は、四枚重ねてしぼってみた。結果は、おなじことであった。やがて、青銅や鉄でできたいろんなものをさわってみて、それらが手にふれると、粘土のようにつぶれるので、彼は約束ど

おり、剛力をあたえられた以上、これからはものに触れるときは、手のなかでつぶれないように、注意しなければならないことをさとった。

家へ帰ると、前夜、その界隈(かいわい)で子供が生れたか、彼は訊ねてみた。すると、たしかにその事件のあった時刻に子供が生れ、しかも事情は、氏神から聞いたとおりであることを知った。

梅津忠兵衛の子供たちは、父親の剛力をうけついだ。その子孫のある者は――みんなすばらしい力持ちだったが――この物語の書かれた当時、まだ出羽の国に生きていた。

漂流

台風が近づいてきた。わたしは、岸に砕ける波を見ようと思って、強い風のなかを防波堤にすわっていた。そして老人の、天野甚助がそばにすわっていた。東南の方は一面に暗青色の薄闇で、ただ海だけが、妙な黄褐色をしていた。巨濤がすでに山のように押し寄せている。百ヤード先でそれらは、雷鳴のような轟きとともに激しい地響きをたてて崩れ落ち、泡をはねながら斜面を一気にあらい、われわれ二人の顔に飛沫をかける。一直線に砕けたあと、小石の退いて行く音は、まさしく全速力ではしる列車の轟音のようであった。わたしは天野甚助に、見ていると恐ろしくなるといった。すると、彼は微笑した。

「わたしは、これよりもひどい海で、二日二晩、泳いだことがあります」彼はいった、「当時、十九歳でした。八人の舟乗りのうち、生き残ったのは、わたし一人でした。

船は福寿丸といいました――この町の、前田甚五郎の持ち船です。一人をのぞいて乗組みは、みな焼津の人間でした。船長は斎藤吉右衛門といって、六十をこした男。城の越に住んでいました――ちょうどこの裏の通りにあたります。船にはもう一人、仁藤正七という老人が乗っており、新屋地区の住人でした。それから、四十二歳になる寺尾勘吉、その弟の、まだ十六歳の、巳之助

も、いっしょにおりました。この寺尾一族も、新屋に住んでいたのです。それから、三十歳になる斎藤平吉がおり、松四郎という男もいました——これは生れは周防ですが、焼津に住みついた男です。乗組みのもう一人は鷲野乙吉。城の越に住んでおり、まだ二十一歳でした。わたしは、寺尾巳之助をのぞいて、船ではいちばんの若僧でした。

万延元年——申年の——七月十日の朝、わたしどもは讃岐へ向けて、焼津から船を出しました。十一日日の夜、紀州沖で、東南方からの台風におそわれました。真夜中すこし前に、船は転覆いたしました。ひっくり返ると思ったときわたしは、船板を一枚つかんで、放り出してから、とび込みました。そのときは、猛烈に風が吹いていました。そして、まっ暗な夜で、二、三フィート先がやっと見えるくらいでした。でも、うまいこと、その船板が見つかり、からだをその上へのせることができました。と、あっと思う間に、船は沈んでしまいました。わたしの近くに、鷲野乙吉と寺尾兄弟と松四郎という男が浮いていました——みんな泳いでいたのです。他の者は、影も見えませんでした。おそらく、船といっしょに沈んだものでしょう。わたしども五人の者は、大波に浮き沈みしながら、互いに名を呼び合っておりました。見ると、寺尾勘吉だけが、船板や、板切れ一枚もっていません。わたしは勘吉にむかって、『兄貴よ、おまえには子供がある、おれはまだ若い——この板をくれてやる！』と叫びました。彼は怒鳴り返しました、『こんな海じゃ、板はあぶない！——木から離れておれ、甚よ！——けがをするぞ！』それに返事できないうちに、黒い山のような波が、わたしどもの上におそいかかってきました。わたしは長いあいだ、波の下にいました。そして、また浮び上がったとき、勘吉の姿はどこにも見えませんでした。若い連中

はまだ泳ぎつづけていました。が、わたしの左手のほうへ、流されていたのです――わたしからは見ることができませんでした。わたしどもは、お互い大声で、呼び合っておりました。わたしは、波に逆らわぬようにしていました――他の連中はわたしに呼びかけます、『甚よ！　甚よ！――こっちへ来い――こっちのほうへ！』しかしわたしは、そっちのほうへ行くことが、非常に危険であることを知っていました。なぜなら、横波を受けるたびに、わたしは下へ引きずり込まれたからです。そこでわたしは、彼らに叫び返しました、『潮に乗っておれ！――流れに乗っておれ！』しかし、みんなにはわからなかったようです――まだ、『こっちへ来い！――こっちへ来い！』とわたしを呼んでいました。そして、そのたびに、みんなの声は、だんだん遠ざかって行くようでした。わたしは、返事をするのが、こわくなってきました……溺れた者は、仲間がほしいとそんなふうに、『こっちへ来い！――こっちへ来い！』と呼ぶものなのです。

しばらくすると、その呼びかける声もやみました。そして、聞えるものは、波と風と雨の音ばかりです。まっ暗だったので、波が通り過ぎるときだけしか見えませんでした――高い黒い影が、そのたびにぐいと強く引くのです。その引き方で、どう向きをかえればよいかわかりました。雨のため、波はあまり砕けません――もし雨が降っていなかったなら、だれでもそんな海で、あまり生きていることができなかったはずです。そして、時間のたつにつれて風はますます強まり、波は高くなって行きます。わたしはその夜、一晩中、小川の地蔵さまに助けを祈っておりました……明りですか？――ええ、水に明りはありましたが、数は多くありません。大きなやつで、蠟燭のように光ります。

明けがた、海はひどいものでした――濁った緑色をしているのです。波は小山のようでした。そして、風は猛烈でした。雨と飛沫は、海上に霧をつくり、水平線は見えません。しかし、たとえ陸が見えたところで、ただじっと浮んでいるよりほか、何もすることができませんでした。わたしは、腹がへってきました――非常に空いてきたのです。そして、空腹の苦痛は、やがて耐えきれないまでになりました。その日は一日中、上がったり下がったり大波にゆられて――風と雨の下に漂っていました。陸は影ひとつ見えません。わたしは、どちらへむかって進んでいるのか、わかりませんでした。そんな空の下では、東も西もわかったものではありません。

日が暮れてから、風は静まりました。しかし、雨はなおもどしゃ降りに降りつづけ、あたりはまっ暗闇でした。空腹の苦痛は消えました。しかし、弱ってきました――これでは溺れるにちがいないと思うほど弱ってきたのです。そのとき、わたしを呼ぶ声が聞えてきました――ちょうど前の晩、わたしを呼んだときのように、『こっちへ来い！――こっちへ来い！』……すると突然、福寿丸の四人の者が見えました――泳がずに、そばに立っているのです――寺尾勘吉と、寺尾巳之助と、鷲尾乙吉と、松四郎という男が。みんな、わたしのほうを怒った顔つきをして見ています。そして、子供の巳之助が、まるで叱りつけるように、『ここで、おりゃ、舵をとらにゃなんねえ。だのに甚助、おめえは、眠ってばかしいる！』と、大声で叫びました。すると寺尾勘吉は――これは前に船板をやろうとした男ですが――両手に掛け軸をもって、わたしの上に身をかがめ、それを半ばひろげていいました、『甚よ！　ここにあるのは、阿弥陀さまの絵だ――見ろ！　さあ、念仏をとなえるのだ！』それが妙な口のきき方なので、わたしはこわくなりました。わたしは、

仏さまの姿をながめました。そして、すっかりこわくなって、『南無阿弥陀仏！——南無阿弥陀仏！』と、念仏を繰りかえしました。と、その瞬間、火傷のような痛みが、わたしのももとしりを刺しました。そして、気がつくと、わたしは船板から海へころげ落ちていました。痛みは、大きなカツオノエボシのせいでした……カツオノエボシを、ごらんになったことはないでしょうか。神主のかぶる帽子、つまり烏帽子のような格好をしたクラゲのことです。鰹がそれを食べることから、わたしどもはそれをカツオノエボシと呼んでおります。そいつがどこかへ出てくると、漁師たちは、鰹がたくさん獲れると期待するわけです。からだはガラスのように透明です。が、下のほうに紫色のふち飾りのようなものと、紫色の長いひもがついております。このひもが身体にさわると、痛さは非常なもので、いつまでもつづきます……その痛さで、わたしは意識を回復したのです。もしも刺されなかったら、二度と目をさまさなかったかもしれません。わたしは、また船板に乗り、小川の地蔵さまと、金毘羅さま*に祈りました。そうして、朝まで目をさましていることができました。

　夜明けまえに雨がやみ、空は晴れはじめました。星がいくつも見えたからです。明けがた、わたしはまたうとうとしました。そして、頭をがつんとやられて目をさましました。大きな海鳥が、わたしにぶつかったのです。太陽は雲のうしろにのぼっております。波もおだやかになっていました。やがて、小さな茶色の鳥が、顔をかすめて飛んでいきます——磯の鳥です（本当の名前は知りませんが）。そこで、陸が目に入るにちがいないと思いました。振りむくと、山なみが見えました。山のかたちは、見たおぼえがありません。それらは青く——十里近く離れているように

思われました。わたしは、そちらへぱちゃぱちゃ、水をかいて行こうと決心しました——もっとも、岸へ行きつくあてはほとんどありませんでしたが。またもや、腹がへってきました——おそろしいほど腹がへってきたのです！

わたしは、何時間も、山のほうへ水をかいて行きました。またもや、眠ってしまいました。そしてこんども、海鳥がわたしにぶつかったのです。一日中、わたしは水をかきつづけました。夕暮れ近く、山の様子から、そちらへ近づいていることがわかりました。が、岸へ着くのに、まだ二日はかかると思いました。ほとんど希望を失いかけているとき、不意に船が見えたのです——大きな帆掛け船でした。船は、わたしのほうにむかって進んできます。が、もっと早く泳がなければ、船ははるか向うを通り過ぎて行くのがわかりました。それは最後の機会でした。そこでわたしは、船板を棄てて、できるかぎり早く泳いで行きました。やっと二丁ばかりの所へ近づきました。そこで、わたしは大声で叫びました。しかし、甲板には人影ひとつ見えません。答える声もありませんでした。と、思う間に、わたしの前を通り過ぎて行きました。陽は沈みかけています。わたしは絶望しました。突然、男が一人、甲板に姿をあらわし、わたしにむかって大声で叫びました、『泳ごうとしちゃだめだ！　からだを疲れさせるな！——すぐ舟を下ろしてやるぞ！』見ると、同時に帆を下ろしています。わたしはうれしさのあまり、新しい力が湧いてくるように思いました——わたしは懸命に泳ぎました。すると帆掛け船は、小さな舟を下ろしました。そして小舟が近づいてくると、一人の男が叫びました、『ほかに誰もいないのか——何か落したものはないか』わたしは答えました、『板子一枚あるだけだよ』……とたんに、わたしは力が抜けてし

まいました。小舟の人たちがわたしを引きずり上げることは感じていました。でも、しゃべることも、動くこともできなかったのです。何もかもがまっ暗になりました。

しばらくして、またあの声が聞えてきました――福寿丸の男どもの声です――『甚よ！　甚よ！』――わたしはぎょっとしました。すると誰かがわたしをゆさぶって、『おい！　おい！　そりゃ夢だわな！』見ると、わたしは帆掛け船のなかで、吊り洋燈の下に（夜でしたから）寝ておりました。そして、わたしの横に、見知らぬ老人が、片手にかゆを入れた碗を持って、ひざまずいていました。『ちっとばかし、食べてみな』老人は非常にやさしく、いいました。わたしは、身を起そうとしましたが、できませんでした。すると老人は、自分で碗から、かゆを口へはこんでくれました。それが空になったので、わたしはもっと所望しました。けれど、老人は答えました、『もう駄目だよ――まず、眠ることだ』老人がほかの誰かにむかって、『わしがいうまで、もう何もやっちゃ駄目だぞ。たくさん食わすと、死んでしまうからな』といっているのが聞えました。わたしはまた眠りました。そしてその晩は、さらに二度、飯を――やわらかく炊いた飯を――小さな碗に一杯ずつもらいました。

朝になると、わたしはずっと気分がよくなりました。すると、飯を運んでくれた老人が、わたしのところへやって来て、いろいろ訊ねました。わたしどもの船の沈没したことや、わたしが海中にいた時間のことを聞くと、彼はたいそう気の毒がりました。二日二晩のあいだ、二十五里以上も漂流していたことを、彼は教えてくれました。『わしらは、お前さんの船板を追っかけて、拾い上げておいたよ』彼はいいました、『たぶん、いつかお前さんは、それを金毘羅さまへ納め

たがるだろうと思ってな』わたしは、お礼をいいましたが、それは焼津の、小川の地蔵さまへ奉納したいと思うといいました。わたしが一番、助けをお願いしたのは、小川の地蔵さまだったからです。

親切なその老人は、帆掛け船の船長で、しかも船主でした。播州（ばんしゅう）*の船で、紀州のクキの港へ向っていたのです……クキのキは、鬼という字で——したがって、九つの鬼という意味になります……船の人たちはみな、わたしに非常に親切でした。わたしは、船に引き上げられたとき、ふんどし一つで、まっ裸でしたが、みんな、わたしの着るものを探してくれました。ある者は下着をくれる、また、ある者は袷をくれる、もうひとりは帯をくれる、といったぐあいで——何人かの者は、手拭いと草履（ぞうり）をくれました。それからみんなで、六、七両にもなる金を、寄せ集めてくれたのです。

九鬼に着きますと——変った名前ですが、小さな気持のいい町です——船長はわたしを、りっぱな宿屋へ連れて行きました。そして二、三日も休むと、わたしはもとのように丈夫になりました。すると、土地の領主が——当時の名でいう地頭（じとう）が——わたしを呼んで、話をきき、それを書きとめさせました。まず焼津の地頭へことのしだいを報告したうえで、わたしを国へ送りかえす方途（みち）を考えてみよう、というのです。しかし、わたしを救ってくれた播州の船長は、自分の船でわたしを送りとどけ、しかも地頭の使いの役も果そうと申し出ました。それから二人のあいだに、かなりの議論がつづきました。当時は、電信も、郵便もありませんでした。それに、九鬼から焼津まで特別の使者（飛脚（ひきゃく））を送ったら、すくなくとも五十両はかかったことでしょう。ところが、

一方では、そうしたことに特別の法律や習慣がありました――今日のそれとは、ずいぶん違った法律です。そうこうしているうちに、焼津の船が一隻、近くの荒坂の港に入ってきました。そして、たまたま荒坂にいた九鬼の女が、焼津の船長に、わたしが九鬼にいることを告げたのです。焼津の船は、そこで九鬼にやってきました。地頭は、わたしを焼津の船長に託し――令書を彼にわたして――送りかえすことに決めました。

大体のところ、わたしが焼津へ帰ったのは、福寿丸が沈んだときからほぼ一月たっておりました。港へ着いたのは、夜分でした。わたしはすぐ家へ帰りませんでした。家人を仰天させると思ったからです。船が沈没した確かな報せは、まだ焼津にとどいていませんでしたが、いくつか船の付属品が、漁船によって拾われておりました。それに、台風は非常に突然やってきて、海はひどく荒れていたので、福寿丸は沈んで、わたしどもはみな、溺れてしまったのだと、一般に信じられていたのです……ほかの者は誰ひとり消息が聞かれませんでした……その晩、わたしは友人の家へ行きました。そしてあくる朝、両親と兄弟へ知らせたのです。すると、みんなわたしを迎えに来ました。

毎年一度、わたしは讃岐の金毘羅さまへまいります。難破から救われた者はみな、お礼にそこへまいるのです。それから、小川の地蔵さまへも、わたしはしばしばまいります。明日、いっしょにいらっしゃれば、その船板をお見せいたしやしょう」

『骨董』

幽霊滝の伝説

伯耆(ほうき)の国、黒坂村の近くに、「幽霊滝」と呼ばれる滝がある。なぜ、そう呼ばれるのか、わたしはその由来を知らない。滝壺の近くに、氏神をまつった小さな社(やしろ)があり、土地の人たちは滝大明神と名づけている。そして、社の前に、信者の賽銭(さいせん)をいれる小さな木の箱がある。その賽銭箱について、こんな物語がある。

今から三十五年前の、ある底冷えのする冬の晩、黒坂のとある麻とり場に雇われている女房や娘たちが、一日の仕事をおえたあと、麻とり部屋の大きな火鉢のまわりに集まった。それから、女たちは怪談にうち興じた。話が十もあまるころになると、たいがいの女どもは、薄気味わるくなってきた。すると一人の娘が、ぞくぞくするような恐怖をさらに強めようとばかり、「今夜、あの幽霊滝へ、だれかがひとりで行くことにしたら！」と、大声で叫んだ。この思いつきに、みんなはわっと声を上げたが、たちまち興奮した笑い声につつまれた。「行った人に、あたし、今日とった麻を全部あげる！」と、なかの一人が、茶化すようにいった。「わたしもあげる」と、もう一人が大声でいった。「わたしも」と、つづいて声があがった。「みんな、さんせい」と、さらに一人が言いはなった。すると、麻とり女のなかから、安本(やすもと)お勝という大工の女房が、立ち上

がった。女は、二歳になるひとり息子を、暖かそうにくるんで、背中に寝かしつけていた。「みなさん」と、お勝はいった、「ほんとに、今日とった麻をみんなわたしに下さるなら、幽霊滝に行ってきますよ」彼女のこの申し出は、驚きと無視でむかえられた。しかし、何度も繰りかえすので、とうとうみんな本気になった。麻とり女たちはつぎつぎと、もしお勝が幽霊滝へ行くなら、その日とった分をあたえることに同意した。「でも、ほんとにそこへ行ったか、どうしてわかるの」だれかが鋭い声で訊ねた。「そうね、では、お賽銭箱を取ってきてもらいましょうよ」と、麻とり女たちから「おばあさん」と呼ばれている老女が答えた。「持ってきますとも」と、お勝は叫んだ。そして、眠った児をおぶったまま、表へとび出した。

凍りつくような夜だったが、晴れていた。人通りのない道を、お勝はいそいだ。見ると、身を切るような寒さのため、どの家の表戸もかたく閉めてあった。村を出て、両側ともひっそり静まりかえった、凍った稲田にかこまれた街道を、彼女は、ただ星あかりにみちびかれて——ぴちゃぴちゃと——走った。小半刻も、ひろい道を走りつづけただろうか。それから、崖の下へ曲りくねっている狭い道へ折れた。すすむにつれて、小道はますます暗く、ますます悪くなった。しかし、彼女はよくその道を知っていた。やがて、滝の低い響きが聞えてきた。さらに二、三分すると、小道は谷あいにひらけ——低い響きは、いきなりものすごい轟音になり——前方に、一面の暗闇のなかから、長く鈍く光る滝の流れが、ぼんやり現われてきた。ほのかに、社が——賽銭箱が、見えた。彼女は、駆けよって、手をかけた。

「おい！　お勝さん！」突然、滝の砕ける音を圧していましめる声が聞えた。

お勝は、恐怖に気を失いかけて――立ちすくんだ。

「おい！　お勝さん！」またもや、声がひびいた――こんどは、もっとおどすような口調であった。

しかし、お勝は実は大胆な女であった。すぐに気をとりなおすと、賽銭箱をひっつかんで、走りだした。街道へたどりつくまでに、もう恐れるようなことは、なにも耳にも目にもしなかった。そこまで来て、彼女はちょっと立ちどまり、ひと息ついた。それから彼女は、休まずに――ぴちゃぴちゃと――走りつづけて、黒坂村に着くと、麻とり場の戸をどんどん叩いた。

お勝が、息を切らし、賽銭箱をかかえてはいってきたとき、女房や娘たちは、どんなに驚きの声をあげただろう！　息を凝らして女たちは、彼女の話を聞いた。滝のなかから何者かが、二度も、彼女の名を呼んだ話を聞いたときは、同情のあまり悲鳴をあげた。なんていう女（ひと）だろう！胆ッ玉の太いお勝さんだこと！――麻を上げるだけのことはあるわ！……「でも、坊やは寒かったでしょうね、お勝さん！」と、おばあさんは叫んだ、「さ、火のそばへ連れてきなさい！」「お腹がすいているでしょう」と、母親が大声で叫んだ、「すぐ、乳をやらなくちゃ」

「かわいそうなお勝！」とおばあさんは、子供をくるんであるねんねこを解くのを手伝いながらいった――「まあ、背中がぐっしょり！」それから、かすれた声で悲鳴をあげた、「あッ！　血だ！」

そして、解いたねんねこから床に落ちたものは、血にしみた子供の着物から突き出た、非常に小さな二本の褐色の脚と、非常に小さな二本の褐色の手——ただ、それだけであった。子供の首は、むしり取られていたのである！

茶碗の中

読者はこれまで、古塔の暗闇のなかにそそり立つ階段をのぼろうとして、その暗闇のただ中を、蜘蛛の巣のかかった突端で、行きどまるようなことがなかったであろうか。あるいは、断崖に沿って切りひらかれた海岸づたいの小径を、ひと曲りしただけで、のこぎりの歯のような崖っぷちに出るようなことがなかっただろうか。こうした経験の感情的価値は――文学的観点からいえば――そのときに呼びおこされた感覚の力と、それらが記憶される鮮烈さとによって決定されるのである。

ところで、日本の古い読み本には、これとほとんど似かよった感情的経験をよび起す小説の断片が、不思議にもいくつか残っている。多分、作者がなまけ者だったのであろう。あるいは、版元と喧嘩をしたのかもしれない。あるいはまた、不意にその小机から呼び出されて、二度ともどってこなかったのかもしれない。いや、まさにその文章の途中で、死が筆をとめさせたのであろう。しかし、なぜ、これらのものが未完に残されたのか、だれもはっきり教えてくれる者はいない。一つ、その典型的な例を選んでみよう。

天和三年の一月四日――すなわち、今を去る二百二十年前――中川佐渡守は、年始回りの途中、

江戸は本郷の、白山の茶店に供を連れて立ち寄った。一同そこで休息しているあいだに、供回りの一人——関内という若党*——が、ひどくのどのかわきをおぼえたので、みずから立って大きな茶碗に茶をいっぱい注いだ。飲もうとして、その透明な黄いろい茶に、彼とはちがう別人の顔が映っているのに、不意に気づいた。ぎょっとして、あたりを見まわしたが、そばには誰もいない。茶に映った顔は、髪のかたちからみて、若い武士の顔らしかった。妙にはっきりして、なかなかの美男——娘の顔のようにやさしかった。しかも、生きている人間の顔が映っているように思われた。なぜなら、眼も口も動いていたからである。この不思議な現象に当惑した関内は、茶をすてて、綿密に茶碗をしらべてみた。それは別に、なんの意匠も凝らしてない、ごくありふれた茶碗であった。彼は、べつの茶碗をさがして、茶を注いだ。するとふたたび、顔が茶のなかに現われた。そこで彼は、新しい茶を命じて、茶碗に注いだ。するとまたもや、不思議な顔があらわれた——こんどは嘲るような笑いをもらした顔が。しかし関内は、もう驚きはしなかった。「何者か知らないが」と、彼はつぶやいた、「もうお前にはだまされぬぞ！」——そういって彼は、顔ごと茶をぐいと飲むと、妖怪を飲み込んだかもしれないと思いつつ、立ち去った。

その日の晩方おそく、関内が、中川侯の屋敷で宿直を勤めていると、見知らぬ男が部屋へ音もなくはいってきたので驚いた。この見知らぬ男は、身なりの立派な若い武士であったが、関内に面と向ってすわると、軽くこの若党に一礼していった。

「式部平内と申す者——本日、はじめてお目にかかり申した——貴殿はお見覚えないようでござ

るが」

非常に低いが、よく通る声であった。関内は、最前あの茶碗のなかで見、しかも飲み込んだ妖怪の、無気味な、美しい顔を目の前に見て、驚愕した。そいつは、あの亡霊が微笑したように、今も微笑を浮べている。が、微笑している口もとの上から、凝視する視線は、挑戦的であり、また侮蔑にみちていた。

「いかにも、見覚えはござらぬ」と関内は怒りつつも、ひややかに答えた、「それにしても、貴殿は、どうしてこの屋敷へはいる許しを得られたか、お聞かせねがいたい」

（封建時代には、大名の屋敷は、昼夜を問わず厳重に守護されていた。そこで、警固の武士の許すべからざる怠慢でもないかぎり、取次ぎの案内もなくしてはいることは不可能であった。）

「ほう、見覚えがないと！」客は、皮肉な調子で、すこしにじり寄りながら、叫んだ。「いや、見覚えがないとな！　が、貴殿は今朝ほど、拙者に非道な危害を加えられたではないか！」

関内は、即座に、腰の短刀をつかむと、男ののどを、はげしく突いた。が、切っ先に、手ごたえはなかった。同時に音もなく、その侵入者は壁のほうへ横に飛び、そこを抜けて行った！　壁には、人の通り抜けた跡はなにもなかった。まるで、蠟燭のあかりが、提燈の紙を透けてとおるように、壁を通り抜けて行ったのである。

関内がこの出来事を報ずると、家臣たちは驚き、かつ当惑した。その事件のあった時刻に、屋敷を出入りした客の姿はなかったからである。そして、中川侯に仕える者のうちに、だれひとり

「式部平内」なる者の名を聞いた者はなかった。

あくる夜、関内は非番で、両親とともに家にいた。かなり遅くなってから、来客があり、しばらく話をしたいと伝えられた。刀をとって、玄関に出ると、そこに三人の刀をさげた男たち――あきらかに侍――が、戸口のまえに待っていた。三人は、うやうやしく関内に頭を下げると、その一人がいった――

「身どもは、松岡文吾（ぶんご）、土橋文吾、岡村平六（へいろく）と申す者。式部平内どのの家来でござる。主人が昨夜うかがった折、貴殿は刀で刺された。傷が重いため、主人は湯治に行かねばならず、目下そこで、傷の治療にあたっておられる。しかし、来月の十六日にはお帰りになる。その時には、必ずやこの意趣はお返し申す……」

それ以上は耳もかさずに、関内は、刀を手にとび出し、その客たちを目がけ、左右に切りまくった。だが、三人の男は隣家の塀（へい）にとびのくと、影のようにその上を飛びこえ、それから……。

ここで、古い物語はぷつんと切れている。話ののこりは、だれかの頭のなかにはあったのだが、土に帰してもう百年になる。

わたしは、いろいろと可能な結末を想像することができる。が、いずれも、西洋の読者の想像力を満足させることはあるまい。魂をのみ込んだ結果については、読者の判断にゆだねておく。

常識

むかし、京都に近い、愛宕山とよばれる山の中に、坐禅と聖典の研究にひたすら精進する、ある博識の僧が住んでいた。僧の住む小さい寺は、村から遠く離れていた。そして、人里離れたこういう場所では、人の助けなしには、日常、生活に必要なものも手に入れることができなかった。しかし、何人かの信心深い村人が、毎月きまって野菜や米を運んで、僧の生活をささえていた。

これらの善良な人びとの中に、一人の猟師があり、ときどきこの山へも、獲物をさがしにきた。ある日、この猟師が寺へ米を一袋もってきたとき、僧はいった。

「そなたに、ひとつ話したいことがあるのじゃが、この前、そなたが見えて以来、ここに不思議なことが起きている。どうして愚僧のような者に、こんなことが生じるのか、とんと納得がいかない。しかし、知ってのとおり、長年わしは、毎日坐禅と、読経をつづけてまいった。そこで、こうしたありがたいことも、勤行の功徳かとも思われる。が、これも確信がもてないのじゃ。しかし、たしかなことは、普賢菩薩が毎晩、象に乗って、この寺へお見えになる……今夜はここに、わしと泊るがいい。仏さまをおがむことができるからの」

「そんな尊いおすがたをおがめるとは、まったくありがたいことです！」猟師は答えた、「よろこんで、ご一緒におがませていただきます」

そこで猟師は寺に泊った。しかし、僧が勤行をつとめているあいだ、今夜あらわれる奇蹟について考え、いったいそんなことがありうるだろうかと、疑いはじめた。そして、考えれば考えるほど、疑いはますます深まった。寺に少年——つまり小僧——がいたので、猟師は折をみて小僧に訊ねた。
「和尚さまのお話では」と、猟師がいった、「毎晩、この寺へ普賢菩薩がみえるそうだ。お前さんも、普賢菩薩を見なさったかね」
「ええ、もう六度も、普賢菩薩のおすがたを、おがみました」と、小僧は答えた。
猟師は、小僧の正直さをすこしも疑わなかったが、この言葉によって、かえってますます疑いを深めた。しかし、小僧の見たものは、いずれ自分も見ることができるのだと思い直した。そして、姿のあらわれる時刻を、心から待ちうけていた。

真夜中ちょっと前に、僧は、普賢菩薩を迎える時刻の近いことを知らせた。小さな寺の戸は開け放たれた。そして僧は、東の方をむいて、戸口にぬかずいた。小僧はその左手にぬかずき、猟師は僧のうしろにかしこまった。
九月二十日の夜——無気味な、暗い、非常に風の強い夜であった。三人は、そのままずっと、普賢菩薩のあらわれるのを待っていた。するとようやく、東の方に、星のような、白い一点の光があらわれた。そして、この光は、ずんずん近づき——近づくにつれて、ますます大きくなり、山の斜面をくまなく照らし出した。やがて、光はかたちをとり——六本の牙のある、雪のように

まっ白な象に乗った、尊いお姿になった。すると、次の瞬間、光りかがやく菩薩を乗せた象は、寺のまえに達し、まるで月光の山のように――あやしく、無気味に――そびえ立った。

するとと、僧と小僧は、ひれ伏したまま、普賢菩薩にむかって必死に経文を唱えだした。が、突然、猟師は、手に弓をとって、二人の背後に立ちあがった。そして、弓を満月のように引きしぼると、光りかがやく菩薩を目がけて、長い矢をひょうと放った。矢は、その胸元ふかく、羽根のところまで突きささった。

たちまち、激しい雷鳴のような音響とともに、白い光は消え、姿も見えなくなった。寺のまえには、ただ風のある暗闇がのこった。

「ああ、この恥知らずめ！」と僧は、恥と絶望のあまり涙を流しながら叫んだ。「なんという、ひどい悪いやつだ！――いったい、どうしてくれる――どうしてくれるのだ！」

しかし、猟師は、いっこうに平気で、怒りの色も見せずに、僧の非難を聞いていた。それから彼は、きわめて静かにいった。

「和尚さま、どうか落ちついて、わたしの言うことをお聞きください。あなたは、ただ一筋の坐禅と読経による功徳で、普賢菩薩をおがむことができるとお考えになりました。しかし、もしそれならば、仏さまは、あなたにだけ現われるはずです――わたしや、この小僧さんには見えるはずもありません。わたしは、無学の猟師で、殺生を生業としております――命を奪ることは、仏さまの忌われるところです。それなのに、どうして、普賢菩薩をおがむことができましょうか。仏さまは、まわりのどこにでもおられるが、わたしどもは無知蒙昧のためにおがむことができな

いのだ、と教えられております。あなたは——清らかな生活を送っておられる、学問のあるお坊さまですから——仏さまをおがめる悟りもひらいておられましょう。けれども、暮しのために殺生をしているような人間に、どうして尊いおすがたをおがむ力などありましょうか。わたしも、この小僧さんも、あなたのおがまれたものを、そのまま見ることができました。そこで、和尚さん、はっきり申し上げますが、あなたのごらんになったものは、普賢菩薩ではなく、あなたを騙(だま)し——ことによると、あなたを殺そうとしている、化けものに違いありません。どうか、夜の明けるまで、気をおしずめください。そうすればきっと、いま申したことの証拠をごらんに入れますから」

夜明けとともに、猟師と僧は、あのお姿の立っていた所をしらべて、うすい血の痕を見つけた。それからその痕を、数百歩はなれたくぼ地までたどって行くと、猟師の矢を突き立てた、大きな狸(たぬき)の死骸があった。

僧は、博識で信心深い人であったが、狸に容易にだまされていた。しかし、猟師は無学で信心のない男だったが、強い常識をそなえていた。そして、この生れつきの知恵だけによって、ただちに危険な幻影を見破り、それを打ち砕くことができたのである。

生霊

むかし、江戸の霊岸島に、喜兵衛という金持のいとなむ大きな瀬戸物屋があった。喜兵衛は、長年、六兵衛という番頭を使っていた。六兵衛の差配によって、店は繁盛した。そして、ついには、あまりに手広くなり、六兵衛ひとりの力では、まかないきれなくなった。そこで、申し出て、経験のある手代を一人、雇う許しを得た。そして、自分の甥の一人を、呼びよせた——大阪で瀬戸物商売を見習っていた、二十二ばかりの若者である。

甥は、なかなか腕のある手代であった——商売の道にかけては、経験をつんだ伯父よりも抜け目がなかった。その発明の才は、店の商いをますますひろげ、喜兵衛を非常によろこばせた。しかし、雇われてから七カ月もしたころ、この若者はひどい病にかかり、死にそうに思われた。江戸一番の良医たちをも招いて診せた。が、だれにも、その病の性質がわからなかった。みんな、薬の処方もせずに、こんな病気は、なにか人に知られぬ悲しみから生じたものとしか思われない、と意見を述べた。

六兵衛は、恋わずらいかもしれないと思った。そこで、甥にむかっていった。

「お前は、まだたいそう若いのだから、あるいは、人知れず思いをかけて、それがお前を不幸にし——ことによると、病気にまでなったのではないかと考えている。もし、それがほんとうなら、

思いのたけをみんな、わしに打ち明けるのが当然。ここでは、お前は親もとから遠くはなれているので、わしが親代りだ。それでもし、わずらいごとや悲しいことがあれば、父親としてなすべきことを、このわしがしてやるつもりだ。金子がいるなら、恥ずかしがらずに、いくらでも言いなさい。工面もしてやれると思う。それに、喜兵衛さまも、お前をしあわせに元気にすることなら、なんでも喜んでやってくださるだろう」

病人の若者は、この親切な言葉に当惑したように思われた。それで、しばらくのあいだ、黙っていた。とうとう、彼は答えた。

「一生かけて、そのやさしいお言葉を、忘れるものではございません。しかし、わたしには、ひそかに思いを寄せている人――思い焦がれている女性など一人もありません。わたしのこの病は、医者の癒せるような病気ではないのです。お金だって、ちっとも役に立ちません。実をいえば、わたしはこの家で迫害をうけているので、もうこれ以上生きていたいとは思えないほどです。どこでも――昼でも夜でも、店であれ自分の部屋であれ、独りでいても人中にあっても――わたしは絶えず、ある女のまぼろしにつきまとわれて、苦しめられております。もう、ずいぶんのあいだ、一晩のやすらぎさえ得ておりません。目を閉じるやいなや、その女のまぼろしが、わたしののどをつかんで、絞め殺そうとするのです。それで、わたしは眠ることができないのです」

「では、なぜもっと早く、わしにそれを話さなかったのだ」と、六兵衛は訊ねた。

「お話しても、無駄だと思ったのです」甥は答えた、「まぼろしは、死んだ人間の亡霊ではないのです。生きた人間の――あなたもよくご存じの方の、憎しみから出たものなのです」

「それは、だれだ」と六兵衛は、大いに驚いて訊ねた。
「ここのお内儀(かみ)さんです」と、若者はささやいた、「喜兵衛さまの奥さん……あの方が、わたしを、殺そうとしていなさるのです」

六兵衛は、この告白に当惑した。甥のいったことに、いささかも疑いはなかった。が、とり憑(つ)かれる理由(いわれ)は想像すらできなかった。生霊は、失恋やはげしい憎悪(ぞうお)から——それの因(もと)となっている当の人間も知らないうちに——生じることがある。この場合、いかなる恋情も想像することは不可能だった。喜兵衛の妻女は、もう五十をかなり出ていたからである。が、それならば、この若い手代は、なにか憎悪を——生霊をまねくほどの憎悪を、かき立てるようなことでもしでかしたのだろうか。彼は、非のうちどころのないほど行儀がよく、いつも礼儀正しく、仕事にはたいそう熱心であった。その不可解は六兵衛を困らせた。しかし、熟考したあと、いっさいを喜兵衛に打ち明け、よく調べてもらおうと決心した。

喜兵衛は、仰天した。しかしこれまで、四十年ものあいだ、六兵衛の言葉を疑うようなことはさらになかった。そこで彼は、ただちに妻女を呼んで、病人の手代のいったことを伝えると同時に、注意深く訊ねた。最初、彼女は青くなって、泣いた。が、しばらくためらったあと、すなおに答えた。
「生霊について、新しい手代のいったことは、本当のように思います——実は、言葉や顔色に出すまいと努めておりますが、わたしは、あの男が憎くてたまらないのです。あなたもご存じのと

おり、あれは商売が非常にじょうずで——やることなすこと、ことごとく気がきいております。それであなたは、お店の権限を——丁稚(でっち)や召使を思いのままに使う力を、あの男にあたえておやりになりました。ところが、この商売を当然継ぐべきうちの一人息子は、実にお人好しで、すぐに人にだまされます。そこでわたしは、せんから、この利口な手代がうちの息子をたぶらかして、財産をすっかり横取りしてしまうかもしれないと、考えていたのです。実際、あの手代はいつでも、きっと、やすやすと、危険を冒すまでもなく、店をつぶして、うちの息子を堕落させることができます。こう思い込むと、わたしはあの男が、恐ろしく、また憎くてたまらなくなりました。何度も何度も、死ねばいいと思いました。自分の力で殺せたら、とさえ願ったくらいです。……ええ、そんなふうに他人(ひと)を憎むのは、間違っていることはわかっていました。が、その気持をおさえることはできませんでした。夜も昼も、わたしはあの手代を、呪(のろ)いつづけてきたのです。だから、あの男は、六兵衛にいったとおりのものを、ほんとに見たにちがいありません」

「なんという馬鹿だ」と、喜兵衛は叫んだ、「そんなに苦しむなんて！　今の今まで、あの手代は、かれこれいわれるようなことは、何ひとつしたことがない。それなのにお前は、あの男をひどく苦しめていた。……さて、もしあの男を、伯父といっしょに、ほかの町へやって、店を分けたら、もっとやさしく考えてやれないだろうか」

「もし顔を見たり、声を聞いたりしなければ」妻女は答えた、「もし、この家から出してさえくだされば——わたしも、憎しみをおさえることができると思います」

「そうしてみてくれ」と、喜兵衛がいった、「これまでのように、あの男を憎みつづけていては、

あれはきっと死ぬだろう。そうすれば、お前は、わたしたちのために、よく尽してくれた男を殺すような罪を犯すことになる。どうみても、あの男は、これまで実にすばらしい手代だったのだから」

それから喜兵衛は、すぐにほかの町へ、出店をつくる準備にかかった。そして、手代といっしょに、六兵衛をやって、面倒をみさせた。それからのち、生霊は、この若者を苦しめるのをやめ、やがて彼は健康を回復した。

死霊（しりょう）

越前の国の代官、野本弥治衛門（のもとやじえもん）が死ぬと、たちまちその下役どもは共謀して、旧主の遺族から財産をだまし取ろうとした。代官の負債の一部を返すことを口実に、その家の金子（きんす）や、金目のものや、道具類を、いっさい手に入れた。しかもそのうえ、主人が無法にも自分の財産をはるかにこえる債務を負っていたかのように見せかける虚偽の報告書を作った。この虚偽の報告書を、彼らは老中のもとに送った。そこで老中は、野本の妻子たちに、越前の国から追放を命じた。当時、代官の家族は、たとえ代官の死後であっても、生前の悪行があばかれた場合、責任の一半を負わされることになっていたのである。

しかし、追放の命が野本の未亡人に正式に伝えられた瞬間、その家の女中の一人に、妙なことが起った。彼女は物の怪（もののけ）に憑（つ）かれた人間のように、いきなり激しい発作を起して、がたがた震えだした。そして、発作がおさまると、すっくと立ち上がり、老中につかわされた役人と、亡主の下役どもにむかって叫んだ。

「者ども、よっく聞くがよい！　なんじらに話しているのは、小娘ではない。それは、拙者こと――弥治衛門、野本弥治衛門――が、黄泉（よみ）の国からもどって参ったのだ。悲憤のあまり――いたずらに信じていた者どもへの悲憤のあまり、もどって来たのだ！……おう、なんじら、恥ずべき

恩知らずの下役ばらよ！　どうして、受けた恩義を忘れ、かくまで拙者の財産をかすめ、名を辱(はずか)しめることができるのか……さあ、拙者の面前で、役所とわが家の勘定書を調べてみよう。そして目付(めつけ)*のところから、召使に帳簿を持ってこさせ、それらを比べてもらおう！」

女中がこういう言葉を発したので、居並ぶ者どもはみんな驚いた。彼女の声も態度も、野本弥治衛門の声であり態度であったからである。身におぼえのある下役どもは青くなった。が、老中につかわされた役人たちはただちに、その女中のねがいを十分聞きとどけるように命じた。役所の勘定書は、ただちに、いっさい女中の前に集められた――そして目付の帳簿も運ばれた。そこで、彼女は勘定をはじめた。間違いひとつ犯さず、勘定をすっかりやってのけ、締高(しめだか)を書いて虚偽の記入をことごとく正した。しかも、彼女の書いた字は、ほかならぬ野本弥治衛門の筆跡であることが認められた。

さて、勘定のこの再吟味によって、負債のまったくなかったことが証明されたばかりでなく、代官の死亡した当時、役所の金庫に剰余の金のあったことが判明した。こうして、下役どもの悪事が明らかになった。

そして勘定がすっかり終ると、女中は、ほかならぬ野本弥治衛門の声でいった。

「さて、これでいっさいが終った。もうこれ以上、やることはござらぬ。そこで拙者は、来たところへ帰るといたそう」

それから女中は横になると、すぐに寝入ってしまった。二日二晩、死んだように彼女は眠った（とり憑いていたものが離れると、とり憑かれた者にひどい疲労と深い眠りが襲ってくるのであ

る)。ふたたび目覚めると、声も態度も、若い娘の声と態度になっていた。そして目覚めた時も、またそれから後も、野本弥治衛門の亡霊にとり憑かれていたあいだのことを、女中は何ひとつ思い出すことができなかった。

この事件の報告は、ただちに老中のもとへ送られた。すると老中は、すぐさま、追放の命を取り消したばかりでなく、代官の遺族に多くのほうびをあたえた。のちに、いろいろな死後の栄誉が、野本弥治衛門に贈られた。そして、それから長いあいだ、一族は、公儀の恩顧をうけ、大いに栄えた。が、下役どもは、みなそれぞれ相応の罰を受けた。

おかめのはなし

土佐の国、名越の長者、権右衛門の娘のおかめは、夫の八右衛門を心から愛していた。彼女は二十二歳、八右衛門は二十五歳。あまりに愛していたため、世間では、やきもちやきと思われていた。しかし夫は、やきもちを起さすようなことは、何ひとつしでかさなかった。そして、二人のあいだに、絶えて、冷たい言葉の交わされたことがなかった。

不幸にも、おかめはからだが弱かった。結婚後、二年とたたぬうちに、そのころ土佐で流行っていた病気にかかり、どんな名医も癒せなかった。この病気にかかった者は、食べることも飲むこともできなくなった。いつもうとうとして、けだるく、妙な妄想に苦しめられた。そして、休みなく看護をうけたにもかかわらず、おかめはしだいに、日一日と弱っていき、とうとう自分でも、もはや助からぬことがわかった。

そこで、彼女は夫を呼んでいった。

「わたしのこのひどい病気のあいだ、あなたが、どれだけわたしに尽してくださったか、とうてい口では申せません。きっと、こんなに思いやりのある方は、どこにもいらっしゃらないでしょう。でも、それだけに、いまあなたとお別れするのが、わたしには辛いのです……考えてもみてください！　わたしはまだ二十五にもならないのです――それに、世界でいちばん立派な夫があ

りますーーそれなのに、わたしは死なねばならない！……いえ、いえ、駄目！　わたしに、気やすめをおっしゃっても無駄よ。どんなお医者も、手の打ちようがないのですから。まだ、二、三カ月は生きられると思っていました。でも、今朝、鏡で顔を見て、今日死ぬことがわかりました——ええ、たしかに、今日なのです。それで、あなたにしていただきたいことがあります——わたしを、ほんとに幸福に死なせたいのでしたら」

「どんなことか、言ってごらん」八右衛門は答えた。「もし、わたしの力でできることなら、よろこんでそれをしてあげよう」

「いえ、いえ——よろこんでしていただけることではないのです」彼女は答えた。「あなたは、まだお若いのですもの！　そんなことお願いしても、むずかしい——とても、むずかしい——ことです。でも、その願いごとは、わたしの胸のうちに、火のように燃えております。死ぬ前に、それを申し上げておかなくてはなりません……ねえ、あなた、わたしが死ねば、おそかれ早かれ、皆さんがあなたに、また奥様を持たせようとなさるでしょう。わたしにお約束いただけません？——お約束できません？——もう結婚しないと……」

「そんなことか！」八右衛門は叫んだ。「それくらいの願いごとなら、確かに聞いてあげよう。心から、お前の後添いはもらわぬことを約束する」

「ああ！　うれしや！」とおかめは、寝床から半ば身を起して叫んだ、「ああ、それを聞いて、わたしはほんとうに幸せ！」

　そういって彼女は、ばったりうしろに倒れて死んだ。

ところで、八右衛門は、おかめの死後、からだがしだいに衰えていくように思われた。最初、顔の変化は当然、悲嘆のせいにされ、村人たちは、「あの人はたいへん女房想いだったから！」としかいわなかった。しかし、月日がたつにつれ、彼はますます青く弱々しくなり、とうとう人間というよりは幽霊のように思われるほど、細くやつれてきた。そこで人びとは、そんな若い男がこれほど急に衰弱するのは、たんに悲しみだけでは説明がつかないと疑いだした。医師たちは、八右衛門の病気は普通のものでないといった。彼らには、彼の病状が説明できなかった。それでも、なにか非常に異常な心の悩みが原因になっているかもしれない、とほのめかした。八右衛門の両親は、いろいろ質ねてみたが無駄であった――すでに両親の知っていること以外に、悲しみの理由はないというのである。両親は再婚をすすめた。しかし、死んだ妻との約束を破る気にはなれないと、彼は主張した。

それからも八右衛門は、日に日に、目に見えて衰えていった。そして家族は、彼の命はもうないものとあきらめた。しかしある日、きっと何か隠していることがあるにちがいないと思っていた母親は、その衰弱の本当の原因を教えてくれるように熱心に頼み、しかも目の前でさめざめと泣いたので、彼も母の懇願を断わりきれなくなった。

「母上」彼はいった、「こんなことは、母上やどなたにも、非常に申し上げにくいことなのです。それに、おそらく、一部始終をお話したところで、とても信じていただけないと思います。実は、

おかめがあの世で成仏できないでいるのです。それに、いくら回向を繰りかえしても無駄だということです。たぶん、わたしが黄泉路をずっといっしょについて行ってやらなければ、成仏できないのでしょう。なぜかというと、毎晩、あれはもどってきて、わたしのわきに寝みます。葬式の日から、毎晩、もどってくるのです。それで、時には、あれがほんとに死んだのか、疑いたくなるときさえあります。顔色も振舞いも、生きているときのままなのですから――ただ話しかけるときに、声をひそめるだけです。そしていつも、ここへ来ることを、だれにも教えないように頼みます。わたしにも死んでもらいたいのでしょう。わたしも、わたし一人だけのことなら、生きていたいとは思いません。しかし、たしかに、おっしゃるように、わたしのからだはご両親のもので、なによりも孝養をつくさねばなりません。そこで今、母上に、いっさいの真相を申しあげるのです。……ええ、毎晩、わたしが眠ろうとすると、あれはやってくるのです。そして、明け方までおります。寺の鐘が聞えると、すぐに出て行きます」

八右衛門の母はこれらのことを聞いて、たいそう驚いた。そして、ただちに菩提寺へいそぎ、住職に息子の告白したことをすべて伝えて、御仏の助力を乞うた。高齢で経験の深い住職は、べつに驚きもせず一部始終を聞きおわると、母親にむかっていった。

「このようなことが起ったのは、愚僧には初めてのことではない。おそらく、ご子息は助けてあげられよう。しかし、ご子息は実際危ないところにおられる。顔には死相があらわれているようじゃった。もし、おかめどのがもう一度帰ってこられたら、二度と陽の日を見られないだろう。

手の打てることは、すぐに手を打たねばならぬ。ご子息にはなにも言われぬように。そして、できるだけ早く、ご両家の家族を集めて、さっそく寺にくるようお伝えくだされ。ご子息のために、おかめどのの墓をあばく必要があるから」

そこで一族の者は、寺に集まった。そして、墓をあばくことにみな同意したので、住職は墓地へ案内した。それから、住職の指図にしたがって、おかめの墓石が除けられ、墓がひらかれ、棺が引き上げられた。そして棺の蓋がはずされると、居合せた人びとはみな、ぎょっとした。おかめが、病気になる以前のような美しい顔立ちのまま、微笑を浮べて坐っていたからである。そして、死んだ形跡はどこにも見られなかった。しかも住職が、女の亡骸を棺から取り出すよう手伝いの人びとに命じたとき、驚きは恐怖に変った。あれほど長いあいだ、坐ったままの格好で*置かれていたにもかかわらず、遺体は触ると生温かく、生きているようにまだ弾力があったからである。

それは斎場へはこばれた。そして、そこで住職は、筆をとって、遺体の額や胸や手足に梵字で、ある魔除けの言葉を書いた。それから、その遺体を墓へもどすまえに、おかめの霊のために施餓鬼をおこなった。

彼女はそれから二度と、夫のもとを訪れなかった。それで八右衛門は、しだいに健康と体力を回復した。しかし、彼がいつまでもその約束を守ったかどうか、日本の作者は語っていない。

蝿（はえ）のはなし

およそ二百年ほど昔、京都に飾屋久兵衛（かざりやきゅうべえ）という商人が住んでいた。店は島原街道からすこし南によった、寺町通りにあった。店に、たまという——若狭（わかさ）の国生れの——下女がいた。

たまは、久兵衛夫婦にやさしく扱われていて、心から二人になついているようであった。しかし、彼女はほかの娘たちのように、美しく着飾ろうとする気はなかった。そして彼女は、休みの日になると、綺麗（きれい）な着物をいろいろもらっていたにもかかわらず、いつも仕事着のまま出かけた。久兵衛のもとにきて五年ばかりたったある日、彼は、なぜ身だしなみをととのえようとしないのか、と彼女に訊（たず）ねた。

たまは、この質問に含まれている非難に顔をあからめて、うやうやしく答えた。

「両親が亡くなりましたとき、わたしはまだ小さな子供でございました。ほかに子供はおりませんでしたから、二人の供養をおこなうのが、わたしの務めとなりました。そのころは、そうするだけの余裕がありませんでした。けれども、それに必要な金をためることができたら、すぐに常楽寺（じょうらくじ）という寺へ二人の位牌（いはい）をおさめて、法要を営んでいただこうと決心しました。そこでこの決心を果すために、わたしは、お金や着るものを、詰めてまいったのでございます。あるいは、なりふりかまわぬとお気づきなほど、詰めすぎてまいったかもしれません。しかし、いま申しあげ

た目的のために、銀百匁ばかりを、もうたくわえることができました。ですからこれからは、身ぎれいにして人前へ出るようにいたします。これまでのだらしなさと無作法を、どうかお許しくださいますように」

久兵衛はこの率直な告白に感動した。そこでこの娘に、やさしく話しかけ、これからは、自分の好きなものを着てもよろしいと請け合い、そしてその孝心をほめた。

こう話し合ってからまもなく、女中のたまは、両親の位牌を常楽寺へおさめて、相応の法要を営んでもらうことができた。彼女がたくわえた金子（きんす）のうち、七十匁はこうして費やされた。残り三十匁は、お内儀（かみ）さんにあずかってもらうことにした。

しかし、つづく冬の初めに、たまは突然病気になった。そして、ほんのしばらくわずらったあと、元禄十五年（一七〇二年）の一月十一日に死んだ。久兵衛夫婦は、その死を深く悲しんだ。

さて、それから十日ばかりしたころ、非常に大きな蠅が一匹、家の中にはいってきて、久兵衛の頭のまわりをぶんぶん飛びまわりはじめた。ふつう、大寒の時節に蠅が出てくることなどありえないうえ、こんな大きな蠅は、暖かい季節でもなければ滅多に見られなかったから、これには久兵衛も驚かされた。蠅があまりにうるさいので、久兵衛はわざわざそれをつかまえて、外へ逃がした――そのあいだ、傷つけないように注意をはらいながら。久兵衛は、熱心な仏教徒だったのである。蠅は、すぐにまたもどって来た。そしてまたつかまえられて、捨てられた。しかしそ

れは、またもやはいって来た。久兵衛のお内儀は、これを不思議に思った。「もしかしたら、たまじゃないかしら」彼女はいった（というのは、死者は――とくに餓鬼道におちた者は――ときどき虫のすがたになってもどってくるからである）。久兵衛は笑って、「それでは、目じるしをつけたらわかるだろう」と答えた。彼はその蠅をつかまえて、鋏で翅の両端にすこし切り目をつけた――そしてそのあと、家からかなり離れたところへ持って行って放した。

あくる日、それはもどって来た。久兵衛は、それがもどって来たことに、なにか霊的な意味があるかどうか、まだ疑っていた。彼はまたもやそれをつかまえると、翅とからだに紅を塗って、前よりもっと家から遠いところへ持って行って、それを放した。ところが、二日後に、全身まっ赤なそれはもどって来た。そこで、久兵衛はもう疑うのをやめた。

「おそらく、それはたまだろう」彼はいった。「なにか欲しいものがあるのだ――が、なにが欲しいのだろう」

お内儀が答えた。

「わたしはまだ、たまのお金子を三十匁あずかっております。おそらく、自分の魂の供養に、その金を寺へおさめてほしいのでしょう。たまはいつも、自分の後生のことを非常に気にしていましたから」

そう彼女が話すと、蠅はとまっていた障子から下へ落ちた。久兵衛が拾い上げて見ると、それは死んでいた。

そこで夫婦はただちに寺へ行って、娘の金子を僧におさめることに決めた。二人は蠅の死骸を小さな箱に入れて、いっしょに携えて行った。

　寺の住職の自空上人は、蠅のはなしを聞くと、久兵衛夫婦はよいことをしたと断言された。それから自空上人は、たまの霊魂のために施餓鬼を営まれた。そして蠅の死骸に、妙典八巻を誦した。それから、蠅の死骸をおさめた箱は、寺の庭に埋められた。そしてその上に、それにふさわしい経文をしるした卒塔婆が建てられた。

雉子のはなし

尾州の国、遠山の里に、むかし若い農夫とその妻が住んでいた。家は山あいの、淋しい場所にあった。

ある夜、妻は、数年前に亡くなった舅が、夢にあらわれて、「明日、わしは非常な危険な目にあう。できるなら、わしを助けてくれ！」といった。夜が明けて、彼女はこのことを夫にむかっていった。そして彼らは、その夢について語り合った。二人とも、死んだ父がなにか用があるのだろうと思った。しかし、夢の言葉がなにを意味しているのか、想像もつかなかった。

朝食をすませてから、夫は畑へ行った。妻は家に残って機を織っていた。やがて、戸外に大きな叫び声が聞えたので、彼女は飛び上がった。戸口へ走りよると、土地の地頭が、狩りの一行をひき連れて、こちらへ近づいてきた。そのまま見ていると、一羽の雉子がわきをすり抜けて家へとび込んできた。彼女は不意に、昨夜の夢を思い出した。「ことによると、これはお舅さんかもしれない」彼女は心に思った、「助けてあげなければならない！」そこで、鳥——すばらしい雄の雉子だった——の後を追って急いで家にはいると、苦もなくそれをつかまえて、空の米櫃の中へ入れて、蓋をした。

その後すぐ、地頭の家来たちが何人かはいってきて、雉子を見かけなかったかと訊ねた。彼女

は大胆にも、知らないと答えた。が、猟師の一人が、たしかこの家へ逃げ込むのを見たといった。そこで一行は、隅々にいたるまでのぞき込むようにして、さがし回った。しかし、米櫃をさがすことまで思いつく者はなかった。いたる所しらべてみたが、なんの手がかりもなかったので、みんな鳥はどこか穴から逃げて行ったにちがいないと思いきった。彼らはそこで立ち去った。

農夫が家に帰ってくると、妻は彼に見せようとして、米櫃に隠したままにしておいた雉子の話をした。「捕えたとき、すこしももがきませんでしたよ」妻はいった、「そして米櫃の中で、たいそうじっとしていました。きっと、お舅さんにちがいありません」農夫は米櫃のところへ行き、蓋をあけて、鳥を取り出した。鳥は、まるで飼いならされたように、手の中にじっとしたまま、いかにも平然と彼を見ていた。目の片方がつぶれていた。「父も片方の目がつぶれていた」農夫はいった、「右目が。この鳥の右目もつぶれている。ほんとに、これは父のようだ。見ろ！　いつもの父のような目つきでこいつは見ている！……かわいそうに父は、『鳥になっているからには、猟師どもにつかまるより、子供たちに食わせてやるほうがましだ』と心に思っているにちがいない。昨夜、お前がみた夢の意味はそれだ」こういい添えると――気味の悪い笑いを妻のほうへ向けて、雉子のくびをひねった。

この畜生にも劣る仕業を見て妻は、悲鳴をあげて叫んだ。

「まあ、なんてひどい人！　あなたは、鬼です！　鬼のような心をもった人でなければ、そんなことできるはずがありません！……そんな男の妻でいるくらいなら、死んだほうがまだましで

す！」

そういったかと思うと、草履をはく間もあらばこそ、戸口へとんで行った。とび出したとき、彼はその袖をつかんだ。が、女はそれを振り切って駆け出し、走りながら泣きつづけた。こうして、はだしで女は走りつづけて、とうとう町へ着くと、まっすぐ地頭の居館（やかた）へ急いだ。そして、涙ながらに、地頭にいっさいを訴えた——狩りの前夜にみた夢の話、雉子を助けようとして隠したこと、それから夫が彼女を嘲（あざけ）って、雉子を殺したことなどを。

地頭は女にやさしい言葉をかけて、家来によく面倒をみてやるよう下知（げち）をあたえた。しかし、夫は召し捕えるように命じた。

翌日、農夫は取調べをうけた。そして、雉子を殺したことについて真相を白状させられて、刑を申し渡された。地頭は、彼にむかっていった。

「よほどの悪心を持った者でなければ、そのほうのやったようなことはできるものではない。そんなねじくれた奴がいるとは、土地にとって迷惑千万。当地の住民は、孝心を重んずる者ばかりだ。そんな所に、そのほうのような奴を住まわせておくわけにはいかぬ」

こうして、農夫は土地から追放され、万一、帰ってきたさいには、死罪に処せられることになった。が、女に対しては、地頭は土地をあたえた。それから、のちに、よい夫を持たせてやった。

忠五郎のはなし

遠い昔、江戸は小石川に、鈴木という旗本が住んでいた。屋敷は、江戸川のほとり、中の橋からほど遠からぬ所にあった。そして、この鈴木の家来に、忠五郎という足軽がいた。いっぱしの美男で、非常に愛想がよく利口で、同輩の受けもたいそうよかった。

数年のあいだ、忠五郎は鈴木に仕えていたが、身持ちもよく、非のうちどころがなかった。しかしついに、毎晩、忠五郎が、屋敷を庭づたいに抜け出して、明け方すこし前までもどらないことを、他の足軽が気づいた。最初は、この妙な振舞いについて、だれも彼にいう者はなかった。屋敷を空けても日頃の務めに妨げはなかったし、なにか色事によるものだろうと思われたからである。しかし、しばらくすると、顔色が青くなり弱りはじめてきた。そして同輩たちは、なにかひどくふしだらなことを想像して、口出しすることにした。そこである晩のこと、屋敷を抜け出そうとするところを、年配の家来が、彼をわきへ呼んでいった。

「忠五郎よ、お前は毎晩出かけて、明け方まで帰ってこないことを、みんな知っている。それに、見たところだんだん顔色もよろしくない。どうやら、悪い連中とつき合って、身体をそこねているのではないか。そこでお前が、この行いに十分申し開きできないようなら、わしどもの務めとして、このことをお頭まで届け出なければならない。とにかく、わしどもはみな、お前の仲間で

友達なのだから、お前が当家の掟にそむいて、夜分に外出する理由を知って当然と思うのでな」

この言葉に、忠五郎は非常に当惑し、驚いたようであった。しかし、しばらく黙っていたあと、彼は庭へ下り、そのあとを朋輩が従った。ほかの者たちからもう聞かれないところまでくると、忠五郎は立ちどまっていった。

「もう、何もかも申し上げます。しかし、どうか内密にしておいていただきたいのです。もし、わたしの申したことを口外されると、わたしに大きな災難がふりかかるのです。

わたしが、女のために、夜、出歩くようになったのは、この春も初めのころ——ほぼ五カ月ほど前のことでした。ある晩、両親をたずねてから屋敷に帰る途中、表門からさして遠くない川ッぷちに、女が一人立っているのを見ました。身なりは、高い家柄の女のようです。こんな身なりのりっぱな女が、そうした時刻にひとりそこに立っているのは、妙に思えました。しかし、訊ねるのは、はばかられました。声もかけずに、そばを通り過ぎようとすると、女は前へ出て、わたしの袖を引くのです。見ると、非常に若くて美しい女でした。

『あの橋のところまで、お伴させていただけないでしょうか』女はいいました。『申し上げたいことがございますので』

声はたいそう穏やかで、快くひびきました。話しながらにっこり笑いました。その笑顔には勝てなかったのです。そこで、わたしはいっしょに、橋のほうへ歩いて行きました。途中、女は、屋敷を出入りするわたしの姿をしばしば見かけて、わたしに惹かれるようになったといいます。

『どうかわたしの旦那さまになっていただけませんか』女はそういいました、『わたしを好いてく

かりませんでした。それでも、女がたいそう魅惑的に思えました。

ださるなら、きっとお互い、幸せになれるにちがいありません』わたしは、どう答えてよいかわかりませんでした。それでも、女がたいそう魅惑的に思えました。

橋の近くへ来ますと、女はまたわたしの袖を引き、土手を下りて川ッぷちまで連れて行きました。『いっしょに、ついていらっしゃいませ』そうささやいて、水ぎわへ引っぱりました。あそこは、ご承知のように、深くなっています。で、急にわたしは女が怖くなって、引き返そうとしました。女は微笑を浮べ、わたしの手首をにぎっていうのです、『まあ、わたしとごいっしょでしたら、怖いことありませんわ！』なぜかしら、女に手を触れられると、わたしは子供のようにどうすることもできなくなるのです。まるで、夢のなかで走ろうとして、手も足も動かない人のような感じでした。

深みへ、女は足を踏み入れ、いっしょにわたしを引きずり込みました。それから、もうなにも、見たり、聞いたり、感じたりできなくなりましたが、やがて気づくと、明りにみちた、大きな宮殿のように思えるところを、女と並んで歩いておりました。それで、濡れてもいないし、冷たくもないのです。まわりのものはいっさい、乾いて、暖かく、美しいのです。わたしは、どこにいるのか、どうやってそこへ来たのか、わかりませんでした。女は、手を取ってわたしを案内いたします。部屋から部屋を通り抜けて――ずいぶんたくさん部屋を通ったのですが、みんながらんとして、しかもすごく美しいのです――とうとう千畳敷の客間にはいりました。奥の、大きな床の間のまえに、灯りがともっていて、宴席のように座布団が並べてあります。しかし、客の姿はまるで見えないのです。女は、わたしを床の間の、上座に案内して、わたしのまえに坐ると、申

しました。『ここがわたしの住まいでございます。ここでいっしょに暮して、お幸せになれるとお思いになりませんか』こう訊ねながら、にっこり笑いました。その笑顔の美しさは、とてもこの世のものとも思えませんでした。そこで、つい思ったままわたしも、『さよう……』と答えました。

同時に、わたしは、浦島のはなしを思い出しました。そして、この女は天女（てんにょ）かもしれないと思いました。しかし、訊ねてみるのがこわかったのです。……まもなく、女中たちが酒やさかなを持ってはいってきて、それをわたしたちの前に置きました。すると、わたしの前に坐っている女はいうのです、『わたしがお気に召されたようなので、今夜、祝言をあげるといたしましょう。これが祝言の祝いでございます』こうしてわたしたちは、七生かけて誓いをたてました。そして宴のあと、用意してある祝言の間へ案内されたのです。

彼女に起されたのは、まだ明け方も早いころでしたが、こう彼女はいいました、『ねえ、もうあなたは、ほんとにわたしの旦那さまです。しかし、わたしからも申せない、あなたもお訊ねになってはならない理由（わけ）から、この結婚を隠しておく必要があります。夜が明けてしまうまで、あなたをここにおとどめしますと、わたしたち二人の命にさしさわるのです。それで、お願いですから、いまどき、ご主人のお屋敷へお帰し申し上げても、どうぞお気を悪くなさらないでください。今夜また、それから、今後も毎晩、初めてお会いした時刻に、お出でいただきとうございます。いつも橋のたもとでお待ちください。それほどお待たせいたしませんから。しかし、それにしてもともかく、わたしどもの結婚は、隠しておかねばなりません。もしこのことをお洩らしに

なると、おそらく、永久のお別れとなりましょう』

わたしは、いっさい彼女にしたがうことを約束しました——浦島の運命を思い出したからです。それから彼女は、みんながらんとした美しい部屋を、いくつもつぎつぎと通り抜けて、門口まで案内してくれました。門口で彼女が、ふたたびわたしの手首をにぎると、たちまち、まわりがまっ暗になり、なにもかも分らなくなりましたが、気がついてみると、中の橋のたもとの、川べりにひとり立っておりました。屋敷へもどっても、まだ寺の鐘は鳴りだしませんでした。

夕方、彼女の指定した時刻に、ふたたび橋のところへ行きますと、女は待っておりました。前夜と同じように、女はわたしを、深い淵のなかへ連れ込み、祝言の夜を過した、あのすばらしい部屋へ連れて行きました。そして、それからは、毎夜、彼女との逢瀬を重ねております。今夜も、きっとわたしを待っています。失望させるくらいなら、わたしは、死んだほうがましです。だから、行かねばなりません。……しかし重ねてお願いしますが、いまのわたしの言ったことを、決してだれにも洩らさないでいただきとうございます」

年かさの足軽はこのはなしを聞いて、驚きかつ心配した。彼は忠五郎の話にいつわりはないと思った。が、その真相から、いろいろ不快なことが予想させられた。たぶん、こうした経験は、ことごとくひとつの幻影、ある魔性の力が、よからぬ目的のためにひき起した幻影であったろう。それでも、もしほんとうに迷わされているならば、この若者は、責めるより、むしろ憐れむべきものであった。しかも、無理な干渉は、かえって悪い結果をもたらすだろう。そこで、年かさの

足軽は答えた。
「お前のいったことは、だれにも決して話さない——すくなくとも、お前が生きて無事なあいだは。行って、その女に会ってくるがいい。しかし——女には用心しろ！　なにか魔性の者にたぶらかされているのではないかと思う」
忠五郎は老人の警告に、ただ微笑をうかべて、急いで去った。数刻ののち、妙に落胆した様子で、屋敷にもどってきた。「会ったかね」と、老人が訊ねた。「いいえ」と忠五郎は答えた、「いませんでした。いないなんて、初めてのことです。おそらく、もう二度と会ってくれないでしょう。あなたにお話したのが間違いでした。まったく無分別にも、約束を破ったのです」相手はなぐさめようとしたが、無駄であった。忠五郎は横たわると、もう何も言おうとしなかった。まるで悪寒でもするかのように、頭から足の先まで身を震わせていた。
寺の鐘がいっせいに夜明けの刻を知らせると、忠五郎は身を起そうとしたが、正気を失って倒れた。あきらかに病にかかっていた——それも死に至る病に。漢方医が呼ばれた。
「おや、この人には血がない！」と医師は、よく診たあと叫んだ、「血管には水しかない！　助けるのは、大仕事だ。……これはなんとたちの悪い」
忠五郎の命を助けるために、ありとあらゆる手が尽された——しかし、無駄であった。日が沈むとともに、彼は死んだ。そこで、老人は仔細を語った。

「ああ！　わしも、そんなところじゃないかと思っていた！」と医師は叫んだ、「それでは、どんなことをやっても、この人を助けることはできない。あの女に殺されたのは、この人が初めてではないのだ」

「あの女とは、だれです——いったい、何者ですか」足軽は訊ねた、「狐女ですか」

「いや。むかしから、この川に出るのです。若い男の血が好きでしてね」

「蛇女？——龍女？」

「いや、いや！　あなたが昼間、あの橋の下にそいつを見たら、まったく胸が悪くなるようなやつでね」

「それは、どんなやつです？」

「なあに、蝦蟇（がま）さ——大きな醜い蝦蟇です！」

土地の風習

時おりわたしのところへ来る、禅宗の上品な老僧がいる——生花やその他、古くからの芸事にすぐれた大家でもある。いろいろ旧弊な信仰の害を説き、あらゆる縁起や夢判じを否定して、ただ仏の道のみを信じるようすすめるにもかかわらず、檀家からは好かれている。禅宗の僧侶で、こんなに懐疑的な人はめったにない。しかし、このわたしの友人の懐疑も絶対ではない。というのは、この前、わたしたちが会って話が死者のことにふれたとき、ぞっとするような話を聞かされたからである。

「霊魂とか幽霊にかんする話に、つねづねわたしは疑いをもっています」と彼はいう、「ときどき、檀家の者が来て、幽霊を見たとか、不思議な夢を見たと言います。しかし、そういう人にくわしく訊ねてみると、ちゃんと無理もなく説明がつくのです。

ただ、これまでに一度だけ、ちょっと説明のつかない、奇妙な経験があります。そのころ、わたしは九州におりました——若い見習僧でした。そして、行を——見習僧としてだれもがやらねばならない托鉢を——やっていたのです。ある晩、山地を旅しているうちに、禅寺のある小さな村に着きました。わたしは宗規にしたがって、そこへ行き、宿を乞いました。しかし、住持は何

マイルか離れた村へ葬式に行き、後に老尼が一人、留守を守っていたのです。尼は、住持の留守のあいだに、わたしを泊めることはできないうえ、七日は帰ってこないと言いました。……その地方では、檀家に死人があった場合、住持は七日のあいだ毎日、経をあげて回向を行う習慣になっております。……わたしは、食べ物などは要らぬから、ただ寝る場所だけあればよい、といいました。その上さらに、疲れ果てているからと懇願したので、とうとう老尼も、あわれに思ってくれたようでした。本堂の、須弥壇のそばに布団を敷いてくれました。そしてわたしは、ほとんど横になると同時に寝入ってしまいました。真夜中に――たいそう寒い晩でした！――寝ているすぐわきで、木魚をたたく音と、だれかが唱える念仏の声で、目をさましたのです。わたしは目を開けました。しかし、本堂はまっ暗闇です――だれかに鼻をつままれてもわからないくらいまっ暗でした。そんな暗闇で、いったいだれが、木魚をたたき、念仏をとなえているのか、不思議に思いました。しかし、音は最初、すぐ近くのようでしたが、どうもはっきりしないのです。どうやら思い違いしているらしい――住持がもどってきて、寺のどこかで勤行しているのだろう、と自分に言いきかせました。木魚と読経の音を聞きながら、わたしはまたもやぐっすり寝入り、朝まで眠りつづけていたのです。朝になって、顔を洗い衣服をととのえるとすぐ、老尼をさがして、顔を合わせました。好意にお礼をいったあと、思いきって訊ねてみました、『昨夜、和尚さまはお帰りになられたのですね』『いえ、帰りません』老尼は、いかにも不機嫌に答えます、『申しましたように、まだ七日は帰ってまいりません』『失礼ながら』と、わたしはいいました、『昨夜、どなたか念仏をとなえて、木魚をたたいておられたのが聞えたので、和尚さまがお帰りにな

られたのかと思っておりました』『ああ、それなら、和尚じゃありません！』と老尼は叫ぶのです、『それは檀家の人です』『だれですって？』わたしは訊ねました。尼の言ったことがわからなかったのです。『ええ』と、尼は答えました、『もちろん、死んだ人です*！　檀家の人が死ぬと、いつもそういうことがあるのです。ほとけが、木魚をたたいて念仏をとなえに来るのです』……老尼はまるで、そんなことに慣れきってしまって、わざわざ口にするまでもないように話すのでした」

草ひばり

一寸の虫にも五分の魂
――日本のことわざ

籠はかっきり高さ二インチ、幅は一インチ半。軸で回転する小さい木の扉は、小指の先がやっとはいるくらいである。それでも、そいつにはその籠もけっこうひろい――歩いたり、はねたり、飛んだりするだけのひろさがある。なにしろ、そいつはあまりに小さくて、ちらとでも見ようとするためには、茶色の紗を張った籠の横から目をこらさなければならない。わたしはいつも、そいつの居所を見つけるまでに、明るいところで、何度も籠をぐるぐる回して見る。すると、たいてい上の隅っこ――紗を張った天井に、逆さまになって、じっとしがみつくように、止っている。

白分のからだよりもっと長い、明りにすかしてはじめて見えるくらい細い、一対の触角をもった、ふつうの蚊ほどの大きさのこおろぎを考えればよい。「草ひばり」というのがそいつの日本名である。そして店では、十二セント*もしている。つまり、自分の目方の金の値段よりもはるかに高いのである。こんな蚊のようなやつが、十二セントもするとは！

毎朝、籠へ入れてやらねばならない、新しいなすかきゅうりの薄片にとりついているあいだを除いて、昼は、眠っているか黙って考えこんでいる。……こいつをいつも小綺麗にして、餌をじ

ゅうぶんあたえておくのは、かなり面倒なことだ。諸君もごらんになったら、こんなこっけいなくらいちっぽけな虫ケラのために骨を折るのが、いかにも馬鹿げたことのように思われるであろう。

ところが、いつも日が暮れると、この微小の魂は目をさます。すると、部屋じゅう、名状しがたい妙なる美しい音楽――この上ない小さな電鈴のような、かすかに、かすかに鳴りひびく音でいっぱいになる。暗闇が深くなるにつれて、その音はますます美しく――ときには、家中がその妙なる調べにうち震えるかと思うばかりに高まり――ときには、この上なくかすかな音へ消えうすれていく。だが、高かろうと、低かろうと、その不思議な、鋭い音色にはかわりはない。夜じゅう、こうしてこの微小なものは歌いつづける。寺の鐘が明けの刻を告げるとき、それはようやく、やむのである。

さて、このちっぽけな歌は恋の歌である――目に見えぬ、未知のものをそこはかとなく恋い慕う歌なのである。この世の生涯で、こいつが見るとか知るとかいうことは、およそありえない。遠いはるかな先祖たちも、野辺の夜の生活や、恋における歌の価値を知っていたものはない。こいつらは、そこいらの虫屋の店先にある、素焼きのかめのなかでかえった卵から生れてきたものだ。それから後は、籠のなかに住むだけなのである。しかし、こいつは、いく百万年かの昔から歌いついできたとおりに、しかも、その歌の調べのひとふしひとふしの正確な意味を理解しているかのように、間違いもなく、同胞の歌をうたっている。もちろん、歌など、教わりはしない。

それは、有機的な記憶――夜ごと、露に濡れた丘の草葉のかげから、その魂が声を張り上げてうたうとき、いく千万もの同胞の、深い、おぼろげな記憶なのである。そのとき、その歌は恋を――そして死を、もたらした。こいつは、死のことなど、きれいさっぱり忘れてしまっている。ただ、恋のほうはおぼえている。だからこそ、いまこうして歌っているのである――いつまでも来てくれもしない花嫁を求めて。

したがって、こいつのあくがれは、無意識のうちに、昔にむかっているのである。これは、過去の朽ちたものにむかって叫んでいる――沈黙と神々とにむかって、過ぎた時のふたたび返ってくることを呼びかけているのである。……人の世の恋人たちも、それとは知らずに、これとひどく似たことをしている。彼らは、幻影を「理想」と呼んでいる。ところが、彼らの「理想」は、けっきょく、人類の経験したものの単なる影、有機的な記憶のまぼろしにすぎない。いまこの世に生きることとは、ほとんどそれとかかわりがない。おそらく、この微小のものにも理想はあるだろう、すくなくとも理想の痕跡はあるはずだ。しかし、それはともかく、このちっぽけな願いは、どれだけ訴えても無駄なのである。

落度は、まったくわたしにない。もともとわたしは、この虫をつがわせると、鳴かなくなるか、すぐに死んでしまうと聞かされていた。しかし、くる夜くる夜、この訴えるような、美しい、応えのない声は、非難の声のように聞え――しまいには、ひとつの強迫観念になり、苦痛になり、良心の呵責となった。わたしは雌を買い求めることにした。季節はあまりに遅すぎた。もう売っている草ひばりは――雄も雌も、一匹もなかった。虫売りは笑って、「九月の二十日ごろには、

もう死んでいます」といった（すでに十月二日であった）。しかし、虫売りは、わたしの書斎によいストーヴがあって、いつも温度を華氏七十五度以上に保っておけることを知らなかったのである。だから、うちの草ひばりは、十一月の末になってもまだ鳴いているし、わたしは大寒のころまで生かしておきたいと思っている。もっとも、これと同じ代のものは、おそらく全部死んでしまったのだろう。どうしてもわたしは、雌を見つけてやることができなかった。それに、もし自分で探せるように逃がしてやったところで、日中は庭にうようよしている自然の敵――蟻や、百足や、恐ろしい土蜘蛛など――から、運よく逃れることができても、ひと晩たりと、生きのびることはできないだろう。

昨夜――十一月二十九日――わたしは机にむかっていると、妙な感じに襲われた。部屋がなんとなく虚ろなのである。やがて、いつになく、草ひばりが黙っているのに気づいた。わたしは、そのひっそりした籠へ近づいて見ると、虫は、石のように白く固く干からびた茄子のかけらのそばに、死んでいた。明らかに、三、四日、餌をもらわなかったのである。が、つい死ぬ前夜も、すばらしくうたっていた――だから、愚かにもわたしは、いつもより満足しているなと思っていた。うちの書生のアキは、虫が好きで、いつも餌をやっていた。ところが、アキは一週間ほど暇をとって田舎へ帰ったので、草ひばりの世話をする役は、女中のハナにかわった。女中のハナは、あまり思いやりがない。そのチビ助のことをけっして忘れたわけではありません――けれど、茄子がもうなかったのです、と彼女はいう。かわりに、玉葱や胡瓜の薄片をやろうとは、いっこう

思いつかないのだから！……わたしは、女中のハナに小言をいうと、素直にあやまった。しかし、夢のような楽しい音楽は、もうとだえた。静寂がわたしを責める。そして部屋は、ストーヴがあるにもかかわらず寒々としている。

馬鹿らしい！……麦粒の半分もない小さな虫のために、善良な娘にみじめな思いをさせるなんて！　あんなちっぽけな生命の消えたことが、こうも信じられないほど、わたしを苦しめる。……もちろん、ある生き物の願望を――こおろぎの願望さえも――考えつづける習慣が、知らず識らずのうちに、ある種の夢みるような関心、関係が切れてはじめてそれと気づく一種の愛情を、生んだのであろう。そのうえ、夜の沈黙（しじま）にあって、その精妙な声の魅力を――まるで神の恩寵（おんちょう）にすがるかのように、わたしの意志と利己的な喜びにすがりついている一つの小さな生命が語るものを――しかも、小さな籠にいる微小な魂と、わたしの内なる微小な魂とが、実在の広大な深淵（しんえん）にあって永遠に同一のものであると、わたしに語るものを――しみじみと感じたのである。……それから、そいつの守護神であるわたしの頭が夢を織りなすことに向けられていたあいだ、夜となく、昼となく、飢え渇（かつ）えていた小さな生き物のことを考えると！……ああ、それにもかかわらず、最期まで――あまりにもそれはひどい最期だ、自分の脚までかじっていたから――雄々しくうたいつづけていたのだ！……神よ、われらすべてを――とくに女中のハナを、許したまえ！

だが、けっきょく、飢えのあまりおのれの脚を食うことは、歌の才を授かったものにとって、

最悪の出来事ではあるまい。歌うために、自分の心まで食らわねばならない、人の形をしたこおろぎさえいるのである。

『怪談』

耳なし芳一のはなし

七百年あまり昔、下関海峡の、壇ノ浦で、長年にわたる平家と源氏の争いの最後の合戦がおこなわれた。この壇ノ浦で、平家は一門の女子供はもとより、今日、安徳天皇として記憶されている幼帝もろとも、完全に滅亡したのであった。そして、それから七百年のあいだ、その浦と海岸は怨霊にたたられてきた。……別のところでわたしは、その海にいる、平家蟹という不思議な蟹について述べておいたが、それは甲羅に人間の顔がついており、平家の武士たちの生霊であるといわれている。しかし、このあたり一帯の海岸には、いまでも妙なことがいっぱい見聞される。まっ暗な夜、いく千ともしれぬ陰火が、渚のあたりをさまよったり、波の上をふわふわ飛んだりする——漁師たちが「鬼火」とよんでいる青白い光である。そして、風の立つとき、きまって鬨の声のような大きな叫喚が、その沖から聞えてくるのである。

以前は、平家の人たちも、いまよりもっと落着きがなかった。夜半、通りかかる船のまわりに現われて、それを沈めようとしている。また、いつも泳いでいる人たちを待ちかまえていて、水中に引きずり込もうとした。阿弥陀寺という寺が赤間が関*に建てられたのは、これらの死者を鎮めるためである。墓地もまた、それに接して、海べの近くにつくられた。そしてそこには、入水した天皇やその主だった家臣たちの名を刻んだ碑がいくつか建てられた。それから、彼らの菩提

を弔うために、毎年忌日にはそこで法要が営まれた。寺が建てられ、墓がつくられてからは、平家の人たちも前ほど、人を困らせることがなくなった。それでも、彼らはときどき妙なことをしでかす――まだ十分、安息を得ていない証拠であろう。

数百年前、この赤間が関に、芳一という盲人が住んでいた。この男は、琵琶*の弾きがたりで名を知られていた。幼時から、琵琶を教え込まれたのである。そして、まだ子供のうちから、すでに師をしのいでいた。本職の琵琶法師として彼は、おもに平家と源氏の物語をかたることで有名になった。そして、壇ノ浦の合戦の段をかたらせると、「鬼神も涙をとどめえなかった」といわれている。

はじめて世に出たころ、芳一は非常に貧しかった。それでも、力になってくれるよい友を得た。阿弥陀寺の住職は、詩や音楽が好きであった。そこで住職は、しばしば芳一を寺へ招いて、琵琶をかたらせた。のちに、この少年のすばらしい腕にひどく心を動かされて住職は寺へ来て住むように申し出た。この申し出はよろこんで受けいれられた。芳一は、寺の一室をあたえられた。そして、食事と宿のお礼として、ほかに約束のない晩には琵琶をかたって、住職をなぐさめるだけでよかった。

ある夏の夜、住職は檀家に不幸があって、法事をおこなうためによばれた。そこで小僧を連れ、

芳一ひとり寺に残して出かけた。その夜は暑かった。芳一は涼もうと思って、寝間の前の縁へ出た。その縁先から、阿弥陀寺の裏手の小さな庭が見わたせる。縁で芳一は、住職の帰りを待っていたが、琵琶のけいこをして淋しさをまぎらわそうとした。もう夜半も過ぎていた。が、住職はいっこう姿をあらわさない。しかし、夜気はまだ熱がこもっていて、部屋でくつろぐこともできない。芳一はそのまま戸外にいた。ようやく、裏門から人の足音の近づいてくるのが聞えてきた。だれかが、庭を横切り、縁へまっすぐすすみ寄り、彼のすぐ前で立ちどまった――が、それは住職ではなかった。太い声が、盲人の名を――侍が目下の者を呼びつけるように、高飛車に、しかもぶしつけに呼んだ。

「芳一！」

芳一は、驚きのあまり、しばらく、返事もできなかった。すると、声はまたもや、きびしい命令するような口調で呼んだ。

「芳一！」

「はい！」と盲人は、その威嚇するような声におびえて答えた、「わたしは盲でございます！――どなたさまがお呼びなのかわかりません！」

「なにも恐れることはない」見知らぬ男は、いくらか声をやわらげていった。「身共は、この寺の近くに泊っておる者であるが、お前に用があってまいった。身共の主君は、やんごとなき身のお方、高位のご家来衆をあまたお引き連れのうえ、ただいま、赤間が関にご逗留である。主君には、壇ノ浦の合戦の跡をごらんになりたいとの思召し。したがって、今日、そこをお訪ねなされ

た。が、お前が合戦の模様を語るのに巧みなことを耳にされ、あらためて、お前の琵琶をお聞きになりたいとの思召しじゃ。それゆえ、琵琶をたずさえ、さっそく身共に従って、高貴の方がたのお待ちになっておられる居館(やかた)へまいるがよい」

当時、侍の命令に軽々しくそむくことは許されなかった。芳一は、草履をはき、琵琶をかかえて、その見知らぬ男に従って出かけたが、侍は巧みに案内したものの、それでも大急ぎで歩かねばならなかった。引いてくれる手は、鉄のようである。そして、武士の足を踏みだすごとにがちゃがちゃ鳴る音から、甲冑(かっちゅう)に身を固めていることがわかった――たぶん、勤番の警固の武士なのであろう。芳一の最初の驚きは消えた。彼は、身の幸運に思いめぐらしはじめた。――というのは、さきほどこの家来が、「やんごとなき身のお方」といった言葉を思い出し、琵琶を聞くことを所望された主君とは、すくなくとも一流の大名にちがいないと考えたからである。やがて、侍は立ちどまった。どうやら大きな門の前に立っているようである――が、彼は訝(いぶか)しく思った。町のこのあたりに、阿弥陀寺の総門のほか、大きな門を思い出せなかったのである。「開門！」侍は呼ばわった――すると、かんぬきをはずす音がした。二人は、進んで行った。ひろい庭を横切り、ふたたび、どこか入口の前で立ちどまった。すると、家来の者は大声で叫んだ、「だれかある！　芳一を連れてまいった」すると急ぎ足の音、ふすまをひらく音、雨戸をくる音、女たちの話し声などが聞えてきた。その女たちの言葉づかいから、それがどこか高貴な殿中の侍女たちであることが、芳一にわかった。しかし、どういうところへ案内されたものか、見当もつかなかった。思案するひまもなかったのである。手をかりて、石段をいくつかのぼると、のぼりきった所

で草履を脱ぐように言われ、そのあと女の手に導かれて、果てしなくつづく、磨きこまれた板張りをすすみ、覚えきれぬほど多くの柱のかどを曲り、びっくりするほど広い畳敷きを通って――大きな広間のまん中に案内された。そこには、おおぜい人が集まっているように思われた。衣ずれの音が、まるで森の木の葉のざわめきのようであった。大ぜいがやがや――小声で――言いあう声も聞える。言葉は、殿上の言葉であった。

芳一は、楽にするようにといわれて気づくと、自分のために、座布団が出されてあった。そこへ坐って、琵琶の調子を合わせていると、女の声が――侍女たちをとりしまる老女と思われたが――彼にむかっていった。

「では、琵琶に合わせて、平家一門の物語をかたるようにとのことでござります る」

さて、全曲をかたるには、幾晩も必要とした。そこで、芳一は、思いきって訊ねた。

「なかなか全部を、かたるわけにはまいりませんが、どの段をかたれと、ご所望でございましょうか」

女の声がこたえた。

「壇ノ浦の合戦のくだりをかたるように――そこがひとしお、哀れの深いところでありまするから」

そこで芳一は、声を張りあげて、悲痛な船いくさのくだりをうたった――櫂をあやつる音、船の突きすすむ音、風を切って飛ぶ矢の音、人びとのおたけびや足を踏みならす音、甲冑に太刀のぶちあたる音、斬られて海中に落ちる音など、驚くほどたくみに、琵琶をひき鳴らした。すると

弾奏のあいまあいまに、左右でささやく、賞讃の声が聞えた。「なんというすばらしい琵琶法師であろう！」「国許では、こんな琵琶は聞いたことがない！」「日本ひろしといえども、芳一ほどのうたい手はまたとあるまい！」すると、あらたな力が湧きおこり、芳一はますますたくみに、弾き、かつかたりつづけた。そして、感嘆のあまり、あたりはひっそり静まりかえった。しかしついに、美しいかよわい人びとの運命——女子供の哀れな最期——や、幼い天子を胸に抱いた二位の尼の入水のくだりにさしかかったとき——聴き入る者はことごとくみな、長くおののくような、悲痛な叫び声をあげた。そして、そのあと、彼らは声をあげて激しく泣き悲しむので、盲人は、みずからのかき起した悲嘆のあまりの激しさに、ただ驚くばかりであった。しばらくのあいだ、嘆きすすり泣く声がつづいた。しかし、しだいに悲嘆の声も消えていった。そして、ふたたび、それにつづく深い静寂のなかから、芳一は、あの老女と思われる女の声を聞いた。

女はいった——

「そなたは琵琶の名手、弾きがたりに並ぶもののないことはかねて聞き及んでおりましたが、この夜、そなたが示されたほどのお腕前とは、思いも及びませなんだ。わが君も、ことのほかご満足で、応分のほうびをとらせるお考えであるとのお言葉でありまする。それにしても、これから六日のあいだ、毎夜、御前において琵琶を聞かせるようにとの思召し——そのあと、おそらくご帰途につかれる。したがって、明晩も、おなじ時刻にここへ出向かれるように。今夜案内いたした家来の者が、やはり迎えにまいるはずである……なお、もう一つ、申しておくようにとのお言葉であります。わが君が赤間が関にご逗留のあいだは、そなたがここにまいることを、どなたに

も申してはならぬとのご希望。忍びのお旅であるゆえ、このことはいっさい口外せぬようにと仰せられる。……さて、もう寺へ引きとられてよろしゅうござります」

芳一があつく礼を述べ、女に手を引かれて居館の入口までくると、さきほど案内してくれた侍が待ち受けていて、寺へ連れて行った。侍は、寺の裏手の縁までくると、そこで別れを告げた。

芳一がもどったのは、もう明け方であった。しかし、寺をあけたことは気づかれなかった――住職は、たいへん遅くなって帰って来たので、彼が眠っているものとばかり思っていたのである。日中、芳一はしばらくやすむことができた。そして、不思議な出来事については、なにも言わなかった。次の晩の夜中になると、侍はまたもや彼を迎えにきて、高貴な方がたの一座に連れて行き、そこでふたたび芳一は琵琶をかたって、前夜とおなじく上首尾を博した。しかし、二度目に出かけているあいだに、寺をあけていることが、はからずも見つけられた。そして明け方、帰ってくると、住職のまえに呼び出された。住職は、やさしくたしなめるような調子で、彼にむかっていった。

「芳一よ、わしらは、お前のことをたいへん心配していた。目の見えないお前が、ひとりで、あんな遅い時刻に出て行くのは、あぶない。なぜ、わしらに一言もいわないで、出て行ったのかね。下男を供にさせることもできたのに。いったい、どこへ行ってこられたのじゃ」

芳一は、言いのがれに答えた。

「和尚さま、お許しください！　ちょっと私ごとがありまして。ほかの時間では都合がつかなかったものですから」

住職は、芳一の口が重いのに、感情を害するよりも、むしろ驚いた。どうもおかしいと感じ、何かよくないことでもあるのではないかと思った。この盲目の少年が、なにか物の怪にたぶらかされるか、迷わされていることを恐れたのである。彼は、もうそれ以上、訊ねなかった。しかし、ひそかに寺男たちに、芳一の行動を見張って、もし夜ふけに、また寺を抜けるようなことがあったら、後をつけるように言いつけた。

するとその晩、芳一が寺を抜け出していくのが見られた。そこで寺男たちは、すぐさま提燈をつけて、その後をつけた。しかし、雨の夜で、非常に暗かった。寺男たちが通りへ出ないうちに、芳一の姿は見えなくなった。たしかに、芳一は、ひどく急いで行ったものらしい――彼が盲であることを考えれば、これは奇妙なことであった。というのは、道の状態が悪かったからである。寺男たちは町なかを急ぎ、芳一がいつも行きつけている家を訪ね歩いた。が、だれも、彼について知っている者はなかった。とうとう、海岸づたいに寺のほうへ帰ってくると、阿弥陀寺の墓地の中から、はげしくかき鳴らす、琵琶の音が聞えてきたので、びっくりした。いくつかの鬼火のほか――暗い夜には、いつもそのあたりにちらちら見られるのだが――そこいらは、まっ暗闇であった。しかし、寺男たちはすぐに墓地へいそいだ。そしてそこで、提燈のあかりをたよりに、芳一のすがたを見つけた――雨のなかを、安徳天皇の陵墓の前にひとり坐して、琵琶をかき鳴ら

しながら、壇ノ浦の合戦のくだりを、声高らかにかたっているのである。そして彼のうしろや、まわりや、墓の上のいたるところに、幽霊火が、御燈火(みあかし)のように燃えていた。かつてこれまで、これほどの鬼火が、人の目にふれたことはなかった……。

「芳一さん！——芳一さん！」寺男たちは叫んだ、「あなたは、たぶらかされているのです！……芳一さん！」

しかし、盲人には聞えないかのようであった。力をこめて、彼は琵琶をかき鳴らした——ますます激しく、彼は壇ノ浦の合戦のくだりをうたいつづけていた。寺男たちは、彼をつかまえ——その耳もとで叫んだ。

「芳一さん！——芳一さん！——いっしょに、すぐ帰りましょう！」

すると、咎(とが)めるように彼はいった。

「やんごとない方がたの御前で、そんなふうに邪魔だてすることは、許されませぬぞ」

これには、無気味な思いにかられながらも、寺男たちも笑いださざるをえなかった。もうたぶらかされていることに確信をもった彼らは、今度は彼をつかまえて、引き起し、力ずくで急いで寺へ連れ帰った——そして、住職の指図にしたがい、さっそく濡れた着物をぬがせ、新しく着替えさせ、食べ物や飲み物をあたえた。それから住職は、友人の驚くべき行為について、くわしく説明するようせまった。

芳一は、長いこと、話すのをためらっていた。が、とうとう、自分の行為が実際に、人のいい住職を驚かせ、怒らせていることがわかると、隠しだてをやめることにした。そして、はじめて

侍が訪ねてきたときから起きた出来事を、ありのまま語った。
住職はいった。
「芳一よ、かわいそうに、お前は、いま、たいそう危ない目に会っている！　もっと前に、すっかり話してくれなかったのは、なんとも不運だったな！　お前が、琵琶にすぐれていたばかりに、実際、妙な災難に巻きこまれてしまったのだ。今となっては、もう分ったと思うが、お前はどこか人の家に行っていたのではなくて、墓場の、平家一門の墓のあいだで、夜を過していたのだ。――今夜、寺の者たちが、雨のなかに坐っているお前を見つけたのは、安徳天皇の御陵の前だった。お前が想像していたことは――死んだ人間が呼びにきたことのほか――みな、まぼろしなのだ。いちど、彼らの言うことに従うと、もうその手のうちに落ちてしまったことになる。すでにこうなってしまった以上、ふたたび言うことに従ったら、お前は八つ裂きにされるだろう。だが、いずれは、とにかく、お前をとり殺すところだったのだ。……ところで、わしは今晩、お前と一緒におることはできない。ちょっとよそへ、法事に呼ばれているのだ。しかし、出かけるまえに、お前のからだに経文を書きつけて、まもってやる必要があるだろう」
日の沈む前に、住職と小僧は、芳一をはだかにした。それから、筆をとって、彼の胸や背中や、頭や顔や頸（くび）や、手足に――足の裏や、からだの隅々にいたるまで――「般若心経（はんにゃしんぎょう）」の経文を書きつけた。書きおわると住職は、芳一にさとしていった。
「今夜、わしが出かけたらすぐに、お前は縁側に坐って、待っているがいい。すると、迎えがく

る。だが、どんなことがあっても、返事をしてはならない、動いてもならぬぞ。なにも言わず、じっとしているのだ――坐禅をしているようにな。もし、少しでも動いたり、物音を立てたりすると、お前は引き裂かれてしまう。こわがらずともよい。それに、助けを呼ぼうなどと思ってはならぬ――助けようがないのだから。ただ、わしの言うたとおりしておれば、危険は去って、もう、こわいものはなくなるのだ」

日が暮れて、住職と小僧は出ていった。芳一は、いわれたとおり、縁に坐った。琵琶を横の縁板のうえに置き、坐禅をする姿勢で、じっと静かにしていた――咳ひとつせず、息を殺すようにしていた。幾時間も、彼はそうしていた。

やがて、通りのほうから、足音の近づいてくるのが聞えた。それは門を通り抜け、庭を横切り、縁に近づいて、立ち止った――彼のすぐ前である。

「芳一！」太い声が呼んだ。しかし、盲人は息を殺して、じっとしていた。

「芳一！」と、またもや無気味に声が呼んだ。それから、三度目の声が――荒々しく。

「芳一！」

芳一は、石のようにじっとしていた――すると、声はつぶやくように、

「返事がないな！――これはいかん！……やつめはどこにいるのか、見てくれよう」

縁に上がる激しい足音がした。それは、ゆっくり近づいてきて――彼のそばで止った。それから、しばらく――その間、芳一は鼓動に合わせて、全身の震えるのを感じた――死のような沈黙

があった。
ついに、荒々しい声が、彼のすぐわきでつぶやいた。
「ここに琵琶があるぞ。が、琵琶法師は――耳が二つあるだけだ！……なるほど、これでは、返事をしないはずだ。返事するにも口がない――耳のほか、なにも残っていない。……よし、わが君に、この耳を持ってまいろう――できるかぎり、仰せのとおりにしたという証拠に」
その瞬間、芳一は、両耳を鉄の指にぐいとつかまれ、引きちぎられるのを感じた。痛さは非常なものだったが、声は上げなかった。荒々しい足音は、縁づたいに遠ざかり――庭へ下り――通りへ出て――消えた。頭の両側から、生温かいどろどろしたものが、たらたら落ちるのを盲人は感じた。が、彼は手を上げようともしなかった。

夜の明けるまえに、住職は帰ってきた。すぐ、裏手の縁に急ぐと、なにか、ねばねばしたものを踏みつけてすべり、恐怖の叫び声をあげた。提燈のあかりで見ると、そのねばねばしたものは、血であった。しかし、芳一はそこに、坐禅の姿勢のまま、坐っていた――傷口から、血をぼたぼた垂らしながら。
「かわいそうに、芳一！」と、びっくりして、住職は叫んだ――「これはどうした？……怪我をしたのか……」
住職の声に、盲人は安堵した。いきなりわっと泣きだし、涙ながらに、その夜の出来事を語った。

「かわいそうに、かわいそうに、芳一！」住職は叫んだ、「みんな、わしが悪かったのじゃ！——わしの、ひどい手ぬかりじゃった！……お前の身体じゅう、経文を書いておいたのに——耳だけぬかった！　その辺は小僧にまかせた。しかし、やったあと、確かめなかったのは、重々、わしが悪かった！……が、もう仕方がない。できるだけ早く、傷を癒すしかあるまい……元気を出せ、おい！——もう危険は去ったぞ。二度と、あんなやつらが来ることはないぞ」

よい医師の手当てによって、芳一の怪我は、まもなく癒った。この不思議な出来事のうわさは、あちこちにひろがり、たちまち彼は有名になった。多くの高貴な方たちが、彼の琵琶を聴きに赤間が関へやって来た。そして、たくさんの金子が贈られた——そこで、彼は金持になった。しかし、この出来事があって以来、彼はもっぱら「耳なし芳一」という呼び名で知られるようになった。

おしどり

陸奥(むつ)の国の、田村の郷(ごう)とよばれる里に、孫允(そんじょう)という名の鷹(たか)使いが住んでいた。ある日、彼は猟に出かけたが、獲物はなにも見つからなかった。しかし、帰り道、赤沼という所で、川を渡ろうとすると、一つがいのおしどりが、いっしょに泳いでいるのが見えた。おしどりを殺すのはよいことではない。が、孫允は、たまたま非常に腹が空いていたので、おしどり目がけて矢を射た。矢は、雄のほうにあたった。雌は、向う岸の藺草(いぐさ)のなかへ逃げ込み、見えなくなった。孫允は、死んだ鳥を持って帰って、それを料理した。

その晩、彼はいやな夢を見た。それは、一人の美しい女が部屋へはいってきて、枕もとに立つと、さめざめと泣きだしたのである。その泣きようがあまりに痛々しいので、聞いているうちに孫允は、胸も張り裂ける思いがした。女は彼にむかって叫んだ。「どうして――ああ！　どうして、あのひとを殺したのです？――いったい、どんな罪を犯しましたか……赤沼で、楽しくいっしょに暮していたのに――あなたは、あの人を殺したのです！……いったい、あなたに何をしたというのですか。あなたは、ご自分のなさったことがおわかりですか。――ああ！　どんなに残酷な、どんなにひどいことをなさったか、おわかりなのですか。……このわたしまでも、あなたは殺しておしまいなのです――あのひとがいなくては、わたしは生きておれないのですから……

ただ、このことだけを申し上げげに、わたしは、やって来たのです」そういって女はまた、さめざめと泣いた――あまりの痛々しさに、その泣く声は、聞く孫允の骨の髄まで浸みた。そして、女はすすり泣きながら、こんな歌をよんだ。

日暮るれば
さそいしものを
赤沼の
真菰(まこも)がくれの
ひとり寝ぞ憂き!

そして、この歌をよみおわってから、女は叫んだ、「ああ、あなたは知らない――あなたは、ご自分のなさったことがおわかりではないのだ! でも、明日、赤沼へお出かけになれば、おわかりです――おわかりになります……」そういって、いかにも痛々しげに泣きながら、女は立ち去った。

孫允は朝、目をさますと、この夢が心にまざまざと残っていたので、非常に気になった。彼は、女の言葉を思い出した。「でも、明日、赤沼へお出かけになれば、おわかりです――おわかりになります」そこで彼は、その夢がただの夢にすぎないかどうか確かめるために、ただちに出かける決心をした。

こうして孫允は赤沼へ出かけた。そして、川岸に着くと、雌のおしどりが一羽、泳いでいるのが目にはいった。同時に、おしどりも孫允をみとめた。が、逃げようともしないで、不思議に彼をじっと見つめたまま、まっすぐ彼のほうへ泳いできた。それから、くちばしで、いきなり自分のからだを引き裂くと、孫允の目の前で死んだ。

孫允は頭を剃(そ)って、出家した。

お貞のはなし

むかしむかし、越後の国、新潟の町に、長尾長生という人が住んでいた。

長尾は医師の息子で、父の業をつぐように教育をうけた。まだ年もいかぬうちに、父の友人の娘で、お貞という娘と婚約をしていた。そして両家では、長尾の修業がすみ次第、結婚させることに同意していた。しかし、お貞のからだが悪くなった。そして、十五の年に、不治の肺病にかかった。死ぬことがわかったとき、彼女は別れを告げるために、長尾を呼んだ。

彼が枕もとに坐ると、彼女はいった。

「長尾さま、わたしどもは、子供のときから、おたがいに結ばれた仲でございます。そして、今年の暮れには、結婚することになっておりました。しかし、もう、わたしは死ぬことになります——これも、神さまの思召しでございます。もう何年か生き長らえましたところで、そのあいだ、ほかの方にご迷惑や心配をおかけするだけのことでございましょう。こんなひ弱なからだでは、いい奥さまにはなれそうもありません。ですから、あなたのために、生きていたいと思うことすら、あまりにも身勝手な願いでございましょう。わたしは、すっかり、あきらめております。で、どうぞ、お嘆きになられぬよう、お約束くださいまし。……それに、申し上げたいのは、わたしどもは、きっともう一度、会えるということです」

「そうとも、きっともう一度、会えるよ」長尾は、まじめに答えた。「それに、あの浄土には、別離の苦しみはないからね」

「いえ、いえ！」彼女は、静かに答えた、「わたしの申しておりますのは、浄土のことではございません。わたしどもは、この世でもう一度、会えることになっていると信じます――たとえ、明日、わたしが葬られましても」

　長尾は、不思議そうに彼女を見つめると、その怪訝な顔にむかって、彼女は微笑んだ。彼女は、やさしい、夢みるような声でつづけた。

「そうです、この世で――長尾さま、あなたの現にいらっしゃる、この世のことでございます……もし、ほんとうに、そう願ってくださるなら。ただ、そうなるには、わたしはもう一度、女の子に生れかわって、大人にならなければなりません。ですから、きっと待っていてくださいませ。十五、六年を。長い月日ですわ……でも、ねえ、あなたはまだ、十九歳ですもの」

　彼女の死に目をなぐさめてやりたくて、彼はやさしく答えた。

「そなたを待つのは、義務でもあるし、また喜びでもあるのだよ。われわれは七生かけて結ばれているのだから」

「でも、疑わしいお顔よ」彼女は、彼の顔をじっと見つめながら訊ねた。

「いや、疑っているのは」彼は答えた、「別のからだで、別の名前になっているそなたが分るか、ということなのだ――なにか目じるしか、証拠を教えてくれなければ」

「それは、わたしにはできません」彼女はいった。「ただ神仏だけが、わたしどもがどこでどう

して会うのか、ご存じなのです――でも、わたしを迎えるのがおいやでなければ、きっと――ほんとにきっと、きっと――おそばに戻ることができますしてよ……このことだけは、お忘れにならないで」

彼女は話をやめた。そして目を閉じた。彼女は死んだ。

長尾はお貞を心から愛していた。それだけに、彼の悲しみは深かった。彼は、彼女の俗名を書いた、位牌をつくらせた。そして、その位牌を仏壇に置いて、毎日その前に供え物をささげた。彼は、お貞が死ぬまぎわに言った不思議なことがらについて、いろいろ考えた。そして彼女の霊をなぐさめようと思って、彼女がもし別のからだに生れかわることができたら結婚しようと、厳粛な誓紙を書いた。この誓紙に、彼は印を押し、仏壇の位牌のわきに置いた。

にもかかわらず、長尾はひとり息子であったため、結婚する必要があった。彼はまもなく家族の希望にしたがい、父の選んだ妻を迎えざるをえなかった。結婚してからも、たえずお貞の位牌の前に供え物をささげた。そして彼女のことを、いつもなつかしく思い出していた。しかし、しだいに彼女のすがたも――まるで思い出しにくい夢のように――彼の記憶から薄らいでいった。こうして歳月は去った。

その歳月のあいだに、不幸がつぎつぎと彼を襲った。まず、両親が亡くなった――それから妻とひとり児も。そこで、彼はこの世でひとりぼっちになった。彼は寂しい家を捨て、悲しみを忘れるために長い旅に出た。

旅の途中、ある日、彼は伊香保(いかほ)に着いた——それは、温泉と周囲の美しい風景で、いまでも有名な山あいの村である。彼が泊った村の宿で、若い女が給仕をした。そして、ひと目、彼女の顔を見たとき、かつて覚えなかった胸のときめきを感じた。まったく不思議なくらい、女はお貞に似ていたので、彼は夢ではないかと、わが身をつねってみた。女が——火や食事を運んだり、客間を片づけたりして——出たり入ったりするとき、その物腰や動作のひとつひとつが、あの若いころ約束していた少女のやさしい追憶をよみがえらせた。彼は、女にむかって声をかけた。すると、快い、よく通る声でこたえたのだが、その声の美しさに、過ぎた日々の悲しみから、胸のふさがる思いがした。

そこで、彼は不思議のあまり、女にこう訊ねた。

「ねえさん、あなたが、わたしのむかし知っていた女(ひと)にあまりによく似ているので、最初、部屋にはいってきたとき、びっくりしたくらいだ。で、失礼だが、あなたの郷里(おくに)はどちらですか、また、お名前は？」

即座に——そして、あの忘れられぬ死んだ人の声で——彼女はこう答えた。

「わたしの名は、お貞と申します。あなたは、わたしの許婚(いいなずけ)の、越後の長尾長生さまでいらっしゃいますね。十七年前、わたしは新潟で死にました。そのときあなたは、もしもわたしが女のからだでこの世に帰ってこられたら、わたしと結婚するというお約束を誓紙にお書きになりました。そしてあなたは、その誓紙に印を押して、それを仏壇の、わたしの名前を書いた位牌のわきに置

かれました。それで、わたしは帰ってまいったのです」

こう言いおわると彼女は、気を失って倒れた。

長尾は彼女と結婚した。そしてその結婚は幸福であった。しかし、その後もまったく、彼女が伊香保で、彼の問いにどうこたえたか、思い出せなかった。それに、前世についても何もおぼえていなかった、その出会いの瞬間に不思議に燃えあがった、先の世の記憶は、ふたたびぼんやりとなって、それから後も、そのままであった。

乳母ざくら

三百年むかし、伊予の国温泉郡の朝美村に、徳兵衛という信心深い人が住んでいた。この徳兵衛は、その地方一番の長者で、村長でもあった。たいがいのことに不足はなかった。ただ、四十の歳に達しても、父親になる喜びを知らなかった。そこで徳兵衛夫婦は、子供のないのを苦にして、朝美村の西芳寺という有名な寺の不動明王に、たびたび願をかけた。

とうとう、夫婦の願がかなった。徳兵衛の妻は女の児を生んだ。子供は非常に可愛かった。そして、露という名がつけられた。母親の乳が足りなかったので、お袖という乳母が、子供のために雇われた。

お露はたいそう美しい娘に育った。しかし、十五の歳に病にかかり、医者もさじを投げるほどになった。そのとき、実の母親のようにお露を愛していた乳母のお袖は、西芳寺へ行き、その少女のためにお不動さまに熱心に祈った。連日、二十一日のあいだ、寺へ行って祈った。そして、その満願の日に、お露は急に全快した。

徳兵衛の家では、大よろこびであった。その祝いに、知人たちをみな招いて祝宴を張った。しかし、その祝宴の晩、乳母のお袖はとつぜん病気になった。そして翌朝、彼女についていた医者

は、死期のせまっていることを告げた。

そこで家族は、悲嘆にくれながら、別れを告げるために、枕もとに集まった。ところが、彼女はこんなことをいった。

「いままでみなさまのご存じないことを、申し上げる時がまいりました。わたしの願が、ききとどけられたのです。わたしは不動さまに、お露さまの身代りになれるよう願をかけました。そして、非常なお恵みをさずけられたのでございます。ですから、わたしの死ぬのを、お嘆きにならないでくださいまし。……でも、一つだけお願いがございます。わたしは不動さまに、お礼と記念のために、西芳寺の庭へ桜の木を一本、植えることをお約束しました。ところがいま、わたしはそこへその木を植えることができません。ですから、どうぞお願いしますが、わたしに代って、その誓いを果していただけませんか。……それでは皆さま、お別れでございます。わたしが、お露さまの代りに喜んで死んでいったことを、お忘れになりませんように」

お袖の葬式のあと、桜の若木が一本——これ以上のものは見られないほど見事なものが——お露の両親によって、西芳寺の庭に植えられた。木は大きく育った。そして、あくる年の二月十六日——つまりお袖の命日に——見事な花を咲かせた。それから二百五十四年のあいだ——いつも二月の十六日に——花を咲かせている。そしてその淡紅色の花は、まるで乳で濡れた、女の乳房のようであった。それで、乳母ざくらと呼ばれている。

かけひき

屋敷の庭でお仕置きをおこなうという仰せがあった。そこで、その男は庭へ引き出され、いまも日本の庭園で見られるような、一列の飛び石が並んでいるひろい砂地に坐らされた。両腕は後ろ手にくくられている。家来たちは、手桶(ておけ)に水と、小石をつめた俵を運んだ。そして、坐っている男のまわりに、俵を積み上げ——くさび締めに、身動きできないようにした。主人がきて、その手はずを見た。気に召されたらしく、何もいわなかった。

不意に罪人が、主人にむかって叫んだ。

「殿さま、わたしがお仕置きを受けることになりました過ちも、わざとやったわけではございません。こんな過ちのもとはと申せば、非常にわたしが大馬鹿だったからです。なんの因果か、馬鹿に生れついて、いつも間違いばかり仕出かしてまいりました。しかし、馬鹿だからといって、人間一匹を殺すのは、ひどい——そんな無法には、報いがあります。どうあっても殿さまが、わたしを斬るおつもりなら、わたしは仕返しをします。人に恨みをいだかせれば、報いがきます。悪には悪を返すのです」

だれでも深い恨みをいだいて殺されると、その人の霊魂は、殺した人に仇(あだ)を返すことができる。そのことを、この侍は知っていた。彼はきわめて穏やかに——ほとんどいたわるように答えた。

「そちが死んだあと、どうなりとわれらを驚かすのは、そちの勝手じゃ。だが、そちのいうことは、とても信じられぬぞ。なにかひどい恨みの証拠を――首がはねられたあと――見せてくれるか」
「お見せしますとも」と、男が答えた。
「よろしい」と侍は、長い刀を抜いていった、「しからば、首をはねるぞ。そちのすぐ前に、飛び石がある。首をはねたあと、その飛び石に嚙みついてみせるがいい。もし、そちの怒った魂が、それをやれるなら、われらのうちに、驚く者もあろう。……どうじゃ、石に嚙みついてみせるか」
「嚙みつきますとも！」と男は、激しい怒りにかられて、叫んだ、「嚙みつき――」
閃光一閃、ひゅうと風が鳴り、ドサッという重い音。縛められたからだが、俵の上に伏した――二条の長い血潮が、切られた首もとからいきおいよく噴き出す――首は砂の上にころげ落ちた。重々しく、飛び石のほうへそれはころがっていく。と、いきなり飛び上がって、石の上端を歯にくわえ、一瞬、必死にかじりついていたが、ころりと落ちた。
だれも口を開こうとはしない。家来の者たちは、恐怖におののいて、主人を見つめている。主人はまったく平然として見える。ただ、近習の者に刀を差し出すと、近習は、柄杓で、鍔元から切っさきまで水を注ぎ、柔らかい紙で、何度もていねいに刃をぬぐった。こうして、お仕置きは

作法どおりおわったのである。

それから数カ月のあいだ、家臣や召使たちは、たえず怨霊の出現に、びくびくしながら暮していた。だれも、意趣返しのくるのを疑わなかった。そして、絶えざる恐怖から、ありもしないものを見たり聞いたりした。彼らは、竹のそよぐ風の音にもおそれた――庭の影のゆらぎをもおそれた。とうとう、相談した結果、恨みをのんで死んだ怨霊のため、施餓鬼をおこなうように主人に願い出ることにした。

「まったく無用なことじゃ」侍は、主だった家臣の一人が一同の願いを申し述べたとき、こういった、「あの男が、死ぬときに仕返しを誓ったことが、恐れの種なのであろう。だが、この場合は、恐れるにおよばない」

家来の者は、嘆願するように主人を見上げたが、この驚くべき自信のほどを訊ねることに、ちゅうちょさせられた。

「おお、理由はきわめて簡単なことじゃ」と侍は、口に出せない疑惑を見抜いていった。「ただ、あの者の最期の意志だけは、剣呑なものであった。それで、証拠を見せるように申して、あれの心を意趣からそらしたのじゃ。あの者は、飛び石に噛みつきたい一心で死んだ。そして、その一心は果すことができたが、ただそれまで。ほかは、みな忘れてしまったにちがいない。……よって、もうこの一件について、そのほうたちは案ずるにおよばぬぞ」

そして、実際、死んだ男はなにもたたらなかった。まったく、なにも起らなかったのである。

食人鬼

むかし、夢窓国師という禅宗の僧が、美濃の国をひとり旅していた折、だれひとり案内してくれる者のない山地で、道に迷った。長いあいだ、彼はあてどもなく、さまよいつづけた。そして、その夜の宿は、見つけることができまいとあきらめかけたころ、夕暮れの残光に照らされている丘の頂に、世を捨てた僧のために建てられる、「庵室」と呼ばれる小さな一軒家を見つけた。家は荒れはてているようであった。が、急いで行ってみると、ひとりの老僧が住んでいたので、一夜の宿を乞うた。老僧は、すげなくそれを断わった。それでも、ねぐらと食べ物をあたえてくれる、隣の谷あいの村を、夢窓に教えてくれた。

夢窓がたどり着いてみると、農家がほんの十軒あまりしかない小さな村であった。そして名主の家に、親切に迎えられた。ちょうど夢窓が着いたとき、座敷に四、五十人の人が集まっていたが、小さな別室に通されると、すぐに食事と寝床をあてがわれた。たいそう疲れていたので、まだ時間は早かったが、横になってやすんだ。しかし、真夜中すこしまえに、隣の部屋で大声を上げて泣いている声に眠りから目ざめた。やがて、ふすまが静かにあけられた。そして若い男が、行燈を下げて部屋にはいってくると、うやうやしくお辞儀をして言った。

「御坊さま、申し上げるのもつらいことですが、わたし、ただいまは、当家のあるじでございま

す。昨日は、まだ総領でございました。しかし、お着きになられましたとき、お疲れでしたので、ご迷惑になるようなことはあってはならぬと考えました。それで、申し上げませんでしたが、ほんの二、三時間まえに、父が亡くなりました。次の間でごらんになりました人たちは、この村の衆でございます。みんな、ほとけに別れを告げるために、ここへ寄ってくれたのです。そして、いま、三マイルばかり離れた別の村へまいるところでございます。なぜと申しますに、わたしどものしきたりによって、死人のあった晩は、村にだれも残ってはならないからです。わたしどもは、適当な供え物と供養をささげます。そのあと、亡骸（なきがら）だけを残して、家を出て行きます。こうして亡骸の残された家には、いつも妙なことが起きます。そこで、御坊さまも、わたしどもと一緒にお出でになられたほうが、よろしかろうと思われます。別の村でも、よいお宿を見つけて進ぜます。でも、御坊さまでいらっしゃいますから、たぶん、鬼でも魔性（あやかし）でも、恐れることはございますまい。で、もし、亡骸と一緒に残ってもよろしいようでしたら、どうぞこの家をお使いくださいませ。ただ、お断わりしておかねばなりませんのは、御坊さまでなければ、だれも今夜は、ここに残ろうという者などございません」

夢窓は答えた。

「ご親切なお志と手あついおもてなしは、まことにかたじけない。しかし、わたしがまいったとき、お父上の亡くなられたことをお教えくださらなかったのは、残念でござった。と申すのは、すこしは疲れておったにせよ、出家としてお勤めをできかねるほど、疲れてはおりませなんだ。もし、お話しくださっていたなら、お出かけのまえに、経をあげることもできたであろうに。が、

そういうことであれば、お出かけのあとで、経をあげることにいたそう。そして、明け方まで、お亡骸のそばに残っておりましょう。ここにひとり残るのはあぶないといわれることはよくわかり申さぬが、怨霊も鬼も恐れるものではない。愚僧についてはお案じ召されるな」

若者は、この自信にみちた言葉を聞いて、大いによろこんだようで、それにふさわしい言葉で礼を述べた。それから、家族の者と、隣の部屋に集まっていた人たちが、夢窓の親切な誓いを聞いて、お礼をいいにきた――そのあと、主人がいった。

「では、御坊さま、おひとりだけ残して行くのは、まことに申し訳ございませんが、これでお別れしなければなりません。村のおきてによりまして、だれも、真夜中すぎまでここに残ることができません。御坊さま、お願いでございますから、わたしどもがお側におりませぬあいだ、くれぐれもお体にご注意なさいますように。それで、もしなにか、留守のあいだに、不思議なことでも見聞きなさいましたら、明朝、もどってまいりました折、どうぞその話を、お聞かせくださいませ」

こうして、夢窓をのこして、みんな出かけて行ったので、彼は亡骸の寝かせてある部屋へ行った。ありふれたお供物が亡骸の前にそなえてあった。そして、小さな燈明が燃えていた。夢窓は経を読み、供養をつとめた――そのあと、瞑想していた。こうして瞑想しつつ、数刻、沈黙のなかにあった。人気ない村に、物音ひとつなかった。しかし、夜の静寂がいよいよ深まったとき、音もなく、ぼんやりした大きな「すがた」が、はいってきた。同時に、夢窓は、動くことも口を

きくこともできなくなった。見ていると、その「すがた」は、まるで両手でかかえるように、亡骸をもち上げ、猫が鼠を食べるよりもはるかに早く、それをむさぼり食った――頭からはじめて、なにもかも、髪の毛や骨や経帷子(きょうかたびら)にいたるまでも。そして、その異形(いぎょう)のものは、亡骸を食いつくすと、こんどは供え物にかかり、それらもまた食べてしまった。それから、来たときと同じように、いずこともなく立ち去った。

あくる朝、村人たちが帰ってくると、名主の家の前に、彼らを待ちうけている僧のすがたを見た。一同の者は、かわるがわるあいさつした。そして、中へはいって、部屋を見回し、亡骸や供物のなくなっているのを見ても、だれひとり、驚くものはなかった。しかし、主人は夢窓にむかっていった。

「御坊さま、昨夜はおそらく、いやなものをごらんになられたことでございましょう。わたしどももみな、お案じ申しあげておりました。でも、ご無事で、おさわりもなく、たいそう結構なことでございました。できることならば、ご一緒にいたかったのですが。でも、昨夜申しあげたように、村のおきてでは、死人が出ると、みな家をあけて、亡骸だけを残しておかなくてはなりません。これまで、このおきてを破りますと、なにかしら大きな不幸に見舞われました。これに従うときはいつも、亡骸もお供物も、留守のあいだになくなってしまうのです。たぶん、そのわけをごらんなされたことでございましょう」

そこで、夢窓は、ぼんやりとした恐ろしい物のすがたが、死人の部屋にはいって、亡骸と供物

とをむさぼり食ったことを話した。この話に、だれひとり驚いた様子は見えなかった。すると、家の主人はいった。

「御坊さま、お話は、むかしから、このことについて伝えられている通りでございます」

夢窓はそこで訊ねた。

「あの山の上の御坊は、この村の亡くなった人のお葬いを、時にはしてくれはせんかの」

「どの御坊さまのことで？」若い主人は訊ねた。

「昨夜、わしにこの村を教えてくれた御坊のことよ」と、夢窓は答えた。「わしは、むこうの山の、その御坊の庵室をたずねてまいったのだ。御坊は、宿は断わったが、この村への道を教えてくれた」

聞いている人びとは、驚いたように、互いに顔を見合せた。そして、一瞬の沈黙のあと、家の主人はいった。

「御坊さま、あの山の上には、御坊さまもいらっしゃらなければ、庵室もございません。何十年このかた、この界隈に住みついている、御坊さまなどいらっしゃいません」

夢窓は、そのことについて、もう何もいわなかった。この親切な人たちが、自分がなにか物怪に惑わされていると思っている様子が、ありありと見えたからである。しかし、人びとに別れを告げ、これから行く道について、必要なことがらをすっかり聞きおわったあと、いま一度、あの山の上の庵室をたずねて、自分がほんとうに迷わされたのかどうかを、確かめようと思い立った。庵室は、なんの苦もなく見つかった。こんどは、その年とった庵主は、中へ入るようにすす

めた。そこで言われるままに入ると、隠者は夢窓の前にうやうやしく頭を下げて、叫んだ。「ああ！　お恥ずかしい！――なんともお恥ずかしい！――まことにお恥ずかしいかぎりです！」

「宿をお断わりになったからといって、なにも、そんなに恥じ入られるには及びません」と、夢窓はいった。「むこうの村を教えていただきましたが、おかげで、大そら親切にもてなしてもらいました。ご好意にお礼を申します」

「わたしは、人さまに宿をお貸しできないのです」隠者は答えた、「わたしが恥じ入っているのは、宿をお断わりしたからではありません。ただ、あなたに、わたしの正体を見られたから恥ずかしいのです――昨夜、あなたの目の前で、死体とお供えを食ったのは、このわたしなのです。……御坊どの、わたしは、人間の肉を食らう、食人鬼でございます。わたしめを憐れみ、こんな境涯に堕ちた、人には知られない秘密を懺悔させてくだされ。

ずっと昔、わたしは、この寂しい在の僧でございました。何里も四方にわたって、ほかに僧はおりませんでした。そこで、そのころ、亡くなった山の衆の死骸は――時にはずいぶん遠方から――経をあげてもらうために、ここに運ばれたものです。ところがわたしは、ただ商売として、経をあげ、法要を営んでおりました――そんな尊いお勤めからいただける衣食のことだけしか考えていなかったのです。それで、こうした自分勝手な不信心から、わたしは死ぬとすぐ、食人鬼のすがたに生れかわりました。それからというものは、このあたりで死んだ人びとの亡骸を、食わなければならなくなったのです。一人のこらず、昨夜ごらんになったように、食いつくさなければならないのです……どうか、御坊どの、わたしのために、施餓鬼をなさってくださらぬか。

お願いでございます、御坊の念仏で、この恐ろしい無間地獄から、すみやかに逃れられるよう、助けてくだされ」

こう嘆願するや、隠者の姿はたちまち消えた。と同時に、庵室もまた消えた。そして夢窓国師は、僧の墓らしく思える、五輪石とよばれる、苔むした古い墓のそばの、丈高い草のなかに、ひとりぬかずいていたのであった。

むじな

東京の赤坂通りに、紀国坂という坂がある——これは、紀伊の国の坂という意味である。なぜ、紀伊の国の坂と呼ばれているのか、その理由は知らない。この坂の片側には、昔から、深い、たいへんひろい濠があって、高い青々とした土手の上は、どこか屋敷の庭につづいている。そして、道の反対側は、御所の長い、高い塀が、ずっと延びている。街燈や人力車のなかった頃は、このあたりは夜ふけになるとたいへん淋しかった。そのため、おそくなった通行人たちは、陽が沈んでからは、ひとりで、この紀国坂をのぼるくらいならむしろ、幾マイルも回り道をしたのであった。

それはみな、そのあたりに、むじながよく出たからである。

むじなを最後に見た人は、京橋界隈の、さる年とった商人で、もう死んで三十年にもなる。これはその人の話したとおりである。

ある晩、夜ふけに、紀国坂を急いでのぼっていくと、女がひとり、濠ばたにうずくまって、さめざめと泣いていた。身を投げるつもりではないかと思い、できることなら力を貸し慰めてやろうとして、足をとめた。女はほっそりと上品で、身なりもよかった。そして髪は、良家の子女

のように結いあげていた。「お女中」と、彼は女に近寄りながら、声をかけた、「お女中、そんなに泣きなさるな！……なんでお困りか、話してごらんなさい。もしお役に立つことがあるなら、よろこんでお力になってあげよう（彼は非常に親切な人だったから、実際、本気でそういったのである）。しかし、女は泣きつづけている――長いたもとの片方で、顔をかくしながら。「お女中」彼はふたたび、できるだけやさしい声でいった、「どうぞ、まあ、わたしの申すことをお聞きになって！……このあたりは、夜分、若いご婦人のお出でになるようなところではありません！お泣きなさるな、お願いだから！――どうしたら、お力になれるか、それをお話しくだされ！」ゆるゆると女は立ち上がったが、彼に背をむけたまま、たもとのかげで、むせび泣きつづけている。彼はそっと片手を女の肩のうえに置いて、頼むようにいった、「お女中！――お女中！――お女中！……ほんのちょっとだけ、お聞きなさい！……お女中！――お女中！」すると、その「お女中」は、くるりと向きなおり、たもとを下ろして、片手でつるりと顔をなでた――見ると、顔には目も鼻も口もなかった――悲鳴を上げて、彼は逃げだした。

紀国坂を、駆けに駆けた。前はまっ暗で、なにも見えなかった。彼はひたすら走りつづけて、ふり返って見る勇気すらなかった。ようやく、はるか向うに螢の光ほどの、提燈のあかりが見えた。彼はそのほうへ急いだ。近づくとそれは、道ばたに屋台を出している、夜なきそばの提燈にすぎなかった。しかし、そんなことのあった後では、どんなあかりでも、どんな人間でもよかった。彼はそば屋の足もとにころがり込むようにして、叫んだ、「ああ！――ああ！――ああ！」「これ！　これ！」とそば屋は、ぞんざいに怒鳴った。「これは！　いったい、どうしたのだ。

だれかに、斬られたかの?」
「いや——だれにも斬られやしない」息をはずませながら答えた、「ただ……ああ!——ああ!」
「——ただ、おどかされただけですかい」と、そば屋はそっけなく訊ねる。「追剝にでも?」
「追剝じゃない——追剝じゃない」恐怖のあまりあえぎながら……「いたのだ……女がいたのだ——濠ばたに。——そして、その女が見せた……ああ! そいつが、なにを見せたか、とてもいえない!」
「へえ! 女の見せたものって、こんなものじゃなかったんですかい?」そば屋はそういって、自分の顔をつるりとなでた——と、その顔は、卵のようになった……そして、同時に、あかりもふっと消えた。

ろくろ首

およそ五百年ほど昔、九州の菊池公の家臣に、磯貝平太左衛門武連(いそがいへいたざえもんたけつら)という侍がいた。この磯貝は、代々、武勇にすぐれた先祖の血をつぎ、生れながら武芸の才にめぐまれ、非常な力持ちであった。まだ年少のころから、剣の術にも、弓にも、槍の操術にも、それぞれ師匠をしのぎ、豪胆で熟練した武士(もののふ)の力量をすでにじゅうぶんあらわしていた。のちに、永享(えいきょう)の乱*にさいして、武功をたて、かずかずの栄誉をさずかった。しかし、菊池氏が滅亡するにおよび、磯貝は主家を失った。他の大名に仕えることはたやすかった。が、彼は一身の栄達を求めるようなことは決してなかったし、それに旧主に対しまだ赤心(せきしん)をいだいていたので、彼はいさぎよく世を捨てることにした。そこで、彼は髷(まげ)を切り、回龍(かいりょう)という法名を名のって、一介の雲水(うんすい)になった。

しかし、回龍はいつも、衣の下に、武士の魂をはげしく燃やしていた。かつては危険をものともしなかったように、いままた苦難には目もくれなかった。そして、どのような天候、どのような季節であれ、ほかの僧にはさらに行く勇気のない所へ、尊い仏の教えを伝えるために出かけた。時代は、暴力と混乱の時代であった。そして、たとえ僧であっても、旅の一人歩きは決して無事ではなかったのである。

最初の長い旅の途中、回龍は甲斐の国を訪れる機会があった。ある夕方、その国の山中を歩いていると、人里から何里も離れた、非常に淋しいところで、とっぷり日が暮れた。そこで彼は、星空の下に夜を明かそうと思った。道ばたに、手ごろな草地を見つけると、そこへ横になって、眠ろうとした。いつも彼は、不自由をよろこび迎えたのである。裸の岩でも、ほかによいものが見つからないときは、彼にはりっぱな寝床であり、松の木の根もすばらしい枕になった。彼のからだは鉄のようであった。露にも、雨にも、霜にも、雪にも、決して悩まされなかった。

彼が横になるかならぬうちに、斧と大きな薪の束をかついだ一人の男が、道にあらわれた。この木樵は、回龍が寝ているのを見ると足をとめ、無言のまましばらく見つめていたが、ひどく驚いた調子でいった。

「こんなところに、ひとりで寝ておられるとは、もし、あなたはどんな方でございますか。……このあたりには化け物が――いろんなやつが出ます。お化けが怖くはないのですか」

「いやいや」と、回龍は愉快そうに答えた、「わしは一介の遊行僧――世にいわゆる雲水にすぎない。なんで化け物なんぞ怖がろうか――たとえ、狐狸、妖怪のたぐいであっても。淋しいところは、わしの好むところだ。ものを思うのにふさわしいからな。わしは、野天で寝ることに慣れておる。それに、自分の命を気にかけぬ修行をつんできている」

「御坊さま、こんなところにお寝みになるとは、あなたは、よほど強い方にちがいない！」木樵は答えた、「ここは評判の悪い――ひどく評判の悪い場所です。ことわざにも言うじゃございませんか、『君子危うきに近寄らず』と。たしかに、ここでお寝みになるのは、たいへん危険なこ

と。したがって、わたしの家は、草ぶきのあばら屋でございますが、これから、いっしょにお出でくださらぬか。食べるものといって、差し上げるほどのものはありません。ただ、露をふせぐ軒はございますから、心おきなくお寝みになられます」

彼は熱心に説いた。その親切な口調が気に入って、回龍はこの控え目な申し出を受けいれた。木樵は、本道からそれて山あいの森をのぼっていくせまい小径を案内して行った。それは、でこぼこの危険な道で――時には崖っぷちを回ったり――時には網の目のような、つるつるした木の根しか足をかけるところがなかったり――時には、鋭くとがった岩の上やその間を、縫うように進んで行った。しかし、ようやく回龍は、満月がこうこうと頭上に輝いている、切りひらいた山の頂に立った。見ると目の前に、小さな草ぶきの小屋があり、中から明りがもれていた。木樵は、家の裏手の物置き小屋へ彼を案内したが、そこにはどこか近くの流れから、竹の筧で、水を引いてあった。二人は足を洗った。物置き小屋のむこうは、野菜畑で、杉の林と竹やぶがつづいている。そして、林のむこうには、かなり高いところから落ちてくる小さな滝がおぼろにきらめきつつ、長い白い衣のように月光の中をゆらめいていた。

回龍が、案内する木樵といっしょに家の中にはいると、四人の男女が、広間のいろりで燃えているわずかの火に、手をあたためていた。彼らは僧に頭を深々とさげ、まことにいんぎんにあいさつした。回龍は、こんな貧しい、人里離れたところに住んでいる人たちが、どうしてこうも丁重なあいさつの仕方を知っているのか、不思議であった。「みんな立派な人たちだ」彼はひそか

に考えた、「だれかよく礼儀作法をわきまえている人から、教わったにちがいない」そこで、「あるじ」――みんなが木樵をそう呼んでいた――にむかって、回龍はいった。
「さきほどからのご親切なお言葉や、お家の方々のたいそうご丁重なごあいさつからして、おことは元からの木樵ではござるまい。さだめし、昔は由緒あるお家柄の方とお見受けいたすが？」
にっこりと笑って、木樵は答えた。
「いかにも、仰せのとおり。いまは、ご覧のごとき暮しをたてておりますが、かつてはいささか名のある者でござった。それがしの身の上話は、そのまま零落の――みずからの落度から身を亡ぼした者の半生の物語でござる。かつてはそれがしも、ある大名に仕えて、家中でもかなりの役目も勤めてまいった者。ところが、酒色に溺れて、ふとした思いのまま、邪なことをしでかした次第。気ままな行いは一家の破滅をまねき、多くの者を死なせたのでござる。その報いは続いてまいった。そこでこの土地に、久しく身をひそめており申す。いまとなって、犯した悪業の罪ほろぼしをして、代々の家名の再興を念じておる次第。しかし、それもかなわぬことのようでござるよ。それでも、心から悔いあらためて、できうるかぎり、不幸な人びとを助けることによって、わが身の業に打ちかとうかと存じております」
回龍は、この立派な覚悟のほどを聞かされて、よろこんだ。そこで、あるじにむかっていった。
「あるじ殿、若いころ愚かなことに溺れがちだった人間が、後年、非常にまじめに、正しい生活を送るようになった例を、わしはいくつか見てまいった。経文のなかにも、悪事をはたらくのにもっとも強い人は、決心しだいで、善行にももっとも強くなれると書かれてある。おことが善い

心をお持ちのことは疑わない。それでますますよい運が向くようにと願いますのじゃ。今夜、わしはおことのために経をあげて、これまでの罪業に打ち勝つ力が得られるよう念じ申そう」

こう言いきってから、回龍は「あるじ」に床につくあいさつを述べた。するとあるじは、すでに寝床のこしらえてある、きわめて小さな脇の間へ彼を案内した。それからみな眠りについたが、ただ回龍だけが、行燈のあかりで経を読みはじめた。夜おそくまで、読経と祈禱をつづけていた。それから、彼は横になるまえに、外の景色をもう一度ながめようとして、小さな寝間の窓をあけた。美しい夜であった。空には雲かげひとつなく、風もなかった。冴えた月の光が、黒い茂みの影をくっきりと下に落し、庭の露のうえにきらきら輝いていた。こおろぎや鈴虫の鳴く声が、にぎやかな音の饗宴を奏でていた。そして近くの滝の音が、夜とともに深まった。回龍は水の音を聞いているうちに、渇きをおぼえた。そして、家の裏手の筧を思い出し、家人の眠りを妨げないように、そこへ行って水を飲もうと思った。できるだけそっと、自分の部屋と広間を仕切っているふすまをあけた。そして行燈のあかりで、横臥している五つのからだを見た——首がない！

一瞬、彼は茫然と立ちすくんだ——犯罪を想像したのである。しかし、つぎの瞬間、そこに血の流れた跡もなく、頭のない首がべつだん切られたようにも見えないのに気づいた。そこで彼はひそかに考えた、「これは化け物にたぶらかされたか、ろくろ首の棲み家におびき寄せられたのだ……『捜神記』*という本に、もしも首のないろくろ首のからだを見つけて、その胴を別のところに移しておけば、首はふたたびもとへもどることができない、と書かれてある。さらにその本には、首が帰ってきて、からだが動かされているのを知ると、首はみずから床に三度ぶつかって

——まりのように跳ね——ひどく恐れおののき息をはずませて、やがて死ぬ、と書いてある。さて、もしこれらがろくろ首なら、自分にはろくなことがあるまい——だから、その書の教えるとおりにやっても差し支えあるまい」

彼は「あるじ」の足をつかみ、窓のほうへからだを引きずっていき、外へ押し出した。それから、裏口へ行ってみると、かんぬきがかけてあった。そこで、首は開いたままになっている屋根の煙出しから出て行ったものと思われた。そっとかんぬきをはずし、庭へ出ると、できるだけ用心をしながら、向うの森のほうへすすんで行った。森の中から話し声が聞えた。彼は声のほうへ向った——よい隠れ場所を見つけるまで、陰から陰へ忍びながら。そして、大きな樹の幹のかげからのぞくと、首が——みんなで五つ——飛び回って、飛び回りながら話し合っているのが見えた。そいつらは、地面や木の間に見つけた虫けらを食べていた。やがて「あるじ」の首が、食べるのをやめていった。

「ああ、今夜きたあの旅の坊主！——よく肥っているじゃないか！　あいつを食べたら、さぞかし腹がふくれることだろう……さっきあんなことを言って、馬鹿をした。——けっきょく、おれの魂のために、経をあげさせることになってしまったわい！　経を読んでいるあいだは、そばへ寄ることはむつかしいから。それに、称名をとなえているうちは、触ることができない。だが、もう夜明けに近いから、たぶん、あいつも眠ったろう……だれか家へ行って、あいつがどうしているか、見てこい」

べつの首——若い女の首——がすぐに舞い上がって、蝙蝠のようにひらひら、家のほうへ飛ん

で行った。二、三分すると帰ってきて、ひどく驚いたようすで、声をからして叫んだ。
「あの旅の坊主、家におりませんよ——行ってしまった！　しかも、もっと悪いことがあります。あの男が、あるじのからだを動かしました。そして、どこへ置いたかわかりません」
　この報せ(しら)を聞いて、「あるじ」の首は——月のあかりにそれとはっきり見えたが——おそろしい形相を帯びた。目がかっと見開いた。髪は逆立ち、はげしく歯ぎしりした。それから、悲鳴が口から洩れた。そして——憤怒(ふんぬ)の涙を流しながら——叫んだ。
「からだを動かされた以上、元にもどることはできない！　そうなっては、死なねばならない！……みんなあの坊主の仕業だ！　死ぬまえに、おれはあの坊主に食らいついてやる！——やつを引き裂いてやる！——かじり殺してやる！……や、あすこにいるぞ——あの木のうしろに！——あの木のうしろに隠れている！　あれを見ろ！——あの肥った卑怯者(ひきょうもの)を！」
　同時に、「あるじ」の首は、ほかの四つの首を従えて、回龍に跳びかかった。しかしこの豪胆な僧は、それよりも早く一本の若木を引き抜いてかまえていた。そしてその木で、かかってくる首をなぐりつけ——恐ろしい力でなぎはらった。四つの首は逃げ去った。しかし「あるじ」の首は、何度打ちすえても、死にもの狂いで回龍にとびかかり、しまいには衣の左の袖にくらいついた。しかし、回龍はすばやくそのまげをつかんで、続けざまになぐりつけた。どうしても首は離れなかった。が、ひと声、長いうめき声をたてると、その後、もがくのをやめた。死んだのであった。しかしその歯はまだ袖をくわえていた。そして、回龍の大力をもってしても、口を開かせることができなかった。

袖に首をぶら下げたまま、回龍が家にもどって見ると、ほかの四つのろくろ首は、傷つき血の流れている首が胴にもどって、そこにかたまり、うずくまっていた。裏口に回龍のすがたがあらわれるとみな、口々に、「坊主だ！　坊主だ！」と叫んで、別の戸口から、森のほうへ逃げて行った。

東の空が白み、夜が明けかかっている。回龍は、化け物の力が、闇のあいだに限られていることを知っていた。袖に食らいついている首をながめた――顔は血と泡と泥にまみれていた。「なんという土産だ！――化け物の首とは！」こう考えて、声をあげて笑った。そのあと、わずかに身のまわりの物をととのえると、旅をつづけるためにゆったりと山を下りて行った。

ただちに旅をつづけ、やがて信濃の諏訪に入った。諏訪の大通りを、ひじに生首をぶら下げたまま、大またにゆっくり歩いて行った。女たちは気を失い、子供たちは悲鳴をあげて逃げだした。そして人だかりと騒ぎが大きくなったので、とうとう捕吏（当時、警官はそう呼ばれた）が回龍を捕えて、牢へ引ったてた。首は殺された男の首で、殺される瞬間、相手の袖にかみついたものと思われたのであった。回龍のほうは、吟味をうけても、ただ微笑を浮べるばかりで、何もいわなかった。そこで、一夜を牢で明かしたあと、土地の奉行の前へ引き出された。そして、出家の身でありながら、どうして人の首を袖にくっつけているのか、なぜ、ずうずうしくも人前で、自分の罪科を見せびらかすようなことをするのか、申し開きをするように命じられた。

回龍は、こうした糾問に、ながながと哄笑した。それからいった。

「皆の衆、わしは首を袖につけはしない。首がそこへくっついてまいったのだ――不本意なこと

ながら。それにわしは、なんの罪も犯しておりはせぬ。と申すのは、これは人間の首ではない。化け物の首だから。その化け物を殺したのはわしであっても、血を流してそうしたのではなく、わしの身の安全をはかるために必要な用心をしたまでだ」そういって彼は、事の次第をつぶさに語り――五つの首と格闘したくだりで、またもや心から哄笑した。

しかし、奉行たちは笑わなかった。彼らは回龍を、ふとい罪人とみとめ、その話は自分たちを愚弄するものと考えた。そこで、さらに吟味を加えようともせず、即座に死罪を申しつけることに決したが、満座にただ一人、高齢の老人だけが反対した。この老役人は、糾問のさい何もいわなかった。が、相役たちの意見をきくと、立ち上がっていった。

「まず、その首を検分されよ。まだ、すんではおらぬようであるから。もし、この出家のいったことがほんとうならば、首がなによりの証拠となろう……首をこれへ！」

そこで首は、回龍の肩からはぎとった衣にまだ食らいついたまま、奉行たちの前に置かれた。老人はそれを何度もぐるぐる回し、たんねんに調べてみると、首すじに、いくつかの妙な赤い符号を見つけた。彼は相役たちに、それへ注意を向け、首の切り口にどこも刃物で切った傷痕のないことを示した。それどころか、その切り口は、まるで落葉が枝からひとり離れたようになめらかであった。それで老人はいった。

「出家はたしかに、ほんとうのことを申したように思われる。これはろくろ首でござるよ。『南方異物志』と申す書に、ほんとうのろくろ首の首すじには必ず、ある赤い符号が見られると書かれてある。その符号がそこにござる。書いたものでないことは、おのおの方、ごらんのとおり。

そのうえ、甲斐の国の山中に、昔からこのような化け物が棲んでいたことは、よく知られており申す。……しかし、御坊よ」と、回龍のほうへ向き直っていった、「御坊はなんというよりむしろ、家でござるか。まことに、出家にはめずらしい剛勇のほどを示された。出家というより豪胆な出武士のおもむきが察せられる。さだめし、かつては武辺に関係されたのではあるまいか」

「いかにも、お察しのとおり」回龍は答えた。「出家をいたすまえは、長らく弓矢をとる身でござった。そのころは人も物の怪も、けっして恐れはいたさなんだ。当時は、九州の磯貝平太左衛門武連と名乗っており申した。どなたかご記憶の方もござろう」

こう名乗られて、讃嘆のささやきが白洲に満ちた。その名を覚えている者が、多く居合せたからである。回龍はたちまち、これまでの役人面とは打って変った友人たち――親身の愛情でその讃嘆の気持をしきりにあらわそうとしている友人たちに、取りかこまれていた。彼らは、うやうやしく彼を大名の居館へ案内した。そこで彼は歓待され、手厚いもてなしをうけ、みごとな贈物を賜わったのち、ようやく退出した。回龍が諏訪の地を去るとき、このはかない浮世で出家として許されるかぎりの、幸福な思いにつつまれていた。首は、土産にするつもりだと冗談をいいながら、たずさえて行った。

さて、その首はどうなったか、ただこんな話が残っている。

諏訪を去って一両日後、回龍は盗賊に出会い、とある淋しい場所で引きとめられて、身ぐるみ脱ぐように命じられた。回龍はすぐさま衣を脱いで、それを盗賊にわたしたが、盗賊はその時は

じめて、袖にぶら下がっているものに気づいた。さすがに胆っ玉のふとい追剝も、仰天した。衣を取り落して、飛び下がった。それから叫んだ、「おめえ――なんちゅう坊主だ！　こりゃ、おれよりもっと悪党だわ！　なるほど、わしは人を殺した。が、人間の首を、袖にぶら下げて歩いたことなんかないわい。……おい、坊さんよ、どうやら同じ仲間のようだな。おめえには一日おくよ！……ところで、その首は、おれの役に立ちそうだが。そいつで、人をおどかすのよ。どうだ、売らんか。おめえの衣ととっかえて、おれの着物をやろう。それから首には、五両出すぜ」

　回龍は答えた。

「それほど言うなら、首も衣もくれてやろう。が、断わっておくが、これは人間の首ではない。化け物の首だ。お前がこれを買って、そのため面倒が起きても、わしにだまされたと思わんでくれ」

「おもしれえ坊主だな！」と、盗賊は叫んだ。「人を殺しておいて、それで冗談をいうのだから！　しかし、おれは本気だぜ。そら、おれの着物だ。それから、金だ。――さあ、首をよこせ。冗談いって何になるか」

「持って行くがいい」と、回龍はいった。「わしは冗談をいってはいない。冗談といえば――もし、冗談があるとすれば――おまえが愚かにも、大金を出して化け物の首を買うことぐらいだ」そして回龍は、からからと笑いながら立ち去った。

　こうして盗賊は、首と衣を手に入れた。そしてしばらくの間、街道筋で化け物坊主をかたって

いた。しかし、諏訪の近辺にきて、首のほんとうのいわれを知った。それから、ろくろ首の怨霊（おんりょう）のたたりが怖くなった。そこで首を元の場所へかえして、からだといっしょに葬ってやろうと決心した。彼は、甲斐の山中の淋しい小屋へようやく行きついた。が、そこには住む人影もなく、化け物のからだも見つからなかった。そこで彼は、小屋の裏手の森に、首だけを埋めた。そして、そのあとへ墓石を建てた。それからろくろ首の霊のために、施餓鬼（せがき）をいとなんだ。いまでも、その墓石——ろくろ首の石塚として知られている——は、そこに残っている（と、日本の作者はすくなくとも、そう断言している）。

葬られた秘密

むかし、丹波の国に、稲村屋源助という金持の商人が住んでいた。彼にはお園という娘が一人あった。非常に利発で器量よしだったので、源助は、田舎の師匠にできるような教育だけで一人前にするのはかわいそうに思った。そこで、信のおける供を何人かつけて、京都へやり、そこで都の婦人たちのうける雅やかな芸事を習わせるようにした。こう躾を受けたあと、父方の知合いの――長良屋という商人に縁づいた。こうして、ほぼ四年のあいだ、幸せに暮した。夫婦のあいだに一人の子供があった――男の子である。しかし、嫁いで四年目に、お園は病気にかかり、亡くなった。

お園の葬式のあった夜、その小さな息子が、お母さんが帰ってきて、二階のお部屋にいるよ、といった。母親は子供を見てにっこり笑ったが、なにも言おうとしなかった。それで怖くなって、逃げ出してきたというのである。そこで、一家の者が何人か、もとお園がいた部屋へ上がってみた。すると驚いたことに、部屋の仏壇の前にともされた小さい燈明のあかりで、死んだ母親のすがたが見えたのである。彼女は、まだ自分の装身具や衣裳の入っている箪笥の前に立っているのであった。首と肩がはっきり見えた。が、腰から下は、だんだん薄れていた――まるで、ぼんやり鏡にうつった姿のようであり、水影のように透きとおっていた。

そこで、人びとは怖くなって、部屋を出た。階下で集まって、相談をした。するとお園の姑がいった、「女というものは、小間物が好きなのです。ことにお園は、自分の身の回りの物を大切にしていましたから。たぶん、それらを見にもどってきたのでしょう。よく亡くなった人がそうするといいますから——それらを檀那寺へ納めずにおきますとね。お園の着物や帯を寺へ納めたら、彼女の魂もおそらく休まることでしょう」

できるだけ早くそうすることに決った。で、あくる朝、箪笥の引出しが空けられた。お園の飾り物や衣裳がすっかり寺に運ばれた。しかし、彼女はその晩もあらわれ、前のように箪笥をじっと見つめている。それからそのあくる夜も、またつぎの夜も、毎晩もどってきた。家は恐怖につつまれた。

お園の姑は、そこで檀那寺へ行き、住職に事の次第をのこらず話し、助言を求めた。寺は禅寺である。住職は、大玄和尚として知られた、老知識であった。

和尚はいった、「なにか、その箪笥の中かまわりに、ほとけの気になるものがあるにちがいない」

「しかし、引出しはみな、からにいたしました」と、姑はこたえた、「箪笥には、なにもございません」

「よろしい」と大玄和尚がいった、「今夜、わしがお宅にまいり、その部屋で見張りをして、どうしたらよいか考えてみよう。見張りをしているあいだ、わしの呼ぶまで、だれも部屋へ入らぬ

よう、よく言いつけておいてくだされよ」

日が沈んでから、大玄和尚はその家に出かけると、部屋はもう用意されてあった。彼はそこにひとり坐って、経を読みつづけた。子の刻*の過ぎるまで、何もあらわれなかった。すると不意に、お園のすがたが簞笥の前に浮び出た。顔はもの思いに沈み、目を簞笥にじっと向けている。

和尚は、こうした場合きめられてある経文を口にしたあと、お園の戒名を呼んで、そのすがたに話しかけた、「わしは、そなたを救いにここに参った。おおかた、あの簞笥に、なにかそなたの気にかかるわけのものがあるのじゃろう。そなたのために、探して進ぜようかな」影はかすかに頭を動かして、同意の様子を示した。和尚は立ち上がって、一番上の引出しをあけた。それは、からであった。つづいて、二番目、三番目、四番目とつぎつぎにあけた——それらの底やうしろを、念入りにさがした——中も念入りに調べた。が、何もなかった。しかし、すがたは前のまま物思わしげに、まだ見つめている。「どうしてほしいのだろう」と、和尚は考えた。が、不意に、引出しの中に張った紙の下に、なにか隠してあるのではないかと、思いあたった。最初の引出しの紙をはがした——何もない！　二番目、三番目の引出しの紙をはがした——やはり、何もない。が、一番下の引出しの紙の下から、それを見つけた——一通の手紙である。「これが、そなたの心を悩ましていたものかの」和尚は訊ねた。女の影は、和尚のほうを向いた——弱々しい視線を手紙のほうに注いでいる。「焼きすてて進ぜようか」と、彼は訊ねた。女は、頭をさげた。「この朝のうちに、寺で焼き捨てよう」和尚は約束した、「わしのほか、だれにも見せはしない」女の

姿は、にっこり笑って消えた。

夜があけて、和尚が降りてくると、家の者はみな、階下で心配しながら待っていた。「ご心配めさるな」和尚は一同にむかっていった、「もう二度と、あらわれ申さぬよ」そしてお園は、ついにあらわれなかった。

手紙は焼き捨てられた。それは、お園が、京都で修業している折にもらった恋文であった。しかし、その内容を知っているのは、和尚だけである。秘密は、和尚とともに葬られた。

雪おんな

武蔵(むさし)の国のある村に、茂作(もさく)と巳之吉(みのきち)という、二人の木樵(きこり)が住んでいた。この物語のあったころ、茂作は老人であった。その雇い人の巳之吉は、十八の若者である。毎日、二人はいっしょに、村から五マイルはなれた森へ出かけた。その森へ行く途中、大きな川をわたらねばならなかった。そこに渡し舟がある。渡し舟のあるところに、何度か橋がかけられた。が、そのたびに橋は、大水で流されてしまった。普通の橋では、川のあふれるとき、流れにさからうことができないのであった。

茂作と巳之吉が、あるたいそう寒い夜、家へ帰る途中、ひどい吹雪におそわれた。渡し場に着いて見ると、渡し守は舟を向う岸においたまま帰ってしまっていた。とても泳げるような日ではなかった。木樵たちは、渡し守の小屋に避難した——ともかく、避難する場所が見つかって運がよかったと思いながら。小屋には火鉢も、また火をたく所さえなかった。わずか二畳敷きの小屋で、戸口が一つ、窓さえないのである。茂作と巳之吉は、戸をしっかり閉めると、簑(みの)をかぶって、休むため横になった。はじめのうち、それほど寒いとも思わなかった。あらしも、すぐやむと思っていた。

老人は、ほとんどすぐに眠りこんだ。が、巳之吉少年は、長いあいだ目をさましていて、恐ろしい風や、しきりに戸口にあたる雪の音に、耳をすましていた。川はごうごうと鳴っている。小屋は、海上の小舟のように、たえず揺れ、きしんでいた。すさまじいあらしであった。大気は刻刻と冷えてきた。巳之吉は、簑の下で震えていた。が、とうとう、寒さにもかかわらず、彼もまた眠りこんでしまった。

顔に雪が降りかかるので、巳之吉は目をさました。小屋の戸は押し開かれていた。雪明りで、中に一人の女が——全身まっ白な女のいるのが見えた。女は茂作のうえに身をかがめ、息を吹きかけた——息はきらきら輝く白い煙のようであった。ほとんど同時に、女は巳之吉のほうへ振り向いて、彼のうえへかがみこんだ。彼は、叫び声をあげようとしたが、声をたてることができなかった。白い女は、しだいに深くかがみこんで、とうとう彼の顔に触れるばかりになった。見ると、目はこわいが、たいそう美しい女である。しばらく、女は彼を見つめていた——やがて、にっこり笑うと、ささやくようにいった、「わたしは、おまえもあの人のようにするつもりだったのよ。だけど、ちょっとかわいそうになってね——あんまり若いものだから。……なんて、かわいい子だろう、巳之吉さん。もう、おまえを殺しはしない。でも、もしおまえが、だれかに——たとえ、おまえの母親であっても——今夜見たことを言ったら、わたしにはわかるのだから。そのときは、おまえを殺してしまう……言ったことをよく覚えておくのだよ！」

そういって女は、くるりと向きなおると、戸口をすーっと抜けて行った。すると、からだが動かせるようになった。彼ははね起きると、外を見た。が、女はどこにも見えない。雪はいよいよ

はげしく小屋の中に吹きこむ。巳之吉は戸をしめ、いくつか棒切れを当てがって開かぬようにした。いったい、風がそれを押し開けたのだろうか――夢を見ていただけで、戸口のかすかな雪明りを、白い女の姿と見あやまったのかもしれないと思った。しかしそれも、そうとは言いきれない。彼は茂作に声をかけたが、返事をしないので、ぎょっとした。暗がりに手さぐりして、茂作の顔に触れると、それは氷のようであった！　茂作は、堅くなって死んでいた。

夜明けに、あらしはやんだ。日がのぼって少したってから、渡し守が小屋にもどってみると、茂作の凍え死んだからだのそばに、巳之吉が気を失って倒れていた。すぐに介抱されて、巳之吉はやがて正気に返った。が、その恐ろしい一夜の寒気のため、長いあいだ寝ついていた。彼は、老人の死にもひどく驚いた。が、白い女のまぼろしについては、何もいわなかった。ふたたび元気になると、彼はまたもやもとの仕事にもどった――毎朝、森へ行き、夕暮れに薪の束を負って帰ってくると、母もいっしょになってそれを売った。

あくる年の、冬のある夜、彼は家に帰る途中、たまたま同じ道を旅している一人の娘に追いついた。背の高い、すらりとした娘で、なかなかの器量よしであった。巳之吉のあいさつに答えた娘の声は、まるで歌鳥の声のように耳に快くひびいた。彼は娘と並んで歩いた。二人は話しはじめた。娘は、お雪という名であるといった。先ごろ両親を亡くしたばかりで、これから江戸へ行き、そこにいる貧しい縁者を頼って、なにか奉公口をさがしてもらうつもりでいることなどを語

った。巳之吉はたちまち、この見知らぬ娘に心ひかれた。娘は見れば見るほど、ますます美しく見えた。もう言い交わした人でもいるのかと、彼は訊ねてみた。娘は笑いながら、そんな人はいないと答えた。今度は逆に、娘は巳之吉にむかって、もう嫁さんをお持ちか、あるいは約束した女人でもいるのか、と訊ねた。彼は、養うのは後家の母親一人きりだが、まだ自分は非常に若いので、「お嫁さん」の話など考えたことがない、と答えた。……こんな打ち明け話のあと、二人は長いあいだ、ものも言わずに歩きつづけた。が、ことわざにもあるように、「気があれば目も口ほどにものをいう」のである。村に着くまでに、おたがい非常に気に入っていた。それで巳之吉は、家にすこし休んでいくようにいった。娘はすこしはにかんだあと、彼について行った。母親はよろこんで彼女を迎え、彼女のためにあたたかい食事の用意をした。お雪の振舞いがあまりに感じがよかったので、母親はたちまち彼女が気に入り、江戸に行くのをしばらく延ばすようにすすめた。そして、とどのつまり、雪は江戸へはついに行かなかった。「お嫁さん」として、その家にとどまったのである。

お雪は、たいそうよい嫁であった。五年ほどして、巳之吉の母親が死ぬとき、最後の言葉は、息子の嫁にたいする愛情こめた賞讃の言葉であった。お雪は、巳之吉とのあいだに、男女十人の子供を生んだ――どの子も、みんな綺麗な、たいそう色の白い子供たちばかりである。

村の人たちは、お雪を、自分たちとは生れのちがう、不思議な人間だと思っていた。農家の女はおおかた齢をとるのが早い。が、お雪は、十人の子の母親になっても、はじめて村へきた日の

ように、若々しく見えた。

ある晩、子供たちが寝静まってから、お雪は行燈のかげで針仕事をしていた。すると、巳之吉は、そんな彼女を見ながらいった。

「お前が、そうやって顔にあかりをうけて、針仕事をしているのを見ると、わしは十八の年にあった、不思議なことが思い出される。そのとき、わしは、いまのお前のように、美しい、色の白い女を見たのだ――ほんとに、その女は、おまえにそっくりだった」

仕事から目をはなさずに、お雪は答えた。

「その女の話をしてくださいな。……どこでお会いになられたの？」

そこで巳之吉は、あの渡し守の小屋の恐ろしい一夜のことを――それから、にっこりささやきながら、白分のうえに身をかがめた白い女のことを――それから、茂作じいやのひっそり死んだことを話した。そして、彼はいった。

「眠っているあいだも、起きているときも、お前のように美しい人を見たのは、その時だけだ。もちろん、あの女は人間ではない。わたしは、その女が怖かった――ほんとに怖かった――しかし、まっ白だったよ！……じっさい、わしの見たのは、夢だったのか、雪おんなだったのか、よくわからんのだが」

お雪は、いきなり針仕事を投げ出して、立ち上がり、坐っている巳之吉のうえに身をかがめて、彼の顔にむかって叫んだ。

「それは、あたし——あたし——あたしなの！　この雪だったのです！　あのとき、わたしは、もしあなたがそのことをひと言でも洩らしたら殺す、と申しました！……そこに眠っている子供がなかったら、すぐにいま、あなたを殺したところです！　ですから、よく、ほんとによく子供たちのことをみてやってください。もし、子供たちにとやかく言われるようなことをなさったら、わたしは相応なことをいたしますから！」

こう叫んでいるあいだも、彼女の声は、風のむせぶ声のように、しだいに細くなった——それから、きらきらした白い霧になって、梁(はり)のほうへ昇って行き、震えながら、煙出しを抜けて行った。……もうそれきり、彼女のすがたは二度と見られなかった。

青柳(あおやぎ)のはなし

文明年間(一四六九—八六年)、能登(のと)の太守、畠山義統(はたけやましむね)の家臣に友忠(ともただ)という若い侍がいた。友忠は越前の生れであった。が、早くから、小姓として、能登の大名の居館(やかた)に引きとられ、太守の監督のもとに、武芸の修行をつんだ。長ずるにおよび、文武の両道にすぐれ、つねに太守の覚えがめでたかった。生れつき性質もやさしく、応対に愛嬌(あいきょう)があり、風采(ふうさい)もきわめて端麗であったので、同輩の侍たちに非常に敬愛されていた。

二十歳のころ、友忠は、畠山義統の親戚(しんせき)にあたる、京都の大大名細川政元(まさもと)のもとへ、内密の使命を帯びて遣わされた。越前の道をとるように命ぜられたので、この若者は、途中、ひとり暮しの母親を訪ねることを願い出て、許しを得た。

旅立ちは、一年のもっとも寒い時期であった。野山は雪におおわれていた。屈強の馬に乗っていたが、道は遅々としてはかどらない。やがて山国にはいり、人家も少なくまばらになった。二日目に、長い馬の旅に疲れたあと、夜分遅くまで、目ざす宿場に着けないとわかって友忠は度を失った。彼の懸念も無理はなかった——身を切るような冷たい風とともに、猛烈な吹雪が襲ってきたからである。それに馬もようやく疲労を示しはじめた。しかし、その苦しいさなかに、思いがけず友忠は、柳の木立の茂っている、近くの丘の頂に、一軒のわらぶきの小屋を見つけた。よ

うようの思いで、疲れた馬に鞭打ちつつ小屋にたどりついた。そして、風の吹き込まぬようぴったり閉めきった雨戸を、はげしく叩いた。一人の老女が戸をあけたが、この端麗な旅人の姿を見ると、同情の声をあげた。「これはこれは、お気の毒に！――こんな天気に、若いおかたがおひとりで旅されるとは！……さ、どうぞ、お入りくだされ」

友忠は馬から下り、裏の納屋に馬を引いて行ってから、小屋へ入って見ると、一人の老人と若い娘が、竹の片を炉にくべて暖をとっている。二人はうやうやしく、彼を炉のそばへむかえた。それから老人夫婦は、旅人のために酒をあたため、食事を用意したが、旅のことについても、何くれと訊ねるのであった。そのあいだに、若い娘はふすまのかげに姿を消した。友忠は、娘が非常に美しいのに、驚きの目を見張った――身なりこそひどく貧しく、長い下げ髪も整ってはいないものの、こんな美しい娘が、こんなみすぼらしい淋しい所に住んでいることに驚いたのである。

老人は彼にむかっていった。

「お武家さま、隣の村は遠うございます。それに、雪もひどく降っております。風は身を切るようです。道もたいそう悪うございます。それで、今夜またこれからお出かけになるのは、大変危のうございます。こんなあばら屋に、お引きとめするのもお恥ずかしく、おもてなしも何もできませんが、今夜は、このむさくるしい所にお泊りなされるほうが、よろしかろうと存じます。お馬のお世話もいたしますゆえ」

友忠は、このつつましい申し出にしたがった――ひそかに、あの娘をもっと見る機会があたえられたことを喜んでいた。やがて、粗末ながら、たくさんの料理が前へはこばれた。娘もふすまのかげから出てきて、酒をすすめた。もう、粗野ではあるが、こざっぱりした手織りの着物に着かえていた。長く垂らした髪も、綺麗にくしけずってあった。彼女が酒をつぐために前へ身をかがめたとき、友忠は、これまで見たどの女よりも、この娘が比類まれな美貌であるのを知って目を見張った。物腰にも、彼を驚かすほどのしとやかさがあった。しかし、老人たちは娘のために言いわけした。「お武家さま、娘の青柳は、この家で、ほとんどひとりで育ちました。で、行儀作法などまるでわきまえておりません。愚かで無知なことは、どうかお許しください」友忠はそれをさえぎり、こんな美しい娘御に給仕されるのは、身の果報にあまるといった。彼は、娘から目をはなすことができなかった――うっとりした目で見つめすぎて、顔をあからめるのが目に入ったが。そして、前に置かれた酒や料理に手をつけようともしなかった。母親はいった、「お武家さま、どうぞ少し召し上がってくださいませ――田舎料理で、まずいものばかりでございますけれど――身を刺すような風で、すっかりからだを冷やされたことでしょうから」そこで、この老人たちを喜ばそうと、友忠はできるだけ口にはこんだ。しかし、恥じらう娘の愛らしさに、ますます彼は心を惹かれた。話をしてみると、声も顔のように美しい。なるほど、山家育ちであるかもしれない――が、それにしても、両親は由緒ある身の上にちがいない。言葉や所作振舞いが、貴人の姫君のようにみえたからである。突然、彼は、心のときめきに駆られて、歌を詠んだ。それは、言問いでもあった。

たずねつる花かとてこそ日を暮せ
　明けぬになどかあかねさすらん

一瞬のためらいもなく、娘はこんな歌でこたえた。

出ずる日のほのめく色をわが袖に
　つつまば明日も君やとまらん

　そこで友忠は、娘が自分の思慕をうけいれてくれたことを知った。そして、その歌が伝える愛の保証をよろこぶと同時に、みずからの思いを、歌に託した彼女の器量のほどにも驚かされた。彼は、いま、この目の前にいる田舎育ちの娘よりも、美しい、才気にみちた娘に出会うことはもとより、ましてやわがものにすることなぞ、とうてい叶えられぬことがわかった。彼の内なる心は、しきりに、「お前の行く手に神仏が置きたもうたこの幸をとれ！」と叫んでいるように思われた。要するに、彼は魅せられたのである——なんの前置きもなく、いきなり老夫婦に、娘御を妻にもらいうけたいと願うほど魅せられたのであった。と同時に彼は、名前と素姓と、能登の太守の家中における身分などを二人に告げた。
　二人は何度も、感謝にみちた驚きの声をあげながら、彼に深く頭を下げた。しかし、しばらく

ためらう様子を見せたあとで、父親は答えた。

「お武家さま、あなたはご身分の高いお方、それにもっとご出世なさいましょう。ただいまのお申し出は身にあまること――まったく感謝のほどは言葉につくせません。しかし、わたしどものこの娘は、卑しい生れの、愚かな田舎娘、なんのしつけも学問もいたしておりませず、立派なお侍の奥方など、分にすぎることでございます。こんなことを申すのさえ、もってのほかで。しかし、娘がお気に召して、田舎育ちをおゆるしになり、不調法をおとがめなさいませぬなら、どうぞよろこんで、端女として、お手もとに差し上げましょう。それで、今後、娘のことはお心のままに、おまかせいたします」

夜の明けるまえに、吹雪はやんだ。そして、雲ひとつない東の空に陽はのぼってきた。たとえ青柳の袖が、ありあけの赤い薔薇色を愛する人の目から隠しえたとしても、もう彼はとどまっていられなかった。といって、娘と別れるのは耐えがたいことである。旅の用意ができると、彼は両親にむかってこう話しかけた。

「すでにお世話になりましたうえに、さらにお願い申すのは、心ないようでござるが、重ねて、お娘御を妻としていただけるよう、お願いいたす次第。このままお別れするのは、なかなかのこと。お娘御も、お許しがあれば、身共とともに参ることをお望みのゆえ、このままお連れしたく存じます。もし、娘御をたまわりましたならば、お二人を親御として、いつまでもお仕えいたす所存。……ともあれ、ご親切なおもてなしのささやかながらお礼までに、これをお納めくだされたい」

そういって彼は、謙虚な主人の前に、一包みの小判を置いた。しかし老人は、何度も平伏したあと、その贈物をそっと押し返していった。

「ご親切なお武家さま、黄金はわたしどもには、なんの使い道もございません。あなたさまこそ、長い、寒い道中に、それを必要とされましょう。ここでは、買うものもございません。よしや使いたいと思いましても、そんな大枚の金子は使いきることができません。……娘は、もうあなたさまに差し上げたもの――あなたさまの所有でございます。それゆえ、お連れなさるのに、わざわざお断わりになる必要などございません。すでに娘も、お供をして、お気に召されるあいだ、お側にお仕えしたいと申しております。わたしどもは、娘をお受け取りいただくだけで、もううれしいのでございます。どうか、わたしどものことで、ご心配くださいますな。こんな所では、ひととおりの衣裳など調えてやれません――まして持参金などは、とてもとても。そのうえ、年寄りでございますれば、いずれは、娘とも別れなければなりません。したがって、いまお連れいただくのは、たいそう幸せに存じます」

友忠は、どれだけ老人に贈物を受け取らせようと言葉をつくしても、無駄であった。金にはまったく執着のないことがわかった。ただ、ほんとうに、娘の運命を彼の手にゆだねることを望んでいた。で、娘を連れて行くことに決めた。彼は、娘を自分の馬に乗せ、老人たちに心から感謝の言葉を繰りかえし、しばしの別れを告げた。

「お武家さま」父親は答えた、「感謝すべきは、あなたさまではなく、わたしどものほうでござ

います。きっとあなたさまは、娘にやさしくしてくださいましょう。ですから、娘のことは、なんの心配もいたしておりません」

（ここのところで、日本の原作には、話の自然な流れにおかしな破綻があって、このあと、妙につじつまが合わなくなっている。友忠の母親のことも、青柳の両親のことも、能登の大名のことも、もうそれ以上、出てこない。あきらかに作者は、ここのところで仕事に飽きてしまい、かなりいいかげんに、驚くべき結末へ、話を急がせたものであろう。わたしは、この抜けたところを補うことも、構造上の欠陥を正すこともできない。しかし、少しばかり細かい説明を加える。それがないと、後の話がまとまらないから。……友忠は軽率にも、青柳を京都へ連れて行き、そこで問題をおこしたらしい。が、二人がその後、どこに住んでいたか書かれていない。）

……さて、侍は、主君の承諾がなければ、結婚は許されなかった。友忠は、使命が果されるまで、この認可の得られる見込みはさらになかった。こんな事情のもとでは、青柳の美しさが危険にも人目をひき、彼から奪い取る策をはかられる恐れは、十分にあった。そこで京都では、物見高い世間の目から彼女を隠しておこうと努めた。しかし、細川公の家臣の一人が、ある日青柳を見て、友忠との関係を知ると、ことを主君に報じた。すると細川公は――まだ若くて、美人好みであったから――娘を居館へ召し出すよう命じた。彼女は、いやおうなしに、ただちに居館へ連れて行かれた。

友忠の悲しみは、言いようもなかった。しかし、自分の非力を知っていた。彼はただ、遠国の大名に仕える、身分の卑しい一使者にすぎない。しかも、当面は、はるかに強大な大名のなすがままであり、その意のあるところを、とやかく言うことはできなかった。そのうえ、友忠は、自分のやり方のまずかったこと——武家の法度が禁じている内密の関係を結んだため、わが身に不幸を招いたことを知った。いまや彼には、ただ一つの希望——絶望的な希望しかなかった。それは、青柳がうまくぬけ出して、自分といっしょに逃げてくれるかもしれないということである。長いあいだ考え抜いたすえ、彼女に手紙をおくろうと決心した。そうした企ては、もとより危険にみちていた。彼女にあてたどんな書きものも、大名の手に入るかもしれない。まして、居館に住む女人に恋文をおくることなど、許しがたい罪であった。しかし、彼はこの危険をあえておかそうと決心した。そして、漢詩のかたちを借りて、彼女に伝えたいと思う手紙を書いた。詩は、二十八文字で書かれていただけである。が、その二十八文字で、深い熱情をことごとくあらわし、青柳を失った苦痛のすべてを示すことができた。

公子王孫逐后塵　　公子王孫后塵を逐う。
緑珠垂涙滴羅巾　　緑珠涙を垂れて羅巾を滴す。
侯門一入深如海　　侯門一たび入る深きこと海の如し。
従是蕭郎是路人*　　是れより蕭郎是れ路人。

若き貴公子は珠のように輝く乙女のあとを追う。
美しい乙女の涙は滴り落ちて、その衣をしとど濡らした。
しかし、貴公子は、ひとたび乙女に魅せられ――その思いは海のように深い。*
それゆえ、このわたしは、ひとりさびしく――ひとり路傍をさまようばかりである。

この詩がおくられたあくる日の夕方、友忠は細川公の御前に召し出された。若者は刹那、秘密の露見したことを懸念した。もし、あの手紙が大名に見られたのなら、厳しい罰をのがれる希望はなかった。「こうなれば、死を賜わるであろう」と、友忠は考えた。「が、青柳がかえらぬ以上、生きていたいとは思わぬ。それに、死を申しわたされても、少なくとも細川公を刺すことくらいできるだろう」彼は両刀を腰にたばさんで、居館へ急いだ。

謁見の間にはいってみると、細川公は、衣冠束帯に身をととのえた重臣たちにとり囲まれて、上段の間に座をすえていた。並みいる者はみな、彫像のごとく黙している。友忠が礼をするためすすみ出るあいだ、まわりの静寂は、あらしの前の静けさのように、無気味に、重苦しく思われた。が、細川公は突然、上段の間から下りてきて、若者の腕をとると、「公子王孫逐后塵」の詩の文句を朗唱しはじめた。友忠が面を上げると、公の目にやさしい涙が見えた。

それから、細川公がいった。

「そのほうたちがあまりに慕い合っているゆえ、一族の能登の太守に代って、婚姻を許すことにした。それで、婚礼はただいま、余の前でおこなうことにする。客人はそろっている——引き出物も用意してある」

公の合図で、奥の間のあいだのふすまが開けられた。見ると、家中の重臣たちがおおぜい、式のために居ならび、青柳は花嫁姿でひかえていた。……こうして彼女は彼に返された。——婚礼はたのしく、きらびやかであった。——高価な品々が、公や、家中の面々から、若い夫婦に贈られた。

結婚してから、五年のあいだ、友忠と青柳は幸せに暮した。が、ある朝、青柳は、夫と家事について話しているうちに、突然、大きな苦しい叫び声をあげ、それからまっ青になって、動かなくなった。しばらくすると、弱々しい声で、彼女はいった。「こんな、はしたない声を出して、お許しくださいませ——でも、痛みがあまり急だったものですから！……旦那さま、わたしどもが結ばれましたのは、さだめし前世からの縁によるものでございましょう。そして、おそらく、またもう一度、いつかご一緒になれると思います。でも、この世での縁は、もう終りました——わたしどもは、お別れ申さねばならないのです。どうか、わたしのために、念仏をお唱えくださいませ——わたしは、死なねばなりませんから」

「なにを、とりとめないことを考えているのだ！」と驚いて夫は叫んだ、「お前は、どこかちょっと具合が悪いのだろう！……しばらく横になって、休むがいい。じきに癒るから」

「いえ、いえ！」彼女は答えた、「わたしは、死ぬのです！――気のせいではございません――よく分っております！……旦那さま、もう隠しだてでは無用でございます。わたしは人間ではございません。木の精がわたしの魂なのです。あの柳の樹液が、わたしの生命なのです。だれかがいま、無惨にも、わたしの木を切り倒しています――そのため、わたしは死なねばならないのです！……泣くことさえ、もうできません！――早く、早く、念仏を唱えて！……早く！……ああ！」

またもや苦痛の叫び声をあげると、彼女は美しい顔をそむけ、袖に隠そうとした。が、ほとんどそれと同時に、彼女のからだ全体がまったく妙なふうに崩れはじめ、下へ、下へ、下へと――床と同じ高さにまで沈んで行くように思われた。友忠は、とびついて彼女を支えようとした。――が、支えるものは何もなかった！　畳の上には、美しい人の抜けたあとの着物と、髪にさしていた飾りが、残されただけである。からだは、もうどこにもなくなっていた。

友忠は頭を剃り、仏門にはいって、雲水になった。諸国を行脚して、訪れた霊場霊場で、青柳の霊のために念仏をささげた。巡礼の途中、越前にはいった折、愛する人の両親の家をさがした。が、その家のあった、山あいの淋しい場所に行ってみると、もう小屋はなくなっていた。小屋のあった跡すらもなく、ただ柳の切り株が三つ――二つは老木の、一つは若木の――彼が訪れるよりずっと以前に、切り倒された跡があるばかりであった。

この柳の切り株のかたわらに、彼は、いくつかの経文をきざんだ碑を建てた。そして、その場

所で、青柳とその両親の霊のために、かずかずの供養をいとなんだ。

十六ざくら

うそのような十六ざくら咲きにけり

伊予の国の、和気郡に「十六ざくら」という、たいへん古い、有名な桜の木がある。毎年、陰暦の一月十六日――しかもその日だけ――花が咲くからである。したがって、この桜が花を開くのは、大寒の季節である――桜の習性からいえば、春の季節を待って花を開くものだが。しかし、十六ざくらは、自分のものではない生命力で――少なくとも、もとは自分のものではない生命力で、花を開く。その木に、ある人間の魂が宿っているのである。

その人は、伊予の侍であった。この木はその人の庭に生えていた。そして、いつもの季節に――つまり、三月の終りか、四月の初めごろ――花が咲いた。子供のころ、侍はこの木の下で遊んだ。そして、両親も、祖父母も、先祖たちもずっと、百年以上にわたって季節のくるごとに、その花の咲いた枝に、花をたたえる歌を短冊に書いてつるしてきた。その人も、もう年老い――子供たちには先立たれた。この世で愛するものは、その木をのぞいて、なにも残っていなかった。ところが、これはいかに！　ある年の夏、その木がしおれて、枯れてしまったのである！

老人は、たいそうこの木を悲しんだ。そこで、親切な近所の人たちが――老人をなぐさめてや

ろうと思い——若い美しい桜の木を一本見つけて、それを彼の家の庭に植えた。老人は礼をいって、いかにもうれしそうな顔をした。が、実際は、悲しみでいっぱいであった。あの老木をたいへん愛していたので、どんなものも、それに代って彼をなぐさめることができなかったのである。

とうとう、よいことを思いついた。枯れた木の助かる方法を思い出した（それは一月十六日のことであった）。彼はひとりで庭へ出て、枯れた木の前に深く頭を垂れ、木にむかっていった、「どうか、お願いする、もう一度、花を咲かせてくれ——お前の身代りにわしは死ぬから」（人は、神仏の恵みによって、ほかの人間や、動物や、木にすら、自分の生命をほんとうにやることができる、と信じられているからである——だから、生命を移すことを、「身代りに立つ」という言葉で表現するのである）。それから木の下に、白い布と、何枚かのおおいを敷き、その上にすわり、侍の作法にしたがって腹切りをおこなった。それで、その人の魂は木に乗り移って、たちまち花を咲かせた。

こうして、一月十六日、雪の季節に毎年、花を咲かせるのである。

安芸之助の夢

大和の国の十市と呼ばれる在に、むかし、宮田安芸之助という郷士が住んでいた。（日本の封建時代に、イギリスのヨーマン階級に相当する、半農の武士——土地所有者——の特権階級があった。それを郷士と呼ぶのである。）

安芸之助の家の庭に、大きな古い杉の木があり、暑苦しい日など、彼はいつもその下で休んだ。ある大そう暑い昼下がり、彼は仲間の二人の郷士とこの木の下にすわって、談笑しながら酒を飲んでいると、突然、非常に眠くなった——あまりに眠いので、その場でひと眠りさせてほしいと友人たちに頼んだ。それから、その木の根もとに横になって、こんな夢を見た——

庭に横になっているると、どこかの大名の行列のような人の列が、すぐ近くの丘を下りてくるのが見えたので、それを見ようとして起き上がったように彼は思った。見れば、まことにすばらしい行列で——これまで見たこともないような堂々たるものであった。すると、それは自分の家のほうへむかって進んでくる。先頭に立派な装束をつけた若者たちが大ぜいいて、あざやかな青絹のかかった大きな漆塗りの御所車を引いてくるのが見えた。行列は、家の近くにくると、停った。そして、一人の立派な衣裳をつけた——見るからに身分の高い——人が中からすすみ出て、安芸之助に近づき、丁重にお辞儀をして、それからいった。

「おそれながら、御前にまいりましたのは、常世の国王の家来でございます。わが君、国王陛下におかせられては、代ってごあいさつ申し上げ、何事も御意のままに従えと、申されております。また、御殿にお越しくださるようお伝えせよとのことでございます。よって、お連れ申すために遣わされましたこれなる車に、なにとぞ、すぐさまお召しくださいますよう」

こういう言葉を聞いて安芸之助は、なにかうまい返事をしようとした。が、あまりに驚きあわてたので、言葉が出なかった。——と同時に、彼の意志はまるでどこかへ融け去ったように、家来の言うがままになるよりほかなかった。彼は車に乗った。家来も横に乗りこんで、合図をした。引き子たちは、絹の綱をとって、その大きな車を南のほうへ回した。——こうして旅がはじまる。

安芸之助の驚いたことに、たちまちのうちに車は、これまで見たことのない、二層の大きな唐様の楼門の前にとまった。ここで家来は下り、「お着きを知らせてまいります」といって、姿を消した。待つほどもなく、高い身分を示す紫の絹の服をつけ、高い冠をいただいた、高貴な顔をした二人の人が門からあらわれた。二人は、うやうやしく礼をしてから、彼を車から助け下ろすと、大きな楼門をくぐり、ひろい庭を横切って、正面が東西数マイルにも及ぶと思われる宮殿の入口に案内した。安芸之助は、すばらしく大きな、目もさめるような応接の間へ通された。案内の者は、彼を上座へ導くと、はるかに下がってうやうやしく控えた。すると正装した侍女たちが、茶菓を運んできた。安芸之助が茶菓を受けおわると、紫の服を着た二人の侍者は、彼の前に低くお辞儀をして、つぎのようなことを——宮殿の作法どおり、かわるがわる——申し述べた。

「おそれながら申し上げさせていただきます……ここへお越しねがいましたのは……わが君、国

王陛下におかせられては、あなたを御婿君として迎えたいがためでございます。……そして、今日ただいま、王女……、姫君さまと華燭の祝典をあげられるようにとのお言葉でございます。……ただちに謁見の間へご案内申し上げます。……陛下はもうお待ちかねでございます。……しかし、まずそのまえに……定めの式服に……お着替えあそばすように」

こういいおわると、侍者たちはいっせいに立ち上がり、金蒔絵の大きな櫃の置かれてある床の間へすすんで行った。そして櫃をひらき、そこから、すばらしい布地で作られたいろいろな束帯や、冠を取り出した。それらを安芸之助に着けて、国王の婿君にふさわしくした。それから謁見の間へ案内されると、そこには常世の国王が、いかめしい高い黒い冠をかぶり、黄いろい絹の服を着て、玉座にすわっていた。玉座の前には、左右に、おおぜいの高官たちが、まるで寺の仏像のように、身動きもせず、きらびやかに並んでいる。安芸之助は中央に進み出て、国王に、きまりの三拝の礼をした。国王は、優渥な言葉であいさつされ、こういった。

「そなたをここへ召した理由は、すでに聞き及びのことと思う。そなたを、ひとり娘の婿と決めた。よって、これより婚礼をとり行うことにする」

国王の言葉がおわると、歓びの楽の音が聞えた。そして、美しい官女たちの長い列が、幕のうしろから進み出て、安芸之助を、花嫁の待ちうけている部屋へ導いて行った。

部屋はたいそう広かった。が、婚礼を見ようとして集まった大ぜいの客は、そこには入りきらなかった。安芸之助が、すでに用意のできていた座布団に、王女と向いあってすわると、一同は彼にむかって、深くお辞儀をした。花嫁は天女のように思われた。被衣は夏の空のように美しか

った。婚礼は、大いなる歓喜のうちにおこなわれた。
そのあと二人は、宮殿のべつの場所に用意された、つづきの間に導かれた。そしてそこで、多くの高貴な人たちの祝いの言葉や、数えきれぬほどの祝いの品をうけた。

数日後、安芸之助はふたたび、玉座の間に召された。今度は、前よりもいっそう丁重に迎えられた。国王は彼にむかっていった。
「わが領土の西南のほうに萊州という島がある。今度、そなたを、その島の太守に任命することにした。民は忠実で従順である。が、島の法律はまだ、常世の国の法律とは正しく一致していない。習俗もまたよく整ってはおらぬ。そこで、そなたはできるかぎり、島の社会状態を改善するようつとめてもらいたい。どうか徳と英知をもって、彼らを治めるように。萊州への旅立ちに必要なものは、もうととのえてある」

そこで安芸之助と花嫁は、常世の宮殿を出発し、海岸まで多くの貴族や役人たちに見送られた。そして、国王の命で用意された御用船に乗りこんだ。それから順風に乗って萊州へ無事に着くと、善良な島民たちが、彼らを迎えるために浜べに集まっていた。

安芸之助は、ただちに新しい仕事にとりかかった。それは難かしいものではなかった。治政の最初の三年は、おもに法律の制定と実施にあたった。しかし、補佐してくれる賢明な相談役がい

たので、仕事はけっして不愉快ではなかった。その仕事がすっかり片づくと、古くからの慣習で決められた儀式や式典に出席するほか、すすんでやらねばならない仕事はなかった。土地は健康によく地味も肥え、病も貧苦も知らなかった。島民は善良で、法を破る者はなかった。安芸之助は、さらに二十年間、莱州にとどまって治めた——前後二十三年滞在したのだが、その間、彼の生活には、悲しみの影ひとつ、射すことがなかった。

しかし、治政の二十四年目に、大きな不幸がふりかかった。それは、七人の子供——五人の男と二人の娘——を生んだ彼の妻が、病にかかって亡くなったのである。彼女は盛大に、鄱菱江（はんりょうこう）の美しい丘の頂に葬られた。そして、すばらしく立派な碑が、墓の上に建てられた。が、安芸之助は、彼女の死を悲しむあまり、もう生きていたいと思わなくなった。

こうして、所定の服喪の期間が過ぎると、常世の宮殿から、莱州へ国王の使者がやって来た。使者は安芸之助に、くやみの言葉を伝えたあと、こういった。

「わが常世の国王（きみ）が、あなたへ伝えるように申されるのは、『いま、そなたをお郷里（くに）へお帰ししよう。七人の子供たちは、みな国王の孫であるから、よきに計らうであろう。したがって、彼らのことについては、思い煩（わずら）うことはない』とのことであります」

この命をうけて、安芸之助は素直に出発の用意をした。いっさいの仕事を片づけ、顧問や信頼している役人たちに別れを告げる式がおわると、礼をもって港まで送られた。そこで彼は迎えの船に乗った。船は青空のもと、青海原へ乗り出した。そして莱州の島影も青くなり、それから灰

色になり、やがて永久に消えた。……と、いきなり安芸之助は目をさました――自分の家の庭の、杉の木かげにいたのである！

しばらく、彼はぼんやりと目がくらんだようになっていた。しかし見ると、二人の友人はまだそばに坐って――酒を飲みながら楽しげに話をしている。とまどったように彼は、二人の顔をじっと見つめて、大声で叫んだ。

「不思議だなあ！」

「安芸之助どのは、夢を見たのにちがいない」一人が、笑いながらいった。「安芸之助どの、不思議だなどと、どんなものをごらんになられたか」

そこで安芸之助は、自分の見た夢を――常世の国の莱州に、二十三年とどまった夢を――語った。すると二人は、実際に彼が眠ったのはほんのわずかであったから、びっくりした。

一人の郷士がいった。

「なるほど、不思議なものを見ましたな。われわれも、貴公が眠っているあいだに、不思議なものを見た。小さい黄いろい蝶が一羽、貴公の顔の上を、しばらくひらひら舞っていたのだ。われわれは、それを見ていた。すると、貴公のすぐそばの、木の近くの地面に舞い下りた。そこへ舞い下りるが早いか、大きな、大きな蟻が穴から出てきて、蝶をとらえると、穴へ引きずり込んだ。ちょうど貴公が目をさます直前に、見ていると、さっきの蝶がまた穴から出てきて、前と同じように貴公の顔の上をひらひら飛んでいた。しかし、それが急に消えた。どこへ行ったのか分らないのだ」

「おおかた、それは安芸之助どのの魂だったのだろう」もう一人の郷士がいった、「たしかに、わたしは、それが安芸之助どのの口のなかへはいるのを見たような気がする……しかし、たとえその蝶が、安芸之助どのの魂だったとしたところで、それだけでは夢の説明にはならない」

「蟻なら、それが解けるかもしれない」と、最初の郷士がいった。「蟻は奇妙なやつだ――あるいは魔性(ましょう)かもしれない……とにかく、あの杉の木の下に、大きな蟻の巣があるのだ」

「見てみよう！」と安芸之助は、この思いつきに大きく心を動かされて叫んだ。それから、鍬(くわ)を取りに行った。

杉の木のまわりや下の地面は、まったく驚くほどおびただしい蟻の群れによって、掘り抜かれていた。蟻はさらに、その中にいろいろほら穴を掘っていた。そして、わらや、粘土や、茎などでできたその小さな城塞(じょうさい)は、どこか妙に小型の街に似ていた。ほかのものより一段と大きい建物の中央には、黄いろい羽根と長い黒い頭をした、一匹の非常に大きな蟻のからだのまわりに、驚くほどたくさん、小さな蟻がうようよ群がっていた。

「ああ、あの夢の国王がいる！」と、安芸之助が叫んだ、「常世の宮殿もある！……これは不思議だ！……萊州はどこか、その西南の方にあるはずだ――あの大きな根の左に。……そうだ！――ここだ！……まったく不思議だな！　ではきっと、鄱菱江の丘も、王女の墓も、見つかるぞ」

こわれた巣の中を、彼は一生懸命さがして、とうとう小さな丘を見つけ出したが、その丘の頂

には、石塔のような形をした、水ですりへった小石がくっついていた。その下に、彼は——土に埋もれた——一匹の雌蟻の死骸を見つけた。

力ばか

彼の名は「りき」といったが、これは力の強さを意味する。が、世間では、力ばかと呼ばれていた——なぜなら、生れつき、いつまでも子供だったからである。同じ理由で、人びとは彼に親切であった——マッチを燃やして蚊帳に火をつけ、家を一軒焼き、その炎を見て、喜びのあまり手をたたいた時でさえも。十六歳で、背の高い、頑丈な若者になった。が、心は、いつも幸福な二歳のままで、したがっていつまでも、ごく小さな子供たちと遊びつづけていた。四歳から七歳までの、近所のもっと大きな子供たちは、彼が自分たちの歌や遊びをおぼえられないので、いっしょに遊びたがらなかった。彼の好きな遊び道具は、箒の柄で、それをいつも木馬にしていた。そして何時間もつづけて、その箒の柄にまたがり、びっくりするほど大きな笑い声をたてながら、わたしの家の前の坂を、上ったり下りたりしていた。しかし、とうとう、この声がうるさくなってきた。そこでわたしは、どこかほかへ行って遊ぶように、注意せざるをえなかった。彼は、すなおに頭を下げて、それから——悲しそうに箒の柄をひきずりながら——立ち去った。いつもおとなしく、火遊びする機会さえあたえなければ、まったく害はないので、だれにも苦情をいわれる理由はなかった。彼と、われわれの町の日常生活とのかかわり合いは、犬や鶏のそれとはとんど変りがなかった。それで、とうとう彼の姿が見えなくなったときも、わたしは別に何ということ

もなかった。何カ月かたってから、わたしはふとしたことで、力のことを思い出した。
「力はどうしたのだろう？」わたしはそこで、近くへ薪をもってくる老人の木樵(きこり)に訊(たず)ねた。力がしばしば、この老人の薪の束を運ぶ手伝いをしていたことを思い出したからである。
「力ばかですか？」と、老人は答えた。「ああ、力は死にました——かわいそうに！……ええ、死んで、かれこれ一年になりましょうか、まったく急なことでした。医者たちは、ある脳の病だと申しました。さて、その力について、妙な話があるのです。
力が死にましたとき、母親があれの左のてのひらに、『力ばか』と、名を書いたのです——『力』は漢字で、『ばか』は平仮名で。そして、何度も——もっと幸せな身に生れかわってくるようにと——祈りました。
ところが、三カ月ほどまえに、麴町(こうじまち)の、何某(なにがし)さまのお屋敷に、左のてのひらに文字の書いてある坊ちゃんが生れたのです。文字ははっきり——『力ばか』と——読めました。
そこで、そのお屋敷の人たちは、これはだれかのご利益(りやく)で生れてきたものにちがいないと思いました。そして、方々を訊ねまわったのです。とうとう、一人の八百屋が、牛込(うしごめ)に、『力ばか』という、少し足りない子供がいて、去年の秋に亡くなったことを知らせました。そこで二人の下男をやって、力の母親を探させたのです。
下男たちが、力の母親を見つけ出して、事の次第を話してやりました。母親はたいそうよろこびました——なにしろ、その何某さまの家は大金持で有名だったからです。しかし、下男たちは、何某さまのお屋敷では、子供の手に『ばか』という字が書いてあるので、ひどくお腹立ちである

といいました。『で、その力さんのお墓はどこかね』下男たちは訊ねました。『善導寺の墓地に埋めてあります』母親は教えてやりました。『どうか、その墓土をすこし分けてくれませんか』彼らはそう頼みました。

そこで母親は、いっしょに善導寺へ行って、力の墓を教えたのです。下男たちは、墓土をすこし、風呂敷につつんで持って帰りました。力の母親には、いくらか金を——十円ばかり——つつんでやりました」

「しかし、そんな土でなにをするのかね」わたしは訊ねた。

「ええ」老人は答えた、「そんな名前を、手にくっつけたまま、子供を大きくさせるわけにはまいりませんでしょう。子供のからだに、そんなふうにくっついている文字を消すためには、こういう方法しかないのです——前世のからだを埋めてある墓からとってきた土で、膚をこすってやるしか」

『天の川物語その他』

鏡の乙女

足利将軍の御代、南伊勢の、大河内明神の神殿が腐朽した。ところが、土地の大名、北畠公は、戦乱その他の事情のため、神殿の修復をはかることができなかった。そこで、神官をつとめる松村兵庫は、将軍家に信望のあることで知られている、大大名の細川公の助力を求めに、京都へのぼった。細川公は、この神官をねんごろにむかえて、大河内明神の現状について、将軍に言上しようと約束した。しかし、とにかく、神殿修復の許可は、しかるべき調査なくしてはあたえられまいから、かなり日数を要しようといった。で、一件が落着するまで、都にとどまってはどうかと、松村にすすめた。松村はそこで、家族を京都へ連れてきて、昔の京極のあたりに家を一軒借りた。

この家は、りっぱで広々としていたが、長いあいだ、住み手がなかった。なんでも、不吉な家であるとのことであった。その東北側に、井戸が一つあった。これまで借家人が何人か、これという理由もなしに、身を投じたというのである。しかし松村は、神職の身であったから、怨霊など、すこしも恐れなかった。やがてこの新居で、たいへん気持よく暮していた。

その年の夏は、ひどい日照りがつづいた。何カ月も、五畿内*に雨は一滴も降らなかった。川床は干上がり、井戸は涸れた。都でさえ、水飢饉になった。しかし、松村の家の庭の井戸は、水は

あふれるばかりであった。そして、その水は――冷たく清らかで、かすかに青味を帯びており――泉から流れ込んでいるように思われた。暑い季節のあいだ、都の諸方から水を求めて多くの人がやってきた。松村は、欲しいだけいくらでも、人に水を汲ませてやった。にもかかわらず、水はいっこう減るようにも思われなかった。

しかし、ある朝、付近の家からいつも水を汲みにきていた、若い下男の死体が井戸に浮んでいた。身投げの原因など、考えられなかった。松村は、井戸にまつわるいろいろいやな話を思い出し、なにか目に見えぬ怨霊でもいるのではないかと思いはじめた。彼は、まわりに垣をかこうつもりで、井戸を調べに行った。すると、ひとりでそこに立っているうちに、なにか生き物でもいるかのように、いきなり水が大きく動いたので驚いた。動きはすぐに消えた。すると、静かな水面にはっきりと、見たところ十九か二十ぐらいの、若い女のすがたがあらわれた。女は、化粧に余念ないようであった。唇に紅をさしているのがはっきり見られた。最初は、横顔しか見えなかった。が、しばらくすると、彼のほうへ顔をむけて、にっこり笑った。刹那、心に異様なときめきをおぼえ、酒に酔ったように、目まいを感じ、いっさいが暗闇になり、ただ女の笑顔だけが――月光のように白く美しく、そして、さらにますます美しさを加えて、下へ下へと――暗黒のなかへ――彼をひきずり込もうとするかのように思われた。しかし、必死になって、彼は意志をとりもどし、目をつむった。ふたたび目をあけると、女の顔は消え、明りはもどり、井戸の縁にかぶさるように身を乗り出していた。あの目まいが、もうちょっと続いていたら――もうちょっと、あの目まいをおこすような誘惑が続いたとしたら――二度と陽の目を見ることはなかったろ

う。

家にもどると、どんなことがあっても井戸には近寄らぬよう、だれにも井戸からは水を汲ませぬように、彼は家人に命じた。そしてあくる日、井戸のまわりに、頑丈な垣を作らせた。

垣ができてから一週間ばかりしたころ、長い日照りも、風と電光と雷鳴をともなった、烈しい暴風雨でおわった――雷鳴は、まるで地震に襲われたかのように、その轟音で町全体を震わせるほどすさまじかった。三日三晩、どしゃ降りと電光と雷鳴がつづいた。鴨川は、かつてないほどに水を増し、多くの橋を流し去った。その、あらしの三日目の夜、丑の刻に、神官の住まいの戸を叩く音とともに、案内を乞う女の声が聞えた。しかし松村は、井戸で遇った出来事から用心をして、召使たちに、その声に応じてはならぬと命じた。彼はみずから入口へ行って訊ねた。

「お呼びは、どなたか?」

女の声が答えた。

「ごめんください! わたしでございます――弥生でございます!……松村さまに、申し上げたいことがございます――大切なことです。どうか、開けてくださいまし!」

松村は、非常に用心深く、戸を半分開けた。すると、井戸の中から微笑みかけた、あの美しい顔があった。しかし、今度は微笑はしていない。ひどく物悲しげであった。

「家の中へ入ってはならぬぞ」神官は叫んだ、「お前は人間ではない、井戸の化生だ。……なぜ、性懲りもなく、人をだまして、殺そうとするのか」

井戸の化生は、玉をころがすような美しい声で答えた。

「わたしの申し上げたいのも、そのことについてでございます。……わたしは、けっして人を傷つけようとは思っておりません。しかし、あの井戸には、大昔から、毒龍が棲んでいるのです。それが、井戸の主*でした。それのために、井戸の水はいつも、いっぱいなのです。ずっと以前に、わたしは、あの水の中へ落ち、そのため、そいつに仕えるようになりました。そいつは、人間の生き血を飲みたいばかりに、わたしに人間をおびき寄せて殺させるのです。でも、今度は、天の大神さまに、信州の鳥井の池という大きな池に棲むように、龍は命じられました。そして神々さまは、二度とこの都に帰らせてはならぬとお決めになりました。そこで今夜、悪龍が出て行きましたあと、お力添えをお願いに、出てまいったわけでございます。悪龍が退去いたしましたので、井戸には、もう水はほとんどございません。それで、命じてさがさせてくだされば、わたしのからだが見つかることでございましょう。どうか、さっそく、わたしのからだを井戸からお救いくださいませ。きっとご恩返しをさせていただきますから」

こういって、女は闇のなかへ消えた。

夜明けまえに、あらしは去った。太陽がのぼると、澄んだ青空には、雲影ひとつ残っていなかった。松村は、朝早く、井戸替え人夫を呼んで、井戸をさらえさせた。すると、だれもが驚いたことに、井戸はほとんど涸れていた。井戸替えは容易であった。そして井戸の底から、きわめて古風な髪飾りのようなものと、めずらしい形をした金属製の鏡が出てきた――が、からだは、獣

も人間のものも、痕跡すらなかった。

しかしながら、松村は、この鏡がなにか秘密を解く手がかりになるのではないかと考えた。というのは、そうした鏡は、みずから魂をもった、不思議なものであり——しかも、鏡の精は、女性だったからである。この鏡は、よほど古いものらしく、ひどく錆びついていた。が、神官の命で、たんねんに磨きあげてみると、まれにみる高価な細工物であることがわかった。鏡の裏にはすばらしい模様が——文字もいくつか——みられた。なかには、判読できなくなった文字もあった。が、日付の一部と、「三月三日」という意味の表意文字は、まだ読みとることができた。ところで、三月は、むかしは「弥生」（「いや生い」の意）といわれていた。そして、祭りの日である三月三日は、いまも「弥生の節句」と呼ばれている。あの井戸の化生が「弥生」と名のったことを思い出して、松村は、自分を訪ねてきた霊こそ、この鏡の精にほかならぬと確信したのである。

彼はそこで、「人の霊」にたいするのと同じ敬意をもって、その鏡を取り扱おうと決心した。それをていねいに磨きなおさせ銀をふたたびかぶせてから、高価な木でそれを収める箱を作らせ、家の中にそれをしまっておく特別の部屋をととのえた。その部屋へ、それをうやうやしく蔵った。その日の夕方、神官がひとり書院にすわっていると、思いがけなく、弥生がその前へ姿をあらわした。以前よりはもっと美しくなったように思えた。が、その明るい美しさは、純白の雲をとおして輝く夏の月の光のように快いものであった。松村に深々とお辞儀をしてから、彼女は玉をころがすような美しい声でいった。

「あの淋しい悲しい身から、わたしをお救いいただきましたので、お礼を申し上げに参りました。

……お察しのとおり、実は、わたしは鏡の精なのでございます。わたしが初めて百済(くだら)から、こちらへ連れてこられたのは、斉明(さいめい)天皇の御代でございました。そして、嵯峨(さが)天皇の頃まで、御所に住んでおりましたが、そのとき帝(みかど)は、内裏(だいり)の加茂(かも)内親王にわたしをお授けになられました。*その後、藤原家の家宝になり、代々うけつがれてまいりましたが、保元(ほうげん)の世に、あの井戸の底へ落されたのです。数年にわたる大戦乱のあいだ、わたしは打ち捨てられ忘れ去られていました。*井戸の主(ぬし)は、もとはこのあたり一帯にありました大きな池に棲んでいた毒龍でございました。その池がお上(かみ)の命令で、あとへ家を建てるために埋められてから、龍はあの井戸をわがものにしたのです。そして、わたしは井戸に落ちてから、それに仕える身になりました。多くの人びとを誘い込んでは殺す仕事を手伝わされたのです。けれども、神々さまは、龍を永久に追放されました。そこで、ひとつお願いがございます。わたしのもとの主人と血縁のある、将軍家の義政公へ、わたしを献上していただけないでしょうか。この最後のご好意をたまわりますなら、きっとよいご運が向いてまいります。が、危険もお知らせしなければなりません。この家には、明日以後、いらっしゃってはいけません。きっとこわれますから」そう警告をあたえると、弥生は姿を消した。

松村は、この警告によって大いに助かった。あくる日、彼は家族の者と道具を別の場所へ移した。すると、ほとんどその直後に、またもや、この前よりはもっと烈しいあらしが起って、大水になり、彼の住んでいた家は押し流された。

その後しばらくして松村は、細川公の好意によって、将軍義政公に拝謁することができ、鏡に、

その不思議な来歴を書きつけたものを添えて、献上した。すると、鏡の精の予言したとおりのことが実現した。この珍しい贈物をことのほか喜ばれた将軍が、松村へ高価な礼物をあたえたばかりでなく、大河内明神の神殿再建に、莫大な黄金を寄進されたからである。

『知られぬ日本の面影』

弘法大師の書

一

弘法大師は、仏僧中、最高の聖（ひじり）で、真言宗——晃（あきら）もこの宗派である——の開祖、しかも日本の人びとに平仮名とよばれる書体と、いろは文字を書くことを、最初に教えた人である。弘法大師自身、きわめてすぐれた文章家であり、また、書家としても天才的な能筆で知られた。

そして、『弘法大師一代記』という本にのっている話によれば、彼が中国にいたころ、帝（みかど）の宮殿のある部屋の名が、古くなってだんだん薄れてきたので、帝は彼を召して、新たに名を書くように命じた。そこで、弘法大師は、右手に筆を一本、左手にも一本、左足の指のあいだに一本、右足の指のあいだにも一本、それから口にも一本くわえた。五本の筆を、このように保ちながら、壁に文字を書いた。その文字は——川の流れに立つさざなみのようになめらかで——かつて中国でも見られぬほどの美しさであった。弘法大師はそれから、一本の筆をとって、遠くから壁へ墨汁をはねとばした。すると墨汁は、落ちるにつれて、美しい文字になった。そこで帝は、弘法大師に五筆和尚の名を授けられた。

またあるとき、大師が、京都に近い高雄山（たかおさん）に住んでいたころ、天子は弘法大師に金剛上寺（こんごうじょうじ）とい

う大伽藍(だいがらん)の扁額(へんがく)を書かせようと思われ、それに書かせるため、使者に扁額をもたせて、弘法大師のもとへ遣わされた。しかし勅使が、扁額をささげて、弘法大師の住んでいるあたりへ近づくと、前面の川が雨で異常にあふれて、だれも渡ることができなかった。しかし、やがて弘法大師が向う岸にあらわれ、勅使から天子の望んでおられることを聞くと、彼は扁額を高くかかげるように呼びかけた。勅使はそれにしたがった。すると弘法大師は、向う岸に立ったまま、筆で文字を書く仕草をした。たちまち、それらの文字は、勅使のかかげている扁額の上にあらわれた。

二

さて、そのころ、弘法大師はひとり川べで瞑想するのを常としていた。ある日のこと、いつものように瞑想していると、一人の少年が前に立って、じっと彼を見つめているのに気づいた。少年の衣服は貧しい人びとの着るものであった。が、顔は美しい。弘法大師が訝(いぶか)しんでいると、少年が、「あなたは、同時に五本の筆で字を書くという『五筆和尚』の名で知られている弘法大師ですか」と訊ねた。弘法大師は、「その通りである」と答えた。すると、少年が、「もしそれなら、どうか、天に字を書いてみせてくださらぬか」といった。そこで弘法大師は、立ち上がって、筆をとり、天にむかって、まるで字を書くような仕草をした。たちまち上天に、非常に美しい文字がつぎつぎと、あらわれた。すると少年が、「今度は、わたしがやってみよう」といった。そういって彼も、弘法大師がしたように、天に文字を書いた。それからまた、彼は弘法大師にむかって、「どうかわたしのために——川の上へ、書いてくださらぬか」といった。すると弘法大師は、

水面に、水をたたえる歌を書いた。しばらく文字は、流れの面に、木の葉が散ったように、美しく残っていた。が、やがて水とともに動き、流れ去った。「今度は、わたしがやってみよう」と、少年がいった。そして、草書で、龍という字を水面に書いた。文字は、流れの面にとどまったまま、動かなかった。しかし、弘法大師が見ると、その字に必要な小さな点が、わきへ打っていない。そこで少年に、「なぜ、点を打たないのか」と訊ねた。「あ、忘れていた！」と、少年が答える、「どうぞ、わたしのために、点を打ってください」それで弘法大師は点を打った。すると、どうしたことか！　龍の字が、一匹の龍になった。そして龍は、水中ではげしく動いた。天は雷雲で昏み、電光が刺し貫いた。龍は一陣のつむじ風とともに天にのぼって行った。

そこで、弘法大師は少年に訊ねた、「そなたは、だれじゃ」すると少年が答えた、「わたしは、呉台山に祀られている者。知恵の王――文珠菩薩である！」こう語っているうちに、少年は変化してきた。その美しい面立ちは、神々しいばかりにかがやき、四肢はいたるところ、柔らかい光を発した。そして、微笑をふくみつつ、天空にのぼり、雲の外に消えた。

三

ところが、その弘法大師自身、かつて御所の應天門の名を書いた扁額に、「應」の字に点を打つのを忘れたことがあった。京の天子が、その字に点を打たないわけをお訊ねになると、弘法大師は、「忘れました。が、すぐ点を打ちましょう」と答えた。そこで天子は、梯子を持ってくるように命じた。額はすでに、門の上に高くかかげられていたからである。しかし弘法大師は、門

前の敷石の上に立ったまま、無造作に額にむかって筆を投げつけた。すると投げつけられた筆は、みごとにそこに点を打って、手にもどってきた。

弘法大師はまた、京の御所の光華門の額を書いた。ところが、その門の近くに、紀百枝という男が住んでいた。そして、弘法大師の書いた文字をあざけって、その一字を指さし、「なんだ、ふんぞり返っている相撲とりみたいだな！」といった。しかしその夜、百枝の夢に、相撲とりがあらわれ、枕もとに立つと、彼におどりかかり、げんこつでなぐりつづけた。その痛さのあまり泣きだし、目をさまして見ると、相撲とりは空中にのぼって、百枝がさきほど嗤った文字のかたちに変り、門の額へもどって行った。

また、小野道風という、非常に筆のたつ書家がいたが、弘法大師の書いた秋鶴門の額の文字を嗤った。そして、秋の字を指さして、「まるで、あの秋の字は米の字のように見える」といった。するとその晩、夢に、あの嗤った文字が、人のすがたになってあらわれた。そいつは、襲いかかって彼を打ちすえ、何度も——ちょうど米搗きが米をつく杵を動かすために跳び上がったり跳び下りたりするように——彼の顔に飛びつきながら、「こら！　わしは弘法大師の使いであるぞよ！」といいつづけた。そして、目をさまして見ると、まるでひどく踏みつけられた人のように、傷つき、血が流れていた。

弘法大師の歿後かなりたってから、大師の書いた御所の二つの門——美福門と光華門——の扁額の字が、歳月とともにかなり薄くなってきた。天子は、行成という大納言に、額の修復を命じられた。しかし行成は、他の人たちの身にふりかかったことから、勅命にそのまましたがうこと

を恐れた。そして、弘法大師の逆鱗を気づかい、供物をささげ、なにか許しの証拠を祈り求めた。すると、その夜、夢に弘法大師があらわれ、やさしく微笑みつつ、「帝の望まれるとおりに行うがよい、なんら恐れることはない」といった。そこで、彼は、寛弘四年の一月に、額を修復した、と『本朝文集』に記されている。

これらのことはみな、友人の晃がわたしに話してくれたことである。

心　中

一

時には彼らは、たんに抱き合ったまま、急行列車のくる直前に、レールの上に横たわることがある（しかし出雲では、まだ鉄道が敷かれていないから、これはできない相談であろう）。時には、二人だけで小宴を張り、両親や友人たちにあてて、きわめて奇妙な手紙を書き、酒になにか苦いものを混ぜて、永遠の眠りにつく。時には、もっと古めかしい、もっと名誉ある手段を選ぶ者もある。まず、男が短刀の一突きで恋人を殺し、その後、みずから喉を刺すのだ。時には女の長い縮緬の腰帯で、向い合ったまま、しっかり二人のからだを縛りつけ、抱き合って深い湖や川にとび込む。ショーペンハウエル*が驚くべき理論を展開している、あの世界とともに古い悲哀に苦しめられるとき、人びとの「冥土」におもむく道もまたさまざまである。

彼ら自身の理論はもっと単純なものである。

日本人ほど、生を愛する者はいない。死を恐れぬ者はいない。来世について、彼らはなにも恐れない。彼らはこの世を、美と幸福の世界であると思うがゆえに、去るのを悲しむのである。しかし、西欧人の心を長く圧迫しつづけている、来世への不可解に対しては、彼らはあまり関心が

ない。いま、わたしが述べようとしている若い恋人たちも、妙な信仰を持っていて、それが自分たちの不可解をぬぐい取ってくれる。彼らは無限の信頼をいだいて、暗黒にむかう。もしも、生に耐えられぬほど不幸であるなら、罪は他の人びとでもなく、世間でもない。彼ら自身にある。それは因縁、すなわち前世の罪の結果なのである。この世でどうしても結ばれることができないのは、前世で結婚する約束を破ったか、でなければ、残酷な仕打ちを相手に加えたためにほかならない。こうした考えは必ずしも異端とはいえない。しかし、同時に彼らは、仏教で自殺は大罪とされているにもかかわらず、いっしょに死ぬことによって、来世で結ばれるものと信じている。ところで、こういう死によって結ばれるという考えは、釈迦の信仰よりはるかに古いのである。しかし、なぜか近代においてそれは、仏教から一種独特な法悦に近い色合い、神秘な幸福感を借りている。「蓮の花の上において待たん」。極楽の蓮の花に仲よく身を託そうというのである。仏教の教えによれば、何兆年ものあいだ魂は無限の転生を重ね、無限の達識、無限の記憶を得て、白雲が夏の蒼天に溶けるように、涅槃の至福にはいる。しかし、これらの苦しんでいる人たちは涅槃のことを決して考えない。彼らの至上の願望である愛の結合は、ただ一度の死の苦痛をとおして達成されると、彼らは空想する。なるほど、彼らの空想は――あわれな手紙がしめすように――必ずしも同一ではない。ある者は、阿弥陀の光明にみちた極楽浄土に入るつもりでいる。また、幻想的な希望のもとに、愛する者たちがいきいきした新しい青春の歓喜のうちに再会する先の世、未来の再生を見ている者もある。多くの者、実際、大多数の者の考えは、もっと漠然としている――はかない夢の幸福のように、おぼろげな静寂の中を共に影のように漂って行くにすぎ

ないのである。

彼らはつねに、いっしょに葬られることをねがっている。この願いは、しばしば親や保護者たちから拒否される。世間はこの拒否を残酷なものと考えている。なぜなら、互いに愛し合って死んだ人たちは、同じ墓に葬られないなら、成仏できないと信じられているからである。しかし、願いがゆるされると、葬儀は美しく感動的なものになる。二つの家から二つの葬列が出発して、提燈(ちょうちん)のあかりのもとに、寺の境内に相会する。そこで、読経や、昔ながらの印象的な儀式のあと、導師は死者の霊にあいさつを述べる。心から、彼はその過ちと罪について語る。犠牲になった若い人たちが、春とともに花の開きたちまち散っていくかのごとく、生命の短く、美しかったことを語るのである。彼は、彼らにこのような行動をとらせるにいたった妄執(もうしゅう)――「迷い」――について語り、御仏(みほとけ)の教えを朗唱する。しかし、時には恋人たちが、来世のさらに幸福なより高い生涯において再び結ばれることを予言し、心からの雄弁をもって人びとの心情をゆさぶり、聞く者を涙させる。それから、二つの葬列は一つになり、すでに墓の掘られてある墓地へすすんで行く。二つの棺がいっしょに下ろされ、穴の底で共に接するように置かれる。すると、「山の者」*たちが、二人のあいだを隔てている板を取りのぞき――二つの棺を一つにする。再び結ばれた死者の上に土が盛られる。そして、彼らの薄幸の物語を刻んだ墓石が、おおかた小さな歌を添えて、彼らの遺骸の結ばれた墓の上に据えられるのである。

二

こうした恋人たちの自殺は、「情死」または「心中」と呼ばれ、いずれも「心の死」「情の死」「愛の死」を意味する。女の場合、よくそれは女郎階級に起きる。が、時には良家の子女のあいだにもみられる。女郎屋の抱える遊女のなかで、もし心中が一つ起きると、さらにきっともう二つ起きるという運命論めいた信仰がある。疑いもなく、そうした信仰そのものが原因になって、一般に三つ心中がつづいて起きるのである。

家族の窮乏のはて、すすんで苦界に身を売る哀れな娘たちは、日本の場合（おおかた、ヨーロッパの悪徳と残忍とが風俗を乱す力となっている開港地をのぞいて）、西洋の女たちほど淪落の淵に沈んではいない。実際に多くの者は、恐るべき隷従の期間を通じて、そうした境遇のもとにあっては、哀れとも異常とも思われる、洗練された物腰、優雅な情緒、自然な慎みを失わないのである。

つい昨日のこと、一つの心中事件がこの静かなまちを驚かした。灘町のある医者の下男が、夜の明けたあとしばらくして、主人の息子の部屋に入ってみると、若者が娘を抱いて死んでいるのを発見した。息子はすでに廃嫡されていた。娘は女郎であった。昨夜、彼らは葬られたのだが、いっしょではなかった。父親が、そうした事件のあったことを悲しむと同時に、立腹したからである。

娘の名は、かねといった。ひときわ美しく、また非常にやさしかった。そして、だれの話からも、彼女の主人はそうした日陰商売にはめずらしいほど親切に彼女を取り扱っていたらしい。彼女は、母親と幼い妹のために身を売った。父親が死んで、いっさいを失った。十七歳の時である。女郎屋に来て一年とたたぬうちに、その青年と出会った。たちまち二人は、激しい恋におちいった。二人の身にとって、これ以上恐るべきことはありえなかったに相違ない。とうてい夫婦になれる見込みはなかったからである。青年は、まだ息子として特権はもっていたが、もっと生まじめな義弟のために、すでに廃嫡されていた。不幸な二人は、逢瀬を重ねるために、持ち金をすべて使いはたした。女は代金として自分の衣裳をさえ売りはらった。とうとう最後に、二人は夜半おそく、ひそかに医師の家で会い、毒を飲み、永遠の眠りについたのであった。

わたしは、娘の葬列が提燈のあかりに——かすかな燐光のような青白い光に——導かれて寺町のほうへ進んで行き、白い頭巾をかぶり、白い衣裳をつけ、白い帯をしめた女たちの長い列が——亡者の一群のように——声もなくつづくのを見た。

このように、仏教の地獄図絵では、冥土への暗黒の中を、白い亡者たちが——霊魂の果てしない行列が——飛んで行くのである。

三

この哀れな物語の一部始終は、明日の『山陰新聞』に出ることだろうが、わたしの友人である新聞記者君は、すでに同情を寄せる人たちが、花と樒で新しく作られた墓を飾っているという。

そして、縦長の日本特有の封筒から、美しい日本の文字を書きつらねた、軽くて薄い、長い巻き紙を取り出し、それをわたしの前にひろげながら、さらに言葉をつづけた。

「彼女はこの手紙を、住んでいた楼主に残しました。しかしわたしには、うまく翻訳できそうもありません。それを発表するためにもらい受けてきたのです。まことに立派に書かれてあります。女ことばで書かれた手紙は、男ことばで書かれたものとは違い女ことばで書いてあるからです。女ことばは、わらわというだけでなく、女独特のことばや言い回しを使うからです。たとえば、男は、地位や状況に応じて、自分のことを、わたくし、われ、余、ぼくなどと使い分けますが、女ことばでは、わらわというだけです。それに、女ことばは、非常にやわらかく、やさしいのです。そうしたやわらかでやさしいことばを、他の国語に移すことなど、できそうにも思えません。だからわたしは、手紙の大意をお伝えするだけです」

そして、彼はゆっくりと、つぎのように訳した。

「置き文を残します。

ご存じのように、春よりこのかた、わらわは田代さまをお慕い申しておりました。田代さまもまた、わらわを憎からず思し召されてこられました。ところが、ああ！——前世の因果のため——先の世に交わした夫婦の約束が果されぬゆえ——今日、冥土に旅立たねばならなくなりました。

こんなふつつかなわらわに対し、かげひなたなく、親切にお取り扱いいただいたばかりか、母や妹のためにもいろいろお力添えいただきました。わらわをいつくしみくださったご恩の——海

山にひとしい大恩の、万分の一もお返し申すこともできず、大罪人とお憎みいただいても、まことに無理からぬことと存じ上げます。

しかし、非道の愚行とはわきまえつつも、腹蔵なきところ、やむをえない仕儀でございます。どうか、これまでのかずかずの過ちをお許しくださいませ。冥土にまいりましても、海山のように大きな――ご恩は決して忘れはいたしません。草葉の陰よりお礼申し上げ――ご主人さまおよびお家のご繁栄を念じております。どうかかえすがえすも、お許したまわんことを。

書きたいことはつらつらございます。が、いまは、心はここになく、急がねばなりませぬ。それでは筆を置かしていただきとう存じます。乱筆ごめんくだされたく　かしこ

かね

――さま」

「で、これはまことに典型的な心中の手紙です」友人は、しばらく沈黙していたあと、いまにも裂けそうな白い紙を封筒におさめながら、注釈を加えた。「それで、あなたに興味があると思ったのです。もう、暗くなってまいりましたが、墓のあたりがどうなっているのか、墓地へ行ってみようと思います。ごいっしょに、まいりませんか」

われわれは、長い白い橋をわたって、薄暗い寺町を通り、妙興寺の古い墓地のほうへ向った――そして、歩いているうちに、だんだん暗くなってきた。細い月が、大きな寺の屋根の真上にかかっている。

突然、遠くから、朗々と響く美しい声が——男の声が——星月夜の下にうたいだした。小鳥のさえずりのように、妙な魅力と抑揚——小鳥の歌から学んだように思われる、あの民衆感情をあらわす日本特有の抑揚——にとんだ歌声が。だれか幸福な職人が、家へ帰る道すがらうたいだしたものであろう。冴えた冷気の中を、歌の節々がわたしたちのほうにひびいてくる。が、わたしには、その意味はわからない。

指して行けとや、あの家を指して、
行けば近寄る主のそば。

「あれは何だろう」わたしは友人に訊ねる。
彼は答える、「恋の歌です」

日本人の微笑

一

世界とその驚異についてのいろいろな知識を、主に小説や物語から得ている人たちは、まだ、東洋が西洋よりも生まじめだという、あいまいな考えに溺れこんでいる。もっと高い見地からものごとを判断する人たちは、逆に現状から、西洋のほうが東洋よりも生まじめだと主張している。それに、重々しいとか、また、その反対に近いとかいったところで、たんに一つの流儀にすぎないのではないかともいう。しかし実のところ、この問題にかぎらず、他の問題でも、人類のどちらの半数にも通用する規準など、正しく作れるはずはないのだ。そうした問題の生じてくる非常に複雑な原因を、じゅうぶんに解明したいという希望は別にしても、さしあたりわれわれは、科学的に、ざっといくつかの相違を比較検討していくしかなかろう。そうした相違のなかで、とくに興味深いものを、イギリス人と日本人は提供している。

イギリス人は生まじめな国民である――それも、表面だけのまじめさではなく、民族性の根底にいたるまでずっと生まじめであることは、だれもが認めている。これに対して、日本人は、イギリス人よりはるかにまじめさに欠ける民族とくらべても、表面はおろか、おお根において、あ

まり生まじめでないといって、おそらくさしつかえあるまい。そして、少なくとも、まじめさに欠ける分だけ、幸福なのである。たぶん、文明世界の中で、一番幸福な国民であろう。われわれ西欧の生まじめな民族は、とても自分たちのことを幸福だなどとはいえない。実際、われわれは、いったいどの程度まじめなのか、自分たちでもよく分っていないのである。ますます増大する産業社会の圧力のもとに、いったいどれだけ生まじめになるものか、おそらく、それを知ったら驚倒してしまうのではないか。あるいは、われわれ自身の気質を一番よく知るには、われわれほどくそまじめでない国民のあいだに、長期間、身をおいてみることかもしれない。こうした信念は、ほぼ三年間、日本のいろんな地方に生活したあと、二、三日の間、開港地の神戸でイギリス風の生活にもどったとき、いっそう強められた。イギリス人によって話される英語をふたたび耳にして、わたしは思いがけぬほど感動した。が、こうした感情も、ほんのわずかしか続かなかった。目的は、必要な買物をすることだったのである。連れは日本人の友人だったが、彼にとって外国人の生活はすべて新奇なものにみえたらしく、こんな妙な質問を発した。「外国の人は、どうして笑わないのですか。あなたが、あの人たちに話しかけるときは、笑って頭を下げます。でも、あの人たちは、にこりともしません。どうしてでしょうか？」

実のところ、わたしはすでに日本の風俗や慣習にどっぷり浸かっていて、西欧風の生活からすっかり離れていた。それでこの友人に質問されて、はじめて自分の振舞いの多少奇妙なことに気づかされたのである。同時にこのことが、二つの民族のあいだの相互理解がいかに困難なことか、それのよい例証となるように思われた――つまり、相手の習慣や動機を、つい自分たちのそれら

で評価しがちであるが、それもとかく、思い違いしがちであるということである。もしも、日本人がイギリス人の重々しさに当惑するとすれば、少なくとも、イギリス人のほうも、日本人の軽さに当惑しているのである。日本人は、外国人の「怒った顔」についていう。外国人は日本人の微笑について、ひどく軽蔑したことをいう。ふまじめではないかと思うのである。実際、そうでなければなんだ、と言いきっている者さえある。ただ、ほんのわずかのもっと注意深い人たちだけが、その微笑を研究するに値する謎であることを認めているにすぎない。横浜にいるわたしの友人の一人が――たいへん愛すべき人物で、半生以上を東洋のいくつかの開港地で過した人だが――わたしが地方にむかって出発する直前、こんなことをいった。「君は、これから日本人の生活を研究するわけだから、たぶんなにか、ぼくのために教えてくれるだろう。ぼくには、どうしても日本人の微笑がわからないのだ。いろんな経験のなかから、一つだけいってみようか。ある日、ぼくが馬に乗って山の手から下りてくると、空の俥が一台、曲り角をぼくと同じ側へのぼってくるのだ。馬をとめようとしたって、間に合わないのさ。で、たいして危険でもないと思ったから、馬をとめようとしなかった。ただ、車夫に日本語で、道の向う側へ行け、と怒鳴りつけてやった。ところがそいつは、そうしないで、梶棒を道の中央へ向けて、俥を曲り角の低いほうの壁にもどしただけなのだ。ぼくは同じ調子で進んで行ったものだから、とても避けられたものじゃない。あっという間に、俥の梶棒の一つが、馬の肩にぶつかった。そいつは、怪我もしていない。馬を見ると血を流しているので、ぼくはカッとなって、そいつの頭を鞭の握りでなぐりつけてやった。男はぼくの顔をまっすぐ見ると、にっこり笑って、頭を下げるのだ。いまでも、その微笑を思い

浮べることができる。ぼくは打ちのめされたような気がした。微笑にすっかり面くらって——腹の立ったのも、いっぺんに消えてしまった。いや、なんともいんぎんな微笑だったな。が、どういう意味だったのだろう。いったい、なんであの男が笑ったのか。ぼくにはそれが分らんのだ」

その時は、わたしにも分らなかった。が、ずっと後になって、もっと不思議な微笑の意味も、わたしには分るようになった。日本人は、死を前にしても笑うことができるし、また、いつもそうしている。ところが、そういう時の微笑も、ほかの場合と理由はまったく同じなのである。その微笑には反抗も偽善もない。とかく性格の弱さに結びつけられる病的な諦めの微笑とも混同してはならない。それは入念に、長いあいだに洗練された、一つの作法なのである。それはまた、沈黙のことばでもある。しかし、西欧流の観相術の考えにしたがってそれを解釈しようと努力したところで、しょせん、漢字を、たとえ想像にもせよ、現実の物のかたちに似ているかどうかで解釈しようとするのと同様、成功はおぼつかないのである。

第一印象とは、がいして本能的なものだが、科学的にかなり信用できるものと認められている。そして、日本人の微笑から受ける第一印象も、この事実から遠く離れていない。外国人で、日本人の顔の特徴が、たいていうれしそうににこにこ笑っているのに気づかぬ者はない。この第一印象は、たいがい、すばらしく気持がよい。日本人の微笑は、まずうっとりさせる。それに対して疑いをいだくようになるのは、もっと後のことで、異常な出来事——苦痛や、恥辱や、失望に陥ったときなど——のさいにも、同じ微笑を浮べているのに気づくときである。時には、いかにも場所がらをわきまえないため、激しい怒りをまねくことさえある。実際、在留外人と日本人の使

用人とのあいだのいざこざの多くは、この微笑のためである。よい使用人は厳粛でなければならないというイギリス風の伝統を信じている人には、おそらく日本人「ボーイ」の微笑に、じっと耐えることはできまい。しかし、最近、西洋のこういう変った特殊な面も、だんだん日本人に認められるようになってきた。彼らは、英語を話す普通の外人が微笑することを嫌い、それを侮辱的に受けとりがちであることを理解しはじめている。そのため、開港地の日本人の使用人たちは、たいてい笑わなくなり、むっつりした態度をよそおっている。

ここでわたしは、ある横浜に住む外国婦人が、日本人の使用人の一人について語った奇妙な話を思い出す。「うちの日本人の家政婦が、先日、なにかたいへん楽しいことでもあったように、にこにこ笑いながらわたしのところへ来て、夫が死んだので、葬式に行かせてほしいというのです。わたしは、行っておいで、といいました。どうやら火葬にしたらしいのです。それで、夕方、家政婦は帰ってきて、遺骨のはいった壺を見せました(中に歯が一本見えました)。そして、『これが主人です』というのです。そういいながら、ほんとに笑っているのですよ！　こんないやらしい人間のこと、お聞きになりまして？」

この出来事を話した婦人に、この家政婦の態度が、無情であるどころか、まことに立派で、大いに感動させうるものであることを理解させることは、まったく不可能であろう。俗物でなくとも、こんな場合、外見から欺かれるかもしれない。しかも、開港地に住む多くの在留外人は、根っからの俗物で、敵意のある批評家として以外、けっして周囲の生活の上っ面以上のものを見ようともしないのだ。俥屋の話をしてくれた横浜の友人は、それとはまったく違った傾向の人であ

る。彼は、外見だけでものごとを判断する誤りをわきまえていたのである。

二

日本人の微笑を誤解したことから、たとえば、かつて横浜の商人であったT——の場合のように、きわめて不愉快な結果を一度ならず招いている。T——は、ある資格で（たぶんなかば日本語の教師として）、上品な老人のサムライを雇ったが、老人は、当時の習俗から、ちょんまげを結い、刀を二本さしていた。イギリス人と日本人は、今でもあまり互いによく理解し合っているとはいえない。が、当時は、それがもっとひどかった。日本人の使用人たちは、外人に仕えるさい、最初は、殿さまに仕えるのとまったく同じように振舞う。*ところが、こういう無邪気な思い違いが、ひどい悪口と残酷な行為を招いている。とうとう、日本人を、西インドの黒人と同じように扱うことが、非常に危険であることがわかってきた。何人かの外人が殺され、それが教訓となって、よい結果をもたらした。

さて、本筋にもどろう。T——はこの老人のサムライが、かなり気に入った。もちろん、老人の東洋風な礼儀正しさや、ていねいなお辞儀、ときたま、T——にとってまったく無駄としか思えないほど、いんぎんきわまる態度で差し出すささやかな贈物の意味など、まるで理解できなかった。ある日、老人は願いごとがあるといってやって来た（おそらくそれは、大晦日の夜だったのであろう。ここでは詳しく述べることのできない理由から、だれもが金を必要としたからである）。その願いごととというのは、老人の大小のうち、大刀を抵当に、少々金子を拝借したいとい

うことであった。それは非常に美しい刀であった。同時に、非常に高価なものであることがわかったので、この商人は、少しもためらわずに金を貸した。数週間後、老人は刀を取り戻すことができた。

そのあと、どんなことから不愉快なことが起ったか、もうだれもおぼえていない。たぶん、T――の神経が狂ったのであろう。とにかく、ある日、彼は老人に対してひどく立腹したのだが、老人は頭を下げ微笑を浮べながら、猛烈な怒りに耐えていた。これがますます怒りを駆り立て、T――は非常に口汚なくののしった。が、老人は相変らず頭を下げて微笑を浮べている。そのため、家から出て行くように命じた。しかし老人は、なおも微笑をつづけているので、T――は、われを忘れて、老人をなぐりつけた。こんどは、T――はにわかに怖くなった。あッという間に大刀がさやから抜きはなたれると、頭上でくるくる回ったからである。老人はもう老人とは思えなかった。さて、日本刀はそれの使い方をわきまえている人の手中にあって、両手で振り回されると、その剃刀のような刃は、なんの造作もなく人の首をはねることができる。が、T――の驚いたことに、この老人のサムライは、振り回すとほとんど同時に、剣の達人らしく刀をさやにおさめて、くるりと向きをかえると、出て行った。

それでT――は驚き、腰を下ろして考え込んだ。彼は老人のいろいろよい点を――頼みもせず、また返しもしなかった親切のかずかず、珍しいささやかな贈物、非のうちどころのない誠実さを――思い出してみた。T――は恥ずかしくなってきた。彼は、「まあ、むこうが悪いのだ。怒っていると分っていて、笑うなんて」と考えて、みずから慰めようとした。実際、T――は、折を

みて、償いをしようとさえ決心したのである。

が、機会はついにやって来なかった。その晩、老人は、サムライの作法にしたがって、腹切りをしたからである。彼は、その理由をしたためた、きわめて美しい手紙を一通のこした。サムライが無法な打擲をうけながら仕返しもできないのは、とうてい耐えられぬ屈辱である。彼は、そのような打擲をうけたのである。他の場合ならば、彼は遺恨をはらしたかもしれない。が、この場合、事情はきわめて特殊なものであった。彼の道義からいって、かつて困窮した折、大刀を抵当に企を無心した人間に、刀を振うことは、とうてい許されなかった。そこで刀を振えないとなれば、あとはただ、名誉ある自決を選ぶしか途は残されていなかったのである。

この話をいくらかでも快いものにしたい読者は、T――が心から後悔し、老人の遺族に対して気前よく振舞ったと想像されてよい。が、そうした暴力沙汰と悲劇をもたらした微笑を、なぜ老人が顔に浮べたか、その理由をT――が思いあたったと想像してはならない。

三

日本人の微笑を理解するためには、日本古来の、あるがままの民衆の生活に、すこし踏み込む必要がある。近代化した上流階級からは、なんら学ぶべきものはない。民族的相違が、高等教育の結果、日一日とますますあらわにされつつある。高等教育は、感情の一致を生み出すかわりに、西洋と東洋との距離をさらにひろげるだけのように思われる。外人の観察者たちによれば、高等教育は、ある隠れた特性――わけても、民衆のあいだにほとんど認められない純然たる物質主義

を法外に発達させた結果、このようなことになるのだといっている。こういう説は、わたしにとって、まったく承服しかねるものである。が、すくなくとも、西洋流の方法にしたがって、高度の教養を身につければつけるほど、日本人は心理的にますます、われわれから離れて行く。新しい教育を受けると、日本人の性格は、どこか妙に堅いもの、西洋人の観察によれば、どこか妙に不透明なものに固まっていくようである。感情的に、日本の子供のほうが日本の数学者よりも、また農民のほうが政治家よりも、はるかにわれわれに近いように思える。完全に近代化された日本のエリート階級と西洋の思想家とのあいだには、知的共感といえるほどのものはまるで存在しない。日本人の側には、それの代りに冷静な申し分のない礼儀正しさが見られるだけである。他の国ならば、より崇高な感情を発達させるのに大きく力あると思われる教育の影響力が、この国の場合、むしろそうした感情を抑圧するのに異常な効果を発揮しているように思われる。外国においては、感受性と知性の拡まりは結びついているのが一般的であるといってよい。が、日本にこの法則を適用するのは、おそるべき誤りとなろう。普通の学校の外人教師ですら、年々、教え子たちが、上級へすすむにつれて、自分たちから離れて行くように感じている。多くの高等教育機関において、こうした距離はますます急速にひろまり、卒業直前になると、学生たちは教授にとって、ほんの行きずりの顔みしり程度のものにしかならない。こうした謎はおそらく、いくらかは、科学的解明を必要とする生理学的な謎であろう。が、その答えはまず、先祖伝来の生活と想像力の特性に求められねばならない。こうした本来の原因が理解されてはじめて、十分論議されることになる。ところがそれらは、どうして単純なものではないのである。ある観察者は、日

本の高等教育にはまだ西洋の水準にまで感情を高める力がないから、その啓発する力が、一様にかつ賢明に発揮されることなく、ただ特殊な方向にだけ、特性の犠牲のうえに発揮されているにすぎないと主張している。しかし、この説には、特性も教育によって作られるという見当違いな仮説が含まれている。しかも、いかなる教育制度によるよりも、生来の性向を自由に発揮できる機会をあたえるほうが、もっともよい結果が得られるという事実を、それは無視しているのである。

こうした現象の原因は、民族性のなかに求められねばならない。高等教育が、遠い将来、どんな成果をもたらすにしても、本性を変えうる、とまではとうてい考えられない。しかも、目下のところ、なにかそれはすぐれた性向を萎縮させているのではなかろうか。わたしは、それに間違いないと思う。というのは、現在の状況にあって、徳性も知能も教育の要求によってすりへらされているという単純な理由にもとづく。昔ならば、社会的・道徳的・宗教的理想主義に向けられた義務とか、忍耐とか、自己犠牲などといった、まさに驚嘆すべき国民精神のすべてが、より高度の訓育のもとにあって、その総力を要求するばかりでなく、むしろ疲弊させる目的に集中させざるをえないのである。その目的を、すくなくとも達成させるために、西洋の学生ならめったに出会わない、ほとんど理解すらかなわない困難に直面せざるをえない。こうして古くから日本人の国民性として賞讃されてきた道徳的資質は、現代の日本の学生を世界でもっとも不屈に、従順に、野心的にさせているものと、たしかに共通するところがある。しかし同時にまた、そうした資質は、彼らをして本来の力以上に努力させ、しばしば知的にも道徳的にも疲労させている。日

本人は、いまや知的に、過度の緊張の時代に突入している。意識する、しないとを問わず、不意の必要にせまられて、日本は精神的に最高の水準にまで、いやおうなしに拡大する恐るべき仕事にとりかかっている。このことは、神経組織の発達に無理を押しつけることになる。わずか数世代のあいだに、望みどおりの知的変革をなしとげることは、当然、恐るべき犠牲をともなわずにはおかない生理的変化をもたらすにちがいない。言いかえるならば、日本はあまりに身のほど知らずなことをしているのである。とはいえ、それを避けて通ることは、事情が許さなかったのであろう。幸いにも、もっとも貧しい人たちのあいだでさえ、政府の教育方針は驚くほどの熱意をもって支持されている。国民全体が、この小論ではある程度の印象さえじゅうぶん伝えられないほどの熱情をこめて、勉学にいそしんでいるのである。ここでわたしは、感動的な一例をあげよう。一八九一年のあの恐るべき濃尾地震の直後、岐阜と愛知の荒廃した町々の子供たちは、言葉に絶するほどの恐怖と悲惨にとりかこまれ、寒さと飢えと宿るところもなく、わが家の廃墟にうずくまりながら、まだ足もとの大地が揺れているさなかを、石盤のかわりに焼け落ちた家の瓦を用い、壁の破片を白墨がわりにして、ささやかながら勉強をつづけていたという。＊こうした事実によって語られる驚嘆すべき意志の力から、いったい将来、どれほどすばらしいことが期待されるであろうか！

しかし、正直にいって、今までのところ高等教育の成果は、必ずしもほめられたものではない。昔気質の日本人のなかに、ほめてもほめ足りない礼儀正しさや、無心無欲や、まったくの善良さからくるしとやかさに、われわれは出会うことがある。当世風の若い世代の連中のあいだから、

こういったものはほとんど姿を消している。卑俗な模倣と、陳腐きわまる浅薄な懐疑を超えることもできずに、いたずらに古い時代と古い習俗とを嘲笑する若い人たちを見かけることがある。いったい、彼らが父祖から受け継いだ、あの崇高な魅惑的な資質はどこへ行ったのであろうか。あるいは、そうした資質のうちでもっともすぐれたものは、たんなる努力――過労のあまり特色をすりへらして、重さも均衡もなくしてしまう努力に、変ってしまったのではなかろうか。

西洋と極東の、民族的感情や感情表出のあきらかな相違の意味をさぐろうとするなら、つねに流動的で、変りやすい、民衆の自然な生活に目をむけねばならない。生きるにも、愛するにも、また死ぬにも、等しく微笑をもってむかえるこれらのやさしい、親切な、気のいい人たちとは、いっしょに、単純な、自然なものに、気持を通わせることができる。そして、親しみ打ちとけることによって、われわれは、彼らの微笑する理由を知ることができるのである。

日本の子供は、生れながらにしてこうした幸福な性向をもっており、それは家庭教育の全期間を通じてはぐくまれている。しかもそれは、庭木の自然な癖を伸ばすのとおなじく丹精をこめて養われるのである。微笑はお辞儀のように、また平伏のように、目上の人にあいさつしたあと、喜びのしるしに、ちょっと音をたてて息を吸い込むあの仕草のように、また、古い礼式にもとづく入念な美しい作法のように、教えこまれるのである。わかりきったこととして、声を出して笑うことは、すすめられない。ところが微笑は、目上の人や対等の人に話しかけるとき、愉快な場合はもちろん、愉快でない場合にも、用いられる。それは、礼法の一部なのである。もっとも気

持のいい顔は、微笑した顔である。それで、両親や、身内や、先生や、友達や、好意を寄せる人たちに、いつもできるだけ、気持のいい顔を見せるのが、生活のしきたりになっている。さらにそのうえ、世間の人びとに絶えず幸福そうな様子を見せ、他人にできるだけ愉快な印象をあたえるのが、生活のしきたりになっているのである。たとえ、胸が張り裂けそうな時でも、雄々しく微笑するのが、社会的義務となっている。これに反し、深刻な顔をしたり、不幸な顔をすることは、自分に好意をもってくれる人に不安や苦痛をあたえるため、非礼にあたる。しかも、自分に好意をもっていない人びとに、非情な好奇心をおこさせる点、愚かなことでもあろう。こうして、小さい頃から義務として植えつけられた微笑は、やがて本能的なものになる。どんな貧しい百姓の心の中にも、個人的な悲しみや苦痛や怒りを顔に出して見せることは、めったに役にも立たず、いつも不親切であるという信念がひそんでいる。それゆえ、他の国の場合とおなじように日本においても、悲しみには当然、吐け口がなくてはならぬにせよ、目上の人や客人の面前で、こらえきれずに涙を流すことは、いかにもはしたない。どんな無知な田舎女でも、そんな場合、取り乱したあと必ず、「つい、失礼をいたしまして、申し訳ございません！」と詫びるのである。ここで微笑を浮べる理由は、たんに道徳的な意味ばかりでないことに、注意されたい。それはある程度、美的なものであろう。ギリシア芸術において苦悩の表現を抑制した観念と、ある点おなじものを表わしている。それでも、美的というより、はるかに道徳的であることは、以下に述べるとおりである。

この微笑という基本的な作法から二義的な作法が発達するのだが、それを固執するあまりしば

しば外国人に、日本人の感受性についてきわめて極端な誤解をいだかせている。苦しいことや恐ろしいことを話さねばならない時は、いつも当人の口から、微笑をもって語られるというのが、この国の習性なのである。* 事が重大であればあるだけ、微笑はいっそう目立つ。そして、話の内容が当人にとってきわめて不愉快な場合、微笑はしばしば、低い、おだやかな笑い声に変る。初(うい)子(ご)を亡くした母親が、葬式でどれだけ烈しく泣いても、もし彼女が雇われの身なら、おそらく微笑を浮べてその不幸を語るであろう。彼女は、「伝道者」*のごとく、「泣くに時あり、笑うに時あり」と考えているのである。最近亡くなった人を愛していたはずの人たちが、どうして笑いながら死んだことを話せるのか、ずいぶん長いあいだ、わたしは理解できなかった。ところが、笑いは、極点まで自己を放棄した礼儀なのである。それはこういう意味であろう――「あなたは、これを不幸なこととお考えになるかもしれません。どうか、こんなつまらぬことで、ご心配なさらないように願います。失礼をかえりみず、ついこんなことをお耳に入れて、申し訳ございません」

もっとも不可解な微笑の秘密を解く鍵(かぎ)は、日本人の礼儀正しさである。過失のため解雇を言いわたされた召使は、深く頭を下げ、微笑を浮べて許しを求める。その微笑は、冷酷とかずうずうしさとかの正反対を意味している。「まったくお言葉のとおりでございまして、わたしの落度の重大さも、よくわかりました。でも、ぶしつけなお願いで、まことに恐縮に存じますが、なにとぞまげてお許しいただけないかと、心からお願い申し上げるしだいでございます」子供らしい涙を流す時期をこえた若い男女は、なにか過ちを犯したとき、こんな意味の微笑を浮べて罰を受け

る――「どんな悪い感情も抱いてはおりません。わたしの過失は、もっとひどい罰を受けてもよいくらいなのですから」わたしの横浜の友人が鞭でなぐった俥屋が微笑したのもまったく同じ理由からで、その微笑が即座に相手の気をしずめたことから、友人も直観的にさとったように、「わたしが悪うございました。お腹立ちはごもっともです。ぶたれるのも当然でございますから、べつに恨みがましく思ったりいたしません」という意味なのである。

しかし、どんなに貧しい、卑しい日本人でも、不当な目にあっておとなしく引き下がることはめったにないと、理解しておかねばならない。日本人の見かけの素直さは、主にその道徳感にもとづくものである。ふざけているつもりで日本人をなぐるような外国人がいたら、たいへんな誤りを犯していることを思い知るだろう。かりそめにも、日本人をからかってはならない。愚かにもからかおうとして、無駄に命を失ったものが何人もいるのである。

このようにいろいろ説明したあとでも、日本人の家政婦の事件は、まだ理解できないように思えるかもしれない。が、これは思うに、おそらく、その話をした人が、この場合、ある事実を隠すか、見のがしたためであろう。話の前半は、きわめて明瞭である。夫の死を告げたとき、この若い召使は、すでに述べたようにこの国の礼儀にしたがって、微笑したのである。まったく信じがたいのは、彼女自身すすんで、女主人に骨壺の中身を見せようとしたことである。夫の死を知らせるさいに微笑するほど日本の礼儀をわきまえているなら、そんな誤りを犯さないだけのことは、確かにわきまえていたにちがいない。彼女は、実際に命令を受けたか、あるいはそうととって、骨壺とその中身を見せたのであろう。そして、そうしながら、苦しい義務をいやおうなく果

す時とか、無理やり苦しい申し立てをせざるをえない時に伴う、低い、静かな笑い声を、おそらく洩らしたものであろう。わたしの意見では、彼女は気まぐれな好奇心を満たしてやらざるをえなかったのである。彼女の微笑や笑い声は、その時こんな意味だったはずである――「こんなつまらない話で、お気を悪くなさらないでください。お言葉とはいえ、わたしの不幸などという、取るにたらないことを申し上げて、まことに失礼いたしました」

四

しかし、日本人の微笑を、たえず心の仮面として身につけている一種の「冷笑」と想像してはならない。他の振舞いとおなじように、これも社会によっていろいろ異なる作法が定められているのである。概して、昔のサムライは、どんな場合にも微笑してはならぬことになっていた。目上や朋輩には、好意をつつみかくし、目下の者に対しては厳しい態度をとってきたように思われる。神道の神職のもつ威厳については、ひろく知られるとおりだ。そして、何百年ものあいだ、儒教のきまじめな規則が、諸官の礼儀作法に反映している。昔から、貴族はサムライよりもお高くとまっていた。位階の重々しさは、あらゆる階級を通じてその頂点に立っている、だれもがその龍顔を拝したことのない「天子様」のあたりまで達している。しかし、個人的な生活では、高貴な人たちの態度にも愛すべきくつろぎはあった。今日でも、救いがたい新しがり屋は別としても、華族や、裁判官や、高僧、大臣、将軍たちは、公務のあいまに、家庭にあっては、昔ながらの非常に快い礼儀作法にしたがっているのである。

会話をあかるくする微笑も、ただそれだけでは、そうした礼儀作法のほんの一部にしかすぎない。が、それによって象徴される情感は、たしかにもっと大きな役割を演じている。もしも、新しい自己中心主義(エゴチズム)や外国にかぶれることがなく、真に日本的なものをとどめている教養ある日本人の友人を持ったとしたら、おそらく、彼の中に、日本民族の社会的特質——彼の場合とくに、それが目立ち洗練されたものとなっているが——を学びとることができるであろう。一般に、自分のことは決して語らず、個人的なことをいろいろ訊(き)かれても、感謝のしるしにていねいに頭を下げて、できるだけあいまいに手短かに答えるのが見られるだろう。しかし、その反面、相手についてはいろいろ訊(たず)ねかけてくる。意見、考え方、日常生活のこまごましたことまで、深い関心をそそられているようである。そして、相手について聞いたことは決して忘れないことに、おそらく、しばしば気づかれるにちがいない。ところが、その思いやりのある好奇心や、あるいは観察にも、きびしい限界がある。不愉快なことや、苦痛なことには決して触れないし、たとえ相手に、奇癖やちょっとした欠点があっても、目をつむっているようにみえる。面前では、けっして相手をほめそやしたりしない。が、嗤(わら)いもくさしもしない。実際、人物を批判せずに、ただ行動の結果を批判するだけなのである。個人的な忠告者として、同意しがたい計画には、じかに批判するかわりに、「これこれ、こうなさったほうが、よほどためになると思われますが」というような慎重な言葉づかいで、新しい考えをそれとなく伝えたりする。他人について、どうしても何か言わざるをえないときは、妙にもって回った言い方で、一枚の絵を描くように、とくに目立つ出来事だけをいくつか引き出し、それらをつなぎ合せて、その人のことを伝える。しかも、その

場合、話すことがらは、興味をよびおこし、好もしい印象をあたえるものにまず限られている。こうした知識の婉曲(えんきょく)な伝達の仕方は、本質的に孔子の教えなのである。「直而勿有」(まったく疑問の余地がないときでも、その語るところを自分の説と思わせてはならない)と『礼記』に書かれている。おそらく、相手のいろいろ異なった特徴を理解するためには、いくらか中国の古典の知識を必要とするだろう。が、他人に対するこまやかな心づかいと、わざわざ自分を押し殺そうとする態度を知るだけなら、そんな知識はいっこうに必要としない。日本人ほど、幸福に生活していくこつをわきまえている国民は、他の文明国には見られない。人生のよろこびは、ひとえに周囲の人たちの幸福にかかっているのであるから、したがって、無私と忍従をつちかうことにあるという真理を、日本人ほどひろく理解している民族はあるまい。そんなわけで、日本の社会では、嫌味や、皮肉や、残酷なしゃれなどは通用しない。洗練された生活にそういうものは存在しない、といえるかもしれない。個人の欠点は、嘲笑や非難の対象とはならない。奇行も、口の端にかかることがない。思いがけぬ過失も、物笑いをまねくことがないのである。

こうした心性が、古くさい中国の保守主義によって多少硬直させられはしたものの、極端に固定したものの考え方と、個性の犠牲とによって保たれてきたことは確かである。が、もしも、社会的要求のより広範な理解によって調整され、知的進化にとって不可欠な自由の科学的理解によってさらに拡大されたならば、こうした道徳律も、まさに最高の、もっとも幸福な結果を得たにちがいない。ところが、実際に行われたものは、体質(オリジナリティー)にとって必ずしも色よいものではなかった。むしろ、今日も見られるような、思考と想像力の、愛すべき平均化を強めたにすぎない。

そのため、日本の地方に住む外人も、時には、もっと大きな喜びと苦悩と、ひろい共感をともなう、あの西欧生活の厳しい、並はずれた不平等をなつかしく思わざるをえないときがある。しかし、それもほんの時おりのことにすぎない。そうした知的な損失も、実は社会的魅力によって、じゅうぶん償われているからである。かりそめにも日本人を理解している人たちにとって、やはり日本人は世界で一番、いっしょに暮しやすい国民であるという感をぬぐえないのである。

五

こんなことを書いているうちに、京都のある夜の情景が目に浮んできた。名はちょっと思い出せないが、たいそう人の混んでいる、明るい街を通り抜けながら、わたしは、非常に小さな寺の門前にある地蔵さまを見ようと思って、人混みをはなれた。それは小僧――美しい童子の像であった。そして微笑は、神々しいばかり真にせまっていた。じっと眺めていると、おおよそ十歳くらいの男の子が、わたしのそばへ駆け寄ってきて、像の前に小さな手を合わせると、頭を下げて、しばらく黙っておがんでいた。遊び仲間から抜けてきたばかりで、まだ遊びの楽しさやほてりが顔に残っていた。そして、無心な微笑は、不思議にも石像の童子の微笑にも似て、少年は地蔵の双子の弟のように思われた。そこで、わたしは考えた、「青銅や石の像の微笑は、たんなる模写ではない。仏師がそれによって表わそうとしたものは、民族の微笑の意味であるにちがいない」と。

もう、それからずいぶん時がたつ。しかし、そのとき胸に浮んだ考えは、今でもわたしには、

真実のように思われる。仏教美術の起源が、いかに日本の土壌と無縁のものであっても、日本人の微笑は、菩薩(ぼさつ)の微笑と同じ概念——つまり、自制と克己から生れる幸福をあらわしている。「戦場において千の千倍の人間に打ち勝つものよりも、おのれ一人に打ち勝つ者こそ、最上の勝利者である」*「神もまた、おのれに打ち勝った人の勝利を敗北に変えることはできない」こうした経文は——非常に多いのだが——日本人の国民性の最高の魅力をなしている道徳的傾向を、形作ったとまでは考えられないにせよ、たしかに表わしている。そして、この民族の道徳的理想主義は、あげてあの鎌倉のすばらしい大仏像にあらわされているとわたしは思う。「深淵(しんえん)のごとく静かな」その面立ちは、おそらく人の手になった他のどのような作品にもあらわすことのできない、「心の静けさほどすぐれた幸福はない」という永遠の真理をあらわしている。東洋人のあこがれの対象は、そうした永遠の静寂にほかならない。そして、無上の克己を、その理想としてきたのである。いろいろ新しい影響力によって表面はかき乱され、いずれ早晩、その根底までゆり動かされるにちがいないのだが、それにしても、西洋の思想とくらべて、日本人の心はいまでも不思議な平静を保っている。われわれがもっとも関心をいだいている究極の抽象的問題について、日本人はほとんど心をとめない。われわれが理解されたいと思っているほど、そうした問題に対するわれわれの関心を理解していない。「あなたがたが、宗教的思索に無関心でないのは、まったく当然なことです」あるとき、日本人の一学者がわたしにこういったことがある、「しかし、われわれ日本人が、そうした問題に注意をむけないのも、また同様に当然のことなのです。仏教の教理には、あなたがた、西欧の神学のそれより、ずっとはるかに深いものが含まれており、わ

われわれはそれを究めてきたのです。そうした思索の奥底をさぐって、その奥にまだ測り知れない深さのあることがわかってきました。われわれは、思想の達しうる、ぎりぎり極限まで船をすすめて行き、水平線が永久に消えないことがわかったのです。ところがあなたがたは、何千年ものあいだ、子供が川で水遊びをやっているような調子で、けっきょく、海には気づかない。近頃ようやく、われわれと違った道をとおって海べに達し、その広大さに新しい驚異の目を見張っておられる。人生の砂漠のかなたに無限をごらんになってこられたのだから、こんどは無何有之郷へ船出されることとです」

千年にもわたって中国の文明と同化しながら、独自の思考や感情形式を保持している日本は、はたして西欧文明と同化することができるだろうか。ただ一つ、希望的な、目ざましい事実がある。それは、西欧の物質的優越に対する日本人の讃美が、決して西欧の道徳にまで及んでいないことである。東洋の思想家たちは、機械の進歩と倫理の進歩とをごっちゃにするような重大なへまをおかしたり、また、われわれの誇る西欧文明のもつ道徳的弱点に気づかぬようなことはない。ある日本の著述家は、かつて西洋の事物について、つぎのような意見を述べたが、これは発表当時より、さらにひろい読者層に注目されてしかるべきだろう。

「一国家の秩序ないし無秩序は、空から降ったり、地から湧いたものによって決るのではない。それは国民の性情によって決定されるのである。国民の性情が秩序にむかうか、あるいは無秩序にむかうかは、公的な動機によるか個人的な動機によるかによって分れる。もしも国民が、主と

して公心に左右されるなら、秩序は保たれる。それが私心の場合、無秩序は避けがたい。公心とは、正しく義務を守ろうとする心がけである。それがひろく行われれば、すなわち家にあっても、町にあっても、国にあっても、ひとしく平和と繁栄をもたらすであろう。私心は、利己的な動機に駆られたものである。それがひろまるとき、混乱と無秩序は避けがたい。家族の一人として、家族の幸福を求めるのは、われわれの義務である。国家の一員として、国家のために働くことが、われわれの義務なのである。家族のためになるように家事を考え、国家のためになるように国事を考えること——これがためには、われわれの義務が正しく果され、公心によって導かれる必要がある。これに対し、国事が、あたかも家事のように考えられるならば——これは、個人的な動機に左右されて、義務の道からそれることになるであろう。

利己心は、だれしも生れながらに持っている。それを勝手気ままに振りまわせば、けだものになってしまう。であればこそ、古来聖者たちは、義務と適正と、正義と道徳の道を説き、個人的な目的をおさえ、公的な精神の涵養をすすめたのである。……われわれが西欧文明について知ることは、それが何世紀にもわたって混乱した状態のうちに苦闘をつづけ、ついにいくらか秩序ある状態に達した事実である。しかしこの秩序も、君臣親子相互間の自然な不変の区別にみあった権利義務の原理にもとづいていないから、人間的な野心や目的の発達にともなって、絶えず変化をうけやすい。だから、利己的な野心によって行動する人びとにはきわめて都合よく、日本でもこの制度を採用しようという声が、自然、一部の政治家のなかにあがっている。皮相な見地からみると、西欧的な社会形態は、古くより人間の欲望を自由に発達させた結果、贅沢と浪費の極限

をあらわしているから、きわめて魅力的である。要するに、西欧で一般に認められる社会状態は、人間の利己心の自由な活動にもとづいているから、そうした特質をじゅうぶん発揮することによって、はじめて到達できるのである。社会的混乱など、西洋ではほとんど注意も引かない。が、そうした混乱こそ、そのまま現在の悪しき社会状態の証明でありまたその要素でもあろう。……西洋かぶれのした日本人は、母国の歴史を、西洋流に書こうと思っているのか。彼らは、本気で自分の国を、西欧文明の新しい実験の場にしたいと考えているのであろうか。

東洋では、昔から、一国の政治は慈悲にもとづき、人民の福利と幸福の確保に向けられていた。どのような政治的信条も、弱者や蒙昧な人間を搾取するために知力をみがくべきであると考えたものはかつてなかった。……この帝国の住民は、だいたい、手工業によって生活している。どれだけ熱心に働いても、日々の必要をみたすに足りるだけのものをかせぐことは困難である。彼らは平均して、日に二十銭ほどかせぐ。きれいな着物を着たり、りっぱな家に住みたいと思うことなど、彼らにとってはまったく問題外である。名誉ある地位にのぼることも望めない。しかも、こうした貧しい人びとが、西欧文明の恩恵に浴せないのは、いったいどんな罪を犯したためであろうか。……なるほど、ある人によれば、それも、彼らの欲望が向上を妨げているせいではないかという。こんな臆測にはなんら裏付けがない。彼らにも欲望はあるのだが、人間性が欲望をみたす能力を制限しているのだ。人間としての義務がそれを制限し、人間にとって物理的に可能な労働量がそれを制限しているのである。彼らは、機会のゆるすかぎり、多くのものを達成する。彼らの労働による生産物の最上、最良のものを、富める者のために取っておく。そして、最悪、

最下等のものだけを、自分たちの用に供するのである。しかし、人間社会にあって、生活を労働に負うていないものはない。ところが、一人の贅沢な人間の欲望を満足させるために、千人の労苦を必要としているのである。労働によって彼らの文明から快楽を約束されている連中が、労働者の恩を忘れ、あたかも同じ人間でないかのように扱っているのは、まことに奇怪といわねばならない。しかし、西洋流の解釈にしたがえば、文明は、大きな欲望をもつ人たちを満足させるためのものにすぎない。大衆にとって、なんら利益はなく、ただ野心家が、その目的を果すために競う制度にすぎない。……西洋風の制度が一国の秩序や平和を大きく乱しつつあることは、目のある人には見え、耳のある人には聞えている。そうした制度の下における日本の将来は、まことに憂慮すべきものがある。倫理も宗教も人間の野望に奉仕するように作られた原理に立脚した制度は、当然、利己的な個人の欲求と一致する。自由や平等という近代的な信条に具現されるような理論は、すでに確立した社会関係を破壊し、礼儀作法を乱す。……絶対の平等、絶対の自由など得られるはずもないから、権利・義務によって規定された制限が、いろいろ置かれることになっている。しかし、だれもが、多くの権利をもとめて、義務はできるだけ少なく負おうとするから、結果は、果てしない論議と法的な争いに終始する。自由と平等の原理は、国家の組織を変え、社会的階級の法的な差別をくつがえし、あらゆる人びとを一つの名目だけの水準に引き下げることに成功するかもしれない。しかし、富と財産の平等な分配は、決して達成できない。アメリカを考えてみるがよい。……もしも、共通の人権や、身分といったものが、富の程度に応じてあたえられるなら、大多数の国民は、財産などあるはずもないから、権利を確立できないにちがいな

い。ところが、金のある少数者は、その権利を主張し、社会の承認のもとに、人間性と慈愛の命ずるところを無視して、貧者に圧制的な義務を強要するであろう。こうした自由と平等の原理を日本で採用するならば、わが国の良風美俗はたちどころにそこなわれ、国民の気風を冷酷無情なものとし、ついには民衆に不幸をもたらす要因となるだろう。

一見したところ、西洋文明は、利己的な欲望を満足させるのに適しているから、いかにも魅力的に見えるが、しかし、人間の欲望が自然法をつくるという仮説を基にしている以上、それは究極するところ、失意と頽廃に終るにちがいない。……西洋諸国は、最も惨澹たる闘争と幾多の消長をへて、今日あるようなものになった。だから、闘争をつづけるのが、彼らの運命なのである。さしあたり現在、動因となるべき要素はいくらか平衡を保ち、社会状態もだいたい安定している。しかし、こうしたささやかな平衡も、かりにかき乱されるならば、新たな闘争と苦悩の一時期をへてふたたびかりそめの安定が得られるまで、またもや混乱と変化の淵に投げ込まれるであろう。現在の貧しい無力な人びとは、将来、富裕な強者となり、その逆もまた同様である。永遠の混乱が彼らの運命なのである。平安な平等は、滅亡した西欧諸国の廃墟と、絶滅した西欧人の死灰のなかに打ち立てられるまで、決して達成されないであろう」*

たしかに、このような自覚をもってすれば、日本は、自国を脅やかす社会的危機のいくつかを避けることができるだろう。だが、近づきつつある変革が同時に道徳的衰退をまねくことも、避けがたいように思われる。文明の根底を愛他主義の上に置いていない諸国と広汎な産業競争をせ

ざるをえない日本は、けっきょく、これまで比較的そういった面の少なかったことが、彼らの生活のすばらしい魅力をなしてきたさまざまの悪徳を育てていくにちがいない。国民性はすでに非情になりかけているが、これからもますます非情の度を加えていくにちがいない。しかし、古い日本が、十九世紀日本より物質的に遅れていたとはいえ、道徳的にはるかにすぐれていたことは、忘れてなるまい。日本は道徳を、すでに合理化したあと、それを本能化している。西欧のもっとも才能ある思想家たちが、もっとも幸福な最高の社会状態とみなしているものを、それはせまい範囲ではあるが、いくらか実現していたのである。複雑な社会のあらゆる階層を通じて、公私の義務の理解と実践を、西欧においてとうてい類例の見られぬ方法で深めてきた。いわゆる道徳的欠陥といわれるものも、文明化したあらゆる宗教が口をそろえて美徳と認めているもの――家族や、社会や、国家のために自己を犠牲にすることの、あまりに過剰な結果であった。それは、パーシヴァル・ローエルが、その『極東の精神』*――極東に関し多少とも直接の知識がなければ、この本の意義はとうてい正当に評価されないにちがいない――のなかで述べている欠陥にほかならない。社会的道徳の面で日本の果した進歩は、西欧よりもさらに大きいものがあるが、主としてそれは相互信頼の方向であった。そして、日本が賢明にもその思想を受け入れた、あの巨大な思想家の教訓を心にとどめておくことが、来たるべき将来の義務となるであろう。いわば、「最高の個性化は、最大の相互依存をともなわねばならない」のであり、また、一見したところ逆説的にみえるが、「進歩の法則は、完全な分離と同時に完全な結合の方向にむかう」のである。

にもかかわらず、現在、若い世代の人たちがとかく軽蔑しがちな過去の日本へ、ちょうどわれわれが古代ギリシア文明を回顧するかのように、いつの日にか、かならず日本が振り返って見る時があるだろう。素朴な歓びを受け入れる能力の忘却を、純粋な生の悦びに対する感覚の喪失を、はるか昔の自然との愛すべき聖なる親しみを、また、それを反映している今は滅んだ驚くべき芸術を、かなしむようになるだろう。かつて世界が、いかにはるかに明るく美しく思えたかを思い出すであろう。古風な忍耐と献身、昔ながらの礼儀、古い信仰のもつ深い人間的な詩情——こうしたいろんなものを嘆き悲しむであろう。日本が驚嘆するものは多い。だが、後悔もまた多いはずである。おそらく、そのなかでもっとも驚嘆するものは、古い神仏の容顔ではなかろうか。その微笑こそ、かつてのおのれの微笑にほかならないからである。

『東の国より』

赤い婚礼

ひと目惚れは、日本では西欧におけるほどありふれたことではない。ひとつには、東洋社会の特殊な構造によるものであり、またひとつには、両親の決めた早い結婚によって、いろいろ不幸が防がれているからである。一方これに対して、情死はめずらしいことではない。ただ、ほとんどいつも二人であるという特殊性がある。しかもそのうえ、たいてい、不義の関係の結果である。それでも、正直な、勇敢な例外もある。通例、それらは田舎に多い。こうした悲劇におわる恋は、もっとも無邪気な、自然な幼なじみの関係から突然発生したもので、因をたずねれば、子どもの頃にかえるものがある。しかし、そんな場合でも、西欧の心中と日本の情死とのあいだに、たいへん奇妙な相違がある。東洋の自殺は、苦痛からくる、一時の盲目な逆上の結果ではない。それは冷静で、筋を通しているばかりではない。神聖でさえある。死を証とする一種の結婚を意味するのである。二人は神前でたがいに誓いを交わし、遺書をしたためたあと、死ぬ。これほど神聖な誓いはあるまい。したがって、もしも、思いがけぬ外部の邪魔や、医師の手当てのため、情死の一人が生命を救われた場合、愛と名誉のもっとも厳粛な義務から、できるだけ早い機会に命を捨てなければならない。もちろん、二人とも救われた場合、問題はない。しかし、娘と死を誓ったあと、相手だけをひとり冥土へ旅立たせた男として知られるくらいなら、いっそ重罪を犯して

半生を牢獄におくるほうがまだしもましであろう。女のほうは誓いに背くことがあっても、まだ幾らかはゆるされる。が、男は、邪魔がはいって助かり、目的が挫かれたばかりにおめおめと生きながらえでもしようものなら、誓いを破った男、人殺し、畜生にも劣る卑怯者、人間の面汚しとして死ぬまで一生、見られることになる。そんな実例を、わたしは一つ知っている――が、ここではむしろ、東国のある村にあった、ささやかな恋物語をつたえたいと思う。

一

村は、ひろいけれどごく浅い川に沿っていたが、その石ころだらけの川床は、雨季のあいだだけすっかり水におおわれてしまう。川は、南北に地平線までひらけているが、西は山なみがそびえ、東は樹木の茂った丘がつらなっている、ひろびろとした稲田を横切っている。村は、これらの丘からわずか半マイル、稲田が間を隔てている。そして、十一面観音をまつったお堂に付属する村の中央墓地が、近くの丘の上にあった。物産の集散地として、村には価値がないわけではない。どこの田舎にも見られる藁ぶき屋根の農家が数百集まっているほか、美しい瓦屋根の景気のよい二階建ての商家や宿屋がつづいている通りが一本走っている。それから、天照大神をまつった、まるで絵のような氏神さまと、桑畑のなかに、蚕の神をまつった小さな社がある。

明治も七年に、この村の内田という染物屋に、太郎という男の子が生れた。生れた日が、たまたま悪日――陰暦の八月七日であった。そこで両親は、旧弊な人間だったため、おそれ悲しんだ。しかし、同情した近所の人たちは、天子様の命令で暦も変って、新しい暦によればそれは吉日に

あたるから、万事うまくいくのではないかとしきりに説いた。こうした説明は、いくぶん両親の不安をやわらげてくれた。それでも、氏神さまへお宮まいりに連れて行ったとき、非常に大きな提燈を神前に奉納して、どんな不幸もこの子を避けて通るように熱心に祈願した。神主は、古風なのりとをあげ、赤ん坊の小さな坊主頭の上で御幣を振りまわし、子供のくびにつるす小さなお守りを作ってくれた。そのあと、両親は丘の観音堂へおまいりし、さらにお供えをささげ、初子を守ってくれるよう、あらゆる仏に祈った。

二

太郎が六つになったとき、両親は、村のすぐ近くに建てられた新しい小学校へ通わせることにした。太郎の祖父が、筆やら、紙やら、本や、石板などを買いあたえて、ある朝早く、手を引いて学校へ連れて行った。太郎は非常にうれしかった。石板や、ほかのいろんなものが、まるで新しいおもちゃのように彼をよろこばしたし、かねていろんな人から、学校は遊ぶ時間がたっぷりある、たのしい所だと聞かされていたからである。そのうえ、母親は、学校から帰ってきたら、お菓子をたくさん上げると約束していたのである。

学校へ着いてすぐに――それはガラス窓のある大きな二階建だった――小使に案内されて大きながらんとした部屋へ行くと、しかつめらしい顔をした人が机の前にすわっていた。太郎の祖父は、そのしかつめらしい顔をした人にむかって深くお辞儀をして、先生と呼びかけ、ひとつこの坊主をよろしくお願いします、とうやうやしく頼んだ。先生は立ち上がり、礼を返して、老人に

ていねいにあいさつした。それから、太郎の頭に手をおき、いろいろやさしいことを言った。しかし、太郎は突然こわくなった。祖父がさようならというと、彼はますますこわくなり、家へとんで帰りたくなった。しかし先生は、彼を男の子や女の子がいっぱい椅子に腰かけている、大きな、天井の高い、白い部屋へ連れて行って、腰かけの一つを指すと、すわるようにいった。男の子や女の子はいっせいに顔を向けると、たがいにささやきあって、笑った。太郎は、自分を嗤っているのだと思い、ひどくみじめな気持になってきた。大きな鐘が鳴った。すると、部屋の一方の高い壇の上に席をとっていた先生が、太郎もびっくりするほどのでっかい声で、静かにするように命じた。みんな静かになると、先生はしゃべりだした。その話のしかたが、たいそう恐ろしいように太郎には思われた。先生は、学校がたのしい所だとはいわなかった。それは遊ぶ所ではなく、一生懸命に勉強する所だと、はっきりと生徒にむかっていった。勉強はつらいものだが、つらくても難かしくても勉強しなければならないといった。みんな従わなければならない規則や、それを破ったりうっかりしていたときの罰について説明した。みんながこわくなって静かになると、今度は先生はがらりと声を変えて、やさしい父親のように――自分の子供たちと同じように可愛がることを約束する、とみんなにいった。それから、学校が、日本中の子供たちがみんな賢いりっぱな大人になるように、天皇陛下の大御心によって建てられたのだから、天皇のためによろこんで生命を捨てるようにといった。そして、親を愛すること、みんなを学校へやるために親たちが働いているのだから、勉強の時間になまけるのは、悪い恩知らずになるといった。それから、一人一人、名前を呼んで、いま言ったことについて質問した。

太郎は、先生の話を一部しか聞いていなかった。彼の小さなこころは、さっき部屋にはいってきたとき、男の子も女の子もみんな彼のほうを見て笑ったことで、ほとんどいっぱいになっていたのである。そして、何のために笑われたのか分らないことが苦痛になって、ほかのことは何も考えられなかったので、先生が彼の名を呼んだときは、まったく不意をくらった。

「内田太郎、お前は、この世でなにが一番好きかね」

太郎は、驚いて立ち上がると、無邪気に、「お菓子です」と答えた。

子供たちはみな、またもや彼のほうへ顔を向けて、どっと笑った。先生は叱るように訊ねた、

「内田太郎、お前はお父さんやお母さんよりも、お菓子のほうが好きか。内田太郎、おまえは天皇陛下につくすことより、お菓子のほうが好きか」

そこで、太郎ははじめて、大きな間違いをしでかしたことに気づいた。顔がまっ赤になり、みんな子供たちが笑うと、とうとう泣きだした。それが、ますますみんなを笑わせた。先生が、また静かにといって、次の生徒に同じ質問をするまで、笑いはやまなかった。太郎は、そでを目にあてたまま、すすり泣いた。

鐘が鳴った。先生は子供たちに、次の時間にはほかの先生から習字の授業があるが、まず部屋を出て、しばらく遊んでよろしいといった。それから、先生は教室を出て行った。子供たちはみな、太郎のことなんか目もくれずに、校庭へ遊びに走り出た。こう無視されて太郎は、さっき皆の注目の的になったときよりも驚いた。先生のほか、まだだれもひと言も声をかけてくれない。その先生でさえ、もう彼の存在を忘れてしまっているように思われた。彼は、また小さな椅子に

腰を下ろすと、泣きじゃくった。子供たちがもどってきてまた嗤われないよう、できるだけ声をたてないようにしながら。

不意に、肩に手がかけられた。やさしい声が耳もとに聞えた。振り向くと、これまで見たことのない思いのこもった目が——彼より一つぐらい年かさの娘の目がのぞいていた。

「どうしたの」彼女はやさしく訊ねた。

太郎は、ちょっとのあいだすすり泣き、頼りなげに鼻をくすくすいわせてから、ようやく答えた。「こんなとこ、おもしろくない。家へ帰りたいよ」

「どうして？」と彼女は、片腕を彼のくびへまわしながら訊ねた。

「みんな、おれがきらいなんだ。声もかけてくれないし、遊んでもくれない」

「いいえ、ちがうわ！」と、娘はいった。「だれもあんたを、きらってやしないわ。ただ、初めての人だからよ。わたしも、去年、初めて学校へ来たとき、ちょうどそっくりだったわ。ぐずぐず言っちゃだめよ」

「でも、ほかの子ら、みんな遊んでいる。それなのに、おれはここにいなくちゃいけない」と、太郎は抗議した。

「だめ、だめ、そんなこと言っちゃ。さあ、いっしょにきて、遊びましょう。あたしが、お相手よ。さあ、おいで！」

太郎は、たちまち大きな声を上げて泣きはじめた。自分があわれになったのと、感謝と、新たに得た同情にたいする喜びとが、小さい胸をいっぱいにして、ついにこらえることができなかっ

たのである。泣いているのをなだめられるほど、うれしいことはなかった。
しかし、娘はただ笑うだけで、すぐさま部屋から彼を外へ連れ出した。彼女のなかの小さい母性愛が、その場のなりゆきを察知したのである。「もちろん、泣きたいときは、泣いてもいいわよ」彼女はいった、「でも、遊ばなくちゃ！」こうして、二人はいっしょに、たのしく遊んだ！
しかし、授業がおわり、太郎の祖父が迎えにくると、遊び相手と別れなければならなくなったので、太郎はまた泣きだした。
祖父は笑って、大声でいった、「おや、これはよし坊ではないか！――宮原の、およしだ！およしもいっしょに来て、家に寄っていくがいい。道もいっしょだから」
太郎の家で、二人の遊び友達は約束のお菓子を食べた。およしはいたずら半分に、先生の威厳をまねていった、「内田太郎、お前はわたしより、お菓子のほうが好きなのかね」

三

およしの父親は、近くにかなりの田をもち、村にも店を出していた。母親は、侍の娘で、武家制度が瓦壊(がかい)した折、宮原家へもらわれて、数人の子女をなしたが、末っ子のおよしだけが、生き残ったのである。まだ赤ん坊の時分、およしは母親を亡くした。宮原は中年を過ぎていた。が、出入りの小作人の娘――名は伊藤おたまといったが――を後妻にもらった。おたまは、新しい銅貨のように色の浅黒い女だったが、非常にきれいな百姓娘で、背も高く、頑丈で、機敏であった。しかし、読み書きもできなかったから、どうしておたまが選ばれたのか、驚きをもって迎えられ

た。おたまが家にはいるとすぐ、絶対権力をにぎってそれを振りまわすようになったことがわかると、驚きはおかしさに変った。しかし、おたまについてだんだん分ってくると、近所の連中は宮原の腰の弱さを嗤うのをやめた。彼女は、夫の商売を本人よりもよく理解して、いっさいを引き受けると、仕事をよくこなして、二年とたたぬうちに彼の収入を倍加した。あきらかに、宮原は金のなる女房をもらったのである。継母として彼女は、男の初子が生れたあとも、むしろ親切にふるまった。およしは、よく面倒をみてもらい、正式に学校へ行かせられた。

子供たちがまだ学校へ通っているころ、長いあいだ期待された驚くべきことが生じた。髪とひげの赤い、背の高い、妙な人間——西洋人——が村へ日本人の労働者をたくさん連れてきて、鉄道を敷設した。それは、村のうしろの稲田と桑畑のむこうの、低い丘のすそをまわって、ちょうど観音堂へ通じる古い道と交差する角のところに、小さな停車場が建てられた。そして村の名が、プラットホームに立てた白い掲示板に、漢字で書かれた。その後、線路に沿って、電柱がずらっと立てられた。しばらくたつと、汽車がやって来て、鋭い音をたてて止ると、また出て行った——古い墓地の仏像を蓮華の台座から振り落さんばかりにして。

子供たちは、この妙な、水平な、灰をまき散らした道を、二本のぴかぴか光る鉄の棒が、はるか彼方まで南北にはしっているのに驚いた。そして汽車が、さながらつむじ風を巻き上げる龍のように、大地をゆるがせて吼え、叫び、煙を吐きながら通り過ぎるのを見て、畏敬にうたれた。しかし、畏敬につづいて好奇心が代った——好奇心はさらに、学校の先生の一人が、黒板に図を描いて、機関車がどういう構造をしているのか説明したことによって、いっそう強められた。そ

のうえ先生は、もっと不思議な電信のはたらきについて教え、新しい西洋風の帝都の東京と聖都の京都とが鉄道と電線で結ばれると、両都のあいだの旅行も二日とはかからぬうえ、わずか数秒で通信もできるようになるのだと説明した。

太郎とおよしは、大の仲よしになった。二人はいっしょに勉強し、いっしょに遊び、たがいに家を行き来した。しかし、十一になったとき、およしは学校をやめて、継母の手伝いをすることになった。その後は、めったに太郎は会わなくなった。彼は十四歳になって学校をおえ、家業を習いはじめた。不幸がつぎつぎとやってきた。弟を生むとすぐ、母親が亡くなった。すると、その年のうちに、はじめて彼を学校へ連れて行ったやさしい祖父も、母親の後を追った。そんなことの後、なにか前よりも世の中が暗く、彼には思われてきた。十七になるまで、それ以上変ったこともなかった。時折、およしと話をするため、宮原の家をたずねた。彼女はもう、すらりとした、美しい女になっていた。が、彼にとっては、まだ楽しい時代の陽気な遊び友達にすぎなかった。

四

あるさわやかな春の一日、太郎はひどく淋しくなって、ふと、およしに会ったら楽しいだろうという気持に駆られた。おおかた、彼の記憶のなかに、淋しいという一般的な感覚と、学校生活のあの第一日目の特殊な経験とのあいだに、いつも変らぬ関係が存在したのであろう。とにかく、

彼の中にある何ものかが——おそらく、死んだ母親の愛情が育てたものか、あるいは他の先祖に属する何ものかが——ささやかな優しさをもとめており、しかも、そうした優しさを彼はおよしから得られるものと確信していたのである。そこで彼は、小さな店へ出かけて行った。店に近づき、彼女の笑う声が聞えると、驚くほど新鮮にひびいた。見ると、彼女は一人の年老いた百姓を相手にしていたが、百姓も上機嫌らしく、ぺらぺらしゃべりつづけていた。太郎は待たざるをえなかったが、すぐにおよしの話を独占できないのにいらいらした。しかし、彼女のそばにいるというだけで、いくらか気が晴れた。彼女をじっと見つめているうちに、突然、なぜこれまで、彼女がこんな美しいのに気づかなかったのか、不思議に思った。まったく、彼女は美しかった——村のどの娘よりも美しかった。じっと見つめて不思議がっていると、彼女はますます美しくなっていくように思われた。ほんとに不思議なことであった。彼は、わけがわからなかった。およしも、じっと見つめられて、はじめて、恥ずかしくなったものか、耳もとまでまっ赤になった。そこで太郎は、彼女が世界のだれよりも美しく、かわいらしく、すぐれていることをはっきり確信し、それを彼女に告げたくなった。するとたちまち、およしにむかって、まるでただの人間であるかのように、ぺちゃくちゃしゃべりつづけている年とった百姓に腹が立ってきた。わずか数刻のあいだに太郎にとって全宇宙が一変していたのだが、彼にはそれが分らなかった。ただ彼は、しばらく会わぬうちに、およしがすばらしく美しくなっているのに気づいただけである。そして、機会がくるなり彼は、思いのたけを打ち明け、彼女もまた自分の思いを打ち明けた。そして、二人の思いが、こうも一致していたことが不思議でならなかった。これが、大きな不運のそもそも

の発端だったのである。

五

太郎が、およしにむかって話しかけているのを見た老人の百姓は、ただの客として店へ来ていたわけではない。彼は、本業のほかに、仲人屋もつとめており、ちょうどその時も、岡崎弥一郎という金持の米穀仲買人に使われていた。岡崎はおよしを見て、好きになったので、この仲人屋に、彼女と、その家族の状況を調べるよう依頼していたのである。

この岡崎弥一郎という男は、百姓や、村のすぐ近くの人たちから、ひどく嫌われていた。彼は、もう中年も過ぎ、粗野な、きつい顔つきをした、騒々しい、横柄な男であった。もっぱら悪い男という評判だった。凶作の時期に、米の相場でうまく当てたことで知られ、百姓たちはそれを罪悪視して、決して許していない。彼は、この県の生れでもなく、また身内もまったくなく、ただ十八年前に、妻と子供を一人連れて、西の方からこの村にやって来たのである。妻は二年前に亡くなり、ひどく虐待されたといわれるひとり息子は、突然家出をして、行方が知れない。ほかにもいろいろ、彼にはいやな評判が立っている。一つは、西の方に住んでいたころ、激昂した暴徒たちに家財を掠奪されて、命からがら逃げ出したというのである。また、婚礼の晩に、お地蔵へふるまいを強要されたともいわれる。

評判の非常に悪い百姓が結婚するとき、花婿にお地蔵へ供応させる風習が、いまでも生きている地方がある。一団の屈強な若者たちが、街道や近くの墓地から、石地蔵を借り出して、その家

へかつぎ込む。おおぜいの人がそれにつづく。彼らは、石地蔵を座敷にすえて、すぐに酒肴をしこたま供えろと強要する。もちろん、自分たちに振舞えということで、拒絶するのは、たいへん危険だ。この招かれざる客を全部、もうこれ以上、腹にはいらぬというまで供応しなければならないのである。そうした供応をさせられるのは、たんに公然とした非難だけではない。それはまた、いついつまでもの公然とした汚名でもある。

年にも似ず、岡崎は、若い美しい妻をめとろうという高望みをした。が、彼の富をもってしても、この望みはなかなか容易に達せられなかった。いろんな家から、できない条件をあたまから持ち出されて、彼の申し込みは断わられている。村長は、もっと無遠慮に、いっそ娘は鬼にでもくれてやったほうがましだと答えた。そこで、米穀仲買人は、そんな失敗のつづいたあと、もし偶然にもおよしが目にとまらなかったら、どこかよその土地で嫁をさがさなければならない気になっていた。娘は、ことのほか気に入った。そして、おそらく貧乏人らしい親たちには、いくらか金をつかませれば、娘を手に入れることができるだろうと考えた。そんなわけで彼は、仲人を通して、宮原家とかけあおうとしていたのである。

およしの百姓生れの継母は、学問こそまったくなかったが、どうして、そこいらの単なるおめでたい女ではなかった。彼女は継娘をすこしも愛していなかったが、根が利口なところから、理由もなしに娘にあたることはなかった。しかも、およしは決して邪魔にならなかった。およしはまめな働き者で、おとなしく、すなおで、たいそう家の役に立った。しかし、およしのそういう美点を見抜いた冷静な目は、同時に結婚市場における彼女の価値をも評価していたのである。岡

崎は、悪知恵にかけて、生来自分よりもうわての人間を相手にするとは、夢にも思ってみなかった。おたまは彼の来歴をいろいろ知っていた。財産の程度も知っていた。彼が、村の内外のあちこちの家から、女房をもらいそこねたこともわきまえていた。彼女は、およしの美貌がほんとうに彼の恋情をかき立てたのではないかと思った。老人の恋情が多くの場合、利用できることを知っていたのである。およしは、それほどすばらしい美人ではなかったが、実際に可愛く、どこか人を惹きつける、しとやかな娘であった。彼女のような娘を手に入れるためには、岡崎はもっと遠くまで歩きまわらなければならなかったであろう。もし、これほどの女房を得るために、彼が金を出し惜しみするようならば、おたまはほかに、もっと金ばなれのいい若者を何人か知っていた。およしを岡崎にやるにしても、並の条件ではかなわなかった。まず最初の申し入れを断わってみれば、その後の出方で、彼の本心はわかろう。もし、ほんとうに惚れこんでいるようなら、この近辺の住人ではだれにも無理なものを吹っかけることもできる。だから、彼の真の執心のほどを知ることと、それまでは、およしに事を知らせずにおくことが肝要であった。仲人の評判は一にロのかたさにかかっているから、彼の口から秘密が洩れるようなことは、まずなかったといっていい。

宮原家の方針は、およしの父と継母の協議で決った。年老いた父親は、とにかく、女房の計画に反対することは考えられなかった。それでも、彼女はまず、用心深く、今度のような縁談はいろいろ娘のためになるようにすべきだ、と夫を説いた。彼女は夫と、この縁組によって得られる経済上の利益を論じ合った。なるほど、おもしろくない危険もあるが、それらはあらかじめ、岡

崎にいくつかの協定を納得させておけば、防ぐこともできるだろう、と彼女は主張した。それから、夫の役割を教えた。話し合いがすすんでいるあいだ、太郎にも再々、来るようにしむける。二人が好き合っているのは、蜘蛛の糸のような薄っぺらな気持なのだから、いざという時には、はらいのけることもできよう。だから当分、せいぜい利用したがよい。ああいう若い恋敵がいると聞けば、岡崎もこちらの思うように結論を急ぐにちがいない。

太郎の父が息子のためにおよしをもらいたいと初めて申し入れたとき、話を承知したともしないとも、はっきり返事をしなかったのは、こうした理由によるのである。ただその場で口にされた唯一の難点は、およしが太郎よりも一つ年上で、そんな結婚は世間のしきたりに反する――これはまったくその通りである――ということであった。それでも、反対の理由は薄弱であり、また、見るからにささいであればこそ、その理由とされたのである。

岡崎の最初の申し出も、同時に、それが本気かどうか疑われるといわぬばかりの態度で迎えられた。宮原家では、仲人のいうことがまったく理解できないと拒絶した。どれだけはっきり保証しても、どうしてもわからぬ風を装うので、ついに岡崎は巧みに、これこそ魅力的な提案と思われるものを持ち出した。宮原老人はすると、この件は家内の手にまかせて、その決定を待つことにしようといった。

おたまは、いかにもあきれ返った様子で、即座にその申し入れをはねつけた。そして、気味の悪い話をした。昔、美しい女を非常に安く手に入れようと思った男がいた。とうとう彼は、日に米を二粒しか食べないという美人を見つけた。そこで彼は、その女と結婚した。そして毎日、女

は二粒の米しか口にしなかった。彼は満足した。しかし、ある夜、旅から帰ってきて、ひそかに天窓からのぞいて見ると、彼女は食べるは食べるは――山盛りにした飯や魚をむさぼるように食らい、頭のてっぺんの髪の毛にかくしている穴へ、食物をみな押し込んでしまった。それで、結婚の相手が山姥（やまおんば）と知れたという。

おたまは、はねつけた結果を、ひと月待った――欲しいと思うものの値打ちは、手に入れる困難が増せば増すほど増大することを知っていたから、大いに自信をもって待っていた。すると、予期にたがわず、とうとう仲人がふたたび現われた。今度は岡崎も、前のように横柄なところがなくなっていた。最初の申し入れの条件をふやしたうえ、さらに魅力的な約束まで申し出た。おたまは、もう彼はどうにでもなることがわかった。彼女の作戦はむずかしいものではなく、人間本性の醜い面を本能的に深く知っているところにもとづいていた。彼女は成功を確信した。約束なんか馬鹿相手のもの。いろんな条件を含む法的契約なんぞ、おめでたい人間をはめる罠（わな）にすぎない。およしを手に入れるまでに、岡崎は、少なからぬものを放擲（ほうてき）せざるをえなかった。

六

太郎の父親は、息子とおよしの結婚を心から願って、なんとかそれをかなえてやりたいと、手をつくしてみた。宮原家からはっきりした返事をもらえぬことに、彼は驚いた。朴訥（ぼくとつ）な、正直者だったが、思いやりある気だてからくる直感力もあり、いつも虫の好かぬおたまのわざとらしい丁重な態度に、これは望みがないのではないかと思った。その疑いを、太郎には話したほうがよ

いと考えて、打ち明けた結果、若者はくよくよして熱を出した。しかしおよしの継母は、まだこどの振り出しの段階で太郎を絶望におとし入れるつもりはないのである。病気のあいだ、やさしそうに言付けをしたり、およしにも手紙を出させたりしたので、彼の希望もまた思いどおり息を吹き返すといった有様であった。病が癒えて、出かけて行くと、宮原ではあいそうよく迎えて、店でおよしと話をするのを許してくれた。しかしながら、父親の訪問については、ひと言も説明がなかった。

恋人たちはまた、よく氏神さまの境内で逢う機会があった。およしはしばしば、継母の末の赤ん坊をおぶって現われた。二人は、子守や、子供や、若い母親たちに立ちまじって、話の種になる恐れもなしに、言葉を交わすことができた。こうして、ひと月ばかり、彼らの希望はなんら大きな邪魔をうけなかったが、そのうちおたまは、太郎の父親のところへ、できそうにもない金の相談を持ちこんできた。岡崎は、彼女の張りめぐらした網のなかで猛烈にもがいていたのが、そのもがきようの烈しさから、そろそろ年貢の納め時であることがわかったため、彼女はその仮面の一端を持ち上げたのである。およしはまだ、なにが行われているのかわからなかった。が、ただなんとなく、太郎のもとへ嫁かせてもらえぬように思われた。彼女は日増しに痩せて、青ざめていった。

太郎はある朝、およしとしゃべる機会もあるかと思って、末の弟を連れて神社の境内へ行った。二人は出会った。そこで彼は、気にかかっていることを、彼女に告げた。子供のころ彼の母親が、くびに下げてくれた小さな木のお守りが、絹の袋のなかで割れていたというのである。

「それは、縁起の悪いことじゃなくてよ」と、およしがいった。「神さまがあなたを守ってくださったしるしなの。村に病気がはやったでしょう。あなたもかかったけれど、癒ったでしょう。神さまのお守りが守ってくれたのよ。それで割れたのよ。今日でも、神主さまにお話しなさい。新しいのをくださるわ」

二人は非常にみじめな気持になり、だれに害をあたえたわけではなかったものの、しぜん話は、因果応報のことに落ちついた。

太郎はいった、「おれたちは、たぶん、前世で、たがいに憎み合っていたのだ。たぶん、おれがお前に、ひどいことをしたか、お前のほうがおれに、そうしたのさ。だから、これはその報いなんだ。坊さんがそういっている」

およしは、昔のいたずら気をいくらか混じえながら答えた、「そのとき、わたしは男で、あなたは女だったのね。わたし、あなたが好きで、好きでたまらなかったのに、あなたはとてもつれないの。ようく、おぼえているわ」

「菩薩じゃあるまいし」と太郎は、悲しみを微笑にまぎらわしながら答えた、「前世のことなんか、覚えていられるものか。覚えていられるのは、菩薩道十階のうち第一階にたっして、はじめてできるそうだ」

「わたしが菩薩じゃないって、どうして分って？」

「おまえは女じゃないか。女は菩薩になれないよ」

「でも、観音菩薩は女じゃなくって？」

「うん、そりゃまあそうだ。だけど菩薩は、お経のほか何も愛さないよ」
「お釈迦さまには、奥さんもお子さんもおありになったでしょう？　どちらも、愛されたのでしょう？」
「そうさ。だけど、お棄てになったじゃないか」
「そりゃ、非常にいけないわ、いくらお釈迦さまだって。でも、そんな話、みんな嘘にきまっている。あなた、わたしをもらったら、棄てる？」
そこで二人は、理屈を言い合い、やがて笑い声もたてた。いっしょにいるのが、それほど楽しかったのである。しかし、急に娘はまたまじめになると、こういった。
「ね、あなた！　昨夜、わたし、夢を見たの。妙な川と、海の夢をね。わたし、川が海へ流れ込む、すぐそばに立っていたのよ。そのうち、こわくなったの、とっても、どうしてだか、分らないんだけど。それでわたし、よく見ると、川にも、海にも、水がぜんぜんなくて、仏さまの骨だらけなの。しかも、それがみんな、まるで水のように、動いているの。
するとまた、わたしが家にいて、いつかあなたから着物にっていただいた美しい絹の織物ね、もう着物にしちゃっているの。で、着ているのよ。それで驚いたことに、はじめはいろんな色があるように思ったのに、すっかり白くなっているの。それを馬鹿なことに、死んだ人のように、左前に着ているのです。それから、親戚の家へあいさつまわりをしているの。これから、冥土へまいりますって。どうしてかと、みんな理由を訊ねるのだけど、答えられないの」
「そりゃ、いい夢だぜ」と、太郎が答えた。「死んだ人の夢を見るのは、非常に縁起がいいんだ

ってよ。たぶん、じきに夫婦になれる前兆だぜ」

今度は、娘は答えなかった。微笑も浮べなかった。

太郎はしばらく黙っていた。それからつけ加えた、「もし、いい夢じゃないと思うなら、およし、庭の南天の木のところへ行って、みんなささやくんだよ。そうすりゃ、正夢にならないから」

しかし、その日の夕方、太郎の父親は、宮原およしが岡崎弥一郎の妻になるという報せを受けたのであった。

七

おたまは実際、非常にりこうな女であった。これまで重大な誤りをおかしたことがなかった。彼女は、愚劣な人間をうまく利用して世わたりして行くのに都合よくできている人間の一人であった。忍耐、ずるさ、悪知恵、目はしのきき方、けちくささなど、先祖代々からの農民としているろんな経験が、一つの完全な機械のように彼女の無学な頭脳のうちに凝縮されていた。この機械は、それが生み出された環境のなかで、しかも、うまく処理できる百姓という、特殊な人間材料を得て、はじめて完全に回転したのである。しかし、先祖伝来の経験によっても解明できないため、おたまにもよくわからない別種の人間がいた。彼女は、サムライと平民とはもともと違った人種であるという昔からの考えを、かたくなに信じようとしなかった。法律と習慣が作りあげた身分上の差別以外に、武士階級と農民階級のあいだになんら相違はなく、しかも、そうした差別

は間違っていると考えていた。そんな法律や習慣の結果が、昔のサムライ階級の連中をすっかり腑抜けなあほうにしてしまったのだと考えて、ひそかにことごとく士族を軽蔑していた。つらい仕事もできず、商いのこつもまるで知らないため、彼らが金持から貧乏人へと転落するのを、彼女は見てきた。新政府によって与えられた年金証書も、彼らの手からもっとも下賤な町人階級の狡猾な山師どもにむしり取られるのを見てきたのである。彼女は、弱さを軽蔑した。無能力を軽蔑した。そして、しがない八百屋でも、かつては通行のたびに履物をぬがせて地面に土下座させた者から、いい年になって援助を乞う家老の成れの果てよりは、よほどすぐれていると考えていた。彼女は、およしの母が士族の出であることを有利にはみなかった。娘の繊細なのをそのせいにして、不幸な血統ぐらいにしか考えなかった。彼女はおよしの性格のなかに、高い身分にぞくさぬ人間として読みとれる程度のものは、はっきり読みとっていた。なかでも、この子を不必要に手荒く扱って得るもののないことを理解していたし、そんな性格は、彼女にとっても嫌いではなかった。しかし、およしの内には、おたまにはっきり見てとれぬ、べつの性質——道徳上の悪に対する深いが抑制のとれた敏感さや、何ものをも抑えきれぬ自尊心、どんな肉体的苦痛にも打ちかつことのできる隠れた意志の力などがあったのである。そんなわけで、岡崎の嫁になるのだと告げられたときのおよしの態度に、反抗を予期していた継母はだまされてしまった。彼女は思い違いをしたのである。

最初、娘はまっ青になった。が、次の瞬間、顔を赤くして、にっこり笑うと、頭を下げ、孝心深いあらたまった言葉づかいで、なにごともご両親のお心に従いますといって、宮原夫婦をすっ

かり驚喜させた。もう内心の不満を示す素振りは見えなかった。そこで、おたまはよろこびのあまりつい打ちとけて、掛け合いのあいだの面白かったことや、岡崎がどれだけの犠牲をはらわざるをえなかったかを、一部始終、話して聞かせた。しかもそのうえ、本人の同意もうけずに、老人のもとに嫁られる若い娘にむかっていつもきまって言われる陳腐な慰めのあと、おたまは岡崎をうまく操縦する実際に貴重なこつを助言した。太郎の名前は、一度も口にされなかった。助言に対しておよしは、しとやかにお辞儀をして、継母に心から感謝した。たしかに、それはりっぱな助言であった。おそらく、どんな百姓の娘でも、才気があり、おたまのような教師にじゅうぶん仕込まれれば、岡崎とも添いとげることができたであろう。しかし、およしは根っからの百姓娘ではなかった。彼女が、未来の運命を宣告されたあと、最初はまっ青になり、つづいてまっ赤になったのは、おたまには推量さえできぬ、二つの感情から発したものである。そしてそのいずれも、おたまの打算的な経験にあらわれたものより、はるかに複雑で敏速な考えをしめしていた。

最初にまっ青になったのは、継母が道徳的にまるで不感症なことや、どんな抗議もまったく絶望的であること、今度の結婚がなくもがなの打算だけであの醜悪な老人に身を売られるようなものであること、しかもその取引が残酷で恥ずべきものであることなど、はっきりした自覚にともなう恐怖の衝撃であった。しかし、次の瞬間、彼女の良心に、最悪の事態に耐える勇気と力とに加えて、したたかな悪知恵に立ち向うには巧妙さの必要であることが、痛感させられた。それで、彼女はにっこり笑ったのである。そして笑いながら、彼女の若い意志は、刃もこぼさずに鉄をも断つ鋼と化した。彼女はただちに、なすべきことを正確に知った――彼女のサムライの血が、そ

れを教えたのである。そして、時機を待とうと心に決めた。彼女はすでに勝算の自信があったので、声をたてて笑うのを抑えるのに、よほどの努力を必要とした。彼女の目のかがやきは、おたまを完全にあざむき、おたまはただ、それを満足感の表われととり、その満足感も、金持との結婚によっていろいろ得られる利点を、急にさとったからであろうと想像した。

それは九月十五日のことである。婚礼は、十月六日にあげられることになっていた。しかし、三日後、おたまが明けがた起きて見ると、前夜のうちにおよしがいなくなっていた。内田太郎のほうは、前日の昼から父親の前に姿を見せなくなっていた。しかし、数時間後に、二人から手紙がとどいた。

八

京都発の一番列車がはいってきた。小さな停車場は喧騒にあふれていた――がらがら鳴る下駄の音、がやがやいう話し声、きれぎれに聞える村の子供たちの菓子や弁当を売る――「菓子よろしー！」、「すしよろしー！」、「弁当よろしー！」という――叫び声。五分後、下駄の音も、汽車の扉のばたんと閉る音も、子供たちのかん高い物売りの声もぱったりやんで、笛が鳴り、汽車ががたんと動きだした。ごうごうと音をひびかせ、煙を吐いて汽車が北のほうへしだいに姿を消すと、小さな停車場はがらんとなった。改札口に立っていた巡査も柵をぱたんと閉めて、砂を敷いたプラットホームを、しずかな稲田を見渡しながら、行ったり来たりしはじめた。

すでに秋——大明(だいみょう)の節であった。太陽の光は急に白さをまし、影は鮮明になり、あらゆる輪郭が、砕けたガラスの縁のようにくっきりと見える。夏の暑さに、長いあいだ乾ききって人目につかなかった苔(こけ)は生気をとりもどし、黒い火山灰地の陰になった裸地は、あかるいやわらかい緑が、ところどころ夢のようにけざやかにひろがっている。どの松林からも、ツクツクぼうしのかん高い鳴き声がひびいて聞える。そして、あらゆる溝(みぞ)や小川の上に、小さい稲妻が音もなく閃(ひらめ)く——鮮緑色や薔薇(ばら)色や青い鋼色の静かな稲妻形の光——トンボがすいすい飛んでいるのである。

朝の大気が、とりわけ澄みきっていたことにもよるのであろう、その時、巡査は、北のほうを見ると、はるか線路の先に、なにかチラと目にはいったので、はっとして、思わず手をかざし、それから時計を見た。ところが、一般に、日本の巡査の黒い目は、空を飛ぶ鳶(とび)の目のように、その視野のなかにちょっとでも変ったものがはいると、めったに見逃すようなことはない。いつか、わたしは遠い隠岐(おき)の島へ行ったとき、泊っている宿屋の前の通りで仮装踊りがあるのを、他人(ひと)に知られずに見ようと思って、二階の障子窓に小さな穴をあけて、行列をのぞいたことがあった。すると、白い制服と帽子の日おおいをつけた巡査が一人、通りをゆっくり歩いていた。真夏のころだった。彼は踊り手や群衆の中をかき分けてくるのだが、首を左右へ向けて、連中を見ようとさえする様子もなかった。すると、突然、立ち止って、わたくしの障子の穴をじっと見つめた。その穴に片目を見つけて、格好から、それが外人の目であると即座に判断したのであろう。それから彼は、宿屋にはいってきて、わたしの旅券についていろいろ質問したが、それはすでに調査済みであった。

いま巡査が、村の停車場でみとめ、のちに報告したものは、停車場の北、半マイルあまり先を、二人の人間が、あきらかに村の西北寄りの農家から出てきて、稲田を突っ切って鉄道線路に達したことであった。そのうち一人は女で、着物と帯の色から、まだ若い娘と判断された。東京発の朝の急行が、あと数分で到着する時刻で、こちらへ進んでくる煙は、もう停車場のホームから認めることができた。二人は列車の来る線路に沿ってすぐ走りだした。角を曲って、姿が見えなくなった。

この二人は、太郎とおよしであった。二人が急に走りだしたのは、一つはあの巡査の目を逃れるためであり、また、できるだけ停車場から離れたところで東京発の急行列車と出会うためであった。しかし、角を曲ると、もう煙の近づいてくるのが見えたので、走るのをやめて、歩きだした。列車の姿が見えはじめると、二人は機関士に警戒させないため、線路から離れて、手に手を取り合って、待っていた。たちまち、低い轟音（ごうおん）が耳に突き進んできたので、二人は、今こそと思った。ふたたび線路にもどって、くるりと向きなおると、たがいに両腕で抱き合い、頰と頰を押しつけ、しずかに、すばやく、もうまっしぐらに進んでくる列車の震動で、金床（かなとこ）のようにがんがん鳴っている内側の線路の上に横たわった。

男は微笑（ほほえ）んだ。娘は、彼の首に巻いた両腕にぐっと力を入れながら、耳もとへささやいた。

「二世にも、三世にもわたって、わたしはあなたの奥さんよ。あなたは、わたしのだんなさま、ね、太郎さん」

太郎は、なにも言わなかった。ほとんどその瞬間、空気制動機（エア・ブレーキ）のない高速の列車は、百ヤード

手前から必死に停めようとしたにもかかわらず、車輪は二人の上を通過した――巨大な鋏のように、まっ二つに切断しながら。

九

村の人びとは、この二人をいっしょに埋めた墓石のうえに、いまも花をいっぱいさした竹筒を立て、線香をあげ、念仏をとなえる。これは決して正しいやり方ではない。なぜなら、仏教では情死は禁じられているし、墓地は寺のものだからである。しかし、これには信仰がある――深い尊敬にあたいする信仰が。

こういう死者に、なぜ、どのように、祈りをささげるのか、疑問の向きもあろう。もとより、あらゆる人が祈るわけではない、ただ恋する人たちだけが、とくに不幸な恋人たちだけが祈るのである。他の人びとは、墓をかざり、経文をとなえるにすぎない。ところが、恋する人たちは、霊験あらたかな同情と助力をもとめて祈るのである。わたしも、理由を訊ねたことがあるが、ただ、「死んだ二人はえらい苦労をしたからです」という答えが返っただけである。

それゆえ、こうした祈りをうながす思想というものは、仏教よりも古くからあると同時に、また新しいものでもあるように思える――それは、永遠の「苦悩の宗教」という思想である。

『心』

停車場にて

明治二十六年六月七日

昨日、福岡からきた電報によると、同地で捕えられた重罪犯人が、今日、正午着の列車で、裁判のため熊本へ護送されてくるという。熊本の巡査が一人、囚人を連れてくるために福岡へ出向いていた。

四年前のこと、ある夜、一人の強盗が相撲町のある家に押し入り、家人をおどして縛り上げ、貴重な品をいくつか奪って逃げた。ところが、警察にうまく追跡されて、贓品を処分するまえに、二十四時間のうちにつかまった。しかし、警察署へ引っ立てられる途中、綱を切って、護送者の剣*を奪い、相手を殺して、逃亡した。つい先週まで、行方は皆目知られなかったのである。

ところが、熊本のある刑事が、たまたま福岡の刑務所を訪れて、服役人のなかに、四年間、脳裡に焼きついている顔を見出した。

「あの男はだれです？」彼は看守に訊ねた。

「窃盗犯です」という答え――「ここでは草部という名になっています」

刑事は囚人のそばへつかつかと寄ると、いった。

「草部というのは、お前の名じゃあるまい。野村貞一、お前は殺人犯として熊本に用があるぞ」

重罪犯人はいっさいを白状した。

犯人が停車場へ着くのを、わたしもおおぜいの人ごみにもまれて見に行った。憤慨のさまを、聞くなり見るなりできるものと予期していた。暴力の可能性をさえ心配していたのである。殺された巡査は、たいそう人望があった。身内の者も、きっと見物人のなかに混じっているにちがいない。それに、熊本人はあまりおとなしいほうでもない。わたしは、たくさんの巡査が警備に出ていると思っていた。この予想は見事にはずれた。

列車は、いつものように、喧騒のうちに――下駄をはいている乗客の急ぎ足とからころ鳴る音や――新聞や熊本のラムネを売り歩く少年たちのかん高い叫び声の中に止った。柵の外で、わたしたちは五分ほど待たされた。すると、一人の巡査部長に改札口から突き出されるようにして、囚人があらわれた――狂暴な顔をした、大きな男で、くびを垂れ、両手を後ろ手にくくり上げられていた。囚人と護送の巡査も、改札口の前で立ちどまった。人びとは見ようとして、前へ押し合った――が、黙ったままである。そのとき、巡査が怒鳴った。

「杉原さん！　杉原おきびさん！　来ていますか」

子供をおぶって、わたしのそばに立っていた、ほっそりした、小柄な女が「はい！」と答えて、人ごみを押し分けて前へ出た。殺された人の寡婦だったのである。おぶった子は、その息子であった。巡査が手を振ったので、群衆は後へ下がって、囚人と護衛のまわりに場所をあけた。その場所に、子供をおぶった女が、殺人者と向き合って立った。あたりは死のように静まりかえった。

巡査が語りかけたのは、女にではなく、その子供にだけ向っていった。低い声だったが、はっきりしていたので、わたしは洩らさず聞くことができた。

「ぼうや、これが四年前に、お父さんを殺した男だよ。ぼうやは、まだ生れていなかった。お母さんのお腹にいたのだ。いま、ぼうやを可愛がってくれるお父さんがいないのは、この男のせいなのだよ。こいつを、ごらん――（といって巡査は、囚人のあごに手をかけ、ぐいと顔を上げさせた）――ようくごらん、ぼうや！　こわがらないで。いやだろうが、これもぼうやの務めだ。こいつを、ごらん！」

母親の肩ごしに、その男の子は、おびえたように、目をいっぱいにひらいて、見つめた。それから、泣きじゃくりだした。そして、涙があふれ出た。それでも、言われたとおり、相手のすくんだ顔をじっと、じっと、見つめつづけた。

群衆は、息をこらしているように思われた。

わたしは、囚人の顔がゆがむのを見た。と、いきなり、縛られたまま、身を投げ出すようにくず折れると、地面に顔をこすりつけて、人の心も震わせるような悔恨に駆られたしわがれ声で、叫びだした。

「ごめんなさい！　ごめんなさい！　坊っちゃん、ごめんなさい！　そんなことしたのも、恨みがあってやったんじゃございません。ただ、逃げたいばかりに、こわくなって夢中でやったのです。ほんとに、ほんとに悪いことしました。坊っちゃんに、言いようのないひどい罪をおかしました！　でも、自分の罪のため、これから死ぬのです。わしは死にたい。よろこんで死にます！

だから、坊っちゃん、憐れんでください！――わしを赦してください！」

子供はやはり、黙って泣いていた。巡査は、震えている罪人を引き起した。無言の群衆は、彼らを通すため、左右へ分れた。するとまったく突然、群衆ぜんたいがすすり泣きはじめた。そして、赤銅色に焼けた警護の巡査が通り過ぎたとき、わたしはこれまでに見たことのないもの――めったにだれも見ない――日本の警官の涙を見たのである。

群衆は散ったが、わたしは一人のこって、この光景の不思議な教訓を考えてみた。ここには、罪のもっとも単純な結果を哀切にしめすことによって罪を思い知らせるという、容赦のない、しかし思いやりある正しい裁きがあった。ここには、死ぬ前に、ひたすら赦しを乞う、必死の悔恨があった。そしてここには、おそらく怒ればこの帝国でももっとも危険なものになったと思われる大衆が――すべてを理解し、すべてのことに感動し、悔恨と恥じらいに満足し、人生の困難と人間性の弱さとをすなおに深く経験しているがゆえに、怒りではなく、ただ罪に対する大きな悲しみをいだいている大衆が、いたのである。

しかし、この挿話のなかで、もっとも東洋的であるがゆえに、もっとも意義ある事実は、罪人も人の父であるという意識――どの日本人の魂にも大部分を占めている、子供に対する潜在的な愛情にうったえることによって、悔恨をうながしたことである。

日本の盗賊のなかでもっとも有名な石川五右衛門が、ある夜、人の家に押し入って、強盗をはたらこうとしたとき、自分のほうに両手をさしのべる赤子の笑顔に気をうばわれて、その子とたわむれているうちに、当初の目的をはたす機会を失ってしまったという話がある。

この話を信じることはむつかしくない。毎年、本職の犯罪者が子供にあわれみを示した例が、警察調書のなかに報告されている。数カ月前、地方の新聞におそろしい殺人事件がのっていた——盗賊たちが一家をみな殺しにしたのである。眠っているあいだに、七人の者が文字どおり、細ぎれに切り刻まれた。が、警察が発見したとき、小さな子供だけが、まったく無傷で、血の海のなかでひとり泣いていた。加害者が、その子を傷つけぬようによほど注意をした、まぎれもない証拠があったという。

門付け

三味線をかかえて、七、八歳の男の子をつれた女が、わたしの家へ歌をうたいにやって来た。女は、百姓の身なりをして、頭に青い手ぬぐいを巻きつけている。顔は醜かった。生れつきの不器量が、さらに天然痘のひどいあばたのために、ますます醜くなっている。子供は、歌の刷りものを束にして持っている。

そこで近所の人たちが、わたしの家の前庭に集まってきた――たいがい、赤ん坊をおぶった若い母親や子守りだったが、じいさんやばあさんも――界隈のご隠居連中もまじっている。次の町角にある客待ちの車寄せから、人力車の車夫たちもやって来た。たちまち、門の中は場所がなくなった。

女は、戸口の踏み段に腰をおろして、三味線の音をあわせ、合の手の一節を弾いた――人びとは、たちまち魔法に打たれたようになった。彼らは、微笑しながら驚きの顔を見合せた。

というのは、その醜い、引きつった唇から、奇蹟のような声が――若々しい、よく通る、言いようのないしみじみとした美しい声が、波のように湧き出してきたからである。「ただの女か、木の精か？」と、見物の一人がいぶかしむ。もちろん、ただの女にすぎない――が、それはすばらしい芸術家であった。その三味線の弾きぶりは、どんな腕達者な芸者をも驚かしたかもしれな

い。しかも、これほどの声は、どんな芸者からも聞けなかった、また、これほどの歌も。女は、たんに百姓がうたうようにしか歌っていない——たぶん、歌の調子は、せみや藪うぐいすから習ったものであろう——しかも、西洋の楽譜には書かれたことのない微妙な音階や、その音階の半分、さらにそのまた半分の音階でうたっているのである。

そして、女がうたっているうちに、聴いている人たちは、声も上げずに泣きはじめた。わたしには、歌の文句はわからない。が、女の歌う声とともに、日本の生活の悲しさ、美しさ、辛さが——そこにはない何ものかを悲しげに追い求めるように、わたしの心に通ってくるように感じた。目に見えぬやさしいものが、わたしたちのまわりに集まり、震えているように思われた。そして、忘れられた場所と時の感覚が——人の記憶にある場所や時の感じとはまるで違った——もっと霊的な感情とまじって、しずかにもどってきた。

その時、わたしは、その門付けがめくらであるのを知った。

歌がおわると、わたしたちは女を説き伏せて家に請じ入れ、いろいろ訊ねてみた。昔は、暮しもかなり楽だったので、娘のころ、三味線を習った。男の子は、自分の息子である。夫は中気にかかっている。天然痘のため女は、両目ともつぶれた。それでも、体は頑丈なので、ずいぶん遠くまで出歩くことができる。子供がくたびれると、背に負うてやる。女が歌をうたうと、人びとは泣いて、銭や食べ物を恵んでくれるので、床に寝ついている夫も、この子供も養っていける——女の話はこんなぐあいであった。わたしどもは、女にいくばくかの金と食事をあたえた。そ

れから、子供に手をひかれて、女は立ち去った。

わたしは、最近あった心中を扱っている歌の本を一冊、買い求めた。「玉米・竹次郎の悲しい歌——大阪市南区日本橋四丁目十四番地、竹中よね作」とある。あきらかに、木版で刷られている。そして、挿絵が二つはいっている。一つは、若い男女が手をとり合って嘆いているさまを写している。もう一つは——一種の「しっぽ飾り」のようなもので——書き物机、消えかかった燈明、ひらいた手紙、香炉にいぶるお香、仏式で仏花として死者に供えられる樒をさした花瓶などが描かれている。縦に書かれた速記文字のような、奇妙な草書体の文章は、訳してみればこんなふうにもなろう。

その名も知られた大阪の、西本町一丁目に——語るもあわれな心中ばなし！
年は十九の玉米を——見初めてホの字の年まだ若い職人竹次郎。
たがいに二世をかけて誓ったものの——遊女を恋したそのあわれさ！
たがいの腕に彫った龍と、竹の字——浮世の苦労を夢にも思わず……
身請けの五十五円を払えぬ——竹次郎の心のもだえ！
この世で添えぬ二人、いっそ手をとり合い死のうと……
供養を女の朋輩にたのみ——露と消え行くあわれさ！
死なんという人の交わす水盃を玉米は取りあげ……

心中する二人の心の乱れ――捨てる命のあわれさよ！

要するに、筋にこれという変ったこともなければ、歌の文句が、ことさらすぐれているわけでもない。その芸が、みんなの讃嘆を博したのは、一に女の声にかかっている。それにしても、門付けが去ったあともずっと、声はまだ耳もとに残っているように思われる――一種霊妙な甘美さと悲哀がわたしのうちに呼びおこされ、その不思議な声の秘密を、わたしは解き明かそうとせずにはいられなかった。

そしてわたしは、こんなことを考えてみた。

すべての歌、すべての旋律（メロディー）、すべての音楽は、感情の原始的な自然の表現――つまり、楽の音（ね）によって表わされる悲哀、歓喜、熱情の生れながらのことばが、いくらか進化したものにほかならない。他のことばがそれぞれ異なるように、この楽音の組み合せによることばもまた異なっている。そんなわけで、われわれ西欧人を深く感動させる旋律は、日本人の耳にはなんの意味もない。しかも、われわれの心にまったく触れようとしない旋律が、青と黄色ほどわれわれと異なった精神生活をもつ民族の感情に強くうったえることもあるのだ。……それにしても、わたしにとうていわからないこの東洋の歌が――しかも、盲目の下層の一人の女がうたったこのありふれた歌が、異邦人であるわたしの心に、これほど深い感動を呼びおこすのは、何故であろうか。おそらく、この歌い手の声のなかに、一民族の経験の総体よりもさらに大きな何ものかに――人類の生命のようにひろい、また善悪の知識のように古い何ものかに、うったえることのできる力があ

ったのであろう。

　二十五年前の、ある夏の夕方、ロンドンのある公園で、わたしは一人の少女が、通りすがりのだれかある人にむかって「こんばんは」といっているのを聞いたことがある。それはただ、「こんばんは」という、短い二つの言葉にすぎなかった。わたしは、この少女がだれであるか知らない。顔さえ見なかった。声も、二度と聞いてはいない。それなのに、その後、百回も季節を送り迎えしたのちまで、その「こんばんは」という少女の言葉を思い出すと、よろこびと苦痛の不思議に入りまじった感動に胸のしめつけられる思いがする――その苦痛とよろこびは、おそらく、わたしのものではなく、この世のわたしのものではなくて、前世からのものであるのだろう。

　こんなふうに、たった一度しか耳にしない声に魅せられるのは、それがこの世のものではないからである。それは、無数の忘却の淵にある生のものだ。もちろん、まったく同じ性質をもった二つの声などあろうはずもない。ところが、愛情から出た言葉には、全人類、幾百億の声に共通するやさしい音色がある。受け継がれた記憶によって、生れたばかりの赤ん坊でも、こうした愛撫の調子の意味はわかるのである。同情、悲哀、憐憫の調子をわれわれが知っているのも、疑いもなく、遺伝によるのである。だからこそ、極東のこの町の、一人の盲女の歌が、一西洋人のこころに、個人的存在よりももっと深い感情を――忘れられた不幸のばくぜんと口にできない悲哀を――記憶にもとどめえない遠い時代のおぼろげな愛の衝動を、よみがえらせるのであろう。死者は、まったく死ぬことはない。疲れた心臓と忙しい頭脳のまっ暗な部屋に、彼らは眠っている

——そして、ごくまれに、彼らの過去を呼びもどす何ものかの声のこだまによって、目ざめるのである。

ハル

ハルは、おもに家庭で、世界でもまれなやさしい型（タイプ）の女性をつくり出す旧式な方法にしたがって育った。こうした家庭教育は、日本以外ではけっしてつちかわれない素直な心や、飾り気のない優美な身だしなみや、従順や、義務に対する愛情などをつちかっている。こうして作り上げられた徳性は、古い日本以外の社会では、あまりにもしとやかで美しすぎる。それは、新しい社会のもっときびしい生活——今も、それは生き残っているのだが——に備えるには、それほど賢明なものとはいえない。上品な娘は、建て前として、夫の意のままになるようにしつけられてきた。嫉（そね）みや、悲嘆や、怒りなど——たとえ、これら三者の抑えがたい場合でも——けっして表わしてならないと教えられている。心からやさしく、夫の欠点を克服することが期待されている。要するに、超人的といえるようなこと——少なくとも外見は、完全な無私という理想を実現するように要求されていたのである。そしてこのことは、同じような家柄で、心づかいの細かい——妻の気持をよく汲（く）んで、傷つけないようにしてくれる夫に恵まれた場合、可能であった。

ハルは、夫よりもはるかによい家柄に生れた。そして、実際、夫にはわからぬところがあったから、夫にはすこし過ぎていたのである。二人は、まだ若くして結婚し、はじめは貧しかったが、ハルの夫が商売に日はしのきくほうだったので、やがてしだいに暮しも楽になった。ときどき、

彼女は、暮しのよくなかったときのほうが、ずっと夫に愛されていたように思われた。そして、女の勘は、こういうことについて、めったにはずれないものである。

彼女はそれでも、夫の着物は自分で縫った。夫は彼女の針仕事をほめていた。言いつけをよく聞き、着替えの世話をし、小綺麗な家の中を何くれとなく気持よくした。朝、夫が仕事に出かけるときは愛想よく送り出し、帰ってくればいそいそと出迎えた。夫の友人は手あつくもてなし、驚くほど経済に一家を切り盛りして、金のかかることなど、滅多にねだることがなかった。実際、ねだる必要はまずなかったのである。夫は、けっしてけちではなかったし、彼女を――まるで、自分の翅で身をかざる美しい銀色の蛾のように――綺麗に着かざらして、芝居やその他、遊楽に連れて歩くことを好んだからである。春には桜の花、夏の夜は螢、秋にはかえでの紅葉で知られる行楽地へ、彼女は夫に連れて行かれた。そして、時には打ち連れて、松の並木が舞いを舞う娘のようにゆらぐ舞子の浜べに、日を過したこともある。あるいは、半日を清水の、古い東屋に遊んだこともある。そこは、すべてが五百年前の夢のように――鬱蒼と茂る樹木のあいだから、洞穴からほとばしる清冽な水のせせらぐ声、たえず古い調べをやさしくかなでる、目に見えぬ笛の訴えるような音が――落日の黄金色の光がしだいに紺青にうすれるように、平安と悲哀の溶け合うなぐさめるような音色が聞える。

そうしたささやかな行楽のほか、ハルは外へは滅多に出なかった。彼女の唯一の身内も、夫の親戚も、他国に遠く離れていた。ほとんど行ったことがなかった。彼女は家にいて、床の間や仏壇に花を活けたり、部屋をかざったり、彼女のかげが見えると水面に顔を出す人慣れした池の金

魚たちに餌をやったりするほうを好んでいた。

子供がなかったため、新しい喜びや悲しみもまだ味わったことがない。丸髷を結っていても、うら若い娘のように見えた。彼女は、子供のように単純であった――それでいて、こまごましたことに対する事務能力には夫も感心のあまり、時に、大きなことに知恵を借りることもしばしばであった。おおかた、そのかわいい頭よりも、心ばえのほうが、そうした時、彼によい判断をあたえたのであろう。しかも、直感的であるにしろ、彼女の助言に間違ったことがなかった。五年のあいだ、こうして彼女は夫と幸福に過した――この間、夫は日本の若い商人として、自分より資質のすぐれる妻に対し、これ以上のぞめぬほど心づかいを尽した。

ところが、夫の態度が急に冷たくなったのである――それがあまりに突然だったため、子供のない妻が気をまわさねばならない理由とは、たしかに違うように思われた。本当の理由がつかめないので、彼女は自分の務めに落度があったのだと思い込もうとした。罪のない良心にどう問うてみても、その効がなかった。そこで、気に入ろうと、一生懸命になった。が、彼はいっこう心を動かそうとしない。べつに、荒い言葉を吐くわけではなかった――それでいて、その沈黙の裏に、言いたいことを無理におさえている気配が感じられた。日本の良家で、妻にむかって荒い言葉を吐くことなど滅多にない。それは、粗野で下品なことのように思われている。普通の気質で教育ある人は、妻に小言をいう場合でも、やさしい言葉をつかう。日本のしきたりでは、一般の礼儀からいって、男らしい男性はみな、こういう態度をとることになっている。しかも、これがいちばん無難な態度なのである。洗練された感受性の鋭い女性は、粗野な扱いに長く甘んじるこ

とができない。気の強い女なら、怒りにまかせて何か言われたため、自殺さえしかねない。こんな自殺をされれば、夫として一巻の終りである。ところが、口でいうよりも悪い、遠まわしないじめ方がある。しかも、もっと安全な――たとえば、嫉妬を駆りたてるように、無視するとか無関心をよそおうやり方である。日本の妻は、実際、どんな場合でも嫉妬をおもてに出さぬようにしつけられてきた。が、この感情は、どんなしつけよりも古く――愛とともに生れ、限りなく存在しつづけるにちがいない。あの無感動な仮面の下に、日本の妻は、西洋の妻たちと同じ感情に息づいているのである――華麗な社交界の夜会をたのしみながらも、この苦痛からひとり解放される時の到来を祈りつづけている、あの西洋の妻たちと同じように。

ハルには、嫉妬する理由があった。が、あまりに子供らしかったので、その理由はすぐにはわからなかった。召使たちも、彼女への好意のあまり言うにしのびなかったのである。夫はこれまで、家でもどこでも、夜は彼女と一緒に過した。が、今では、夜になると、一人で出て行った。最初は、仕事にかこつけていた。その後は、言い訳もせず、いつ帰るつもりであるということさえ言い残そうとしなかった。しかも、近ごろでは、無言のうちに、彼女を手荒く扱うようになっていた。人が変ってしまったのである――「まるで魔が差したようでした」と召使たちはいった。実のところ、彼は仕掛けられた罠に巧みにかかっていたのである。ある芸者の一言のささやきが、彼の意思を麻痺させ、一度の微笑が目をくらましたのである。芸者は、妻よりもはるかに器量が劣っていた。が、網をかける――弱い男たちを淫欲の網でがんじがらめにして、挙句のはてに笑いものにして破滅させるまで、いつまでも締めつける――手管にかけてはまことに巧妙であった。

ハルは知らなかった。彼女は、夫の妙な素振りが毎晩のようになるまでは、悪いことを疑ってもみなかった——そして、その時になっても、ただ夫の金が知らないところへ出て行くのに気づいただけであった。彼は毎晩、どこへ行くのか、決して教えようとしなかった。彼女は、やきもちをやいていると思われやしないかと、あえて訊ねることはしなかった。心のたけを口に出すかわりに、彼女はもっと物分りのいい夫なら、すべてを察してくれるほどやさしく夫に仕えた。しかし、商売以外では、鈍い男であった。相変らず毎晩のように、家をあける。そして、良心が麻痺するにつれて、帰りがますます遅くなった。ハルは、よい妻は夜いつまでも、主人の帰りを起きて待つものだと教え込まれてきた。そこでそうしているうちに、いらいらするようになり、寝不足から、微熱ぎみになり、女中たちを時間どおり下がらせたあと、ひとり起きて思い悩んでいた。一度だけ、非常に遅く帰ってきたとき、夫が彼女にいった、「こんなに遅くまで、わしのために起きていてくれてすまない。もう、こんなふうに待たないでくれ!」すると、彼女はほんとに自分のことを心配してくれたものと思って、うれしそうに笑っていった、「眠くなかったのです、それに、疲れもしません。どうぞ、わたしのことはお気になさらないで」そこで彼は、もう彼女のことは気にかけないようになった——よろこんで、言うことをそのまま受け入れたのである。まもなく、ひと晩、ずっと家をあけた。次の晩も同じようにし、また次の晩もそうした。三晩目に、家をあけたあとは、朝食にも帰ってこなかった。ハルは、妻として何か言わなければならない時がきたことを知った。

彼女は朝のうちずっと、彼の身を思い、わが身のことも思いながら、待ちつづけていた。女ご

ころを深く傷つける放蕩を、そのとき初めてさとったのである。忠実な召使たちが、彼女にいろいろと教えた。あとは彼女も、想像できた。からだがひどく悪くなっていたが、自分では気づかなかった。ただ、腹が立って——彼女が受けたこの苦痛——無慈悲な、えぐるような、むかむかする苦痛のために、自分勝手に腹を立てているのだと思っていた。今は妻として言わずにおれないことを——自分の口から出る初めての非難の言葉を、いかに身勝手ととられずに言えるか、考え込んでいるうちに昼になった。そのとき、いきなり胸を衝かれたようになり、目の前がぼんやりかすんで、ぐるぐる回りだした——俥の音がして、女中の「旦那さまのお帰り！」と呼ぶ声が聞えたからである。

彼女は、やつれた身を、熱と苦痛と、その苦痛を見られはしまいかという恐怖のために震わせながら、やっとの思いで夫を迎えに玄関まで出た。夫はハッと驚いた。いつものように微笑を浮べて迎えるかわりに、震える小さな片手で夫の絹の着物の胸もとにすがると——心の底をさぐるような目つきで、じっと顔を見入り——ものを言おうとしたが、たったひと言、「あなた？」と口にしただけだったからである。と、ほとんど同時に、力なくつかんだ手がゆるみ、目は妙な微笑を浮べて閉じた。そして、夫が両腕でささえる間もなく、彼女は倒れた。彼は、かかえ起そうとした。が、すでに霊の緒は切れていた。彼女は死んでいた。

もちろん、みな驚きあわてて、涙ながらに、かえらぬ名を呼び立て、医者を迎えに手をつくした。が、彼女は白い顔を、静かに、美しく横たえていた。いまは、あらゆる苦痛も憤りも消えて、嫁いだ日のように微笑を浮べながら。

二人の医者が公立病院から駆けつけた――日本の軍医たちである。彼らは直截に、きびしい質問を――夫を骨の髄までたち割るような質問をした。それから、するどい鋼のように冷徹な真実を夫に告げて――死者とともに残して去った。

世間では、彼がなぜ出家しないのか、いぶかしんだ――彼の良心が目ざめたことは、まぎれもない事実だったからである。日中は、京の絹織物や大阪の型染めのうずたかい山のなかに――熱心に口もきかずに坐っている。番頭たちは、やさしい主人だと思っている。けっして、荒々しい口はきこうとしない。しばしば、夜遅くまで彼は働いている。住まいはもう移していた。ハルの住んでいたあの小綺麗な家には知らない人がはいっている。家主は二度と足を踏み入れない。おかた、そこへ行けば、いまも花を活けたり、菖蒲かかきつばたという風情で池の金魚をのぞいている、やつれた姿を見かけるかもしれないと思うからであろう。しかし、どこで臥っていても、人の寝静まるころになると、枕べに声もなく人かげがあらわれ――かつては裏切るためにそれを着て出かけた着物を、縫ったり、しわをのばしたり、丹精をこめて仕立てている姿がかならず目にはいるのである。また、ある時には――仕事の一番忙しい最中に――大きな店の騒がしい音が、ぱったりやむ。帳簿の文字がぼんやりしてきて消える。すると、神仏も沈黙させることのできぬ、訴えるようなかすかな声が、彼の孤独の胸のうちへ、問うように、ただひと言――「あなた？」と、ささやきかけるのである。

きみ子

忘らるる身ならんと思う心こそ
忘れぬよりも思いなりけれ　　きみ子

一

この名は、芸者町のある家の門口の提燈（ちょうちん）に書かれてある。

夜見ると、この町は世界でももっとも奇妙な町の一つである。それは、船内の通路のように狭い。黒光りのする家の表という表は、どこも——そのどれにも、まるで磨（す）り硝子（ガラス）のような障子を張った引戸がはまっている——ぴったりしまっていて——一等船室を思い出させる。実際は、どの建物も二、三階はある。が、とくに月でも出ていないかぎり、すぐにはそれとわからない——つまり、下の階はひさしまであかあかとしているのに、それから上は、まっ暗だからである。あかりは、狭い障子のかげにあるランプと、外に吊してある提燈とでつくられている——提燈はどの門口にもある。この二列の提燈のあいだから町を見わたすのである——ずっと先では、それらは一本の動かない黄いろい光の棒になっている。提燈は、卵形のもの、円筒状のものがある。なかには、四角や六角の形をしたものもある。いずれも表面に、美しい日本文字が書かれている。

町はひっそりとして——なにか大きな展示会の閉場後の家具陳列場のように静まりかえっている。それは、住人が——酒席や宴会に出ていて——ほとんどいないからである。彼らの生活は夜なのである。

南の方へすすんで、左手の一番最初にある提燈に書かれた文字は、「金乃家内おかた」とある。つまり「おかたの住む金乃家」という意味である。右手の提燈は、西村という家に、美代鶴という妓——「絢爛と生きる鶴」という意——がいることを語っている。左手の二軒目は梶田家。その家には、花のつぼみという意味の小花と、人形のように可愛い顔をした雛子がいる。その向いは長江家で、君香ときみ子が住んでいる。……こうして、この二列の明るい名前の行列が、半マイルも連なっているのである。

この最後に名をあげた家の提燈に書かれている文字は、君香ときみ子の関係をあらわにしているばかりでなく——さらに、それ以上のことを語っている。つまり、きみ子に二代目という肩書がついているからである。これは訳しにくい敬称だが、きみ子の第二号とでもいおうか。君香はその師匠であり主人であった。彼女は二人の芸者を育てたが、二人ともきみ子という名であった、というよりはむしろ、彼女が同じ名をつけたのである。この同じ名を二度つけるということは、最初の、つまり一代目のきみ子が有名だったという証拠である。不運な、あるいは失敗した芸者の芸名は、けっして後継者にはつけられないのである。

もし、しかるべき理由でその家にはいってみると——提燈のような入口の障子をあけると、障子にとりつけた鈴が客の来たことを告げる——この置屋の芸者たちに座敷がかかっていなければ、

君香に会うことができるだろう。会えば、彼女がなかなか利口で、話の相手を十分つとめるだけの人間であることがわかる。気がむけば、いろいろ変った話――ほんとに血も肉もある話――人情味あふれる話を聞かしてくれる。というのは、芸者町にはいろいろ言い伝えが――悲劇やら、喜劇やら、メロドラマがあるからだ。どの家にも話が伝えられている。君香はそれを全部知っているのである。非常に恐ろしい話がある。笑いださせるものもある。考え込ませるものもある。初代きみ子の話は、この最後の部類にぞくする。それは大して変った話ではない。けれども、西洋人にはいささか理解に苦しむ話のひとつである。

二

もう、一代目きみ子はここにはいない。思い出のなかにあるだけである。きみ子を妹分にしたころは、君香もまだ若かった。

「まったくすばらしい妓でしたよ」とは、君香がきみ子を評していった言葉である。この稼業で評判をとるためには、芸者が綺麗であるか、非常に利口でなければならない。名妓といわれる者は、通常、この両方を兼ね備えている――まだ年端もいかぬうちから、これはと仕込み役に見込まれて選ばれるのである。そこいらの歌い女ですら、年ごろにはけっこう魅力がある――「鬼も十八」*と日本のことわざでもいわせている「鬼の笑顔」ぐらいの魅力は。ところがきみ子は、たんに綺麗というだけでは足りない。日本的な美の理想にかなっていた。十万に一人とないくらいの水準に。しかも、ただの利口さではない。才芸を一身に兼ね備えていた。優雅な歌をよむ――

巧みに花を活け、茶の湯をみごとにこなし、刺繍もし、押し絵もできる。要するに、躾が行きとどいていたのである。彼女がお披露目に出たとき、京都の花柳界では大評判であった。ほとんど何でも好きなようにでき、幸福が目前にあることは、だれの目にもわかった。

しかも、やがて、芸事にもじゅうぶん通じていることがわかった。ほとんどどんな場所でも、どう振舞えばよいか教え込まれていた。彼女の知らないことは、君香がいっさいわきまえていた。美貌の強みと情のもろさ。約束の手管と人をあしらうこつ。そして、男ごころの愚かさや腹黒さ、など。そのため、きみ子はほとんど失敗をおかすことなく、涙もほとんど流さずにすんだ。やがて、君香の望んだとおり――いささか危険な女になってきた。それは、灯りと夜の虫の関係のようなものである。もしも、そうしなければ、あるいは虫が、灯りを消したかもしれない。灯りの果すべき役割は、楽しいものを目に見えるようにすることである。そこには、悪意はない。きみ子には悪意はなかったし、また、それほど危険でもなかった。気をもむ両親は、彼女が堅気の家にはいる気もなければ、色事に身をやつそうともしないことに気づいた。しかも彼女は、自分の血を誓紙に押したり、永遠に変らぬ愛情のしるしに左の小指の先を切れと女にせまるような若い男たちには、ことのほか、つれなくした。そういう男どもの遊びごころをたしなめるために、散散からかったこともある。身も心も自分のものになるなら、土地も家もやろうと申し出た金持連中には、もっとつれなくした。なかには、君香を金持にして、彼女を無条件に請け出そうという大様な客もあった。きみ子は感謝した――が、芸者をつづけていた。彼女は肘鉄をくらわすにも、できるだけうまく、恨みを買わないようにあしらい、たいがい、その絶望を癒やしてやるこつを

わきまえていた。もちろん、例外もあった。ある老人は、きみ子を自分のものにできなければ生きている甲斐がないと思い込み、ある晩、彼女にお座敷をかけ、いっしょに飲ませた。しかし、顔を読むことに慣れていた君香は、うまくきみ子の杯へ、(まったく同じ色の)茶を入れかえ、直観的に彼女の貴重な命を救った——というのは、わずか十分後に、この馬鹿な客の魂はひとり冥土に旅立っていたのである、もちろん、深く失望しつつ……。その晩から、君香は、まるで野良猫が仔猫をまもるように、きみ子に監視の目を怠らなかった。

この仔猫は流行っ児であり、熱狂——錯乱——の的であり、当時の名物、評判のひとつとなった。彼女の名前をおぼえているある外国の王族もあった。その王族はダイヤモンドを贈ったが、彼女は身につけようともしなかった。その他、いろんな贈物を、彼女をよろこばすだけの贅沢のできる者たちから受けとった。そして、一日たりと、彼女の気に入られようとして、「金ピカの若僧ども」は心をくだいた。にもかかわらず彼女は、だれにも特定の男と思わせるようなことは許さず、永遠の愛情を契るようなこともなかった。そういうことを申し出る者には、自分の身分をわきまえている旨を答えた。堅気の女でさえ、彼女を悪しざまにいう者はなかった——家庭の痴話喧嘩に彼女の名は絶対に出なかったからである。実際に、彼女は分をわきまえていた。歳月は彼女をますます魅力的にした。他の芸者でも評判になった者はあるが、彼女と肩を並べうる者はひとりとしてなかった。ある工場主などは、彼女の写真をレッテルにつかう独占権を得た。そして、そのレッテルで、産をなしたくらいである。

ところが、ある日、きみ子もついになびいたという驚くべきニュースがひろがった。実際、彼女は、君香に別れを告げて、彼女の望むがままに綺麗な着物を買いあたえることのできる人と――彼女を日かげに置かず、その暗い前身にうわさを立てさせまいと気をくばる人と――彼女のために十度死んでもよいと思い込み、すでに彼女恋しさに半ば死んだようになっている人と、手をたずさえて去ったのである。君香の話によれば、その痴れ者はきみ子のために自殺をはかり、それに同情したきみ子が、その痴れ心にこたえてやったのだという。太閤秀吉は、天下に恐ろしいものが二つだけある――痴れ者と闇夜である、といっている。君香はいつも痴れ者を恐れていた。その痴れ者がきみ子を連れ去ったのであった。そして彼女は、わが身可愛さといえなくもない涙を流しながら、きみ子はもう帰ってこないだろうとつけ加えた。それは七生かけてもの相思相愛の仲だったからであるという。

にもかかわらず、君香の言葉は必ずしも正確ではなかった。彼女は実際、非常に鋭かった。が、きみ子のこころのうちにある、ある秘密の部屋をのぞくことができなかった。もしのぞくことができたなら、彼女は驚きの叫びを上げたであろう。

三

きみ子がほかの芸者と違うところは、血筋のよいことである。芸名をつけるまえは、名を「あい」といい、正しく書けば愛という意味になる。別の漢字に、同じ音で哀という意味のものがある。「あい」の生涯は、この哀と愛の物語であった。

彼女はきちんと育てられた。小さいころ、ある年とった侍の私塾へやらされた――そこでは、まだ小さい娘たちは、高さ十二インチぐらいの小さな書き机を前に、座布団に坐らされ、教師たちは無報酬で教えた。教師が一般の役人よりもよい給料をとる今日では、教えることが、昔ほど誠実でも、また愉しいものでもなくなっている。彼女の学校の行き帰りには、いつも女中が一人ついて、本や、算箱や、座布団や、小机を運んだ。

その後、彼女は公立の小学校に通った。最初の「近代的」な教科書がちょうど出たころである――それには、名誉、義務、気高い行為などについて書かれた、イギリスやドイツやフランスの物語の日本語訳がうまく選ばれてあって、それらには、この世にありえそうもない服装をこらした西洋人の罪のない小さな絵がのっていた。こうした、なつかしい、感傷を誘うささやかな教科書は、もう珍しいものになってしまった。かなり以前から、あまり愛情も神経も行きとどいていない、見かけだけりっぱな本がそれにとって代っている。あいは物覚えがよかった。年に一度、試験のころになると、偉いお役人がかならず学校へきて、まるで自分の子供のように生徒たちにむかって訓示をたれ、ほうびをあたえるときは一々、柔らかい髪をなでてくれた。もうその人も地位を退き、たぶん、あいなど忘れているだろう。この頃の学校では、少女たちの頭をなでたり、ほうびをくれるような人はいなくなっている。

そこへあの御一新が起り、高位の人びとはすっかり零落してしまった。そこで、あいは学校を下がらねばならなかった。それからいろんな不幸がつづき、結局、彼女に、母親と幼い妹だけが残されたのである。母とあいは、機を織るしかできなかった。しかも、機織りだけでは、生活の

資をかせぐに十分ではなかった。まず家と屋敷が――それから、暮しに必要でない物が、つぎからつぎへと――先祖代々の家宝や、飾り物、高価な衣裳、定紋入りの漆器などが――人の不幸で金をもうけ、いわゆる「涙の金」でふくれ上がった連中の手へ、二束三文でわたっている。生きている人間からの助力はわずかであった――同族の侍の大半は同じく貧困にあえいでいたからである。しかし、売るものが――あいの教科書さえも――なくなったとき、助力は死者に求められた。

あいの父方の祖父が葬られたとき、大名から拝領した刀もいっしょにそこへ納め、しかもそれが、黄金づくりであったことを思い出したのである。そこで墓はあばかれ、精巧な細工物のすばらしい柄は並みのものにとり替えられ、蠟色塗りのさやの飾りははずされた。しかし、中身の名刀だけは、武士たる者の必要なことから、そのままにしておいた。あいは、古式に従って埋めるとき、高位の侍の棺に用いられた大きな赤い土焼きの壺のなかに、直座している祖父の顔を見た。長い歳月埋められてあったのちも、まだ顔立ちは見分けることができた。刀の中身をもとへもどしたとき、無気味な顔でよしよしとうなずくように思われた。

とうとう、あいの母は病気になり、機にむかうことができなくなった。そして、死者の黄金も使いはたしした。あいはいった、「お母さま、もうどうしようもございません。わたしを、芸者に売ってくださいな」母は泣いて、返事をしなかった。あいは泣かずに、ひとり出て行った。

彼女は、むかし父が家へ人をよんで、芸者に酌をさせた折、君香という自前の芸者がしばしば彼女を可愛がってくれたことを思い出したのである。彼女はまっすぐ君香の家へ行った。「わた

しを買ってください」と、あいはいった、「たくさんお金が要るのです」君香は笑い、なぐさめながら、食事を出して、あいの話を聞いた――あいは涙ひとつこぼさず、思いきって話した。「あなたに」と君香はいった、「たくさんお金を上げることはできません。わたしも、あまり持っておりませんから。しかし、これならできます。あなたのお母さんに仕送りするという約束です。そのほうが、あなたにたくさんのお金を上げるより、よろしいでしょう――お母さんは、大家の奥さまでしたから、金の扱い方をご存じないでしょうからね。あなたが二十四の歳になるまでか、あるいはお金を返せるようになるまで、ここへ来て住むという約束した証文を書いて、お母さんの印をもらっていらっしゃい。そうしたら、いまわたしの貯めているお金をただで上げますから、お母さんのところへ持って行ってあげなさい」

こうして、あいは芸者になった。そして君香は、彼女にきみ子という名をつけ、母と妹を養っていく約束を守った。母は、きみ子が有名にならぬうちに亡くなった。幼い妹は学校へ上げられた。前に述べたことは、これ以後のことである。

芸者に恋い焦がれて死のうとまでした若者は、もっとすぐれた身分の者であった。彼はひとり息子であった。両親は、金もあり爵位も持っていたが、彼のためにはどんな犠牲をも厭おうとせずに――芸者を嫁にとることさえ厭わなかった。そのうえ、わが子と愛し合っている以上、きみ子が全然、嫌いでもなかった。

きみ子は出て行くまえに、ちょうど学校をおえたばかりの、妹のうめの結婚式に参列した。彼

女は気立てがよく、愛嬌もあった。きみ子が、この縁組を取りもち、そのさい男に関する日ごろのきびしい知識を利用した。彼女は、きわめて平凡な、実直な、昔かたぎの商人を——よしや、悪いことをしようにも、とうていできそうもない男を選んだ。うめは、姉の選択の賢明さを疑わなかったが、やがて良縁であったことがわかった。

四

きみ子が用意された家へ連れて行かれたのは、春も四月の頃である——この世の憂さをすべて忘れさせるようにしつらえた——高い塀をめぐらし、植込みの深く茂る大きな庭園に、ひっそりとたたずまう魔法の宮殿のようであった。彼女はそこにあって、善行のゆえに、蓬萊国に生れかわった人間のように感じたかもしれない。しかし春は過ぎ、夏がきた——そして、きみ子は相も変らずきみ子のままであった。三度、彼女は、理由をあかさないままに、婚礼を延ばしてきた。

八月になってようやく、きみ子はこれまでの言いつくろいをやめて、たいそう穏やかに、しかしきっぱりと、その理由を述べた。「長いあいだ控えておりましたが、いよいよ申し上げなければならない時機がまいったようでございます。生みの母親と、妹のために、わたしはこれまで地獄のなかに暮しておりました。それはもうすべて昔のこと。けれど、わたしの胸に焼きついたあとはいまも残っており、それを癒やす力はどこにもありません。わたしのような者が、こんな立派な家にはいり——あなたの子をなし——家名をたてる資格など、どうしてございましょう。も

うすこし、しゃべらしてくださいませ。悪いことにかけては、わたしはあなたなんぞより、もっと、もっと存じているのですから。……わたし、あなたの奥さまになって、恥をおかかせしたくありません。ただあなたのお相手、遊び友達、一時の客——といっても、物をいただきたいからではございません。もし、おそばにおれなくなりましたら——いえ、きっと、そういう時がまいります！——あなたも、目がおさめになります。まだ、わたしのことは、お忘れにならないにしても、今のようなわけにはまいりません——これは迷いですから。いま、心から申し上げているこれらの言葉を、おぼえておいてくださいませ。どなたか、ほんとによい女が奥さまになられて、あなたのお子さまをお生みになられることでしょう。わたしは、お子さまを拝見させていただきます。でも、奥さまにはなりませんし、母となる喜びを知ってはいけないのです。わたしはただ、あなたさまの慰め者——迷いであり、夢であり、あなたの人生をよぎる一つの影にすぎません。もっと先になれば、少しはましな者になるかもしれませんが、あなたの奥さまになんぞとてもとても——この世でも、あの世でも。もう一度、お訊ねでございましたら——お暇をとらせていただきます」

五

十月になって、これという理由もないのに、きみ子はすがたを消した——消えてなくなった——まったくどこにもいなくなったのである。

彼女がいつ、どうして、どこへ行ったものか、だれも知らなかった。家の近くでも、彼女の通るのをだれも見た者はいない。初めのうちは、すぐに帰ってくるにちがいないと思われた。美しい高価な身の回りのもの——衣裳や、装身具や、貰いものなど、それだけでもひと財産あるものを、何ひとつ持ち出してはいなかったのである。しかし、なんの便りも、またその徴候もないまま、数週間が過ぎた。そこで、なにか恐ろしいことが彼女の身に起ったのではないかと思われた。川をさらい、井戸も探ってみた。電報や手紙で、心あたりを当ってみた。信頼のおける召使たちに、行方をさがさせた。懸賞を出して、消息を知ろうとした——とくに君香には金を積んだが、彼女は心からきみ子を愛していたから、謝礼なぞなくても、よろこんで探したにちがいない。しかし、謎はいつまでたっても解けなかった。当局へ依頼しても無駄であったろう。逃亡者は、べつだん悪事を働いたり、法を破ったりしたわけではないのである。しかも、巨大な警察機構が、たかがひとりの青年の色恋で動きだすものでもなかった。こうして、数カ月は数年になった。が、君香も、京都の妹も、この美妓を知り讃美していた多くの誰ひとりとして、きみ子を二度と見た者はなかった。

しかし、彼女の予言したことは事実となってあらわれた。時はどんな涙をもかわかし、どんな思いをもしずめる。いくら日本でも、同じ絶望のため、二度と死のうとする者はまったくない。きみ子を愛する男も目がひらいた。そして、優しい女が妻に選ばれて、男の子を生んだ。それからまた、数年たった。かつてきみ子の住んだこの魔法のような家は、幸せいっぱいであった。

ある朝、その家へ、まるで施し物を求めるかのように、旅の尼僧が訪ねてきた。子供は、尼の

いどんな薄暗いいぶせき御堂に、彼女が無量光明の射してくるまえの暗黒を待ちうけているのか、訊ねても無駄であることを彼は知っている。ただ、光明の射すときこそ、弥陀（みだ）の慈顔は彼女に微笑（ほほえ）みかけ——弥陀の御声（みこえ）は、人間の恋人の唇から出る声よりもはるかに深いやさしい口調で、こう語りかけるであろう——「おお、わが法（のり）の娘よ、お前は申し分ない道を生きた。お前は、最高の真理を信じ、理解してきた。それゆえ、いま、わたしはここへ、お前を迎えにきたのである！」

経を読む声を聞きつけると、門口へ走り出た。間もなく、女中が喜捨をする米を持って出て見ると、驚いたことに、尼は子供をなでながら、なにごとかをささやいていた。そこで子供は、女中にむかって、「ぼくがやるのだ！」と叫ぶと、尼も大きな編み笠のかげから、「どうぞ、お坊っちゃまから、おつかわせくださいまし」と請うた。で、子供は尼の鉢のなかへ米を入れた。すると、尼はお礼をいったあと、訊ねた、「お坊っちゃま、いま、お父さまに申し上げるようにおねがいしました言葉を、もう一度、おっしゃっていただけませんか」子供は、たどたどしくいった、「お父さま、この世で二度とお目にかかれぬ者が、お坊ちゃまを拝見して心からよろこんでおります、と申しています」

尼は、にっこり笑って、また頭をなでると、急いで立ち去った。女中がなおも訝しんでいるうちに、子供は奥へ駆け込んで、父親にその尼の言葉を伝えた。

ところが、その言葉を聞いた父親の目はうるみ、子供の上に涙をはらはらと落した。門前に訪ねてきた者がだれであるのか、彼が、ただ彼のみが、知りえたからであった——そして、いままで隠されていたあらゆる犠牲の意味もさとったのである。

いま、彼はいろいろと考える。が、だれにもその胸のうちを明かそうとしない。

彼は、むかし自分を愛してくれた女との距離が、太陽との間よりもへだたっていることを知っている。

どんな遠い町に、どんな曲りくねった名も知らない細い小径に、貧に落ちこんだ者しか知らな

『仏陀（ぶつだ）の国の落穂』

悪因縁

東京の舞台で、けっして衰えることのない出し物の一つは、有名な菊五郎一座による『牡丹燈籠』の上演である。十八世紀の中頃を背景とするこの気味の悪い芝居は、もとは中国の説話に出来したものであるが、円朝というはなし家が、口語体の日本語で、書き割りもすっかり日本風に直した架空の物語を、劇化したものである。わたしは、その芝居を見に行った。そして菊五郎は、恐怖のもつ新奇なよろこびを、わたしによく理解させてくれた。

「この話の霊的な面を、英語の読者に教えてやってはいかが」と、東洋思想の迷路をいつもうまく案内してくれる一友人が訊ねる。「西洋の人たちのほとんど知らない一般的な超自然観を、すこしは説明してくれるではありませんか。翻訳のお手伝いをしても結構ですよ」

わたしはよろこんで、その提案を受けいれた。そしてわれわれは、円朝の話のきわめて異常な部分を、次のようにまとめてみた。ところどころ、もとの話を縮める必要があった。そして、会話体のところだけは、もとの文章のまま訳するようにつとめた――ある部分は、とくに心理学的に興味をそそられるところもあるようである。

以下、『牡丹燈籠』の幽霊の話である。

いました。わたしたちは、いいものを着て、うまいものを食べていたのです。お父さんが病気になるまで、ほんとの苦労は知りませんでした。
暑いさ中でした。お父さんは、それまでずっと元気だったのです。わたしたちは、お父さんの病気がそんなに危険だとは思っていませんでした。お父さん自身、そう思っていなかったようです。しかし、そのあくる日に、死んでいました。もう、わたしたちは、びっくりしてしまいました。お母さんは、心の中をかくして、いままでどおり、お客の前に出るようにしていました。でも、そう丈夫じゃなかったので、お父さんの死んだのが、急にこたえたのでしょう。お父さんの葬式の八日後に、お母さんも死にました。あまりに突然だったので、みんなびっくりしました。それで、近所の人たちは、すぐ人形の墓を作らなければならない——でないと、もう一人、死ぬ者が出てくる、というのです。兄さんは、そのとおりだろう、といいました。が、いわれたとおりには、すぐはしませんでした。たぶん、わかりませんが、お金がなかったからでしょう。とにかく、墓は作られませんでした」
「人形の墓とは、なんですか？」わたしは、さえぎった。
「おそらく」万右衛門はこたえた、「いくつも見ておられながら、それとは気づかれなかったのでしょう。見たところ、ちょうど子供の墓のようです。同じ年に一家の二人が死ぬと、必ずもう一人死ぬと、信じられています。『いつも墓は三つ』ということわざがあります。それで、同じ年に一家から二つ葬式を出したら、二つの墓の横へ三つ目の墓をつくり、その中へ、わら人形の

人形の墓

万右衛門(まんえもん)は、なだめすかしてその子を家(うち)に入れ、食べるものをあたえた。その女の子は、十一ばかり、利口で、痛々しいくらい素直だった。名はいねといった。つまり、稲のことである。ほっそりと弱々しいからだつきが、その名前をふさわしいものにしていた。

　万右衛門のやさしい勧めにしたがって、彼女が話をしはじめたとき、わたしはその声音が、話につれて変ってきたことから、これはなにか奇怪なことを話すなと思った。彼女は、まったく単調な、高い細い美しい声で話した――炭火の上で小さい鉄瓶(てつびん)が鳴っているように、抑揚のない、感情をともなわない声である。日本ではよく、女や娘などが、なにか哀れなことや、残酷なことや、恐ろしいことを、ちょうどこのような落ちついた、平板な、よく通る声で話すことがあるが、けっして無関心なのではない。いつも感情が抑制されているのである。

「うちには、六人いました」と、いねはいった――「お母さんとお父さんと、たいへん年とったお父さんのお母さんと、兄さんとわたし、それに妹と。お父さんは表具屋でした。ふすまを張ったり、掛け物を表装したりするのです。お母さんは髪結い。兄さんは、印刷屋へ奉公にいっていました。

　お父さんもお母さんもなんとかやっていたのです。お父さんより、お母さんのほうがかせいで

しまった』朝のあいだ、ずっとこのようにしゃべっていました。とうとう、おばあさんが立ち上がって、床をどんと踏みつけると、お母さんを——大声で——叱りつけました。『たか！』おばあさんはいいました、『たかよ、お前は、非常に間違ったことをしている。お前が生きているとき、わたしたちは、みんなお前を大事にした。だれも、ひどいことを言ったものはいやしない。なのに、なぜ、いまこの子を連れて行きたがる？　この家の大黒柱であることは、わかっているだろう。もし、連れて行ったら、だれもお先祖さまをみるものが、いなくなるじゃないか。もしも連れて行ったら、家の名をつぶしてしまうのだよ！　おう、たか、これはむごい！　恥知らずだ！　ひどすぎる！』おばあさんは怒りのあまり、からだじゅう震わせていました。それから坐って、泣きました。わたしも妹も泣きました。しかし、兄さんは、まだお母さんが袖を引っぱっているといいます。日が沈むころ、死にました。

おばあさんは泣きながら、わたしたちをなでて、自分でつくった歌をうたってくれました。まだ、それをおぼえております。

親のない子と
浜辺の千鳥。
日ぐれ日ぐれに
袖しぼる。

はいったお棺を入れます。そして、墓の上へは、戒名を書いた、小さな墓石を建てるのです。その墓のある寺の和尚が、小さい墓石に戒名を書いてくれます。人形の墓をつくれば、死なないですむと考えられているのです。……いねや、後を聞かせておくれ」

子供はふたたびつづけた。

「まだ、四人のこっていました――おばあさんと、兄さんと、わたしと、妹と。兄さんは十九でした。お父さんの死ぬちょっと前に、奉公が終ったところでした。まるで神さまが憐れんでくださったようだと、思っておりました。兄さんは、一家の長になりました。たいそう腕がよくて、友達もたくさんいました。だから、みんなを養うことができたのです。初めの月に、十三円かせぎました――これは印刷屋としてなかなかいいほうでした。ある晩、ぐあいが悪いといって家に帰ってきました。頭が痛いと申します。ちょうど、お母さんの四十七日でした。その晩、食べることができませんでした。あくる朝は、起き上がれなくなりました。――たいへんな熱でした。わたしたちは、けんめいに看病して、夜もずっとそばに起きていました。が、よくなりませんでした。病気になって三日目の朝、お母さんと話しだすものですから、びっくりしました。お母さんの四十九日でした――魂が家をはなれる日なのです。兄さんは、まるでお母さんが呼んでいるようにしゃべります、『はい、お母さん、はい！――もうすぐ、参ります！』そして、お母さんが袖を引っぱっていると申します。兄さんは指を突き出して、わたしたちにいいます、『あそこにお母さんが！――そら！――みんな、見えないのか』わたしたちは、なにも見えないといいます。すると、『ああ！　すぐ見ないからだ。いま、お母さんは、隠れている――畳の下に入って

で万右衛門のつかった敬語はとても訳せそうもない）「ほかの人たちの苦労を知りたいとお考えになっておられるのだ。いねよ、旦那さまのことは心配しなくていいから」

こうして、三つ日の墓ができました――が、人形の墓ではありませんでした。そして、家は絶えました。わたしたちは、おばあさんの死んだ冬のころまで、親類にいました。夜なかに死んだのです――だれも知りませんでした。朝がた、まだ眠っていると思ったのですが、死んでいました。それから、わたしと妹は離れ離れになったのです。妹は、畳屋へ――お父さんの友達の一人ですが――もらわれて行きました。大事にされています。学校も行ってるのよ！」

「ああ、不思議なことだ！――ああ、困ったね」と、万右衛門はつぶやいた。それから、気の毒そうに、ちょっと黙っていた。いねは深々とお辞儀をして、帰ろうと立ち上がった。草履を突っかけようとしたとき、わたしは、老人にものを訊ねるため、彼女の坐っていた場所へ席を移そうとした。彼女は、それと見てとると、すぐさま万右衛門にわけのわからない合図をした。万右衛門はその合図にこたえて、わたしが彼のそばへ坐ろうとするのを押しとどめた。

「いねが旦那さまに」彼はいった、「まず畳を叩いてくださいと申しています」

「そりゃ、どうしてだ？」わたしは驚いて訊ねた――ただ、素足に、その子の坐っていたあとの心地よい温もりを感じただけである。

万右衛門は答えた。

「ほかの人のからだで温かくなったあとへ坐ると、その人の不幸を全部、吸いとってしまうから、まず、そのあとを叩かなくてはいけないと、この子は信じているのです」

そこでわたしは、そのおまじないをしないで坐った。そして、二人は笑った。

「いねよ」と、万右衛門はいった、「旦那さまは、お前の不幸を引き受けてくださったぞ」（ここ

『霊の日本にて』

一

むかし、江戸は牛込に、飯島平左衛門という旗本が住んでいたが、ひとり娘の露は、その名の意味する「朝露」のように美しかった。飯島は、娘が十六のころ、後妻をもらった。そして、お露が義母とうまくやっていけないことがわかると、娘のために柳島に小綺麗な別宅をつくって、お米という、よくできた女中をつけて、身のまわりの世話をさせた。

お露は、この新しい家でしあわせに暮していたが、ある日、お出入りの医者の山本志丈が、根津に住んでいる萩原新三郎という若い侍を連れて、訪ねてきた。新三郎はまれに見る男ぶりで、非常な優男であった。そして若い二人は、ひと目で恋におちた。この短い訪問の終らぬうちに、二人はどうにか――この老医の耳に聞えぬように――たがいに生命をかけて誓うことができた。そして、別れるときに、お露は若者にささやいた――「お忘れにならないで！　あなた、また来てくださらなければ、わたし、きっと死んでしまいますよ！」

新三郎は、その言葉をけっして忘れなかった。そして、お露にまた会うことばかりを考えていた。しかし、一人で会いに行くことは、礼がゆるさない。また別宅へ連れて行くと約束した医者について行く機会を、待つよりほか仕方がなかった。不幸にも、老人はこの約束を果さなかった。彼は、突然お露が恋心をいだいたことをさとった。そこで、万一のことがあった日には、彼女の父親に、責任をとらされるのではないかと恐れた。飯島平左衛門は人の首を切ることで評判だっ

たのである。志丈は、新三郎を飯島の別宅へ連れて行ったことの結果を考えれば考えるほど、ますます恐ろしくなってきた。それで、わざと若い友人を訪ねないでいた。
何カ月かが過ぎた。新三郎の来てくれないほんとうの理由を想像もしないお露は、自分の思いのたけが受け入れられなかったものと思い込んだ。そこで彼女は、思いやつれて死んだ。そのあとすぐ、忠実な女中のお米も、女主人を亡くした悲しさのあまり死んだ。二人は、新幡随院の墓地に並んで葬られた――有名な菊人形の見世物が毎年ひらかれる団子坂の近くにいまもある寺である。

二

新三郎は、どんなことが起ったか、なにも知らなかった。が、失望と不安のあまり、長い病気にかかった。やがてしだいに回復したが、まだひどく弱っているところへ、思いがけなく、山本志丈がまた訪ねてきた。老人は、もっともらしくご無沙汰をくだくだと詫びた。新三郎は彼にむかっていった――
「春の初めからずっと病気をしておりまして――まだ、ろくろく食べられないのです……それにしても、あれきり来てくださらないとは、あんまりひどいじゃありませんか。飯島のお嬢さんのところへ、いっしょにまた伺うことになっていたはずですが。親切に歓迎していただいたお礼に、なにかちょっとお礼をしたいのです。もちろん、ひとりでは参れませんので」
志丈は、重々しく答えた。

「まことにお気の毒なことだが、あのお嬢さんは亡くなりましたよ」
「亡くなった！」と新三郎は、蒼白になって答えた、「亡くなった、というのですね」
医者は、しばらく気を落ちつけるように、黙っていた。それから、面倒なことをまじめにとるまいと決心した人のように、軽い調子で口早につづけた。
「あなたをお嬢さんに紹介したのは、わたしの大きな誤りでした。お嬢さんはすぐに、あなたが好きになったらしいのです。なにか、気持を煽るようなことをいったのではありませんか――あの小さな部屋にいっしょにいたときに。とにかく、お嬢さんがあなたに気持が動いたことがわかったのです。そこで、わたしは不安になりました――向うの父親にでも知られたら、全部自分のせいにされるだろうと思ったからです。そこで――はっきり申しますと――あなたをお訪ねしないほうがよいと決めました。それで、わざと長いあいだご無沙汰していたのです。ところが、二、三日前、ふと飯島のお邸へまいり、お嬢さんが亡くなり、女中のお米もまた亡くなったと聞いて、たいそう驚きました。それから、だんだん思い出してみると、お嬢さんがあなたに焦がれ死をしたことがわかったのです。……（笑いながら）ああ、ほんとにあなたは罪つくりな人ですよ！　まったく、ほんとに！（笑いながら）娘が焦がれ死するほどいい男に生れてくるのも罪ですね＊……（まじめに）まあ、死んだものは仕方がありません。もう、何をいっても無駄です――あとはお嬢さんのために念仏でも唱えるしかありませんな……さようなら」
といって老人は、急いで行ってしまった――はからずも自分に、責任があると感じた厄介な出来事について、これ以上、話をするのを避けようとしたのである。

三

新三郎は、お露の死を聞いて、悲しみのあまり、長いあいだぼんやりしていた。しかし、ふたたびはっきり考えることができるようになると、死んだ娘の名を位牌（いはい）に書いて、それを家の仏壇にそなえ、前に供え物を置き、念仏を唱えた。それから毎日、供え物をささげて、念仏を繰りかえした。そして、お露の記憶は、いつまでも彼の心から消えなかった。

お盆のころまで、こうした単調な孤独な生活に、変ったことはなにも起きなかった――盆は死者をまつる大祭日で、七月十三日にはじまる。その日、彼は家を飾り、祭の支度をととのえた――帰ってくる霊を導く提燈（ちょうちん）をつるし、精霊棚（しょうりょうだな）に精霊の食物をそなえた。そして、盆の入りの日の夜、日が沈んだあと、お露の位牌の前に小さな燈明をともし、提燈に火を入れた。

夜は冴（さ）えわたり、大きな月が出ていた――そして風もなく、たいへん暑かった。新三郎は縁先に出て涼んでいた。軽い浴衣を着て、もの思うともなく、夢見るともなく、悲しみにふけるともなく――ときどき団扇（うちわ）をあおいだり、蚊やりをくゆらしながら――そこに坐っていた。万物はひっそりと静まりかえっていた。あたりは寂しく、外を通る人もまれであった。ただ、近くの小川のやさしく流れる音と、夜の虫のすだく音が聞えるばかりであった。

が、この時、カラコン、カラコンと、女の駒下駄（こまげた）の近づく音で、この静けさが破られた――その音は、急に、近づいて、庭の生垣のところまできた。

そこで新三郎は、好奇心に駆られて、のび上がって、生垣越しにのぞこうとした。見ると、女

が二人通って行く。牡丹芍薬の飾りのついた美しい燈籠をさげた一人は、女中のようであった。もう一人は、十七ばかりのすらりとした娘、秋草模様の刺繡をした振袖を着ていた。ほとんど同時に、二人の女は、新三郎のほうへ振り向いた——見ると、お露と女中のお米なので、彼はあっけにとられた。

二人は、すぐに足をとめた。そして娘は叫んだ。

「まあ、不思議なこと！……萩原さま！」

新三郎も同時に女中にむかっていった。

「お米さん！　まあ、お米さんだね！——よく覚えていますよ」

「萩原さま！」と、お米はぼうぜんとした調子で叫んだ。「まことに思いがけない！……あなたさまはお亡くなりになったと聞いておりましたのに」

「こりゃ驚いた！」と、新三郎は叫んだ。「わたしも、あなた方お二人が亡くなったと聞いていました！」

「まあ、なんてひどい話！」と、お米が答えた。「どうして、そんな縁起の悪いことをおっしゃるのでしょう……誰が申しました？」

「まあ、おはいりなさい」と、新三郎はいった、「こちらで、お話しいたしましょう。そこの折戸があいております」

そこで二人ははいって、あいさつを交わした。そして、新三郎は、二人をくつろがせてから、いった。

「長いあいだお訪ねもしないで、まことに失礼いたしました。実は、一カ月ほど前に、あの医者の志丈がまいりまして、お二人がお亡くなりになった、と申したのです」

「それじゃ、あなたに言ったのは、あの人なのですね」と、お米は大声で叫んだ。「そんなことを言うなんて、ずいぶんひどい人です。それで、わたしどものほうへ来て、あなたがお亡くなりになったと言ったのも、あの志丈です。おそらく、あなたをだまそうとしたのでしょう——あなたはお人がいいものだから、だますのは、むずかしいことではないのです。あるいは、お嬢さまが、あなたを好きなことを、つい口に出して、それがお父さまのお耳にはいったのでしょう。そこで、あの後妻のお国が、医者にわたしどもが死んだといわせ、別れさせようとはかったにちがいありません。とにかく、お嬢さまは、あなたがお亡くなりあそばしたということを聞かれて、すぐ髪を切って、尼になりたいとおっしゃいました。しかし、わたしは髪を切ることだけはおとどめしました。そして、やっと、心でさえ尼になった気でいられればよいと納得していただいたのです。そのあと、お父さまは、ある若い方を婿にとらせようとなさいました。が、お嬢さまはお聞きになりません。それで、たいそうもめました——これもおもにお国が原因なのです。とう、わたしどもは別荘を出て、谷中の三崎の小さな家へ移りました。いまでは、ささやかな内職などをして、どうにかかつかつ暮しをつけております。……お嬢さまは、いつもあなたのために念仏を唱えておられます。今日は、盆の初日ですから、お寺にお参りにまいりました。で、帰るところでございます——こんなに遅く——不思議にお会いすることになりました」

「ああ、まったく妙なことだ！」と新三郎は叫んだ。「ほんとうかしら——それとも、夢ではな

いかしら。わたしも、お嬢さんの名を書いた位牌の前で、いつも念仏を唱えておりました！　ごらんください！」そういって彼は、精霊棚に置かれたお露の位牌を二人に示した。
「それほどまでに覚えてくださって、まことにありがとうございます」とお米は、微笑を浮べながら答えた。「ところで、お嬢さまも」とお米は、お露のほうへ向いて、言葉をつづけたが、その間、お露は半ば袖で顔を隠しながら、つつましく黙っていた――「お嬢さまも、あなたのために、七生までお父さまに勘当になっても、たとえ斬られてもかまわないと、ほんとにおっしゃっておられます！……さあ！　今晩、ここへお泊めしてもようございましょうか」
新三郎はよろこびのあまり青くなった。感動から声を震わせて答えた。
「どうぞ、どうぞ。でも、大きな声を出さないように――すぐ近くに、人の顔をみて占いをする――人相見の、白翁堂勇斎という――やかましい奴が住んでいますから。せんさく好きで、知られないほうがいいのです」
二人はその晩、若い侍の家に泊り、明け方すこし前に家へ帰って行った。そしてその晩から、七日のあいだ毎晩――雨の夜も風の夜も――いつもおなじ時刻に、やって来た。新三郎はますます娘に愛着を感じた。二人は、鉄の帯よりも強い迷妄のくびきに、たがいにつながれた。

四

さて、新三郎の住まいの隣の小さな家に、伴蔵という男が住んでいた。伴蔵と女房のおみねはともに、召使として新三郎に使われていた。二人とも若い主人には忠実なように思われた。彼の

力で、比較的楽に暮すことができたのである。
ある晩、かなり遅くなって、伴蔵は主人の部屋で女の話し声がするのを聞いた。それで心配になった。彼は、新三郎は非常にやさしくて人がよいから、だれか悪い女にだまされているのでないかと思った――その場合、一番困るのは召使だからである。そこで、様子を見ようと決心した。あくる晩、彼は、新三郎の家へ爪立ちしてしのび寄ると、雨戸の隙間からのぞいた。寝間の行燈のあかりで、主人と見知らぬ女が蚊帳の中でいっしょに話し合っているのを認めることができた。はじめ、女の様子がよくわからなかった。彼のほうへ背を向けていたので――ただ、女が非常にほっそりしていて――着物の柄や髪型から判断して――まだ若いらしいことしか見えなかった。隙間に耳を押しあてると、その話が手にとるように聞えた。女はいった。
「それでもし、父に勘当されましたら、わたしをそばへ置いてくださいますか」
新三郎は答える。
「引き取りますとも――いや、かえってそのほうが身共の幸せ。しかし、あなたはお父上にご勘当される気づかいはありません。ひとり娘で、非常に可愛がっておいでですから。心配なのは、われわれの仲が、あとで無残に引き裂かれるのではないかということです」
彼女はやさしく答えた。
「決して、決してわたしは、あなたよりほかに夫は考えられません。たとえこのことが知られ、父がわたしのなしたことで手打ちにするようなことがございましても、やはり――死にましてからも――あなたさまのことは思いきることがとうていできそうもございません。それに、あなた

さまだって、わたしがおりませなんだら、きっと、長くお生きあそばされるとも思われません」
そういって寄りすがると、彼のくびに唇をあて、ひしと抱いた。彼もまたかき抱いた。

伴蔵は聞いていて驚いた――女の言葉が普通の女の言葉でなく、身分のある婦人の使う言葉だったからである。それで、万難を排して、その女の顔をひと目見てやろうと決心した。そして、家のまわりを、あちこち、忍び歩いて、あらゆる割れ目や隙間からさしのぞいて見た。こうして、ついに見ることができた――が、同時に、水を浴びたようにぞっと身震いした。髪の毛が逆立った。

それというのも、顔はずっと昔に死んだ女の顔で――かじりついている手は肉のない骨だけの手――腰から下はなにもなく、すっと霞をはいたように消えている。恋にくらんだ人の目に若さと優雅と美しさと見えるものも、のぞいている人の目には、ただ恐怖と、死の空虚としか見えない。と同時に、もう一人の女が、もっとものすごいやつが、部屋の中から立ちあがって、まるでのぞいている人を見つけでもしたかのように、こちらへすばやく進んできた。それで、怖さのあまり、彼は白翁堂勇斎の所へ飛んで行き、気も狂わんばかりに戸を叩いて、やっと起すことができた。

五

人相見の白翁堂勇斎は、非常な老人であった。が、かつて若い頃、ほとんど旅で暮し、いろん

なものを見聞してきたため、容易なことでは驚かない。だが、この怯えた伴蔵の話は、彼を心底から驚かした。彼は古い中国の書物で、生者と死者の愛について読んだことがある。しかし、それを可能なこととは思わなかった。ところが、いま、伴蔵の申し立てることが嘘ではなく、実際になにか非常に不思議なことが萩原の家で起っていることを確信させられた。もし、伴蔵の想像していることが本当であったなら、この若い侍は必ず死ぬにきまっている。

「もしもその女が幽霊なら」――と勇斎は、怯えている下男にむかっていった――「もしもその女が幽霊なら、お前の主人はじきに死ぬにちがいない――なにか非常手段を講じて助けでもしないかぎりはな。そして、女がもし幽霊なら、死相が顔に出る。生きている人の魂は陽気で、清く――死んだ人の魂は陰気で、穢れているからだ。一方は正で、一方は負なのだ。花嫁が幽霊だと、生きていられない。その人の血のなかに、百年も生き長らえられる力があったとしても、その力はたちまち失せてしまうにちがいない……でも、萩原さまを助けるために、わしもできるだけのことをやってみよう。そこで、伴蔵よ、当分、このことを他人にしゃべるなよ――お前の家内にもな。夜が明けたら、お前の主人のところへ行ってやろう」

六

あくる朝、勇斎に訊ねられると、最初のうち新三郎は、女など家に来たことがないと、やっきになって打ち消した。が、そんな下手な言い抜けでは、なんの役にも立たないと思い、老人の目的にぜんぜん欲のからんでいないことがわかったので、ついに、実際に起ったことを認め、事を

内密にしておきたい理由をあげた。飯島のお嬢さんは、できるだけ早く女房にするつもりだ、と彼はいった。

「とんでもないことをいう！」と、驚きのあまりこらえきれなくなって、勇斎が叫んだ。「毎晩ここへ来る連中は、死んだやつらだ！　なにか恐ろしい迷いにあなたはかかっているのです！……一体、ずっとお露さんを死んだものと思い、念仏を唱えて、位牌の前にお供えを上げてきたことが、なによりの証拠じゃありませんか！……死んだ人の唇があなたに触れたのです！——死んだ人の手があなたにかじりついたのですよ！……いま、あなたの顔に、死相が出ていますーーが、あなたは信じない！……まあ、お聞きなさい——お願いだから——もし助かりたいのなら。でないと、二十日を待たずに死にます。その人たちは、下谷の、谷中の三崎に住んでいると申したのですね。そこへ行ったことがありますか。いや！——もちろん、ないでしょう！　じゃ、今日——すぐにでも——谷中の三崎へ行って、家をさがしてごらんなさい！」

こう、熱心に意見をまくしたてると、白翁堂勇斎は、あわただしく帰って行った。

新三郎は、納得したわけではなかったが、しばらく考えたあと、この人相見の助言にしたがい、下谷へ出かける決心をした。谷中の三崎へ着いて、お露の家をさがしはじめたのは、まだ朝も早いうちであった。彼は、通りといわず横町といわず、すみずみまでさがし、表札の文字を読み、折があるごとに訊ねた。が、お米がいったような小さい家に似たものは、いっこうに分らなかった。誰に訊ねても、この界隈で、女の二人暮しをしている家など知っている者はなかった。とう

とう、これ以上さがしても無駄だと思ったので、たまたま新幡随院の境内を通り抜ける近道を帰ろうとした。

突然、寺の裏に、二つ並んで立っている新墓に気づいた。一つは、普通の墓で、身分の卑しい人のために建てられたもののようであった。もう一つは、大きな立派な墓であった。そして、その前にきれいな牡丹燈籠がかかっており、たぶん盆のときに置き忘れたものらしかった。お米がつけてきた牡丹燈籠がこれとそっくりであることを、新三郎は思い出した。偶然の一致とはいえ、おかしく思われた。彼は、墓を見直した。が、墓にはなんの手がかりもなかった。どちらにも、俗名はなかった――ただ、戒名があるだけである。それで、寺へまわって訊ねることにした。質問に答えて寺僧は、大きい墓は先だって、牛込のお旗本、飯島平左衛門の娘のために建てたもので、その隣の小さいのは、お嬢さんの葬式のあとすぐに、悲しみのあまり死んだ、女中のお米の墓であると説明した。

即座に、新三郎の記憶に、お米のことばが、無気味な違った意味をもってよみがえってきた――「わたしどもは別荘を出て、谷中の三崎の小さな家へ移りました。今では、ささやかな内職などをして、どうにかかつかつ暮しをつけております。……」なるほど、ここには小さな家がある――しかも、谷中の三崎だ。が、ささやかな内職とは……？

びっくりして、侍は大急ぎで勇斎の家にもどり、助言と助力を求めた。しかし勇斎は、こんな場合、とても助けられるものでないといった。彼としてできることは、新幡随院の名僧、良石和尚のもとへ、ただちに法力をもって助けてくれるよう、新三郎に手紙を持たせてやるしかなかっ

た。

七

良石和尚は、博識のほまれ高く、高潔の人であった。透徹した眼力をもって、どんな悲しみの秘密も、また、その原因をなしている因縁の本質をも知ることができた。寂然として新三郎の話を聞いてから、いった。

「お前が前世で犯した過ちのため、いま大へんな危険におそわれている。お前と死霊を結びつけている悪因縁は、非常に強い。が、そのわけをいっても、お前にはとうてい分るまい。だから、こうとだけいっておこう――あの死人は、憎しみからお前を害したいとか、なんの恨みを持っているわけではない。それどころか、お前が恋しくて恋しくてならないのだ。たぶん、この娘は、この世のずっと前から――三世も四世も前から、お前を思うているのだ。そして、生れ替るたびに、かたちや境遇が変っても、お前のあとを付きまとうのをやめようとしない。だから、その女の因縁から逃れるのは、容易なことじゃあるまい。が、そこで、霊験あらたかなこのお守り*を貸してやる。それは、海音如来という仏の金無垢だが――法の教えが、海鳴りのように世界じゅう鳴りひびくところから、この名が来ている。そしてこの小さい仏は、とくに死霊除け*になる――つまり、生きている人を幽霊から守るのじゃ。これを、袋に入れ、体につけて――胴巻の下に――しまっておきなさい。……そのうち、この迷っている魂を成仏させるため、寺で施餓鬼をしてやろう。……それから、ここに雨宝陀羅尼経というお経がある。それを毎晩、家で――必ず

――読むようにしなさい。……それにこのお札も一束やろう――家の入口という入口へ、どんなに小さい所でも、全部貼っておきなさい。そうすれば、お経の文句の力で死人は入ることができない。だが――どんなことがあっても――お経を読むのをやめてはなりませんぞ」

新三郎は和尚に深く礼を述べた。それから、お守りと、お経と、お札の束をかかえて、日の暮れるまえに家に帰ろうと急いだ。

八

勇斎の忠言と助力によって、新三郎は暗くなるまえに、家の開き口という開き口に全部、お札を貼ることができた。それから、人相見は自分の家へ――この若者を一人残して――帰って行った。

夜がきたが、暖かく晴れていた。新三郎は、戸をしっかり締め、腰のまわりに貴重なお守りをしばりつけ、蚊帳の中へはいり、行燈のあかりで雨宝陀羅尼経を読みはじめた。長い時間、わけもわからないまま、ただ言葉だけを読誦していた――それから、すこし寝もうとした。が、その日のいろんな不思議な出来事のため、あまりにも心が乱されていた。真夜中が過ぎた。睡気はいっこうなかった。とうとう伝通院の大きな鐘の八ツを知らせるボーンという音が聞えた。

鐘がやんだ。すると突然、いつもの方向から下駄の近づいてくる音が新三郎に聞えた――しかし、いつもよりはゆっくりと、カランコロン、カランコロンと！　同時に、冷たい汗が額に流れ

た。あわてて、震える手でお経をひらき、声を張り上げてまた読みだした。下駄の音がますます近づいてきて――生垣のところで――ぱったり止った！　すると、不思議なことに、新三郎は蚊帳の中にじっとしておれなくなった。恐怖よりもっと強いものに駆られて、彼は確かめたくなった。雨宝陀羅尼経を読誦するのをやめて、愚かにも雨戸へにじり寄り、隙間から外をのぞいて見た。見ると、家の前にお露と、牡丹燈籠を下げたお米が立っている。そして二人とも、入口の上に貼ってあるお札をながめていた。いままで――生前も――これほどお露が美しく見えたことがない。新三郎はほとんど抗しがたくお露のほうに惹かれて行く自分を感じた。けれども、死の恐怖と未知への恐怖が押しとどめた。彼の心のうちに、愛と恐怖が争いつづけ、体は焦熱地獄に堕ちたような苦痛を味わっていた。

やがて、こういっている女中の声が聞えた。

「お嬢さま、とても入れません。萩原さまはお心変りなさったにちがいありません。昨夜のお約束を破られたのですから。わたしたちの入れないように、戸締りしてあります。……今夜は、入れません。……お嬢さまに対するお心がたしかに変ったのですから、もうあの方のことなど、お考えにならないほうが、ようございますよ。きっと、あなたにお会いしたくないのです。だから、そんな薄情な方のために、これ以上苦労なさらないほうがおためですよ」

ところが娘は、泣きながら答えた。

「ああ、あれほどまでにお約束したのに、こんなことをなさろうとは！……男の心は秋の空と、よく聞いてはいたけれど。でも、萩原さまのお心が、ほんとにこんなふうに締め出されるほど、

つれないとは思われない！……米や、どうぞ会わせておくれ。……会わせてくれなければ、わたしは決して、帰らないよ」

こんなふうに、振袖を顔にあて、訴えつづけた――はなはだ美しくもあり、また哀れでもあったが、新三郎には死の恐怖が強かった。

お米は、ついに答えた。

「お嬢さま、こんな酷いことをなさるお方に、どうして気をもまれるのです。……さ、裏口から入れないでもありますすまい、行ってみましょう！」

そういってお露の手を取り、裏口へまわった。そして、二人は、行燈のあかりが吹き消されるように、突然ふっと消えた。

九

毎晩、幽霊は丑の刻にやって来た。そして、夜ごと、新三郎はお露の泣く声を聞いた。にもかかわらず、彼は助かるものと思っていた――すでに彼の運命が、召使たちの裏切りによって決められているとも知らずに。

伴蔵は勇斎に、これまでの奇妙な出来事を、けっして他言しない――女房のおみねにさえ――と約束していた。しかし、伴蔵は幽霊のため、いつまでも、安眠を許されなかった。毎晩、お米が家の中にはいってきて、寝ている彼を起し、主人の家の裏手の、非常に小さい窓に貼ってある

お札をはがしてくれるように頼んだ。伴蔵は恐怖から、そのたびにあくる日の暮れ方までに、お札をはがすことを約束した。が、日中は、それをはがす決心がつかなかった――新三郎に害が及ぶと思ったからである。とうとう、あらしの夜、お米は叱責の声をあげて彼を眠りからさまし、枕もとに立っていった。「わたしたちをからかうのも、いい加減におし！　もし、明日の晩までに、あのお札をはがしておかないと、わたしの恨みがどんなものか、思い知らせてやる！」と、話すうちに、ものすごい顔になり、恐怖のあまり伴蔵は死にそうになった。

伴蔵の女房のおみねは、それまで幽霊の来ていることを少しも知らずにいた。夫にも悪夢のように思われていたのである。が、この夜にかぎって、不意に目がさめると、だれか女が伴蔵と話をしているのが聞えた。と、ほとんど同時に、話し声はやんだ。で、おみねがあたりを見回すと、行燈のあかりのもとに――恐怖のあまり、身を震わせ蒼白になっている――夫の姿がひとり目にはいった。客は帰ったようである。戸は固く締ったままである。誰もはいることはできないように思えた。それでも、嫉妬がぐっとこみ上げる。激しく責め、難詰されたあげく伴蔵は、秘密を打ち明け、現在窮地に立たされていることを説明せざるをえなかった。

そこで、おみねの怒りは驚愕に変った。が、なかなか目はしのきいた女だったから、たちまち、主人を犠牲にして夫を救う方策を考えついた。そして伴蔵に――幽霊と妥協する――奸策を助言した。

あくる夜、丑の刻に二人はまたやって来た。カランコロン、カランコロンという、下駄の音を

聞くなり、おみねは身を隠した。しかし、伴蔵は暗闇の中を会いに出て行き、勇を鼓して妻に言われたとおりのことをいった。

「お叱りもごもっともでございます――けれど、なにもお怒りを招くようなことまで、したいわけではございません。お札をはがせられない理由は、わたしども夫婦は、萩原さまのおかげでようやくその日を送っている者でございますから、萩原さまにもしものことがございましたら、わたしどもが不幸になるのです。でも、百両の金をいただけましたなら、誰からも助けはいりませんから、お望みのようにいたしましょう。それで、百両を下さいましたら、暮しに困る心配もなしに、お札をはがすことができます」

そう言うと、お米とお露はしばらく黙ったまま、顔を見合せていた。それからお米はいった。

「お嬢さま、それごらんあそばせ、この方を困らせてはすまないじゃありませんか――この方になんの恨みをいだく理由はないのでございますから。でも、萩原さまはお心変りをなさったのだから、かれこれ思い悩まれるのは無駄でございます。さ、お嬢さま、も一度申しますが、あの方のことは、もうあきらめあそばしてください！」

しかしお露は、泣きながら答えた。

「米や、わたし、どうしても、あきらめることはできない！……お札をとってもらうために、百両のお金を持ってこられるでしょう。……ね、も一度だけでよいから、おねがい、お米！――も一度だけ萩原さまに会わせておくれよ――おねがいだから！」そういって、袖に顔を隠しながら、うったえつづけた。

「まあ！　どうしてわたしに、こんなことをしろとおっしゃるのですか」とお米は答えた。「わたしに、お金のないことぐらいよくご存じじゃありませんか。しかし、それほどまでにおっしゃるのでしたら、仕方がありませんから、なんとかお金を工面して、明晩持ってまいりましょう。……」それから、この不実な伴蔵へ向っていった、「伴蔵さん、もう一つ言っておきたいのは、萩原さまはまだ海音如来というお守りを身につけておられるので、それがあるうちは、おそばへまいることができません。だから、なんとか、そのお守りを、お札といっしょに、とってください」

伴蔵は、力なく答えた。

「百両を持ってくると約束してくださったら、それもできましょう」

「では、お嬢さま」と、お米はいった、「明晩まで、お待ちあそばせ、ね？」

「まあ、米や！」と、お露はすすり泣いた。「また今夜も、萩原さまにはお目にかからないで帰るのかえ。それは、ひどいよう！」

と、お露の幽霊は、泣きながら、女中の幽霊に手を引かれて出て行った。

十

あくる日になって、夜が来ると、幽霊もやって来た。が、今度は、萩原の家の表に嘆く声は聞かれなかった。その不忠実な下男が、丑の刻に金を手にすると、お札を取り除いたからである。そのうえ、主人が入浴中に、金のお守りを袋から抜き取って、代りに銅の像を入れておいた。そ

して、海音如来を淋しい野原に埋めた。それで、幽霊たちは、中へはいるのになんの支障もなかった。袖で顔を隠しながら、うすい霞のたなびくように、お札のはがれた小窓からスッと中へはいった。が、そのあと、家の中でなにが起ったか、伴蔵にはけっしてわからなかった。

日が高くなってからようやく、彼はまた主人の家に近づき、思いきって雨戸を叩いた。長年のあいだ、返事のなかったのは、初めてである。静寂が、彼を身震いさせた。繰りかえし呼んだが、応えはなかった。そこで、おみねの手を借りて、家の中にはいり、寝間へ一人で行って、また声をかけたが返事がない。明りを入れるため、雨戸をがらがらと開けた。が、家の中は、ガタとも音がなかった。とうとう彼は、蚊帳の隅を上げた。が、中をさしのぞくやいなや、キャッと声をあげて、家から逃げ出した。

新三郎は死んでいた――むごたらしい死にざまであった。顔は、恐怖の苦悶のはてに死んだ人のようである。そして、寝床の彼の脇に、女の骸骨が横たわっていた！　しかも、腕の骨と、手の骨が、彼の首ッ玉にしっかりかじりついていた。

十一

占い師の、白翁堂勇斎は、不実な伴蔵の願いをいれて死骸を見にやって来た。老人は、見るなり総毛立つほどびっくりしたが、鋭い目であたりを見回した。すぐさま、家の裏の小窓からお札のはがれているのに気づいた。そして、新三郎のからだをさぐって、袋から黄金のお守りが抜きとられ、銅の不動像にすり替えてあることを発見した。彼は、伴蔵が盗んだのでないかと思った。

が、事はあまりに異常なので、それ以上行動をとるまえに、良石和尚に相談したほうが賢明に思われた。そこで、彼は用心深く事柄をしらべたうえで、老人の足でできるだけいそいで、新幡随院へ行った。

良石は、この老人の訪ねてきた目的も聞かぬうちに、すぐ奥の一室へ請じ入れた。

「やあ、よく来たねえ」と、良石はいった。「まあお楽に。……ところで、気の毒なことに、萩原さまも亡くなったのう」

勇斎はびっくりして叫んだ。

「ええ、亡くなりました。――でも、どうしてそれをご存じで？」

和尚は答えた。

「萩原さまは、悪因縁の結果ああなったのだ。それに、側に悪い奴がついていた。萩原さまに起きたことは逃れられない。――あの方の運命は、ずっと前世からきまっていたのじゃ。もうこのことについて、心配せんでもよいわ」

勇斎はいった。

「有徳（うとく）の僧は百年先のことを見やぶる力をもつことができると聞いておりましたが、そんな力の証拠を見たのは、これが初めてでございます。……しかし、も一つ、心配なことがあります」

「なんじゃな」と、良石はさえぎった、「あの尊いお守りの、海音如来が盗まれたというのだろう。それについては、心配するな。仏は、原っぱに埋めてある。来年の八月には、きっと見つか

って、ここへ戻ってくる。だから、気にせずともよいわ」

ますます驚いて、老人の人相見は思いきっていった。

「わたしは陰陽や、占いの術を学びました。そして人の運勢をいい当てることをもって暮しを立てております。——けれど、こんなことをどうしてご存じなのか、わたしには分りかねます」

良石は重々しく答えた。

「どうして知ったか、どうでもよいわ。……それより、萩原の葬式について話をしよう。もちろん、萩原の家には菩提所もある。が、そこへ葬ることはよろしくない。飯島の娘お露のそばに埋めてやらねばならない。娘とは非常に深い因縁があったのだから。お前も、いろいろ世話になったろうから、お前の手で墓を建ててやれ」

こうして、新三郎は、谷中の三崎、新幡随院の墓地で、お露のそばに葬られることになった。

ここで、牡丹燈籠の幽霊の話はおわる。

友人は、この話はおもしろかったかと、わたしに訊ねた。それでわたしは——この作者の知識の背景(ローカル・カラー)をもっとはっきり知るために——新幡随院の墓地へ行ってみたいと答えた。

「すぐ、ご一緒にまいりましょう」彼はいった。「でも、この人物たちについてどう思われますか」

「西洋流に考えれば」わたしは答えた、「新三郎は見下げはてた奴です。心の中で、わたしは古

い伝承文学のほんとうの恋人たちと比べてみました。彼らは、よろこんで、死んだ恋人を追って墓までもついて行くのです。それにもかかわらず、キリスト教徒ですから、この世に生をうけるのが、たった一回きりであることを信じていました。しかし、新三郎は仏教徒です——後にも先にも、何百万もの生があるのです。そして、冥界からもどってきた娘のために、この浮世の生命さえ捨てようとしないほど利己的でした。いや、利己的というよりも、臆病だったのです。生れも育ちも侍なのに、坊主に頭を下げて幽霊から助けてもらわなければならなかった。どのみち、くだらない奴なのです。だから、お露に絞め殺されるのも当然です」

「日本人の見方からいっても」と、友人は答えた、「やはり、新三郎は相当くだらない奴です。しかし、こんな弱い性格でも、それを使わなければ、おそらく、うまく動かすことのできない事件を、作者は展開させるのに利用しています。わたしの考えでは、この話の中で、魅力的なのは、ただお米の性格だけです。昔ながらの忠実な、愛すべき女中のタイプ——賢くて、抜け目がなく、いろいろ才覚に富み——死ぬまで忠実だったばかりでなく、死んでからも忠実だったのですから……さあ、新幡随院へ行きましょう」

行ってみると、寺はつまらなく、墓地はひどく荒れはてていた。むかし墓のあった跡は芋畑になっていた。その間に、墓石がいろんな角度にかしいで、墓の文字も苔で読めなくなり、台石だけになっているのやら、こわれた水差しや、首や手の欠けた仏像などがあった。夜来の雨は黒土にしみ——ここかしこに小さな泥水のたまりをのこし、そのまわりを無数の小さな蛙が飛びまわ

っている。あらゆるものが——芋畑をのぞいて——長年、打ち捨てられてあったものらしい。門をすぐ入ったところの小屋に、一人の女が食事の支度をしていた。わたしの連れは、思いきってその女に、牡丹燈籠の話に出てくる墓のことを知っているか訊ねた。

「ああ！　お露とお米の墓ですね」彼女は、笑いながら答えた、「それは、寺の裏の一番近い並びの端っこのそば——地蔵さまの隣にあります」

この種の驚きには日本では、ほかでもよく出会う。

わたしたちは、雨後の水たまりや、新芋の緑のうね——その根はおそらく、その他おおぜいのお露やお米たちの骨肉を食んでいるにちがいない——のあいだを、ひろって行った。そして、ついに、苔におおわれた二つの墓に達したのだが、墓の文字はほとんど消えていた。大きいほうの墓のそばに、鼻の欠けた地蔵さまがあった。

「文字は、ちょっと読みとれそうもありません」と、友人がいった、「でも、お待ちなさい！」……彼は袂から、白い柔かい紙を一枚取り出し、それを墓石の文字の上へひろげると、一塊りの粘土で紙をこすりはじめた。そうしているうちに、汚れた紙の上に文字が白くあらわれてきた。

宝暦六年（一七五六年）三月十一日——子の年、兄、火……

「これは、吉兵衛という、根津の宿屋の主人の墓らしい。もう一つのほうに、なにが書いてあるか見てみよう」

また新しい紙を一枚取り出し、彼はやがて戒名の文字を写しとって、読み上げた。

円明院法耀偉貞謙志法尼

「だれか、尼さんの墓ですね」

「なんだ、ばかばかしい！」わたしは叫んだ。「あの女は、われわれを茶化したのだ」

「それは」友人は異議を申し立てた、「あの女に酷にすぎます！　あなたは、感動を受けたくて、ここへやって来たのでしょう。だから、あの女は精一杯、あなたを満足させようとしたのです。いったい、あの怪談がほんとにあったことだと、あなたは思っているのですか」

因果ばなし

大名の奥方に死期がせまり、自分でも死期のせまったことを悟っていた。文政十年の秋の初めごろから、床を離れることができなかったのである。それは、文政十二年――西洋流の数え方では一八二九年――の四月。桜の花が咲きほこっていた。彼女は、庭の桜や、春の陽気のことを考えた。子供たちのことも考えた。夫の多くの側室――わけても、十九歳の雪子のことを考えた。

「奥や」と、大名がいった、「そなたは、三年にもわたる長わずらい。よくなることならばと、できるだけのことはしてきた――昼夜、そなたの側で看病し、そなたのために祈り、しばしばそなたのために食を断った。だが、その心づくしの効(かい)もなく、また名医たちの見立てにもかかわらず、そなたの命も旦夕(たんせき)にせまっているように思われる。仏がいみじくも仰せられたこの『三界の火宅(かたく)』をそなたが去らねばならぬ悲しみは、おおかた、そなたより余(よ)のほうが、どれだけ深いかしれぬ。そなたの後生に役立つことならば、どんな供養も――費用を惜しまずに――とり行うよう命じてくれよう。そして、余たちはみな、そなたが、冥土(めいど)で迷わずに、すみやかに極楽にはいり、成仏(じょうぶつ)するよう、たえず念仏を唱えよう」

彼は、この上なくやさしくいいながら、その間も、彼女をさすりつづけていた。すると、目を閉じたまま、彼女は虫の鳴くようなか細い声で彼に答えた。

「おやさしいお言葉――ありがとう存じます――ほんとにありがとう存じます。……まったく、仰せのとおり、三年にわたる長のわずらい、ありとあらゆるお心づくしとお情けをいただきました。……この最期の時にのぞんで、どうして、ほんとに、ただ一つのまことの道からそれるようなことがありましょう――今となって、浮世のことに思いを残すのはよろしくないのですが――ただ一つ、お願いがございます――ただ一つだけ。……あの雪子をここへ、お呼びくださいませ――ご存じのように、あれを妹のようにいつくしんでおります。あとのことをなにくれと、話しておきたいのでございます」

雪子は、殿のお召しを受けてそこへあらわれ、手まねきにしたがって、床のそばにひざまずいた。大名の奥方は目をひらき、雪子のほうを見ていった。

「ああ、雪子か！……よく来ておくれだね、雪子！……もう少し、近くへお寄り――よく聞えないし、大きな声が出せないから。……雪子、わたしはもう死にます。これからは、万事につけ殿さまによく仕えてほしい――わたしの亡き後は、わたしの代りになってもらいたいのです……そしていつまでも、ご寵愛を受けるように――ええ、わたしの百倍も――すぐに高い地位にのぼって、奥方におなりなさい……そしていつまでも、殿さまを大切にして、ほかの女に、寵を奪われないようにおし。……これが、そなたに言い残しておきたいことだったのです、雪子。……おわかりかい」

「まあ、奥方さま」と、雪子は抗議した、「お願いでございますから、そんな思いもよらぬこと

をおっしゃらないでくださいまし！　ご存じのように、わたしは貧しい卑しい生れの者でございます。殿さまの奥方になろうなどとは、とんでもないことで！」

「いや、いや！」と奥方は、かすれた声でいった、「もう、表向きの言葉を使っている時ではありません。おたがいに、本当のことだけをいいましょう。わたしが死んだら、きっとそなたは、もっと地位が高くなります。もう一度いっておきたいが、そなたに、殿さまの奥方になってほしいのです――ええ、そうです、雪子、わたしが成仏するより、もっとこのことを願っているのです！……あ、も少しで忘れるところだった！――そなたに、一つだけ願いがあります、雪子。そなたも知っているように、庭に一昨年、大和の吉野山から取り寄せた、八重桜があります。もう満開になっているとか――その花を見たいのだよ！　じきに、わたしは死にます――死ぬ前に、どうしてもわたしはあの木を見たい。さあ、わたしを庭へ連れて行っておくれでないか――すぐに、雪子――あれが見えるように……さあ、そなたの背中に、雪子――そなたの背中へおぶっておくれ」

こういっているうちに、彼女の声は、だんだんはっきりして、力強くなってきた――まるで、願望の強さが新しい力をあたえたかのようであった。それから、彼女はいきなり泣きだした。雪子はどうしてよいのか分らないため、じっとひざまずいていた。が、大名はうなずいて承諾の意を示した。

「これが、この世の最後の願いだ」彼はいった。「奥はこれまで桜の花が好きだった。で、あの

大和桜の咲いているのをひどく見たいのであろう。さあ、雪子、奥の望みどおりにしてやるがいい」

子供をしがみつかせるため、乳母が背中をむけるように、雪子は奥方のほうへ両肩をさし出していった。

「奥方さま、さ、どうぞ。どうしたらよいのか、お教えくださいませ」

「さ、こうして！」——と死すべき女は、ほとんど人間業とも思えぬ力をもって、雪子の肩にすがりついて立ち上がりながら答えた。ところが、まっすぐ立ち上がると、あっというまに雪子の首筋から着物の下へ、細い手を両方さし込んで、娘の乳房をぐっとつかみ、いやらしい笑い声をたてた。

「思いがかなった！」彼女は叫んだ——「桜への思いがかなった*——が、庭の桜ではない！……思いがかなうまで、死にきれなかった。もう、かなった！——ああ、うれしや！」

そして、そういったまま、うずくまる娘の上へどっと倒れかかると、死んだ。

侍女たちはただちに、雪子の肩から亡骸をかかえ上げて、床へ移そうとした。ところが——不思議なことに！——見たところなんでもないこのことが、できなかった。冷たい両の手が、どう説明してよいかわからぬままに、娘の乳房にくっついて——生きた肉となったようであった。雪子は、恐怖と苦痛のあまり気を失った。

医師たちが呼ばれた。彼らは、なにが起ったのかわからなかった。並の手段では、死んだ女の

手を被害者のからだからはずすことができなかった。しっかりくっついているので、無理に離そうとすれば血が出た。それは、指がつかんでいるせいではない。てのひらの肉が、どう説明もできないままに、乳房の肉にくっついていたからであった！

当時、江戸一番の名医といえば外人——オランダの外科医であった。この医者を、すぐさま招くことに決った。ていねいに診たあと、彼は、こんな例にぶつかったことはないが、雪子をすぐに助けるために、両手を死体から切断するよりほかに方法はないといった。乳房から手を離そうとすることは危険だというのである。この意見は入れられた。そして、両手は手首のところから切断された。しかしそれはまだ、乳房にくっついたままであった。やがて、それは黒くなってしなびた——ずっと昔に死んだ人の手のように。

ところが、これは恐怖のはじまりにすぎなかった。

その手は、しなびて血も通っていないようであったが、死んではいなかった。ときどき——ひそかに、大きな灰色の蜘蛛のように——そして、それからは毎晩——いつも丑の刻にはじまるのだが——わしづかみにして、締めつけ、責めさいなむのである。寅の刻*になってようやく、その苦痛はやむ。

雪子は髪を切り落し、托鉢の尼になって——脱雪と名を改めた。死んだ奥方の戒名——妙香院

殿知水涼風大姉——を刻んだ位牌を作らせ、それを行く先々に、たずさえて行った。そして、毎日それを前に、死者の赦しをねがい、嫉妬する心の安らぐように供養をつづけた。しかし、こんな苦痛をあたえている悪因縁は、なかなか果てそうにもなかった。夜ごと丑の刻になると、その手は彼女を責めさいなみ、もうそれも十七年になるとか——一夜、彼女が、下野国河内郡田中村の、野口伝五左衛門の家に泊った折、この話を聞いた人たちの証言による。弘化三年（一八四六年）のこと。それ以後、彼女の消息は聞えずとなん。

焼津にて

一

明るい陽光をうけると、この焼津という古い漁師町は、一種独特の魅力にとむくすんだ色を呈する。この町が占めている——小さな入海に沿って彎曲する——きびしい灰色の海岸の灰色を蜥蜴のようにそれは帯びるのである。町は、丸石を積みあげた風変りな防壁で、荒れる海から守られている。この防壁は、波打ち際では、台地の段のような形に作られている。それを構成している丸石は、地中に深く打ちこんだ杭の列のあいだに、竹籠のようなもので編みこまれて、しっかり固めてある——杭の一つ一つの列が段をそれぞれ支えているのである。こうした防壁のてっぺんに立って陸のほうをながめると、町全体が一望のもとに見わたせる——ずっと一面に灰色の屋根瓦や風雨に打たれて灰色になった羽目板などがつづく中を、ここかしこ、寺の庭のありかをしめす松の樹立ちが見える。海のほうは、何マイルもつづく海原のむこうに——のこぎりの歯のような青い連峰が、巨大な紫水晶のように、水平線にくっきりと群がっている——雄大なながめが見え、そのかなた、左手に、ひときわ高く屹立する、壮麗な富士のすがたが見える。岸壁と海とのあいだには砂がなく——主に玉石の、灰色の斜面があるだけである。そして、寄せる波とと

もにそれらの石がころがるので、荒れた日に波打ち際を通るのは、いやな仕事である。一度、石の波に打たれると――わたしは何度かやられたが――その経験はなかなか忘れられない。

　ある時刻になると、このでこぼこの斜面はあらかた、幾列もの妙なかっこうをした船によって占められる――この地方特有な形をした漁船である。それらは、非常に大きな船で――一度に四、五十人の人を運ぶことができる。舳先は妙に高く、ふつうそれに、仏教か神道の護符（おまもりないしは守護）が貼りつけてある。神道の護符のふつうの形は、船の守護のため富士の女神をまつる神社からあたえられる。その文句はこうである――富士山頂浅間宮大漁満足――つまり、好運にも大漁になったあかつきには、この船の船主は、富士山頂に社をもつ神のために、大いなる苦行をおこなうことを誓う、という意味である。

　日本ではどの海岸地方にも――同じ地方でも漁村がちがえば――その地方もしくはその漁村特有の形をした船や漁具がある。事実、わずか数マイルしか離れていない村でも、数千マイルも離れて生活している種類の発明かと思われるほど、形を異にした網や船をそれぞれ作り出していることが、時にはみとめられる。この驚くべき多様性は、ある程度、地方の伝統を尊重する気風に――数百年にわたって先祖代々の教えと習慣を改変せずに保持する賞讃すべき保守主義によるものかもしれない。けれども、所が変れば漁法も変るという事実は、もっと説得力がある。だから、どこでも、ある場所で作られる網や船の形は、よく調べてみれば、ある特殊な経験にもとづく発明品であるように思われる。焼津の大きな船は、この事実のよい例証となる。これらの船は、日

本帝国のあらゆる地方へ鰹節を供給している、焼津の漁業の特殊な条件によって工夫されたものである。それらは、非常な荒海をも乗りきれるようにする必要があった。こうした船を海へ出したり、引き入れたりすることは、なかなかつらい仕事である。が、村じゅうが手伝う。斜面へ平べったい木の枠を一列に並べて、またたく間に一種の滑り道が、その場で作られる。そして、その枠の上へ、底の平たい船を、長い綱でひっぱり上げたり下ろしたりする。たった一そうの船をそんなふうに動かすため、何百人もの人が――男も、女も、子供も、妙に物悲しい歌に合わせて、いっしょに引っぱっているのが見られる。台風がくると、船はずっと町なかにまで移される。そんな仕事を手伝うのも、なかなか面白い。手伝うのが他所者なら、漁師たちはおそらく、海の珍奇な産物でその労をねぎらうであろう。驚くほど脚の長い蟹とか、とほうもないほど腹をふくらます河豚とか、手にさわってみなければ、とても生き物とは信じられない、奇妙な形をしたいろんなものなどで。

舳先に護符を貼りつけた大きな船が、この海岸で一番妙なものだというわけではない。竹を裂いて作った餌籠のほうが、もっと珍しい――高さ六フィート、まわり十八フィート、丸屋根のてっぺんに小さな穴があいている。乾かすために岸壁に沿って並べてあるところなど、少し離れて見ると、何ものかの棲み家か小屋と見まちがえられるほどである。それから、鋤のようなかっこうをした、金物を先へ打ちつけた大きな木製の錨がある。爪の四つある、鉄製の錨。杭を打ち込むのに用いる、巨大な木槌。その他、なんのために使うのか想像もつかぬ、もっと珍しい、いろ

んな道具類がある。いっさいが、なんともいえぬほど古めかしく奇妙であることから——時空を遠く隔てているという——無気味な距離感をいだかせ、目に見えるものの実在性を疑わしめる。しかも、焼津の生活は、たしかに何世紀も昔の生活なのである。土地の人びともまた、古い日本の人間である。子供のように——善良な子供たちのように——率直で親切で、欠点といってよいほど正直で、これから先のことなど思いもせず、古いしきたりや古い神仏に忠実なのである。

二

たまたまわたしは、盆の、つまり死者の祭の三が日を焼津で過した。で、三が日の最後の日の、美しい送り火の行事を見たいと思った。日本の多くの地方では、精霊が海を渡って行くのに、ごく小さな舟を用意するのだが——それは平底舟か漁船の小さな模型で、そのいずれにも食物や、水や、火をつけた香を供える。そして、この精霊舟を夜おくり出すときは、小さな燈籠か提燈を添える。しかし、焼津では、燈籠だけを流す。そして、暗くなってから、水面に下ろすのだと聞いていた。ほかの土地では、真夜中がふつうの時間だが、焼津でもまた、それが別れの時間だとばかりわたしは思っていた。そして、その見物に間に合うように起きるつもりで、うかつにも夕食後ひと眠りした。ところが十時になって、また浜へ出てみると、みんな終って、誰もかれも家に帰ってしまった後であった。海上には、螢火の長い群れのようなものが見える——燈籠が列をなして海へ流れ出ているのであった。が、もうずいぶん遠くへ去り、それらは色のついた灯の点点としか見えなかった。わたしは、たいそうがっかりした。二度とはもどってこない機会を、む

ざわざ取り逃がしたように思われた——というのは、こういう盆の古い習慣は急速に滅びつつあるからである。が、次の瞬間、思いきってその灯のところへ泳いで行ってみようという考えが胸に浮んだ。それらは、ゆるやかに動いている。わたしは浜辺に着物を脱ぎ捨てると、海に飛び込んだ。海はおだやかで、美しく燐光を発している。抜き手を切るごとに、黄いろい火の流れは燃え立った。わたしは泳ぐ手を早め、思ったよりもずっと早く、燈籠の船団の最後尾に追いついた。このささやかな船出をさまたげるなり、しずしずと渡って行くそれらの進路を変えることは、無情であるように思われた。そこで、それらの一つに身を近づけて、仔細に研究することで満足することにした。

構造はきわめて簡単であった。底は、真四角な、厚板で、さしわたし十インチぐらい。その四隅に、高さ十六インチぐらいの細い棒が立っている。そして、このまっすぐに立てられた四本の棒は、さらにその上を横にわたした四本の棒に結びつけられていて、紙障子の側面をささえている。底の中央に突っ立っている長い釘の先に、灯のついた蠟燭が立っている。上はあいたまま。四方は、五つの違った色——青、黄、赤、白、黒——を示している。これら五つの色は、形而上的に五つの仏と同一視される仏教の五大——すなわち、空、風、火、水、地——を象徴しているのである。横に張った紙の一つは赤、も一つは青、さらに一つは黄色であり、四番目の右半分は黒で、左半分は無色のまま、白をあらわしている。この透しのどれにも、戒名は記されてなかった。燈籠の内側には、ただ蠟燭がゆらめいているだけであった。

わたしは、夜通し流れて行き、しかも流れて行くにしたがって、風と波に押しやられて、ますます散り散りに離れて行く、これらのもろい明るいものを見守っていた。それらの一つ一つが、透しの色を震わせて、まるでおびえる一つの命――外の暗黒の世界へそれを運んで行く盲目の流れにうち震える一つの命――でもあるかのように思われた。われわれ自身も、より深い、よりおぼろげな海へ下ろされ、必然の溶解へと流されて行くにともない、しだいに散り散りに分れて行く身の上ではないのか。やがて、思念の炎は燃えつきる。すると、そのささやかな枠組(わくぐみ)や、かつては美しかった色の残骸のすべてが、永遠に色のない虚空へ溶け去らねばならないのである。

　こう物思う瞬間にも、わたしは、ほんとに一人きりなのか、疑いはじめた――わたしのかたわらで、ゆらゆら揺れているものの中に、たんなる光のおののきを超える何ものかが存在するのではないか、燃えつきる炎にとりつき、それを見ている者をながめている霊が存在するのではないかと、自問しはじめた。かすかに冷たい戦慄(せんりつ)が、わたしの身の上をよぎる――おおかた、海底からのぼってくる冷気なのであろう――あるいは、霊的な思いがひそかに忍び寄ってきたのであろう。この海べの古い迷信――精霊が通るときは危険だという古い漠然とした戒め――が心に浮んだ。夜分こうして、ここにいる自分の身に――死者の灯に手を出している、あるいは手を出しているように見える自分の身の上に、なにか不幸がふりかかりでもすれば、やがて自分も、明日の無気味な伝説の主題となるだろうと思った。わたしは――灯りにむかって――別れの念仏を唱え、岸へむかって急いだ。

ふたたび石に足が触れたとき、前方に白い影が二つ見えたので飛び上がった。が、水は冷たくないか、と訊ねるやさしい声に、わたしはほっとした。それは、お内儀といっしょに、わたしを探しに来た、宿の老主人である魚屋の乙吉（おときち）の声であった。

「冷や冷やして、気持がいいくらいだ」彼らと連れだって帰るため、着物をひっかけながら、わたしは答えた。

「まあ」と、お内儀はいった、「盆の夜、海へ出るのはよろしゅうございませんよ」

「遠くへは行かなかったよ」わたしは答える。「ただ、燈籠を見たくてね」

「河童（かっぱ）も溺（おぼ）れ死に、といいます」と乙吉は抗議する。「この村の男で、あらしのとき、舟がこわれて、七里も泳いで帰った者がいます。が、この男も後で溺れましたよ」

七里といえば、十八マイル足らずになる。いまどき、この村で、そんなに泳げる若者がいるのかと、わたしは訊ねた。

「たぶん、おります」老人はそう答える。「泳ぎの達者なのはたくさんいます。ここの連中は、みんな泳ぎます――小さな子供たちでさえ。でも、漁師がそんなに泳ぐのは、命が助かりたいときだけです」

「または、恋をしたときとかね」おかみはつけ足した――「あの端島（はしま）＊の娘のように」

「だれ？」と、わたしは訊ねた。

「漁師の娘です」と、乙吉はいった。「七里離れた網代（あじろ）に、恋人がいたのです。夜になるとその男のところへ泳いで行き、朝がた、泳いで帰ったものです。男は、その道しるべに火を燃やして

おきました。が、ある暗い夜、燃やすのを忘れたか——風で消えたかしたのです。娘は、方向がわからなくなって、溺れました。……伊豆では有名な話です」

「それじゃ」と、わたしはひとりつぶやいた、「極東では、かわいそうにヘロのほうが泳いで行くのだな。もし、そんな具合だったら、西洋ではレアンドロスは、なんと言われただろうか」

三

いつも盆のころは、海が荒れる。だから、あくる朝、波が高くなってきても、わたしは驚かなかった。一日中、それは高まってきた。午後も半ばになると、波は驚くほどになった。わたしは岸壁に坐って、日暮れまで、それを見つめていた。

それは、長いゆるやかな——ものすごく大きな恐ろしい——うねりであった。ときどき、砕ける直前に、高くそびえる大波が、まるで硝子が砕けるときのようなピシピシという音をたてて、青い大波にいっぱい裂け目ができる。それから、足下の岸壁をもゆるがすほどの轟音とともに崩れて平らになる。……わたしは、麾下の軍隊をまるで潮のように——怒濤のようにつづく剣の波で——雷鳴のごとく殷々ととどろきわたる砲声とともに襲撃させた、今は亡きロシアの偉大なる将軍*のことを思い出した。まだ、ほとんど風はなかった。が、どこかほかの所で空が荒れていたにちがいない——白波がしだいに高まってくる。その動きに、わたしはすっかり心を奪われてしまった。そうした動きの、なんとすばらしい複雑さ——が、また、なんと永遠に新鮮なことであ

ろうか！　その五分を、誰がじゅうぶんに描きうるだろうか。二つの波が、まったく同じように砕けるのを見た人間が、かつてこの世にあっただろうか。

そしておそらく、怒濤のごときうねりを見、その咆哮を耳にして、厳粛な思いに打たれぬ者はなかったであろう。わたしは、馬や牛のような獣でさえ、海の前では瞑想的になるのを知っている。彼らは、その無際限な光景と音によってこの世のいっさいのものを忘れてしまったかのように、じっと立ったまま、じっと見すえて、耳をすましているのである。

この海岸には、「海には魂も耳もある」という言い伝えがある。意味はこういうわけだ――「海をこわいと思うとき、そのこわさを、けっして口に出してはならない。こわいことを口にすると、波は急に高くなる」……いま、こういう想像は、まったく自然なようにわたしには思える。海で泳いでいるか、あるいは船にあるとき、海は生きてはいない――意識のある、敵意ある力でないと、心から信じられないことを、わたしは告白せざるをえない。理性は、当面、こうした空想に対してなんの役にも立たない。海をたんなる水の塊りにすぎないと思うためには、押し寄せる大波もゆったりと寄せるさざ波としか見えぬような、高いところに身を置かねばなるまい。

しかし、この原始的な空想は、白昼よりも夜の暗闇のときのほうが、さらに強くかき立てられるかもしれない。燐光を発する夜、潮の流れが明滅するさまは、いかにも生命あるかのようである！――その冷たい炎の色合いが微妙に変るのは、まるで爬虫類のようである！　こんな夜の海にもぐって――青黒い暗がりのなかで目をひらき、からだの動きにつれて無気味に光のほとばし

るのを注意して見るがいい。海の流れを透して見える光を発する点の一つ一つが、目を閉じたり開いたりしているようである！　そんな瞬間、まるで、なにか巨大な知覚力につつまれているような——どの部分も同じく感じ、見え、意志をはたらかせる、なにか生命に満ちた物質のうちに——無限の柔らかい冷たい「霊」のうちに浮んでいるような気持に、実際なるのである。

四

その晩、わたしはずっと横になったまま目をさまして、巨大な潮が、咆哮し砕ける音に耳を澄ませていた。はっきりした激しい衝撃の音、近くの波の押し寄せる音よりも、さらに太く低く、遠い寄せ波の低音が聞える——それは、建物も震えるばかりの、絶え間ない底知れぬつぶやきである——無数の騎兵隊の蹄の音や、無数の砲車の群がり寄せる音のように——昇りつつある太陽から、全世界にもわたる大軍の突進する音かとばかり、想像されるのであった。

やがてわたしは、子供のころ、海の声に耳を澄ませたときに抱いた、おぼろげな恐怖心を思い出していた。——そして、後年、世界のさまざまな国のさまざまな海岸で、打ち寄せる波がいつも子供のころの感情をよみがえらせたことを思い出した。たしかに、この感情はわたしより、数百万世紀も古いもので——父祖より伝えられた数知れぬ恐怖の総体であろう。が、やがて、海に対する恐怖は、海の声によって目ざめさせられた、おびただしい畏怖の一つの要素をあらわすものにしかすぎないという確信に立ちいたった。なぜなら、駿河湾岸のあの荒潮に耳を傾けていると、人に知られている恐怖のほとんどあらゆる音が聞き分けられたからである。たんに、ものす

ごい戦闘の物音——果てしない一斉射撃の音——限りない突撃の音ばかりではなく——野獣の咆哮する音、火のはじけ、しゅうしゅういう音、地鳴りの音、破壊する雷鳴のような大きな音、そして、なかでも、悲鳴や押し殺したわめき声のように長くつづく叫び声——すなわち、水に溺れた人の声であるといわれている「声」が、聞きわけられるのである。憤怒と破滅と絶望の、ありとあらゆるこだまを合わせた——恐るべきどよめきのきわみが！

そして、わたしはひとりつぶやいた——海の声が、われわれを厳粛にするのは、なんと不思議なことであろうか、と。海のさまざまな発言に合わせて、魂の経験という、より広大な海に動いている、太古からの恐怖のあらゆる波がこたえざるをえないのである。「淵々呼びこたえる」*。目に見える淵は、その潮の流れでわれわれの霊魂をつくったより古い、目に見えぬ淵に叫びかけるのである。

そんなわけで、海のどよめきを死者の言葉とする古い信仰には、たしかに少なからぬ真理がある。実のところ、過去の死者の恐怖と苦痛は、海のどよめきがよび起す、あのおぼろげな深い畏怖のうちに、われわれに語っているのである。

しかし、海の声よりもはるかに深く、しかもより奇妙にわれわれの心を動かす音がある——われわれを、時には厳粛に、さらにひどく厳粛にさせる音が——それは音楽の音色であろう。

偉大な音楽は、われわれのうちにひそむ過去の秘密を、思いもよらぬ深さにまでかき立てる、霊魂のあらしである。あるいは、それは——いろいろ異なった楽器と声とが、何十億といういろ

いろ異なった出生前の記憶に、別々にうったえる——驚くべき魔法といえるかもしれない。青春と歓喜とやさしみのあらゆる霊魂を呼びさます音色がある——いまは滅んだ熱情のあらゆる幻の苦痛を呼びおこす音色がある——尊厳と力と栄光のもはや失せた感覚——消えた歓喜——忘れられた寛容を、すべて生き返らせる音色がある。自分の生命は、百年足らずまえに始まったのだとぼんやり夢想する人にとって、音楽の力が不可解に思えるのはもっともであろう！　しかし、「自我」の本質が太陽よりも古いことを知っている人にとって、この秘密は明らかになる。彼は、音楽が一種の魔法であることを知る——旋律（メロディー）のあらゆるさざ波に対し、諧音（ハーモニー）のあらゆる大波に対し、死と生誕の大海原から、古い快楽と苦痛のある無限の渦が、彼のうちにこたえるような気がするのである。

快楽と苦痛。これらはつねに、偉大な音楽のうちに混ざり合っている。であればこそ、音楽は、大洋の声、あるいは他のいかなる声もなしえないほど、深い感動をあたえることができるのである。しかし、音楽のより大いなる表現のなかで、基調低音をなすのは、つねに悲しみ——「魂の海」の波のつぶやきなのである。音楽の意味が人間の頭脳のなかで進化するまで、いったいどれだけ大きな喜びや悲しみが経験されたか、思うだけでも不思議である！

どこかで、こんなことがいわれている——人生は神々の音楽である——そのすすり泣きと哄笑（こうしょう）する声、その歌と悲鳴と祈り、その歓びと絶望の叫びは、神々の耳には、完全な諧音としか聞えないのだ、と。……であればこそ、神々は苦痛の音色を消そうとは思われなかったのである。も

し消せば、神々の音楽はそこなわれたであろう！　そのいかなる組合せも、苦痛の音色がなければ、神の耳には耐えがたい不協和音となるであろう。

そして、ある意味では、われわれ自身も神のような存在である――生来の記憶をとおして、音楽のもつ恍惚（こうこつ）をわれわれに感じさせてくれるのは、過去の無数の生活の苦痛と歓喜とが集約されているからである。いまは滅んだ幾世代ものあらゆる喜びと悲しみが、数知れぬ諧音（ハーモニー）と旋律（メロディー）となって、われわれのもとへ立ち帰ってはなれようとしない。それにしても――われわれが陽を見なくなってから百万年後に――われわれ自身の生の喜びと悲しみとが、さらに豊かな音楽にともなって他の人びとの心のうちに移り――そこで、ある神秘な一瞬、官能的な苦痛をともなう深い強烈な感動をおこさずにはおかないであろう。

注

＊特に〔訳注〕と断わりのない場合は原注である。
＊原注のうち、われわれ日本人にとって蛇足と思われるものは省いた。

一八　白梅園鷺水　享保十八年（一七三三年）の歿。彼の言及している画家は——蒐集家(しゅうしゅうか)には菱川吉兵衛師宣(もろのぶ)の名で有名だが——十七世紀後半のころの人である。はじめ染物屋の小僧から身を立て、一六八〇年ごろ、浮世絵派とよばれる挿絵(さしえ)を確立することによって、画家として名声を博した。菱川はとくに、「風流」とよばれるもの——つまり上流階級の人生観を描写したことで知られる。

一九　まなじり　「めじり」——つまり外側の眼角——とも書かれる。（古代ギリシアや古代アラビアの詩人たちのように）日本人は、髪や、目や、まぶたや、唇や、指などの独特の美しさを表わすいろんな変った美しい単語や直喩(ちょくゆ)をもっている。

二二　辰の刻　午前八時ごろに始まる〔二時間〕。

二三　陰陽師　陰陽の術——すなわち、陰と陽との二気が宇宙を支配しているという理論にもとづく、古代中国の自然哲学を説く学者。

二七　誕生水　この「誕生」という言葉は、ここでは、西欧的な生誕の意味よりもむしろ、仏教的な新生と再生という神秘的な語義に理解すべきであろう。

二七　短冊　たいてい色のついた、細長い紙片のことで、それに歌を縦に書きつける。短冊に書かれた歌は、木々の花や、風鈴や、その他、歌人の思いついた美しいものに下げる。

二八　そして、清冽(せいれつ)な……思われた　慣れないヨーロッパ人の目には、中国や日本で書かれた

ものから、いわゆる「筆づかい」を意味する――個人特有の――書体を見わけることは困難だろう。しかし、日本の学者は、一度見た筆跡の特徴はけっして忘れない。それどころか、筆者のおおよその年齢まで言い当てる。中国と日本の作者は、用いられた墨の色（質）から筆者の性格もある程度わかるという。どんな人でも自分で墨をするわけだから、深い清冽な墨の色はすくなくとも、その人の心づかいと美の感覚をある程度しめすことになろう。

三九　七日参り　参りとよばれるいろんな宗教的な修行がある。七日参りを行う人は、ある社で七日間つづけて祈願を誓う。

三九　稚児　この言葉は、貴族の家の侍童、ことにやんごとなき所の小姓を意味する。この物語にあらわれる稚児は、もちろん超自然的な存在――女神の使者であり、代弁者である。

三〇　月下翁　一般に結びの神として知られている、婚姻の神の詩的な名称。この物語を通じて、神道と仏教思想のまことに興味ある混合が見られる。

三三　まあどうにかというところで　実のところ日本では、昔から子供のしつけに関し親は控え目にものをいう習慣があるので、ここの「まあどうにか」という言葉は、客にとって、「非常にすぐれている」という意味である。同様の理由から、その後に用いられている「一応は」とか「人並み」という表現も、その字面とはほとんど正反対の意味を含んでいる。

三六　瀬田の長橋　日本の伝説上有名な「瀬田の長橋」（唐橋のこと）は、長さほぼ八百フィート、眺望の美しさで知られる〔近江八景の一つ＝訳注〕。橋は琵琶湖岸、瀬田川へ流出する地点の近くに架けられている。石山寺は、日本の風光明媚な名刹の一つ、橋とは遠か

らぬ所に位置している。

三六　鮫人間　文字通り鮫人間だが、この物語では男性になっている。鮫人の性格については、通俗物語である『鮫人（こうじん）』を読まれたい。辞典によれば、この言葉は男女を問わずただ漠然とした「人魚」としか訳されていないが、ここの記述を見ると、つまり極東の「鮫人」は、西欧的な「人魚」とはほとんど関係のない概念のようだ。

三六　龍宮　これもまた、日本の多くの物語に形象化されている、あの海底の空想世界全体に与えられた名称である。

三七　珠名　もとの話では「珠」。この「珠」という言葉にはいろんな意味がある。ここでは、英語でいう jewel や gem や precious stone のように、きわめてあいまいに用いられている。実際、それはもっとあいまいなのであり、珊瑚玉（さんごだま）や、水晶玉、ヘヤピンにつけられた光沢のある石、なども意味する。だが、後ほどでは、筆者はそれをルビーの意味にとりたい——理由はことさら説明の要はあるまい。

四四　八雲立つ国　出雲の国、つまり雲州の古い詩語の一つ。

五九　天正の御代　天正時代は一五七三年から一五九一年。この物語にも出てくる偉大な武将、織田信長の死は一五八二年。

六〇　小栗宗丹　十五世紀初頭のころの仏画の巨匠。のちに出家した。

六六　大きな杯　「大盃」という言葉のほうが、ここで作者のいっている酒器をよりよく示しているかもしれない。祭事にさいして用いられる、いわゆる杯のうちに——一クォート以上も入る浅い漆器の盆のような——非常に大きいものがある。最大のものをひと息で飲み干すことは、かなりのわざを要するものと見られている。

七六　金毘羅さま　〔訳注〕金毘羅権現は、海上の守護神としてひろく民間に信仰されている。

八一　播州　〔訳注〕播磨国（今の兵庫県西部）の別称。

八九　若党　武士の武装した供をこのように呼ぶ。武士と若党の関係は、騎士と従者の関係にあたる。

一〇一　代官　将軍家の直轄領を治める地方行政官。行政および司法をつかさどる。

一〇三　目付　地方の行政官や司法官の行動を監視し、その勘定を監視する役目をもった政府の役人のこと。

一〇八　坐ったままの格好で　日本では遺体は、ほとんど立方体の棺に、坐った格好で置かれる。

一二五　もちろん、死んだ人です　原話の日本語も少なくとも同じように強い表現をとっている。「ああ、あれですか？――あれはほとけが来たのですよ！」。「ほとけ」という言葉は、仏陀の意味と同時に、この場合のように、死者の霊をも意味するのである。

一二六　十二セント　〔訳注〕現在の時価に換算すれば千円あまりにもなろう。

一三四　赤間が関　下関のこと。町は馬関の名で知られる。

一三五　琵琶　四絃琴の一種である琵琶は、主として叙唱に用いられる。むかし、『平家物語』や、その他の悲史を語った職業的吟遊詩人が琵琶法師の名で呼ばれた。この名称の起源は明らかではない。が、おそらく、盲人の按摩と同じく、「琵琶法師」も、僧侶のように頭を剃っていた事実から連想されたのだろう。琵琶は、通常角で作られた、一種の撥で演奏される。

一七〇　永享の乱　〔訳注〕永享十年（一四三八年）から翌年にかけて、関東足利氏が時の足利将軍と抗争した事件。

一七四 捜神記 〔訳注〕中国の晋時代(四世紀)の干宝作の小説集。
一八四 子の刻 〔訳注〕夜の十二時。
一九九 公子王孫逐后塵……従是蕭郎是路人 唐の詩人崔郊の七言絶句(七字四句)。崔郊はこの詩によって奪われた恋人をとりもどした。
二〇〇 しかし……海のように深い 〔訳注〕この一行は、ハーンの注解とは異なり、「しかし、公子の居館にひとたび入ってしまえば、海のように深く、もはや助けるすべもない」の意である。
二〇八 五畿内 〔訳注〕京都周辺の山城、大和、河内、和泉、摂津の五国の総称。
二二一 井戸の主 昔は、どの池や泉にも守護者があり、時に蛇や龍のかたちをとっていると考えられていた。池の霊は、ふつう池の主と呼ばれる。ここでは「主」は池に棲む龍につけられている。が、池の守護者は、実は水神なのである。
二二三 わたしが初めて百済から……お授けになられました 斎明天皇の在位六五五―六六二年。嵯峨天皇の在位八一〇―八四二年。百済は、古代朝鮮の東南部にあった王国で、日本の古代史にもしばしばあらわれる。内親王は皇統につらなる。古い宮廷制度によれば高貴の女性は二十五の位階に分れていた――内親王は、上位から七番目に属する。
二二三 その後、藤原家の……忘れ去られていました 数百年にわたって、皇后や女御たちは藤原一門から選ばれていた。保元時代は一一五六―一一五九年。いわゆる保元の乱は、源平の有名な合戦である。
二三一 ショーペンハウエル 〔訳注〕ドイツの哲学者(一七八八―一八六〇)。主著『意志と表象としての世界』の中で、人生を最悪の世界であるとして、それよりの解脱をプラトン的

な芸術的静観と涅槃(ねはん)によらねばならないと説き、ヨーロッパのペシミズム思想に重大な影響を与えた。

二三三　山の者　洞光寺の山に住むためこの名があるが、死体を洗い、墓を掘ることを専門の業とする特殊階級。

二四四　日本人の使用人たちは……同じように振舞う　読者は、ベーコン女史の『日本の娘と女たち』の「召使奉公」の章を読まれるとよい。男女双方の召使に関する、奉公の実際面における興味深い正確な記述が見られるからだ。しかし、奉公の詩的な面は扱われていない——たぶん、キリスト教的な立場から書く人は共感をもって考えることのできない信仰と、密接に結びついているからであろう。古い日本の召使奉公は、宗教によって変形され規定されてきた。そして奉公に関する宗教的感情の力は、今日でも知られている、次のような仏教のことわざからも推測できる。「親子は一世、夫婦は二世、主従は三世」といわれ、親子の関係はわずか現世のあいだだけであり、夫婦の関係は来世までつづくが、主従は、生き替り死に替り三世のあいだつづくという。

二四九　一八九一年の……勉強をつづけていたという　回数と強度をしだいに減じていったが、六カ月以上も、余震がつづいていた。

二五二　苦しいことや……習性なのである　もちろん話は、当人をなぐさめるのが普通である。

二五三　伝道者　〔訳注〕旧約「伝道の書」第三章四節を参照。

二五八　戦場において……　ここの引用は『真理のことば(ダンマパダ)』から。〔訳注〕仏教聖典のうち最古のもので、中国を通じ「法句経」として伝えられた。

二六三　一国家の秩序ないし無秩序は……　これは鳥尾子爵〔小弥太、一八四七—一九〇五＝訳

注』の有名な保守的論文を、一八九〇年十一月十九日、二十日の両日、『ジャパン・デーリー・メール』紙に英訳掲載したものから抜いたものであるが、これだけでは、全体の主旨は必ずしも明確ではない。全文は、引用には長すぎるし、また『メール』紙のこのすぐれた訳文のどこを抜いても、本文のいろんな部分を一本の鎖につないでいる倫理的・宗教的・哲学的な筋道をばらばらにこわしてしまう。しかも、この論文は、西欧思想の影響を全く受けていない日本人学者の著述として注目すべきものである。彼は、新しい国会の開設以来、日本に生じた社会的・政治的混乱を正しく予言した。鳥尾子爵は、また仏教思想家としても名を知られている。陸軍においても彼は、要職にあった。

二四　極東の精神　このすぐれた本に、わたしは讃嘆を惜しむものではないが、にもかかわらず、その結論のあるもの、ことに最後の結論に対し、わたしはまったく反対の意見であることを表明しておかねばならない。わたしは、日本人に個性がないなどとは考えていない。が、その個性は、西欧人たちの個性ほど、表面にあらわれていないし、あらわれ方も鋭くないのである。しかも、西欧で、「人格」とか「精神力」などと呼ばれているものが、文化によって多少偽装されはしているものの、たんに原始的な攻撃的性向の遺物でありその認知のあらわれにほかならない、とわたしは確信している。スペンサー氏のいう最高の個性化には、たしかに、たんなる攻撃的目的に適した力の異常な発達は含まれていない。ところが、むしろこの面においてこそ、西欧的個性が一般に容易にあらわれているというべきである。これに対し、日本では、まだ暴君的な、野蛮な、あるいは攻撃的ないし病的な個性はまれである。日本の明らかな知識層の明らかな弱点として感じられるのは、比較的、自発性とか、創造的な思考とか、高度の独創的な思考とか、高度の独創的な直覚力などに

欠けている事実である。おそらく、こうした外見上の欠陥は、民族的なものであろう。極東の人びとは、有史以来、創造的というよりもむしろ受動的であったように思われる。とにかく、仏教――もともとアリアン民族の信仰であるが――に責任があるとは、とうてい考えられない。普通教育から、仏教の影響をことごとく除外したことは、あまりほめられないことのように思われる。というのは、古い仏教哲学の指導者のほうが、いまでも、帝国大学一般の卒業生よりもはるかに、思想的に高い能力をしめしているからだ。実際、仏教の知的復興――その崇高な真理と、近代科学の最良かつ広範な内容とを調和させること――は、日本にもっとも重大な影響をもたらすだろう。井上円了という日本人学者は、実際に、そういう崇高な目的をもって、東京に哲学の専門学校〔哲学館、つまり今日の東洋大学＝訳注〕を設立したが、現時点においてすでに、有力な学校になっているようだ。

二九四　護送者の剣　〔訳注〕戦前までわが国の巡査は帯剣していた。

三一四　鬼も十八　「鬼も十八、薊（あざみ）の花」。同じく鬼についてこんなことわざもある――「蛇も二十（はたち）」

三三九　娘が……罪ですね　おそらく、この会話は、西洋の読者にとって奇妙に思われるかもしれない。が、実際これはこのとおりなのである。この場面全体、いかにも日本的な特徴をあらわしている。

三四三　七生まで　日本の芝居や物語で、父親が子供を「七生まで」勘当することは珍しいことではない。つまり、現世のあと六生もつづいて、罪を犯した鬼子や娘が父親の不興を蒙（こうむ）っていることを意味する。

三四九　お守り　日本語の「お守り」には、少なくとも西洋の「魔除け」という言葉に伴うくら

い、いろんな意味がある。その名で呼ばれる日本の信心の対象の名をあげるだけでも、たんなる注記では間に合わない。今の場合、「お守り」は、おそらく漆器か金属で作られた小さなお厨子に蔵われ、さらに絹袋におさめられた、ごく小さな彫像である。そうした小さな彫像を侍はしばしば肌身につけていた。最近、わたしは、あの西南戦争のさい、ある士官が携えていた、鉄箱に入っている小さな観音像を見ることができた。たぶん、それが自分の命を救ってくれたのだ、と彼がいうのも、もっともであろう。なぜなら、弾丸が観音像に当ったくぼみが歴然と見られたからだ。

三四九　死霊除け　日本の伝説に固有の霊が二つある。つまり、死霊と生霊である。家にも個人にも、死霊と同様、生霊がとりついている。

三六五　桜への思いがかなった　日本の詩歌やことわざでは、女人の肉体美は桜の花と比較される。これに対し、女性の貞操は桃の花になぞらえる。

三六六　寅の刻　〔訳注〕午前四時。

三七四　端島　〔訳注〕静岡県の熱海の沖にある初島の旧名。

三七五　今は亡きロシアの偉大なる将軍　〔訳注〕露土戦争に武名をあげ、英雄視されたミハイル・スコベレフ将軍（一八四三―一八八二）のこと。

三七八　淵々呼びこたえる　〔訳注〕旧約「詩篇」第四十二篇七節を参照。

解説

上田和夫

小泉八雲の人と文学

ラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn）＝小泉八雲は、一八五〇年六月二十七日、ギリシアのイオニア諸島の現名レフカス島に生れた。父のチャールズ・ブッシュ・ハーンはアイルランド人で、当時ギリシア駐屯イギリス歩兵連隊付き軍医であった。母のローザ・カシマチは、マルタ島生れともシチリア島生れともいわれるギリシア人で、アラブの血もまじっていたらしい。のちに八雲自身、つねに家族や友人たちにむかって、「自分には半分東洋の血が流れているから、日本の文化、芸術、伝統、風俗習慣などに接しても、肌でこれを感じとることができる」と自慢していたといわれる。

こうした父と母を通じて、地球上の東と西と、南と北の血が自分の中にあるという抜きがたい自覚が、八雲の生涯と文学を特徴づけているように思われる。異国情趣を求める時代風潮もあったにせよ、八雲は生涯を通じて、アイルランドから、フランス、アメリカ、西インド諸島、日本へと、浮草のように放浪をつづけている。しかも、こういう世界放浪のうちにあって、いかなる土地でも、人間は奥底において同一であることを彼は疑っていない。シンシナティでは、州法を

犯してまで混血黒人と結婚しようとしたし、のちに、日本婦人と家庭をもつにさいしても、何ら抵抗を感じていないのである。

父と母とは、父がレフカス島に駐屯中、激しい恋におち、周囲の強い反対を押し切って結婚したのだが、ラフカディオ二歳のとき、ダブリンのハーン家に一家をあげて移ってから、二人の仲はしだいに冷えてきた。最初は、異国育ちの嫁として温かく迎えられた母も、夫は海外駐在のため留守がちであるうえ、姑や小姑たちにかこまれ、ことばも通じなければ、気候、宗教、習慣などもあまりに違う環境のために、しばしば錯乱におちいり、それとともに、夫の心もしだいに離れていくのである。やがて、少年の四歳のとき、母は追われるように、ひとり永久にギリシアへ去り、ついに二人は離婚した。父はたちまち再婚して、少年を生家に残したまま、インドへ去った。父に見捨てられたあと、少年は金持の大叔母の手もとに養われ、十三歳のとき、カトリック系の寄宿学校に入学させられるが、これも大叔母の破産のため、三年後には退学せざるをえず、ほとんど無一物のまま、新しい天地を求めて、アメリカに渡ることになる。

このような、父母の不和にはじまる家庭的不幸は、母への同情と思慕とから、弱者や小さいものにたいする同情心をそだてる一方、この幼い少年の神経を、異常なまで過敏にしたようである。五歳のころ、いつもひとりで寝かしつけられている寝室の暗闇のなかに、しばしば怪奇な幽霊を見て、気も狂いそうになった経験を、のちに「夢魔の感触」という追憶文のなかで語っている。この幽霊は、その後も夢の中で、彼をいつまでも追いかけてくるのである。しかも、カトリックの宗教教育は、この恐怖をますます倍加させている。「ゴシックの恐怖」というエッセイのなか

で彼は、恐怖におびえる少年のカトリックにたいする憎悪の芽生えをなまなましく伝えている。彼は、神と聖霊をひたすら恐れ、幽霊の実在を信じている。そして、キリスト教への反感と、母への血の自覚から、やがて少年ラフカディオの恐怖心は、キリスト以前の、ギリシア神話にあらわれるような、原始未開の超自然な神々のイメージとむすびつき、彼の異教的な怪奇趣味をそだてていくのであった。

のちに八雲は、このような恐怖の起源を、青春期の彼にとって回心ともいえる衝撃的影響をあたえたハーバート・スペンサーの生物進化論と、仏教の輪廻思想とのつながりにおいて考える。われわれの生命は、過去幾千万億の生命の集合物である。肉体は、その無数の生命の物質的象徴にしかすぎない。この過去の生命は、滅びることなく、脈々としてわれわれのうちに生き、その経験は意識の深い奥底に遺伝されてきた。「草ひばり」が、たんに過去の無意識の経験に従ってうたっているように、われわれも、その無意識の記憶によって現在生きているのである。しかし、覚めているあいだは意識に現われない、過去の無数の生命に潜在した記憶が現われてくるのは、夢のなかであった。だから、夢にあらわれる恐怖は、人間の出現よりもはるか以前に、ものを恐れる能力をもった生物がうけた、苦痛や恐怖の記憶である。したがって、怪奇や超自然のかもしだす恐怖のうちに、われわれは未生以前の人間存在、未開のはるかな過去にまでさかのぼる、霊的な経験をさぐることができる、と彼は結論づけている。

少年時代にはぐくまれた怪奇、超自然へのこうした八雲の関心は、キリスト教と、西洋近代の合理主義に対する反感から、ますます強められていった。すでに早くもアメリカ時代に、ゴーチ

エや中国の怪談の翻訳となってあらわれている。さらに、エジプト、インド、アラビア、エスキモー、フィンランド、ユダヤなど「異国文学」の民話・伝説・神話を翻訳している。そして、関心はさらに実際の行動へと駆りたて、彼は、シンシナティ、ニューオーリンズで、すすんで下層社会、貧民街の黒人たちの間に身を置く。ついで、原始熱帯の島マルティニークに渡る。ゴーギャンの住んだ翌年のことである。マルティニークでは、クリオール（混血白人）の女たちの特異な美しさに、驚嘆の目を見張り、深い幸福感にひたっている。そして、彼はついに日本にたどり着くのであった。日本にきて八雲は、日本人の生活、風俗習慣から、民話・伝説にいたるまで、自分の気質とぴったり合う、怪奇なもの、霊的なものを多く発見する。そしてそこに、不滅の日本、日本民族の真のすがたを認めている。彼は夫人や友人たちを通じて、昔話や、お伽噺や、怪談など、熱心に聞き書をつづけ、『今昔物語』『雨月物語』『夜窓鬼談』『日本霊異記』などをはじめ、いろいろ通俗な読み本や怪談本にいたるまで、ひろく読みあさっている。そしてそれらをもとに、旺盛な筆力で怪談を書きつづけるのである。

一八九〇年（明治二十三年）四月四日、八雲は横浜に上陸する。時に三十九歳であった。「ハーパーズ・マンスリー」誌から特派され、わずか二カ月の滞日予定だったが、日本に対する関心は、これよりも早く一八七九年、すでにワトキン宛ての手紙のなかで、なみなみならぬものを示している。

日本到着後、八雲は契約条件に不満をもち、ただちにハーパー社と絶縁する。そして、知友チェンバレン教授と、かつてアメリカの記者時代に知遇を得た服部文部省普通学務局長らの斡旋で、

島根県立松江中学校の英語教師として赴任する。

松江に移った彼は、かつてニューオーリンズでも、マルティニークでもそうしたように、何よりもまず日本人の生活の中にとび込み、それに融けこもうと努力している。着任数日後、九月四日の「松江日報」は、「本邦に在留せる西洋人はとかく自国の風を固守し我邦の事物を目して野蛮なり未開なりと悪しざまに批評する癖あれど、今度本県に雇入れられたるお雇教師ヘルン（ハーン）氏は感心にも全く之に反して、日本の風俗人情を賞讃すること切りにして其身も常に日本の衣服を着して日本の食物を食し、只管日本に癖するが如き風あり……」と、きわめて好意的に報じている。

西洋ぎらい、キリスト教ぎらいの八雲にとって、この古代からの奇妙な風俗をまだ多く残している松江は、不思議な安息をあたえたものらしい。やがて、零落したとはいえ、彼の尊敬してやまぬ士族の娘と結婚し、日本に帰化し、名を小泉八雲とかえ、ついに骨を埋めることになった。彼は、横浜以来の通訳真鍋晃や、生涯の知友となった松江中学校教頭西田千太郎、下男の万右衛門老人、それに夫人たちの助力を得て、どんらんに出雲その他、日本古来のすがたをとどめている土地を歩きまわり、日本研究の知識を吸収し、それを書きつづけた。

やがてそれは、最初の著作『知られぬ日本の面影』として出版されるのだが、そのほとんどが出雲の人情・風俗について書かれたもので、それらを通して、彼がいかに日本を愛し、讃美していたかがよくわかる。そしてこの中で、八雲の讃美する日本は、西洋化しつつある新しい日本ではなくて、むしろ世界にほとんど知られていない、古い日本、つまり合理的な西洋近代と対置さ

れた、霊的な日本のもつ美しさであった。

最も卓抜な日本人論として知られる「日本人の微笑」のなかで八雲は、友人のイギリス人たちが日本で実際に経験したことのいくつかを例証として、いつも微笑しつづけ、死に直面してもなお微笑する日本人の不可解さを指摘し、この日本人の神秘な微笑を理解するためには、日本の古い、自然な、庶民の生活がわからなければならないといっている。そして、この「日本人の微笑」を書き上げた直後、チェンバレンに宛てた手紙のなかで、『極東の精神』の著者パーシヴァル・ローエルにふれていう。ローエルは、日本人の性格として個性の欠除を指摘する。しかし、この個性の欠除といわれるものは、日本人の場合、きわめて意志的に自己抑制をはかった結果である。つまり、義務のための自己犠牲にほかならず、したがって「古い日本の文明は、物質的には後進国だが、それだけ道徳面では、西洋文明よりはるかに進んでいる」と断じているのである。

しかし、八雲と日本のこの蜜月は、わずか一年八カ月で破れる。松江に永住するつもりでいた八雲は、寒気のため生来の弱視がますます悪化することをおそれて（すでに片目は幼時失明している）、当時、嘉納治五郎が校長を勤めていた熊本の第五高等学校に転任する。しかし、「出雲におとらない面白い日本の一部」であり、健康にもよく、著書の出版にも便利だということで熊本の土地をすすめたチェンバレンに宛て、すぐさま「熊本は日本でもっとも醜い、もっとも不快な都市です」と抗議し、しだいに絶望的になっていく。もちろん、そうした絶望の直接の原因として、まず熊本が思ったよりも寒かったことと、また松江と違い、気風が荒っぽく、外人なれしていて敬意をはらわれなかった事実が指摘できるかもしれない。が、むしろ、それが時代の趨勢に

よるものであることに、やがては八雲は気づいている。

八雲が日本に着いた明治二十三年は、教育勅語発布の年であり、前年には明治憲法が発布されている。明治初年以来の西洋近代のどんらんなまでの摂取も、軍制、官制、学制にわたる近代化の終了と同時にようやく転機をむかえ、しだいに自由民権思想から、排他的な国家主義へと移行しつつあった。彼が熊本ではじめて直面したのは、こうした日本の現実にほかならなかった。時あたかも、日清戦争に突入しつつあったのである。

「真実なものは古い日本でした。わたしは新しい日本を好むことができません」と、絶望にかられながらも、八雲は新しい日本を直視しようとしている。そして、古い、美しい、霊的な日本が、教育その他の面における西洋化によって失われていくのを悲しみつつも、結局、日本の近代化を推進し、新生の独立国家として国際社会に地歩をすすめる唯一の力が、新しい日本の中にしかないことを認めざるを得なかった。

彼は、こうした苦悩を秘めたまま――時にはそれを知友のチェンバレンに爆発させながら――神戸から東京へと移る。そして、ようやく市外西大久保の新居に腰をすえた八雲は、夫人の献身的な助力のもとに、怪談や奇談を書きつづけ、『東の国より』『心』『仏陀の国の落穂』『異国情調と回顧』『霊の日本にて』『影』『日本雑記』『日本お伽噺』『骨董(こっとう)』『怪談』『天の川物語その他』と、ほとんど毎年のように著作を刊行している。一九〇四年(明治三十七年)九月二十六日、八雲は、日露戦争の趨勢を案じつつ、狭心症で急逝(きゅうせい)する。そして、死後、『神国日本』が刊行されるのだが、これは、八雲の日本考察、日本研究のいわば総決算として、とくに注目に値しよう。

『神国日本』、正しくは『日本――解釈への一つの試論』は、表紙にわざわざ漢字で「神国日本」と書かれているのだが、この神国は、八百万の神々の住む日本というほどの意味であって、神々の国としての日本の側面を論究しようという意図によって書かれたものである。全巻二十二章からなり、宗教、社会、歴史、教育、産業にいたる、国家存立の万般にわたって論じた大著だが、ここではもはや西洋文明に対する、八雲年来の憎悪、呪詛は片鱗もみられない。これからの日本は、西洋近代の文明をとり入れて、ますます近代化の道をすすまざるを得ない。それが歴史の必然であろう。しかし同時に、日本は本来の美を失ってはならない。また失うことはないだろう。日本は、ギリシア・ローマの古代社会と同じく、死者が神となって支配する国である。やがて新しい日本が危機に直面するさい、たとえば明治維新にみられるように、日本を救ってくれるものは、そうした古代的な祭祀の力にほかならない。真に恐るべき力は古い日本である。それは、古い日本に、人道的にきわめて高いすぐれたものがあるからである、と八雲は結論づけている。

小泉八雲は、十四年におよぶ日本時代のあいだ、怪談その他、日本観察記、日本文化研究のすべてを通じて、古い日本を讃美しつづけている。彼のこうした日本研究は、すでに古くなり、もはやかえりみる価値すらないというのが、今日、定説のようにもみえる。しかし八雲の文学は、年々、日本の新しい読者によって読みつがれていることも、また事実である。しかも、彼の作品が、日本人読者のためではなく、欧米人を対象として書かれたことを考えれば、これは奇異なことのように思われる。

八雲は、西洋との対比において、日本文化の深部、つまり怪談その他によって語りつがれてき

た霊の日本を、えぐり出そうとしている。あるものは讃美しすぎるきらいはあるにせよ、彼の冷徹な目は、日本社会の欠点にも容赦しない。そうした彼の作品を通じて、読者はいつまでも、忘れられぬ日本、われわれの意識の奥底に不滅の生命をたたえて息づいている日本の美しいすがたを、呼びさまされるにちがいないのである。

作品について

この作品集には、まず怪談・奇談ものを収め、ついで日本観察および日本文化に関する作品を、それぞれ刊行順に従って収めた。

『影』は一九〇〇年（明治三十三年）に出版。三部に分れ、《不思議な物語から》には、「和解」「普賢菩薩のはなし」「衝立の乙女」「死骸にまたがる男」「弁天の同情」「鮫人の感謝」が、《日本研究》には「蟬」「日本の女性の名」「日本の古い歌」が、また夢によせてみずからの思想を語った《幻想》には「夜光虫」「群衆の秘密」「ゴシックの恐怖」「夢の飛行」「夢魔の感触」「夢の本」「両の目に」が、それぞれ含まれている。この作品集に収められたものは、『今昔物語』『御伽百物語』などによったもので、かつて八雲に「日本の面白い物語」を紹介するようにすすめていたマクドナルドに献げられている。

『日本雑記』は一九〇一年（明治三十四年）出版。ニューオーリンズ時代からの友人ビスランド嬢に献げられた。これも三部からなり、《奇談》には、「守られた約束」「破られた約束」「閻魔の庁で」「果心居士のはなし」「梅津忠兵衛のはなし」「興義和尚のはなし」が、《民間伝説落穂》には

「蜻蛉（とんぼ）」「動植物の仏教用語」「日本のわらべうた」が、《随筆ここかしこ》には「橋の上」「お大の場合」「海べにて」「漂流」「乙吉のだるま」「日本の病院で」が、それぞれ含まれている。《奇談》は『雨月物語』や、『仏教百科全書』『夜窓鬼談』、あるいは出雲の伝説によっているが、「漂流」は実在の天野甚助本人からの聞き書きである。

『骨董』は一九〇二年（明治三十五年）出版。この作品集に収められた「忠五郎のはなし」までの《古いはなし》九編のほか、「ある女の日記」「平家蟹（がに）」「蛍」「露の一滴」「餓鬼」「あたりまえのこと」「幻想」「病気のこと」「真夜中に」「草ひばり」「夢を食う獏（ばく）」が含まれている。これらは、スペンサーの生物進化論や仏教の輪廻思想を強く反映している。

『怪談』は一九〇四年（明治三十七年）出版。ここに収められた十四編のほか「鏡と鐘」「日まわり」「蓬莱（ほうらい）」を含めた《怪談》と、「蝶」「蚊」「蟻（あり）」など三編のエッセイを含めた《虫界》の二部からなる。《怪談》はそれぞれ『夜窓鬼談』『仏教百科全書』『古今著聞集』『玉すだれ』『新選百物語』などからとられている。巻頭に付けられた出版社の序文には、「アトランティック・マンスリー」一九〇二年二月号に八雲を論じた当代の代表的批評家P・E・モアの文章を引用して、西洋の読者にとって八雲文学の魅力は、日本人の美意識によって独自に育てられた東洋の仏教思想が、西洋近代の科学的精神を通じて伝えられるところにあると述べている。

『天の川物語その他』は八雲歿後、一九〇五年（明治三十八年）に出版された。「天の川物語」「化け物のうた」「究極の問題」「鏡の乙女」「伊藤則助のはなし」「小説よりも奇なり」「日本からの手紙」が収められ、ほとんどが「アトランティック・マンスリー」誌に掲載されたものである。

『知られぬ日本の面影』は一八九四年（明治二十七年）出版。日本について最初の新鮮な印象記を集めた二冊の大著で、ほとんどが松江時代に書かれ、「タイムズ・デモクラット」紙や「アトランティック・マンスリー」誌に発表されたものも含む。「日本はキリスト教に改宗することによって、道徳的にも、またその他の点においても、なんら得るところがなく、かえって失うところが多い」と述べている「序文」以下、「東洋における第一日」「弘法大師の書」「地蔵」「江の島詣で」「盆の市にて」「盆おどり」「神々の国の首都」「杵築――日本最古の神社」「子供の霊の岩屋」「美保の関」「杵築雑記」「日御碕にて」「心中」「八重垣神社」「狐」「日本の庭で」「家の祭壇」「女の髪」「英語教師の日記から」「二つの珍しい祝日」「日本海に沿って」「舞妓」「伯耆から隠岐へ」「霊魂について」「幽霊と化け物」「日本人の微笑」「さようなら」の二十七章からなる。このうち「日本人の微笑」は、一八九三年五月「アトランティック・マンスリー」誌に発表され、当時、欧米で高い評価をうけた論文で、明治開明期に外人の手によって書かれた日本人論としてもっともすぐれたものの一つであろう。

『東の国より』は一八九五年（明治二十八年）の出版。松江中学校以来、深く敬愛していた西田千太郎に献げた。松江時代の日本研究はこの西田に負うところが多かった。のち一八九七年に肺患で歿している。「夏の日の夢」「九州の学生とともに」「博多にて」「永遠の女性」「生と死の断片」「石仏」「柔術」「赤い婚礼」「大願成就」「横浜にて」「勇子――思い出」の十一編からなり、日本の武士道、サムライ的精神と対決した熊本時代の記録である。

『心』は一八九六年（明治二十九年）出版。「日本の外面的生活より内面的生活――つまり、日本

の心を取り扱った」作品群である。「停車場にて」「日本文化の真髄」「門付け」「旅の日記より」「阿弥陀寺の尼」「戦後」「ハル」「時代の趨勢」「業(ごう)の力」「ある保守主義者」「薄明の神々」「前世の思想」「コレラの流行」「祖先の崇拝について」「きみ子」の十五編に、「俊徳丸」「小栗判官」「八百屋お七」など俗謡の英訳を付録につけている。

『仏陀の国の落穂』は一八九七年（明治三十年）出版。「生神」「街角より」「京都紀行」「塵(ちり)」「日本美術における顔」「人形の墓」「大阪にて」「日本民謡にあらわれる仏教思想」「涅槃(ねはん)」「勝五郎転生記」「環の中」の十一編からなり、松江その他での聞き書を中心に、東洋思想、ことに仏教の説く輪廻と、不可知論哲学との共通性を取り上げている。「人形の墓」は、八雲の家に住み込んでいた子守りの身上話である。

『霊の日本にて』は一八九九年（明治三十二年）出版。「断片」「振袖」「香」「占いのはなし」「蚕(かいこ)」「悪因縁」「仏足石」「犬の遠ぼえ」「短い詩」「仏教にかかわる日本の諺(ことわざ)」「暗示」「因果ばなし」「天狗(てんぐ)のはなし」「焼津にて」の十四編からなり、後期の怪談ものを予想させる物語性にとむ作品を集めている。

（昭和四十九年十月）

年譜

一八五〇年（嘉永三年）　ラフカディオ・ハーンは六月二十七日、ギリシアのイオニア諸島のレフカス島（古名リュカディア島）に生れる。ラフカディオの名はこの古名にちなむ。父チャールズ・ブッシュ・ハーンは、アイルランド出身で、当時、ギリシア駐屯イギリス軍のノッティンガムシャー歩兵第四十五連隊付き軍医。母ローザ・カシマチは、マルタ島生れともいわれるギリシア人で、アラブの血がまじっていると伝えられる。ラフカディオは三人男子の次男で、長男は夭折し、弟ジェイムズは一八五四年に生れ、のちアメリカで農業を営んでいる。

一八五一年（嘉永四年）　一歳　父の西インド転属のため、年末、母と通訳代りの女中にともなわれて、アイルランドの父の生家に向い、パリをへて、翌年八月、ダブリンに着く。

一八五三年（嘉永六年）　三歳　十月、父、黄熱病のために帰国。しだいに父母の仲が冷却し、翌年四月、父のクリミヤ戦役出征後、母はひとりギリシアに帰る。大叔母サリー・ブレネーンの許に引き取られる。

〔ペリー、浦賀に来る〕

一八五六年（安政三年）　六歳　父母、正式に離婚。父はただちに再婚、インドにおもむく。

一八六三年（文久三年）　十三歳　九月、イギリス本土ダラム州アッショーにあるカトリック系聖カスバート校に入学。遊戯中あやまって左目を失明する。生来、短軀、弱視のうえ、さらにこの失明によって、肉体的コンプレックスから終生、抜け出せなかった。

一八六六年（慶応二年）　十六歳　大叔母の破産のため、聖カスバート校を中退。十一月、父がインドから帰国の途中、スエズで病死する。

一八六七年（慶応三年）　十七歳　大叔母の知人モリヌーの斡旋で、フランスのイヴトーにあるカトリック系の学校に入学。一年余りで退学したが、この頃から、ゴーチエ、フローベール、ボードレールら、フランスの新文学に親しむ。

一八六九年（明治二年）　十九歳　大叔母から旅費をもらい、アメリカに渡り、ニューヨークをへて、オハイオ州シンシナティに向う。馬小屋の干草の中で寝たり、ホテルのボーイ、電報配達、校正、広告取

り、煙突掃除など、窮迫した生活をつづけながら、図書館で読書にふける。印刷業者ヘンリー・ワトキンを知り、生涯の友となる。

一八七四年（明治七年）二十四歳　一八七二年頃から、日刊新聞「シンシナティ・インクワイアラー」に常連寄稿していたが、秋、正式の記者となる。下層社会、ことに黒人の風俗を好んで書き、世評高まる。六月、友人の画家ファーニーと共同で日曜諷刺新聞「大きな眼鏡（イー・ジグランプス）」を刊行し、八号までつづく。この頃、下宿先の炊事婦、混血黒人のマッティー・フォリーと結婚をはかるが、反対されて断念する。

一八七六年（明治九年）二十六歳　三月、「シンシナティ・コマーシャル」紙の社会部記者となる。生活はようやく安定し、かたわら夜は、ゴーチエその他、フランス文学の翻訳にうちこむ。音楽評論家H・E・クレービールらと親しむ。

一八七七年（明治十年）二十七歳　変化と健康の土地を求めて、十月、シンシナティを去り、ルイジアナ州ニューオーリンズにおもむく。下町の安下宿に住み、フランス系混血白人（クリオール）に深い興味をもち、「シンシナティ・コマーシャル」紙に探訪記事を送る。

一八七八年（明治十一年）二十八歳　六月、小新聞「デイリー・アイテム」紙に入社、評論、随筆、翻訳などに筆をふるい、売上げをのばすため、漫画入り記事百七十五編を約二年間に書き、好評を博した。シンシナティ時代より収入は減るが、時間的余裕があり、読書に、また水泳に興じる。〔フェノロッサ、東京帝国大学で教える〕

一八七九年（明治十二年）二十九歳　自立をはかるため、乏しい給料をたくわえて、三月、五セント食堂「不景気（ハード・タイムズ）」屋を開くが、共同出資者に持ち逃げされ、二十日間でつぶれる。

一八八一年（明治十四年）三十一歳　十二月、「タイムズ」紙と「デモクラット」紙が合併して、南部一の新聞となった「タイムズ・デモクラット」紙の主筆ベイカーに、文芸部長として招かれ、ゴーチエ、フランス、ロチ、ボードレール、ツルゲーネフ、ドストエフスキーなど、主にヨーロッパの新文学を翻訳、紹介につとめた。

一八八二年（明治十五年）三十二歳　ゴーチエの翻訳『クレオパトラの一夜その他』（ワージントン社）を自費出版。表題作ほか五編の短編集で、名訳者と

して名を上げ、エリザベス・ビスランド（のちウェットモア夫人）など、多くの知友を得る。

一八八四年（明治十七年）三十四歳　エジプト、エスキモー、インド、フィンランド、アラブ、ユダヤなどの民俗伝承に材をとった二十七編の短編からなる、『異文学遺文集』（オズグッド社）出版。ニューオーリンズ百年祭記念博覧会で、日本政府委員服部一三から訪問記事をとり、「ハーパーズ・マンスリー」誌に発表。夏、ビスランドら友人たちと、ミシシッピー河口のグランド島に遊び、小説『チタ』の材料を得た。〔鹿鳴館で西洋舞踏会〕

一八八五年（明治十八年）三十五歳　博覧会目当てに書いた、『ニューオーリンズの歴史的スケッチと案内図』、クリオールの諺集『ゴンボ・ゼーベス』、および『クリオール料理法』を共にコールマン社から出版。この頃、友人クロスビーのすすめで、ハーバート・スペンサーの『第一原理』を読み、その進化論哲学に衝撃的影響をうける。五月、友人とフロリダへ旅行。〔伊藤博文、初めて内閣を組織。チェンバレン、東京帝国大学教授となる〕

一八八七年（明治二十年）三十七歳　『中国怪談集』（ロバーツ社）出版。未知の世界を求めて、六月、ニューオーリンズを出発。シンシナティからニューヨークをへて、七月、西インドのマルティニーク島を訪れ、熱帯の美に深く魅せられる。九月、ニューヨークにもどり、十月、再びマルティニーク島へ渡る。一年半、サン・ピエールに住み、紀行、見聞記を「ハーパーズ・マンスリー」誌に発表するかたわら、『チタ』『ユーマ』などの小説を書きつづける。〔ロチ『お菊さん』〕

一八八九年（明治二十二年）三十九歳　五月、サン・ピエールを出発し、ニューヨークをへて、フィラデルフィアの友人宅に落着き、執筆にはげむ。九月、『チタ——ラスト島物語』（ハーパー社）を出版。十月、ニューヨークにもどり、旧友クレービールの紹介で、「ハーパーズ・マンスリー」誌の美術主任パットンと相知る。日本の文学・美術について語り合い、挿絵画家ウェルドンに従って、二カ月の予定で日本に特派されることになる。〔帝国憲法発布〕

一八九〇年（明治二十三年）四十歳　マルティニーク紀行十六編を集めた『仏領西インドの二年間』（三月）、小説『ユーマ』（五月）、フランスの『シル

ヴェストル・ボナールの罪』の翻訳を、それぞれハーパー社から出版。三月、ニューヨークから、モントリオールをへて、ヴァンクーヴァーを、カナダ太平洋汽船アビシニア号で出発。四月四日、横浜到着。ただちにグランド・ホテルに、ビスランド嬢の紹介でミッチェル・マクドナルドを訪問。鎌倉、江の島に遊び、紀行を送るが、ウェルドン中心の契約に不満を抱き、五月、ハーパー社と絶縁する。この間、マクドナルドの紹介で知った東京帝国大学教授B・H・チェンバレンと、文部省普通学務局長の地位にある服部一三の斡旋で、島根県立松江中学校の英語教師となり、八月末、書生兼通訳の真鍋晃を連れて、松江におもむき、九月、初登校。月俸百円。教頭西田千太郎らと相知る。十月、旅館から末次本町の借家に移る。十二月、西田の世話で、旧士族の小泉節子（戸籍名セツ）と結婚。〔第一回帝国議会召集。教育勅語発布。チェンバレン『日本事物誌』〕

一八九一年（明治二十四年）四十一歳　五月、城の見える北堀町塩見縄手へ転居。この旧居は現在保存され、隣接して小泉八雲記念館がある。八月、杵築の出雲大社、日御崎神社、加賀浦、美保の関に遊ぶ。『知られぬ日本の面影』はこの頃書かれた。松江の厳しい寒気と生活のため、嘉納治五郎校長の第五高等学校へ転任。十一月、熊本に着き、手取本町三十四番地の静かな士族屋敷に住む。月俸二百円。秋、「アトランティック・マンスリー」誌に日本印象記を連載、好評を博する。

一八九二年（明治二十五年）四十二歳　二月から三月、「タイムズ・デモクラット」紙に日本印象記を連載。四月、博多、太宰府を訪れる。八月、博多、門司、神戸、京都、奈良、伯耆境港、隠岐、美保の関、福山、尾道に遊ぶ。ことに純朴な隠岐に魅せられる。

一八九三年（明治二十六年）四十三歳　四月、博多に遊ぶ。八月、単身、長崎を訪れる。秋、坪井西堀端町三十五番地（現、八雲旧居跡）に移る。十一月、長男一雄生れる。

一八九四年（明治二十七年）四十四歳　四月、讃岐の金比羅に詣でる。八月、東京、横浜、箱根、大津と回遊し、チェンバレンと会う。九月、『知られぬ日本の面影』（ホートン・ミフリン社）出版。日清戦争勃発のため反響強し。十一月、著作に専念する

ため、契約切れを機に、「神戸クロニクル」紙の論説記者として、神戸に移る。下山手通四丁目七番地、同六丁目二十六番地、中山手通十七番地と転々する。

一八九五年（明治二十八年）四十五歳　四月および十月、大博覧会や奠都祭などで三度、京都に遊ぶ。五月、黄海海戦の旗艦松島を見学。九月、『東の国より』（ホートン・ミフリン社）出版。秋、妻子の将来を考え、日本に帰化し、小泉八雲と改名する。〔日清講和条約〕

一八九六年（明治二十九年）四十六歳　二月、伊勢に参宮。三月、『心』（ホートン・ミフリン社）出版。四月、京都、大津、奈良、堺、大阪へ旅行。八月、美保の関、松江へ旅行。同じく八月、妻とともに上京。チェンバレンを通じて東京帝国大学学長外山正一から招請のあった、英文科講師の就任を承諾。月俸四百円、のち四百五十円。九月、牛込区市ヶ谷富久町二十一番地に住み、人力車で本郷に通う。英米文学史、ミルトン、テニソン、ロセッティなどを講じた。学生に、小山内薫、厨川白村、戸川秋骨、石川林四郎、田部隆次らがいた。

一八九七年（明治三十年）四十七歳　二月、次男巌生れる（のち稲垣姓）。夏、静岡県焼津町の魚屋山口乙吉の二階を借り、海に遊ぶ。焼津および乙吉が気に入り、死ぬまでほとんど毎年、この避暑がつづいた。帰途、富士山に登る。九月、『仏陀の国の落穂』（ホートン・ミフリン社）出版。

一八九八年（明治三十一年）四十八歳　十二月、『異国情調と回顧』（リトル・ブラウン社）出版。

一八九九年（明治三十二年）四十九歳　九月、『霊の日本にて』（リトル・ブラウン社）出版。

一九〇〇年（明治三十三年）五十歳　二月、外山正一学長、死去。大学での支柱を失う。十二月、『影』（リトル・ブラウン社）出版。同月、三男清生れる。〔夏目漱石、イギリス留学〕

一九〇一年（明治三十四年）五十一歳　十月、『日本雑記』（リトル・ブラウン社）出版。

一九〇二年（明治三十五年）五十二歳　三月、市外（現、新宿区）西大久保（二丁目）二六五番地の某子爵邸跡に新居を構える。ストーヴのたける書斎を特に注文した。挿絵入り『日本お伽噺』四冊（長谷川版画店）出版。十月、『骨董』（マクミラン社）出版。〔日英同盟成立〕

一九〇三年（明治三十六年）五十三歳　かねて長男にアメリカで教育を受けさせたいと考え、大学に一年間の賜暇を要請していたが、一月、大学から郵便で、三月で契約の終了する通告を受ける。学生の留任運動に驚いた大学は、授業時間と俸給を半減するという妥協案で慰留したが、八雲は拒絶、著作にますます専念する決意を固める。後任は、夏目漱石と上田敏。九月、長女寿々子生れる。

一九〇四年（明治三十七年）五十四歳　二月、日露戦争おこる。四月より、早稲田大学から招かれ、文学部に出講。年俸二千円。同月、『怪談』（ホートン・ミフリン社）出版。九月十九日、自宅で心臓発作。同二十六日、再度発作、狭心症で急逝した。三十日、牛込瘤寺で仏式の葬儀、雑司谷墓地に葬られた。法名「正覚院浄華八雲居士」。歿後、十月、『神国日本』（マクミラン社）出版。翌一九〇五年、『天の川物語その他』（ホートン・ミフリン社）出版。各氏の編集による書簡集、講義録が、その後、相次いで出版された。一九三二年（昭和七年）に夫人節子死去。

上田和夫　編

日常の生活、風俗習慣から、民話、伝説にいたるまで、近代国家への途上にある日本の忘れられた側面を掘り起して、古い、美しい、霊的なものを求めつづけた小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）。彼は、来日後、帰化して骨を埋めるまで、鋭い洞察力と情緒ゆたかな才筆とで、日本を広く世界に紹介した。本書には、「影」「骨董」「怪談」などの作品集より、代表作を新編集、新訳で収録した。

¥ 280